

# 宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書

— 第1分冊 —

1996

東大阪市教育委員会  
財団法人 東大阪市文化財協会

## は し が き

宮ノ下遺跡は、布施駅北口第一地区市街地再開発事業に伴う試掘調査によって東大阪市の中心部市街地の地下より発見された二千数百年前から続く遺跡です。この時みつかった縄紋～弥生時代の貝塚により近鉄布施駅前がかつて河内湖の辺りに位置し、近畿地方で米作りがはじまる頃に半農半漁の村であったことが明らかになりました。

その後おこなわれた発掘調査では、市民生活に深くかかわる市街地再開発のスムーズな進行に配慮しながらも貴重な文化財の調査がすすめられ、貝塚及びその周辺より縄紋～弥生移行期の生活内容をうかがい知ることができる多大の成果が得られました。

この調査成果をまとめた報告書を刊行できますのも、埋蔵文化財に対するご理解と多大のご協力をいただきました、布施駅北口第一地区市街地再開発組合の皆様、並びに東大阪市都市整備部をはじめ関係各位のお陰と厚くお礼申し上げます。

本書が埋蔵文化財の調査研究の一助となり、多方面にわたり広くご活用していただけることを心から願っております。

平成8年2月29日

財団法人 東大阪市文化財協会  
理事長 清水 行雄

## 例 言

- 1 本書は布施駅北口第一地区市街地再開発事業に伴って実施した宮ノ下遺跡の第1次発掘調査報告書 第1分冊である。
- 2 本書は、発掘によって明らかとなった遺構・土器・土製品・木製品・木製品樹種分析等について報告する。その他の層序・古環境石器・骨角器・動植物遺体・人骨についての報告は第2分冊に収録するものとする。
- 3 宮ノ下遺跡第1次調査は、東大阪市建設局都市整備部と布施駅北口第一地区市街地再開発組合（理事長 茨木保善氏）の委託を受けて東大阪市教育委員会と財団法人東大阪市文化財協会により実施し、平成4年7月6日から平成5年6月4日まで発掘調査を行い、その後平成7年9月30日まで整理作業を行った。
- 4 1995年9月30日現在の事務局体制は以下のとおりである。  
理事長 清水行雄（東大阪市長）  
常務理事 西脇 實  
事務局長 杉山浩三（東大阪市教育委員会文化財課課長代理）  
庶務部長 同上  
調査部長 芋本隆裕（東大阪市教育委員会文化財課主査）  
庶務副部長 才原金弘（東大阪市教育委員会文化財課主任）  
調査副部長 松田順一郎・中西克宏  
調査部員 上野節子  
庶務部員 朝田直美・大林亨・村田周亮
- 5 発掘調査は、東大阪市教育委員会文化財課 下村晴文（同課主査）・芋本隆裕及び財団法人東大阪市文化財協会 別所秀高・木建正宏が担当した。
- 6 本書の執筆は、1、2、3-1）・2）・4）、4-2）を下村が担当し、3-3）、4-1）、5、を芋本が担当した。また、6はパリノ・サーベイ(株)に分析及び原稿執筆を委託した。
- 7 本書に収録した図面のうち、A地区の遺構平面図は国際航業(株)に委託して作成したものであり、その他の遺構平面図・土層断面図は発掘調査に参加した全員により作成したものである。また、遺物の実測は太田圭子・狭川有希・中村佳美・吉竹輝美・吉崎恵美子・津田豊子・中平志信が行い、トレースは主として太田が行った。土器の石膏復元は柳瀬久美子が行った。
- 8 本書に収録した写真のうち、発掘現場写真は調査担当者を中心に撮影し、遺物写真は株式会社スタジオG・Fプロに委託して撮影したものである。木製品の顕微鏡写真についてはパリノ・サーベイ（株）によるものである。

（調査・整理参加者）

井池由佳・太田圭子・小川順子・大西真由美・金本英二・河村博・倉橋繁雄・駒沢忍・狭川有希・島田知乃・白沢千秋・高良浩・津田豊子・中平志信・中村佳美・堀田博隆・横本義憲・美並慶久・森田雅枝・吉崎恵美子・吉竹輝美・柳瀬久美子・渡部まゆ子（五十音順）

## 本文目次

1	調査に至る経過	1
2	位置と環境	2
3	調査の概要	4
1)	地区割	4
2)	中世～近世の遺構・遺物	4
1	溝	4
2	井戸跡	5
3	溜池跡	5
4	出土遺物	5
3)	A地区の調査	7
1	縄紋時代晩期末～弥生時代中期初頭の貝塚	7
2	微高地上の土坑・ピット	10
3	自然流路東側の杭列	13
4	微高地南部で出土した人骨	13
5	自然流路	13
2)	B地区の調査	15
1	自然流路	15
2	土坑	15
3	杭例	17
4	小ピット群と杭	17
4	出土土器	19
1)	A地区出土土器	19
1	縄紋土器	19
2	土偶	34
3	弥生～古墳時代の土器	35
2)	B地区出土土器・土製品	53
1	SD69出土土器	53
2	SD72出土土器	53
3	その他の遺構から出土した土器	57
4	包含層出土土器	72
5	出土木製品	80
1)	農具	80
2)	工具・日用雑具	88
3)	武器・祭祀具	92

4) 漁撈具	94
5) 容器・食事具	96
6) 建築部材	99
7) 用途不明品	99

## 挿図目次

第1図	宮ノ下遺跡周辺図	2
第2図	宮ノ下遺跡地区割図	3
第3図	宮ノ下遺跡第1次調査地地区割図	4
第4図	中世～近世の遺物実測図	6
第5図	宮ノ下遺跡第1次調査 中世～近世遺構面平面図	折込み
第6図	貝層1・貝層2中・下部の平面図	8
第7図	貝層2上部の平面図	9
第8図	自然流路西側微高地上の遺構平面図	11
第9図	A地区及びB地区北部の自然流路・杭例平面図	12
第10図	自然流路東側の杭例平面図	14
第11図	土坑・落ち込み状遺構断面図	16
第12図	杭列実測図	18
第13図	B地区南部遺構平面図	折込み
第14図	縄紋土器 深鉢実測図	23
第15図	縄紋土器 深鉢実測図	24
第16図	縄紋土器 深鉢実測図	25
第17図	縄紋土器 深鉢実測図	26
第18図	縄紋土器 深鉢・浅鉢・壺実測図	27
第19図	縄紋土器 深鉢・底部実測図	28
第20図	縄紋土器 深鉢・浅鉢・底部実測図	29
第21図	縄紋土器 深鉢拓影	30
第22図	縄紋土器 深鉢拓影	31
第23図	縄紋土器 深鉢拓影	32
第24図	縄紋土器 深鉢拓影	33
第25図	縄紋土器 浅鉢拓影	34
第26図	土偶実測図	35
第27図	A地区貝層2中部・第9U層出土弥生土器実測図	37
第28図	A地区貝層2中部・第9層出土弥生土器実測図	38
第29図	A地区貝層2上部出土弥生土器実測図	39

第30图	第9U層・貝層2上部出土弥生土器実測図	40
第31图	A地区第8M層出土弥生土器実測図	41
第32图	A地区第8M層出土弥生土器実測図	42
第33图	A地区第8M層出土弥生土器実測図	43
第34图	A地区第8M層出土弥生土器実測図	44
第35图	A地区第8M層出土弥生土器実測図	45
第36图	A地区第8M層出土弥生土器実測図	46
第37图	A地区第8M層出土弥生土器実測図	47
第38图	A地区第8U層出土弥生土器実測図	48
第39图	A地区第8U層出土弥生土器実測図	49
第40图	A地区第8U層出土弥生土器実測図	50
第41图	第8U流路内(自然流路上部堆積層)及び 第7層出土弥生土器・土師器・須恵器実測図	51
第42图	B地区SD69出土弥生土器実測図	54
第43图	B地区SD69出土弥生土器実測図	55
第44图	B地区SD69・SD71・SD72出土弥生土器実測図	56
第45图	B地区SD69出土弥生土器実測図	58
第46图	B地区SD69出土弥生土器実測図	59
第47图	B地区SD69出土弥生土器実測図	60
第48图	B地区SD69出土弥生土器実測図	61
第49图	B地区SD69・SD72出土弥生土器実測図	62
第50图	B地区SD72出土弥生土器実測図	63
第51图	B地区SD72出土弥生土器実測図	64
第52图	B地区SD72出土弥生土器実測図	65
第53图	B地区SD72出土弥生土器・土製品実測図	66
第54图	B地区SD61・SD71・SD66出土弥生土器実測図	67
第55图	B地区SK51・SK47・SK35・SK48・SK50出土弥生土器実測図	68
第56图	B地区SK48・SK55・SK50・SK59・SK67出土弥生土器実測図	69
第57图	B地区SK55・SK44・SK51・SK52・SK48・SK49・SK67 出土弥生土器実測図	70
第58图	B地区SX13・SP5・SX12・SX19・8L～9U層 出土弥生土器実測図	71
第59图	B地区第7層出土弥生土器実測図	72
第60图	B地区第8層出土弥生土器実測図	73
第61图	B地区第8層出土弥生土器実測図	74

第62図	B地区第8層出土弥生土器実測図	75
第63図	B地区第8層出土弥生土器実測図	76
第64図	B地区第8層出土弥生土器実測図	77
第65図	B地区第8層出土弥生土器実測図	78
第66図	木製品実測図 鋏未成品・鋏	82
第67図	木製品実測図 鋏	83
第68図	木製品実測図 鋏未成品・鋏	84
第69図	木製品実測図 鋏・田下駄	85
第70図	木製品実測図 鋏・鋏柄・泥除・横鋏	87
第71図	木製品実測図 臼・舂すくい・竪杵	89
第72図	木製品実測図 櫛未成品・櫛	90
第73図	木製品実測図 櫛・鍔	91
第74図	木製品実測図 打製石斧・横斧柄・柄・火鑽臼・自在鉤	93
第75図	木製品実測図 弓・弧紋円板・朱塗り楯	95
第76図	木製品実測図 刺突具未成品・手網杵	97
第77図	木製品実測図 高杯・合子・把手付鉢未成品・容器	99
第78図	木製品実測図 横杓子・縦杓子・匙・曲物蓋・曲物底板	100
第79図	木製品実測図 槽・梯子	101
第80図	木製品実測図 槽・容器・柄・用途不明	104
第81図	木製品実測図 用途不明又は部材	105
第82図	木製品実測図 用途不明又は部材	106
第83図	木製品実測図 用途不明又は部材	107
第84図	木製品実測図 用途不明又は部材	108
第85図	木製品実測図 用途不明又は部材	109
第86図	木製品実測図 用途不明又は部材	110
第87図	木製品実測図 用途不明又は部材	111
第88図	木製品実測図 用途不明又は部材	112

## 表目次

表 1	木製品の樹種同定結果 (1) ~ (11)	127~132
表 2	杭材の樹種同定結果 (1) ~ (7)	133~139
表 3	農具の製品別樹種構成	120
表 4	工具の製品別樹種構成	122
表 5	武器の製品別樹種構成	122
表 6	漁労具の製品別樹種構成	123

表 7	容器の製品別樹種構成	123
表 8	食器具の製品別樹種構成	124
表 9	建築部材の製品別樹種構成	124
表10	雑具の製品別樹種構成	125

## 図版目次

図版 1	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺構 (1調査地全景 2中世以後の遺構)
図版 2	宮ノ下遺跡第1次調査	A・B地区の遺構 (1自然流路 2B地区北端部西壁)
図版 3	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺構 (1弧紋円板出土状況 2鉄斧柄他木製品出土状況)
図版 4	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺物 (1鉄斧柄出土状況 2ヒト頭蓋骨出土状況)
図版 5	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺構 (1自然流路 2自然流路西側のピット群)
図版 6	宮ノ下遺跡第1次調査	B地区の遺物 (1第8M層出土のサヌカイト打製縦斧 2第8M層出土のサヌカイト打製縦斧細部)
図版 7	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺構 (1貝層2上面 2貝層1・貝層2中部上面)
図版 8	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺構 (1貝層1・2下面 2Jライン貝層2断面)
図版 9	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺構 (1西壁断面の貝層1 2南壁断面の貝層2)
図版10	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺構 (1貝層2中部下面のピット 2南壁断面の自然流路堆積層)
図版11	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺構 (1貝層2下面 2同左)
図版12	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺構 (1貝層2下面 2同左)
図版13	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺構 (1貝層2中部出土の第I様式壺 2貝層2下部出土の土偶)
図版14	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺構 (1貝層2下部出土の縄紋土器深鉢 2貝層1出土の縄紋土器浅鉢)
図版15	宮ノ下遺跡第1次調査	A・B地区の遺物 (1B地区第9層出土の牙製腕輪 2A地区第8層出土のシカ下顎骨)
図版16	宮ノ下遺跡第1次調査	A地区の遺物 (1A地区第8層出土のイノシシ下顎骨 2A地区第8M層出土のイノシシ肩甲骨)
図版17	宮ノ下遺跡第1次調査	B地区の調査 (1調査風景 2同左)
図版18	宮ノ下遺跡第1次調査	B地区の遺構 (1南壁の自然流路堆積層 2自然流路西岸の干潟堆積層)
図版19	宮ノ下遺跡第1次調査	B地区の遺構 (1第8層下面のピット群 2第8層下面のピット・土坑)
図版20	宮ノ下遺跡第1次調査	B地区の遺構 (1第8層下面の杭例 2同左)



図版21	宮ノ下遺跡第1次調査	B地区の遺構 (1SD72東端部 2第8層下面のピット内弥生土器出土状況)
図版22	宮ノ下遺跡第1次調査	B地区の遺構 (1第8層下面の土坑SK41 2第8層下面の土坑SK51)
図版23	宮ノ下遺跡第1次調査	B地区の遺構 (1SD69遺物出土状況 2SD72遺物出土状況)
図版24	宮ノ下遺跡第1次調査	B地区の遺構 (1SD72内の小貝塚 2自然流路内の小貝塚)
図版25	宮ノ下遺跡第1次調査	B地区の遺構 (1SD72掘上げ後 2SD72遺物出土状況)
図版26	宮ノ下遺跡第1次調査	B地区の遺構 (1SD69遺物出土状況 2 同左)
図版27	宮ノ下遺跡第1次調査	縄紋土器・土偶
図版28	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (貝層2中部・上部・第9U層・第8M層)
図版29	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (A地区第8M層)
図版30	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (A地区第8M層・第8U層)
図版31	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (A地区第8U層)
図版32	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (A地区第8U層)
図版33	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器・須恵器 (A地区第8U層・第8U流路内)
図版34	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器・土師器 (A地区第8U層・第8U流路内)
図版35	宮ノ下遺跡第1次調査	縄紋土器 (1凸帯紋土器深鉢 2 同左)
図版36	宮ノ下遺跡第1次調査	縄紋土器 (1凸帯紋土器深鉢 2 同左)
図版37	宮ノ下遺跡第1次調査	縄紋土器 (1凸帯紋土器深鉢 2 同左)
図版38	宮ノ下遺跡第1次調査	縄紋土器 (1凸帯紋土器深鉢 2 同左)
図版39	宮ノ下遺跡第1次調査	縄紋土器 (1凸帯紋土器深鉢 2 同左)
図版40	宮ノ下遺跡第1次調査	縄紋土器 (1凸帯紋土器深鉢 2 同左)
図版41	宮ノ下遺跡第1次調査	縄紋土器 (1凸帯紋土器深鉢 2 同左)
図版42	宮ノ下遺跡第1次調査	縄紋土器 (1凸帯紋土器深鉢 2 同左)
図版43	宮ノ下遺跡第1次調査	縄紋土器 (1凸帯紋土器深鉢 2 同左)
図版44	宮ノ下遺跡第1次調査	縄紋土器 (1凸帯紋土器深鉢 2 同左)
図版45	宮ノ下遺跡第1次調査	縄紋土器・弥生土器 (1凸帯紋土器深鉢・浅鉢 2A地区貝層2中部・第9U層)
図版46	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1A地区貝層2中部 2 同左)
図版47	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1A地区貝層2中部・第9U層 2A地区貝層2中部・第9U層・貝層2上部)
図版48	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1A地区貝層2上部 2A地区第9U層・貝層2上部)
図版49	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1A地区貝層2上部 2A地区貝層2上部・第8M層)
図版50	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1A地区第8M層 2 同左)
図版51	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1A地区第8M層 2 同左)

図版52	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1A地区第8M層 2 同左)
図版53	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1A地区第8M層 2 同左)
図版54	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1A地区第8M層・第8U層 2A地区第8U層)
図版55	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1A地区第8U層 2 同左)
図版56	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1A地区第8U層 2A地区第8U流路内)
図版57	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (SD69)
図版58	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (SD69)
図版59	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (SD69)
図版60	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (SD69)
図版61	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (SD69)
図版62	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (SD69・SD72)
図版63	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (SD72)
図版64	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (SK63・SD66・SD69・SD71・SD72)
図版65	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (SK51・SK55・SK59・SK67)
図版66	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (SX13・SK55・SK44・SK50・SP5・第9層)
図版67	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (第7層・第9層)
図版68	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器・蛸壺 (SD87・第8層・第8層下層)
図版69	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (第8層・第8層下層)
図版70	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (第8層・第8層下層)
図版71	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (第8層下層)
図版72	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1SD69 2 同左)
図版73	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1SD69・SD72 2SD69)
図版74	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器・土製品 (1SD69 2SD69・SD72・第8層下層)
図版75	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1SD69・SD72 2SD69)
図版76	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1SD69・SD72 2SD69・SD71・SD72)
図版77	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1SD69 2SD72)
図版78	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1SD72 2SD61・SD72)
図版79	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1SD72 2 同左)
図版80	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1SD72 2 同左)
図版81	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1SD72 2SD61・SD66・SD69・SD71)
図版82	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1SD61・SD66・SD71 2SK47・SK51)
図版83	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1SK49・SK51・SK52・SK55・第8層・第8層下層2SK44・SK49・SK67)
図版84	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器・土製品 (1SX13・SX19・第8層・第9層 2第8層)
図版85	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1第8層 2第8層・第8層下層)

図版86	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1第8層・第8層下層 2SD69・SD71・SD72)
図版87	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1第8層・第8層下層 2 同左)
図版88	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1第8層 2第8層下層・SD69・SD72)
図版89	宮ノ下遺跡第1次調査	弥生土器 (1SX17・第8層下層 2第8層下層)
図版90	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (鋏未成品・鋏)
図版91	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (鋏)
図版92	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (鋏未成品・鋏)
図版93	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (鋏)
図版94	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (鋏・田下駄)
図版95	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (泥除・横鋏)
図版96	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (小型臼)
図版97	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (鋏柄・大型臼・杵すくい・竖杵)
図版98	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (槌・鍬)
図版99	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (鍬・横斧柄・柄・火鑽臼・自在鉤)
図版100	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (鉄斧柄・自在鉤・弓)
図版101	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (打製石斧装着の縦斧)
図版102	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (弓・弧紋円板・楯)
図版103	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (刺突具)
図版104	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (刺突具・刺突具未成品)
図版105	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (櫛・手網杵・高杯・容器)
図版106	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (合子・把手付鉢未成品・縦杓子・横杓子)
図版107	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (縦杓子・匙・曲物蓋・曲物底板)
図版108	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (槽・用途不明)
図版109	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (梯子・槽・容器・用途不明)
図版110	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (用途不明)
図版111	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (用途不明・編物)
図版112	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (用途不明)
図版113	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (用途不明)
図版114	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (用途不明)
図版115	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (用途不明)
図版116	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (用途不明)
図版117	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (用途不明)
図版118	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (用途不明)
図版119	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (用途不明)
図版120	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品 (用途不明)

図版121	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品（用途不明）
図版122	宮ノ下遺跡第1次調査	木製品（用途不明）
図版123	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（1）
図版124	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（2）
図版125	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（3）
図版126	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（4）
図版127	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（5）
図版128	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（6）
図版129	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（7）
図版130	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（8）
図版131	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（9）
図版132	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（10）
図版133	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（11）
図版134	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（12）
図版135	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（13）
図版136	宮ノ下遺跡第1次調査	木材（14）

## 1. 調査に至る経過

東大阪市は、大阪圏の東部に位置し、河内平野のほぼ中央部を東西に広がる市域を占めている。また、生駒山を挟んで奈良県と接しており、古くから奈良や京都と結ぶ街道筋にあたり、交通の要所という特徴をもっていた。

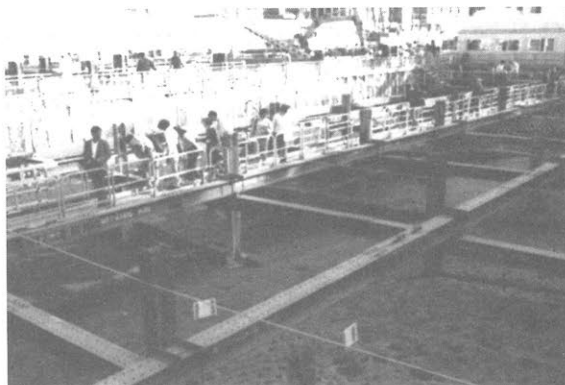
戦後の人口急増に伴って開発が急速に進み、住宅や工場が未整備のまま市街地が形成されてしまった。近鉄布施駅は、奈良線と大阪線の分岐点となっており、周辺は市内でも最も市街地が進んだ地域である。

東大阪市では都市整備の一環として、近鉄布施駅前の再開発を計画し、1972年以来準備が進められてきた。1992年になり、工事計画が本格化し、計画の中心となる再開発ビルの着工が決定した。東大阪市教育委員会では、試掘調査依頼に基づき1992年2月5日に文化財課職員立合の上で予定地内に計9ヶ所のトレンチを設定し、調査を行った。その結果、西北隅の2ヶ所のトレンチから縄文～弥生時代の貝塚が検出され、他のトレンチからも弥生時代の遺物が出土し、予定地全域に遺跡が広がっていることが確認された。工事予定地では、これまで遺跡が発見されたことはなく、新遺跡の発見届けを提出するとともに、土地の字名をとって宮ノ下遺跡と名付けられた。

東大阪市都市整備部と東大阪市教育委員会は、今後の遺跡の取扱いについて協議を続ける一方、貝塚の範囲を確認するため、再度試掘調査を行った。この結果、貝塚は工事予定地内の西北部分約1000㎡の範囲に広がることが確認された。工事着手時期の近づくなかで協議が進められた結果、貝塚の範囲（A地区）は建設工事に先行して発掘調査を行い、その他の範囲（B地区6,000㎡）は工事に並行して発掘調査を行うことが決まった。

調査は、東大阪市建設局都市整備部・布施駅北口第一地区市街地再開発組合の委託を受け、東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会が担当実施することになった。現場調査は、平成4年7月6日より平成5年6月4日まで行った。この間11月8日には主にA地区の貝塚を対象として現地説明会を実施している。整理調査は、現地調査終了後から平成7年9月30日まで実施した。

今回の調査実施にあたっては、市街地の再開発という困難な状況にあったため、新遺跡の発見が工事着工寸前という最悪の状況であった。この困難な状況にもかかわらず、調査期間・経費の確保に終始協力を惜しまれなかった東大阪市都市整備部・布施再開発事務所及び布施駅北口第一地区市街地再開発組合の方々に厚くお礼申し上げます。



現地説明会風景

## 2. 位置と環境

宮ノ下遺跡は、東大阪市長堂1丁目8番地に所在する縄紋時代晩期から中世まで続く複合遺跡である。

本遺跡が立地する布施駅周辺は、現在では住宅や商店が建ち並び市街化が進んだ地域であるが、この地に最初の集落が営まれた縄紋時代晩期～弥生時代初頭には河内湖南岸に位置する湿地帯であったと推測されている。

河内湖周辺において縄紋時代に集落が営まれていた地域は、河内湖を挟んだ上町台地と生駒山西麓地域に限られていた。縄紋時代中期から後期にかけて上町台地縁辺に森の宮遺跡が営まれ、生駒山西麓地域には日下・鬼塚・縄手・馬場川遺跡などの集落が点在している。森の宮遺跡では縄紋時代中期から弥生時代の中ごろまで約2500年間に形成された貝塚が発見された。縄紋時代中期～後期にかけて形成された貝層は、マガキが主体で認められ、縄紋時代晩期～弥生時代中期にかけて形成された貝層はセタシジミが主体であることが確認され、河内湖の水が海水から淡水に変化していることが裏づけられている。

縄紋時代終末から弥生時代初期にかけて河内湖南岸の低湿地にもあらたに集落が出現する。宮ノ下遺跡・山賀遺跡・稲葉遺跡・水走遺跡・鬼虎川遺跡・植附遺跡などで縄紋時代終末の凸帯紋土器と弥生時代前期の土器が共伴することが確かめられている。また、森の宮遺跡・鬼塚遺跡のように縄紋時代以来の集落が弥生時代まで続く例もあり、縄紋色の強い集落と弥生色の強い集落が混在していたと思われる。弥生時代への移行期の問題は、この時期の水田



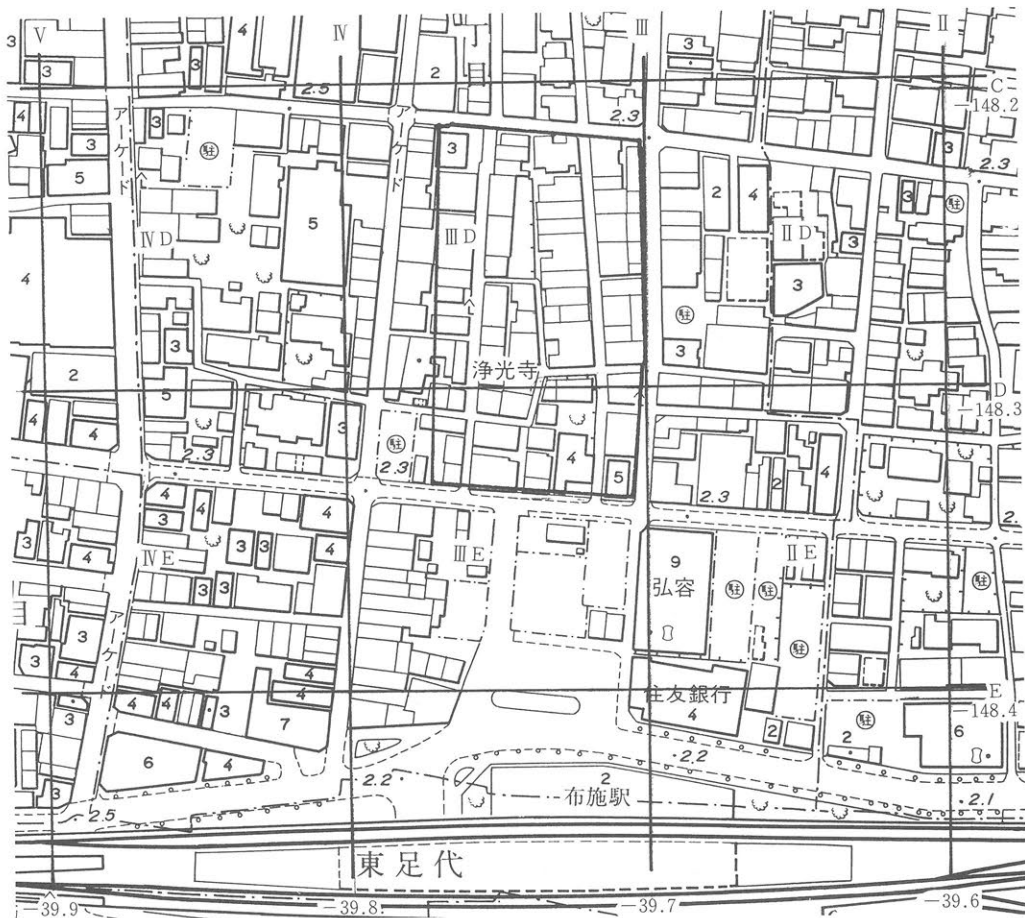
第1図 宮ノ下遺跡周辺図

遺構が検出されていないので初期の農耕集落の実態は明確でない。

また、宮ノ下遺跡の北約1kmのところで発見された高井田遺跡（弥生時代前期末～中期前半）は、河内湖内に立地する点からも宮ノ下遺跡と共通する要素が多く、注目されている。

弥生時代前期後半から中期にかけて低湿地における集落は、飛躍的に発達する。河内湖南岸では瓜生堂遺跡、東岸では鬼虎川遺跡が大規模集落に発達し、周辺の集落を含めてムラを形成するようになる。宮ノ下遺跡でも中期初頭には貝塚の形成が終了し、農耕に大きく依存する集落へと変貌したことがうかがわれる。

弥生時代終末から古墳時代にかけて河内湖南岸の集落は、大規模集落が解体し小規模な集落が点在する状況になり、大規模集落は八尾市から大阪市にかけての南部に移動するようになる。久宝寺遺跡・八尾南遺跡・加美遺跡など大規模な集落が発見されているが、河内湖周辺では西岩田遺跡・小若江遺跡など小規模な集落にとどまっている。宮ノ下遺跡では、自然流路内よりこの時期の遺跡が出土しているが、遺構は検出されていない。



第2図 宮ノ下遺跡地区割図 (1/2500)

### 3. 調査の概要

#### 1) 地区割

宮ノ下遺跡第1次調査地区は、布施駅北口前にあたり今回がはじめての調査となる。しかし、周辺では引き続いて発掘調査が予定されているため、今後の調査を考えてかなりの範囲を含めて地区割を行なうことにした。

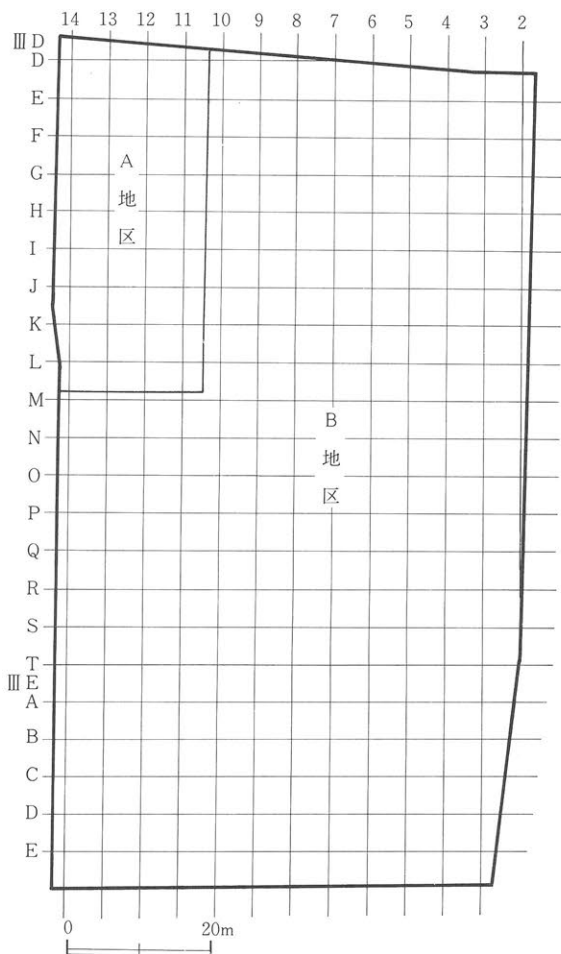
地区割は、国土座標にもとづいて100m方眼の大区画とさらにその中を5mメッシュの方眼で分けて、小区画と呼ぶことにした。地区割の基点 (X=-148.0, Y=-39.5) を長堂小学校北東地点に置いた。100m毎の大区画のX軸 (横軸) を北から南へA (-148.0)、B (-148.1)、C (-148.2)、D (-148.3)、E (-148.4) とアルファベットの大文字で表記し、Y軸 (縦軸) を東から西へI (-39.5)、II (-39.6)、III (-39.7)、IV (-39.8) とローマ数字の大文字で表記し、それぞれの南東の交点をその地区名としている。小区画は、100m方眼の大区画をさらに5mメッシュで区画した。小区画は、Y軸 (縦軸) を東から西へ1・2・3と数字で表し、X軸 (横軸) を北から南へA・B・Cの小文字で表し、それぞれの南東の交点をその地区名としている。小区画は、大区画内に400区画あることになる。今回の調査地で言えば、大区画でⅢD・ⅢEの2区画におさまる。小区画を加えた表記は、調査地北端でⅢD2D、南西端でⅢE13Fとなり、遺物の取り上げもこの表記を用いている。

また、A地区の貝塚部分については、5m区画の小区画をさらに2.5mメッシュで区画して北東端からNE・NW・SE・SWと細分した。貝塚内の遺物取り上げは、この細分した区画割で表記した。例えば、ⅢE11KNEとうように表記し、取り上げを行なっている。

#### 2) 中世～近世の遺構・遺物

##### 1 溝

宮ノ下遺跡第1次調査地の全域にわたって、第6層～第7層の上面より溝・土坑・落ち込み等



第3図 宮ノ下遺跡第1次調査地区割図



が検出された。このうち多くは、耕地に伴ういわゆるスキ溝と呼称される幅0.5m以下の小溝である。これらの小溝は基本層序の第5層に相当する砂層によって埋積されていることから、中世の遺構とみられるが、時期を限定し得る遺物は出土していない。小溝が検出された面は、縄文～古墳時代の古地形の名残りである第7層上面のわずかな起伏が第6層の埋積によってほぼ平坦化された状態である。但し、第7層上面が微高地上に高まる部分では、第6層が堆積しなかったために小溝は第7層の上面より掘り込まれている。全体として、これらの小溝は5～8m間隔で平行に並び、またこれらに直交する溝がすくないことから、条里制による長地型地割に沿ったものと考えられる。溝の方向がB地区北半分ではほぼ東西に走るのに対して、A地区とB地区南半分では南北より東へ10度前後振るという相違をみることから、こうした溝の方向の違いは畦畔方向の違いに基づくものと思われる。

## 2 井戸跡

A地区南部で検出された土坑SK01はほぼ円形で、直径約3.3m、深さ約1mを測り、底部に曲物杵を据えたとみられる直径35cm・深さ15cmの掘り込みが検出された。底部は弥生～古墳時代の自然流路内に堆積した植物遺体・粘土・砂混じりの第8U層に達し、湧水がみられた。この掘り込み内に曲物は存在しなかったが、埋土より瓦器・土師器の破片が出土したことから、この土坑は中世の曲物井戸杵を抜き取った跡ではないかと思われる。

B地区西南部で検出された落ち込みSX03は、不整形な浅い掘方内の西よりに4.8m×2.8mの楕円坑が約2.4mの深さで検出され、坑底は弥生時代の自然流路内堆積層である第9層に達していた。坑内の埋土より14世紀後半の土師器小皿が完形の状態で出土した。この楕円坑も、曲物等は出土していないが中世の井戸跡と考えてよいものである。

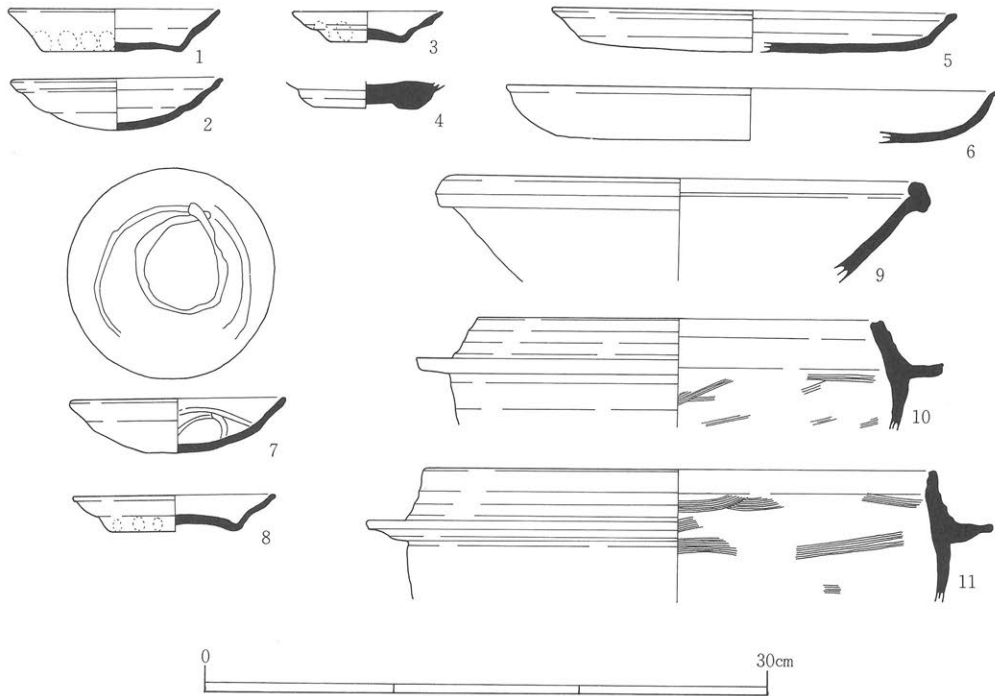
このほかに、板組杵をもつ井戸SE04・07・08や桶杵であったとみられる井戸SE05などが検出されたが、これらは出土遺物からみて近代以後のものと思われる。

## 3 溜池跡

A地区北部のSX01、B地区東部のSX02、B地区西南部のSX06等の落ち込みとB地区南部の大型の土坑SK25がこれに該当する。SX01は7.0×6.1m以上の平面方形を呈し、中世の小溝のひとつであるSD13を切って掘り込まれている。深さは検出時で35cm程であったが、掘り込み面からの深さではないため、もとの深さは不明である。内部に粘土と砂とブロック埋土がみられ、そのなかから江戸時代の陶磁器の破片が出土した。

SX02は不整形な形態を呈するが、10×11m前後の大きさと検出面より約1mの深さ、そしてSX01と同様の埋土などから溜池と判断される。中世の小溝SD61を切って掘り込まれ、埋土より出土した土器より同じく江戸時代のものと考えられる。

SX06は5.4×9.0m以上の方形の溜池で、北西端より東に向かって溝が伸びている。池の北半分は一段と深く掘られ、検出面よりの深さ約1.8mを測る。この池及び溝は中世の小溝SD32を



第4図 中世～近世の土器実測図 (1/4)

切って掘り込まれている。池内より江戸時代の陶磁器片・木片が出土し、溝との接続部南側で南北方向の杭列が検出された。

SK25は5.2×6.8m以上の楕円形を呈し、検出面よりの深さ80cmを測る。内部は、下部に堆積層とみられる粘土～極細粒砂、上部に埋土とみられるブロック土が充填されている。これらの層内より江戸時代の陶磁器片が出土した。

以上の溜池はいずれも小規模であって、一筆から数筆の耕地に伴うものと考えられる。こうした小溜池は江戸時代の河内地方において無数に存在したとされるいわゆる水掻き池に相当するものである。

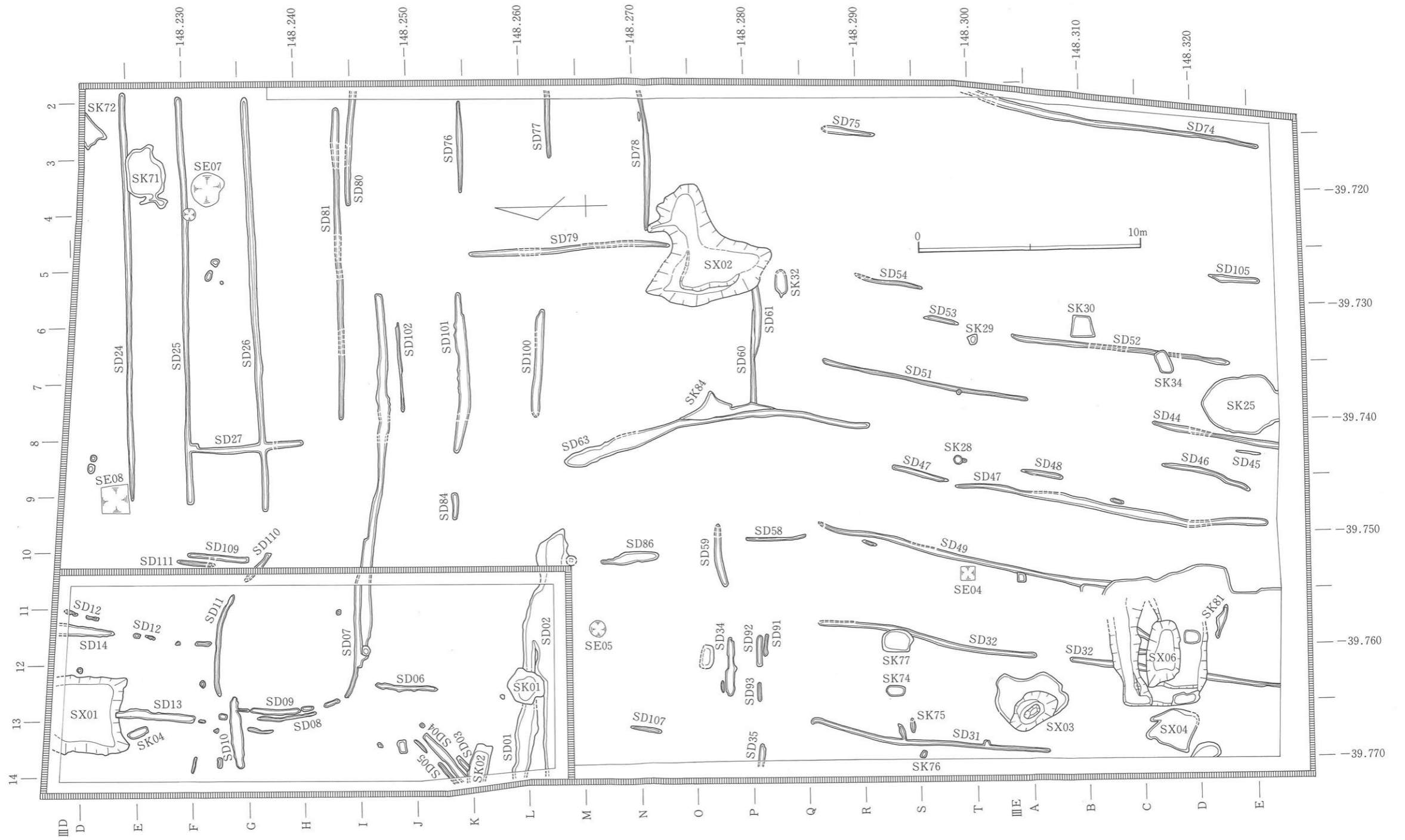
#### 4 出土遺物

中近世に属する遺物は少なく、コンテナ10箱程度の出土量である。

1～4は、土師器小皿でSX06から出土した。底部が大きく凹み、口縁部が大きく外側に直線的に開く形態は、15世紀代の特徴を有している。

7の瓦器碗は、試掘トレンチより出土したもので、内面に太く粗い暗文が認められ、口縁部は丸く終わっている。和泉型の特徴をもち、14世紀代のものである。10・11は、瓦質の羽釜でSX03より出土した。

5・6の土師器皿は、5がSD83、6が第7層の包含層中より出土している。平安時代まで溯る可能性がある。9は、東播系のこね鉢でSD55から出土している。その他、青磁碗の底部(8)が第7層中の包含層より出土している他、包含層中より須恵器杯なども出土している。



第5図 宮ノ下遺跡第1次調査 中世～近世遺構面平面図 (1/400)

### 3) A地区の調査

#### 1. 縄紋時代晩期末～弥生時代中期初頭の貝塚

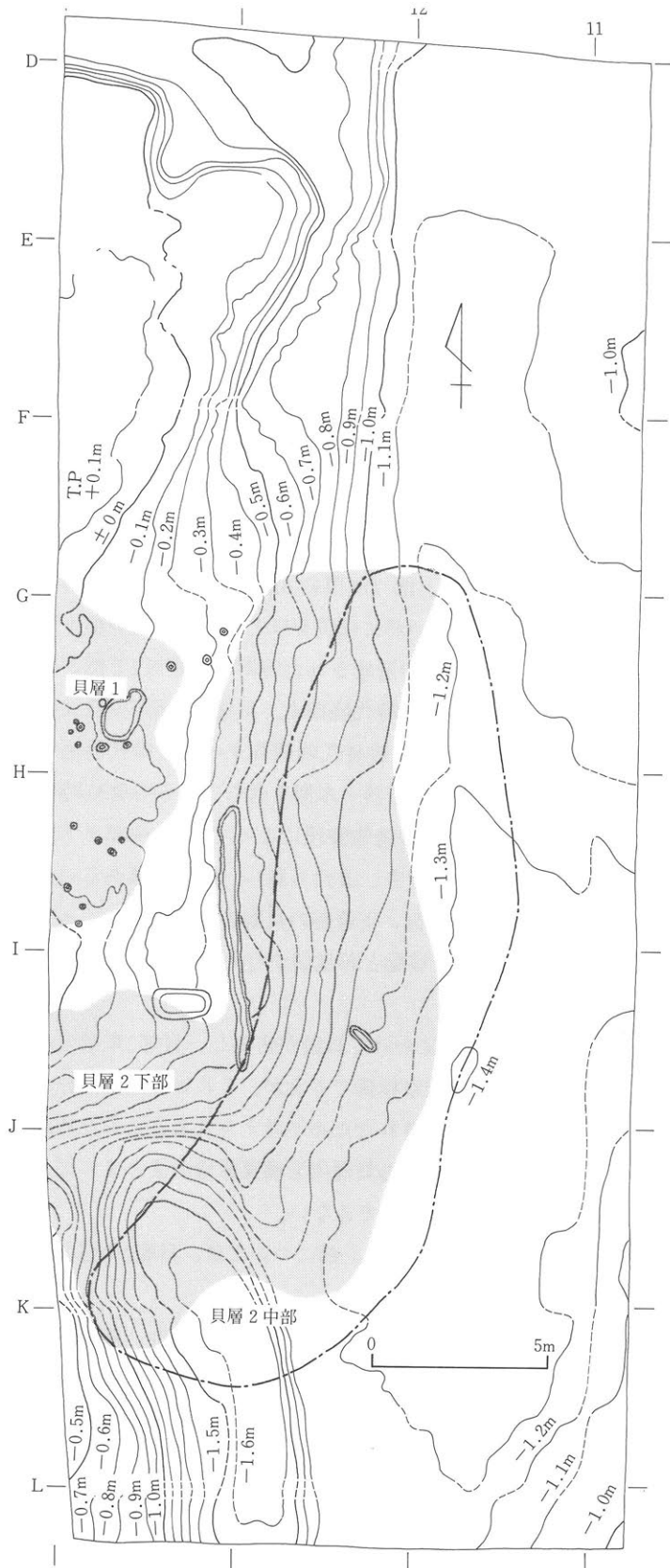
宮ノ下遺跡の貝塚は、A地区調査地内にほぼ収まる規模の貝層2とその西側から調査地以西にのびる貝層1そしてB地区の自然流路内とその周辺に点在する小貝塚からなる。これらの貝塚はいずれも淡水棲のセタシジミを主体とするもので、このほかに僅かではあるが淡水棲のオオタニシ・カワニナ・イシガイ、汽水棲のヤマトシジミ、海水棲のマガキ・ハマグリ・アカニシ・サルボウ・サザエ等が含まれる。

今回検出した貝塚のうちで規模が最も大きい貝層2は、南北約25m・東西約10m・厚さ約1mを測り、A地区西壁沿いに南北にのびる微高地の縁辺に形成されている。この貝層は、貝殻の密集度や貝層内に含まれる堆積土の特徴等によって、上部（層厚約20cm）・中部（層厚約30cm）・下部（層厚約40cm）に区分され、上部と中部のあいだには貝をほとんど含まない粘土層が間層（層厚約10cm）として認められる。当初、各貝層の形成された時期は、貝層2下部が船橋式～長原式の凸帯紋土器・土偶などを含むことから縄紋時代晩期末、貝層2中部が長原式の凸帯紋土器と第Ⅰ様式中段階の弥生土器を含むことから縄紋時代晩期末～弥生時代前期中頃、貝層2上部が第Ⅰ様式新段階～第Ⅱ様式の弥生土器・石器・木器を含むことから弥生時代前期末～中期初頭と考えられた。しかしながら、その後の遺物整理によって貝層2中部と下部より出土した凸帯紋土器が多数接合する事実が明らかとなり、また貝層1と貝層2中部あるいは下部出土の凸帯紋土器が接合することも知られた結果、宮ノ下遺跡の貝層のうちすくなくとも貝層1・貝層2下部・貝層2中部は貝塚形成後に局所的な移動と再堆積が行われたものと考えられるようになった。

これらの貝層の特徴としては、貝層1から貝層2西部にかけて貝殻が密集し、貝層2東部ではしだいに貝が疎らとなって東端で粘土層に漸移する傾向が指摘できるが、これは微高地部分より東側の水域に向かって貝殻等が投棄されて貝層が形成されたためと考えられる。このため陸上形成の貝塚の調査で試みられているような方法、すなわち貝層内を廃棄単位のまとまりごとに細かく区分して投棄の単位・季節性などを抽出することはできない。

いっぽう、弥生時代中期初頭に形成されたとみられる貝層2上部については、貝層2中部との間に貝殻をあまり含まない粘土層堆積後に形成されたものである。

各貝層の特徴としては、貝層2中・下部は南北約23m・東西約7mの範囲に拡がり、前記したように貝層西半部に貝殻が密集する。とりわけⅢD13J・I地区とH地区南半では貝殻のほかに土砂や遺物をほとんど含まないほぼ純貝層の状態を呈する。いっぽう、東半部は、東にむかって貝殻が減少するとともに間隙に粘土が多く含まれ、東端は第9L層下部相当の粘土層に漸移する。このような堆積状態から、東半部の貝層は投棄された貝殻等が水域内において攪拌されたのち、泥と混じり合って堆積したものと推定される。出土遺物は、凸帯紋土器・土偶・第Ⅰ様式土器・動植物遺体等が含まれるが、土器・動植物遺体とも出土量は少ない。

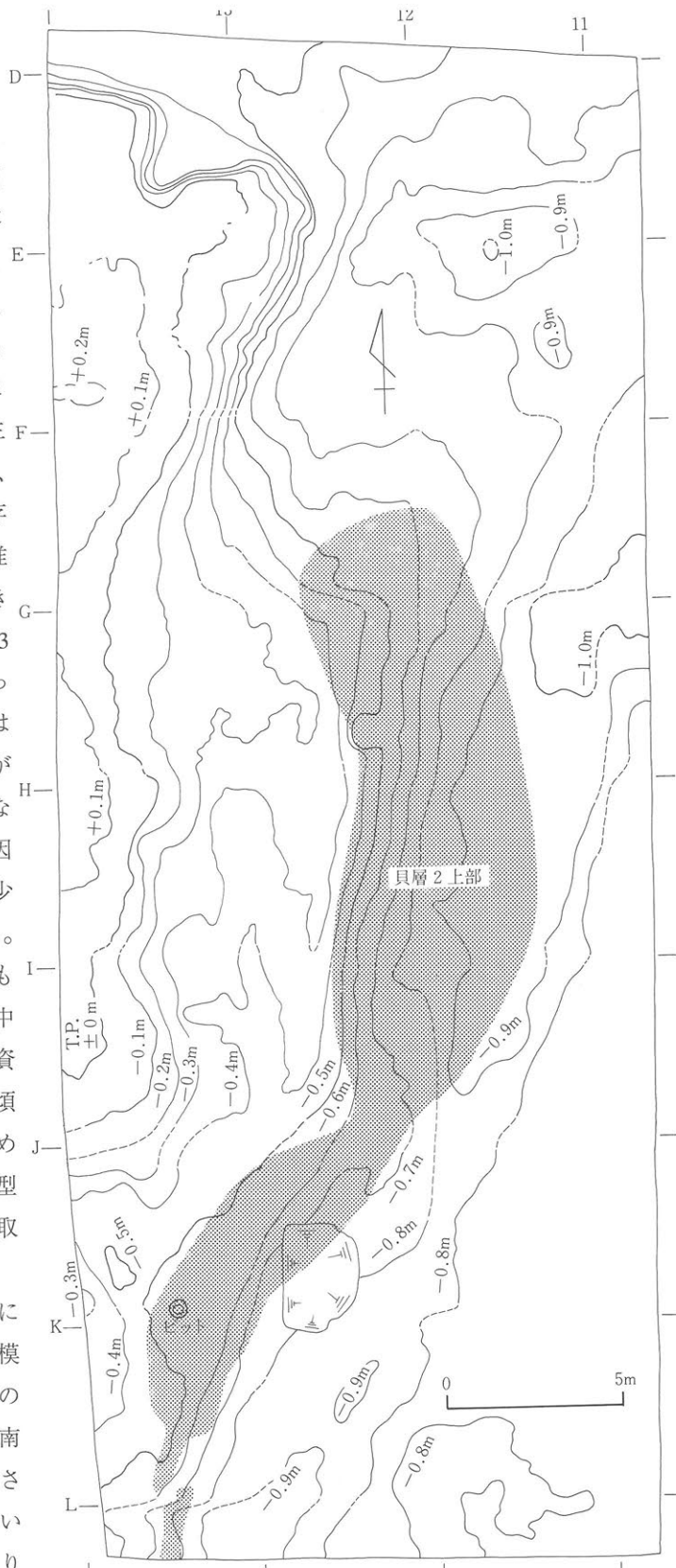


第6図 貝層1・貝層2下部の平面図 (1/200)

貝層2上部は、貝層内に第8L層に相当する細～中粒砂を含む点で貝層2下部・中部と層相を異にする。また、下部・中部と違って南北に細長く広がっている。これは微高地の西側に広がっていた水域に貝層2中・下部に相当する第9L層及びその上部に間層となる第9U層が堆積したことで微高地縁辺は浅い自然流路を残して埋積され、この流路内に貝殻や遺物が投棄されたためである。このため流路が蛇行する部分では、貝層の範囲も同様に屈曲している。この貝層の特徴としては、貝層内に含まれる貝殻や遺物は西部から東部にかけてほぼ均一であって、貝層の東端においても下部・中部のように極端に減少していないこと、また貝層上面には破碎された貝殻が多くみられることなどがあげられる。おそらく、貝層2上部の貝殻等は水深の浅い自然流路内に投棄され、その際に投棄物の上を人が絶えず踏み歩いたために貝殻の破碎が生じたものと推定される。さらに、この貝層内には土器・石器・木器・動植物遺体などの遺物が下部・中部よりもはるかに多く含まれている。これらは生活塵芥のなかに含まれていたとみら

れ、その増加は弥生時代前期末から中期初頭にかけて集落人口の増加を示唆するものと考えられる。これに対して、貝層の厚さは逆に前代よりも縮小しているのであって、この貝塚規模の縮小は、米を主要食糧とする生活が定着し、食糧のなかに占める貝の依存度が低下したことによると推定される。また、貝殻の大きさも貝層2下部・中部では幅3cm前後の大型のものが多かったのに対して、貝層2上部では幅2cm前後のやや小型のものが多くなっている。このような貝殻の小型化は何らかの原因による局地的な貝資源の減少を表すものかと考えられる。その原因が人間活動によるものであるならば、弥生時代中期にはセタシジミ生息域の資源管理が狩猟・採集生活の頃ほど徹底されなくなったために、一ヶ所の生息域より小型の個体を含む多数の貝が採取された可能性も考えられる。

貝層1は、一部が調査地外にのびているために全体の規模は明らかでないが、A地区内の貝層2西側の微高地縁辺に、南北約10m・東西4m以上・厚さ約0.3mの規模で形成されている。貝層内の貝殻は貝層2よりも総じて保存状態が悪く、原



第7図 A地区貝層2上部の平面図 (1/200)

形を保ったまま取り上げることができない脆弱なものが多い。この貝層の貝殻の密集度あるいは貝層内に土器等の遺物あまり含まれていない点は、貝層2下部の西西部に類似し、また貝殻の隙間に粘土が充填されている点は、貝層形成のち一時水浸かり状態になったことが示唆される。貝層2下部との層位関係については、貝層1とのあいだをつなぐ地層が後の自然流路によって侵食されているため確認することができない。しかし、貝層1より出土した少数の土器がいずれも凸帯紋土器であること、貝層2下部出土土器と接合する個体もみられることから、堆積した時期は貝層2下部と併行し、縄紋時代晩期末と考えられる。貝層1は、層厚および貝の密集度が西壁部分で最も大きく、東に向かってしだいに減少するところから、貝層2同様に西より貝殻等が投棄形成されたと推定される。

小貝塚は、B地区の自然流路内と流路の岸辺より合計六ヶ所検出された。検出位置は、貝層2の北東約15mのB地区西壁の第9層内、同じくB地区北西隅の自然流路内、貝層2の南約20mのB地区自然流路内、同じく流路北岸、同じく南約40mの流路東岸、枝分かれした自然流路SD72内などである。このうちB地区北西部第9層内のものは、約1m四方に厚さ約5cmで拡がる混貝土層であって、貝層2中部または下部に相当すると考えられるが、その他の小貝塚はいずれも第8L層相当の細～中粒砂と第Ⅱ様式に属する土器片を含むことから、貝層2上部に相当するものと考えられる。なかでもSD72内の小貝塚は、多量の第Ⅱ様式土器・木器を含む粘土層によって埋積されていることから、弥生時代中期初めの比較的短期間に形成されたものと考えられる。これらの小貝塚の規模は、1～2m四方で厚さ10～20cm程度またはそれ以下のものが多く、もっとも規模が大きいSD72内の小貝塚でも、2m×3mの範囲に約20cmの厚さを有する程度である。このように、小貝塚の大半が貝層2上部と同時期のものであることから、貝塚形成のパターンは、それまでのように一ヶ所にまとめて貝殻等を投棄するやり方から、あちらこちらに分散投棄するやり方へと変化したことが知られる。

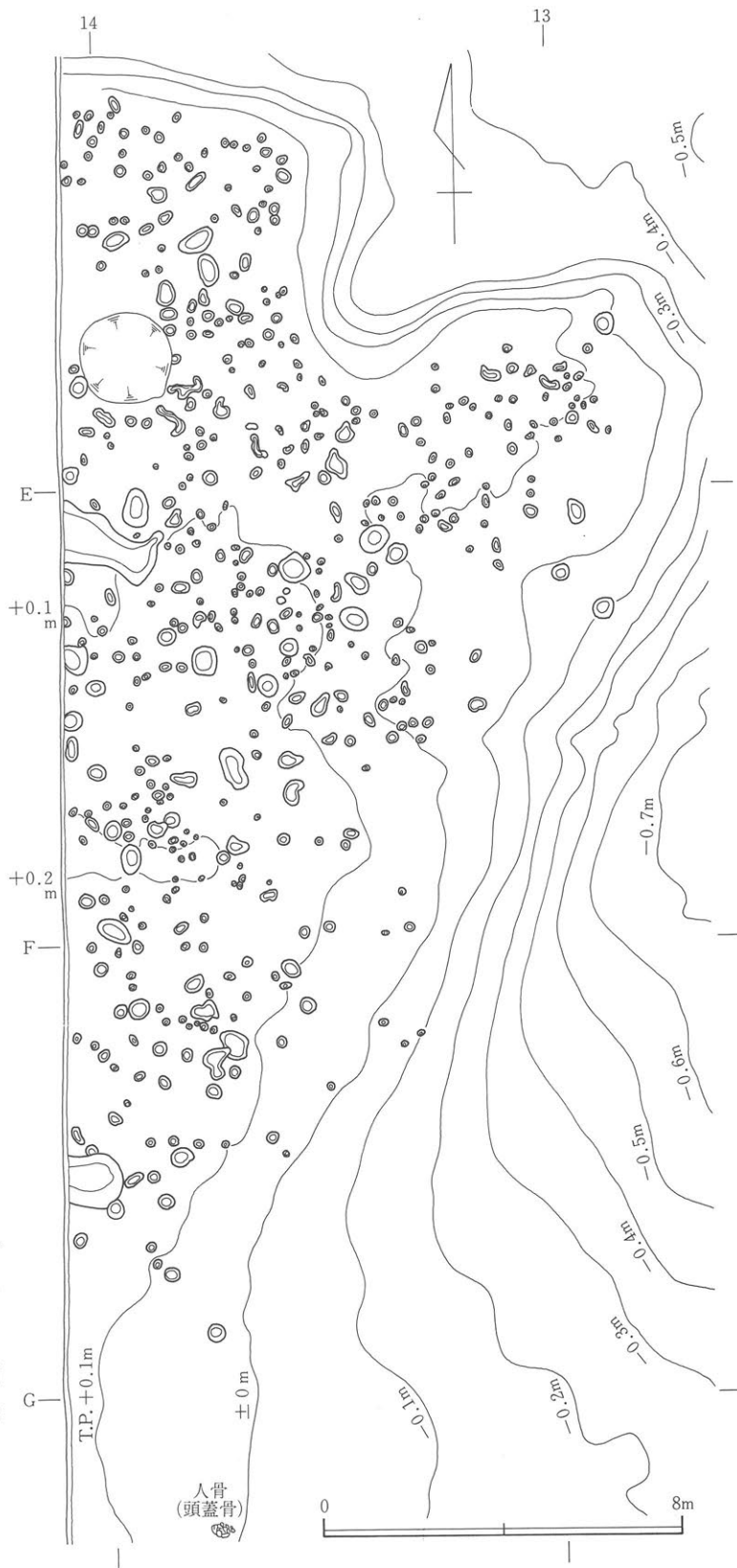
その後、第1次調査地の南に隣接する地点で1995年1月に実施された第5次調査において、第1次調査地より続く自然流路の東肩で南北1.8m以上×東西1.7m以上で厚さ約20cmを測る小貝塚が検出された。この小貝塚もそのなかに第Ⅱ様式の土器と石器・木器を含むことから、貝層2上部に相当するものと考えられる。

## 2. 微高地上の土坑・ピット

自然流路の北西、微高地上のほぼT.P-0.1mの等高線で囲まれた範囲において検出された。土坑は、西壁に接して検出された2基を除いて、いずれも直径1m以内で性格不明の小土坑である。大型の2基は、共に坑内下部に灰や炭化物が幾重にも層をなして堆積し、上部は埋土が充填されている。炭化物にイネ藁らしきものが含まれることから、坑内でイネ藁などが焼かれたのち、埋め戻されたものと考えられる。時期は、埋土内より第Ⅲ～Ⅳ様式に属する土器が出土したことから、弥生時代中期中頃～後半とみられる。

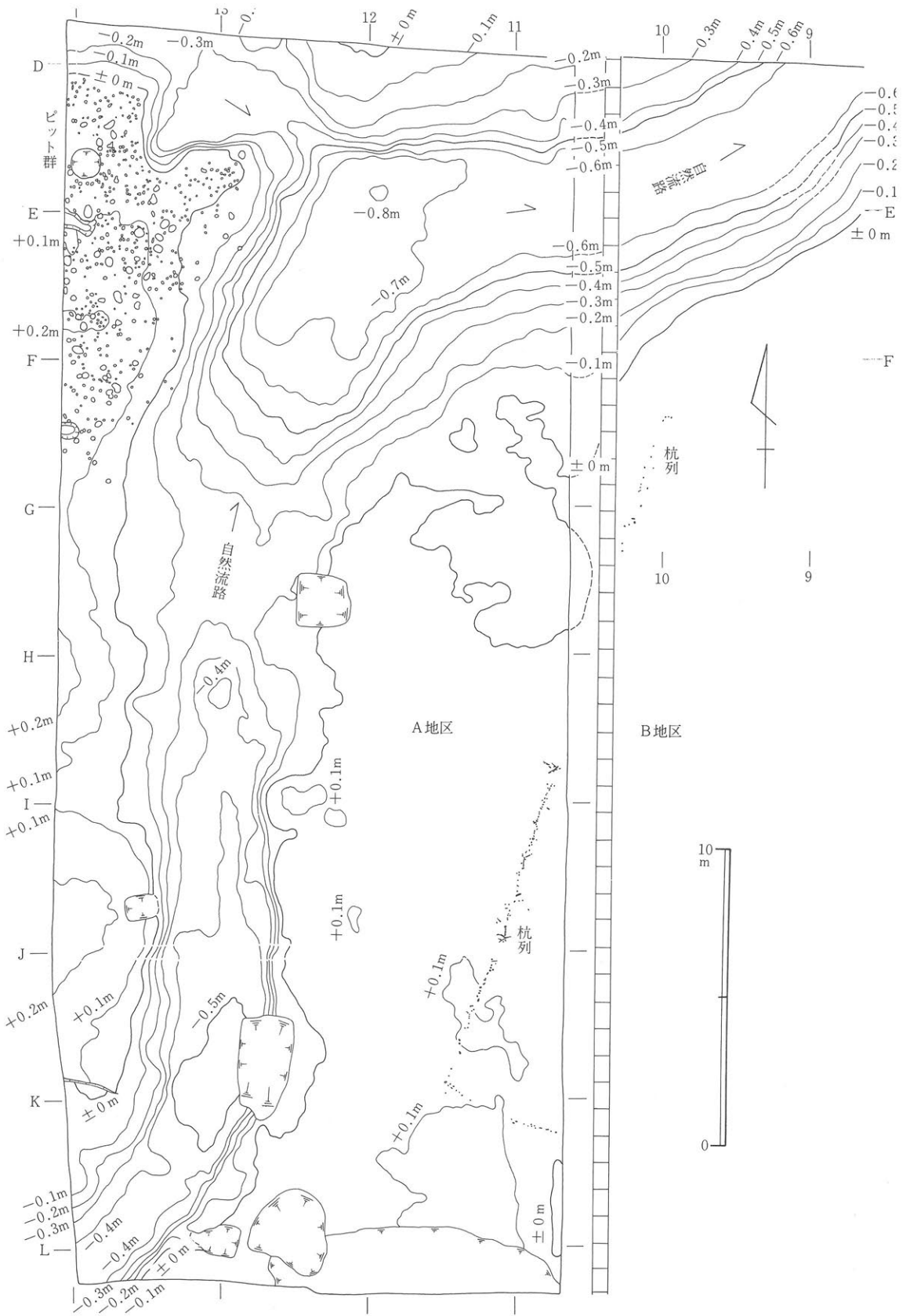
ピットは合計300個以上検出された。ピット内に杭または柱がほぼ完全な形で遺存するもの

もあるが、大半は木質部分の残りが悪く、腐朽してわずかに木質の痕跡を残すだけのものや木質部分が消失したものである。遺存状態のよい材の多くは、直径10cm以下で先端を尖らせた特徴から杭とみられ、直径10cm以上で先端の角度が鈍い特徴から掘立柱と判断されるものが少数含まれる。これらの杭・柱跡は、南北約28m・東西約12mの範囲に密集しているが、杭や柱の並びを見いだすことができなかった。杭・柱にどの程度の時期差があるのか、また並びが存在するかどうか等が確認できない以上、その性格も不明である。しかし、杭・柱が検出された位置が自然流路が二股に分かれる部分であることから、何か水域とかかわりをもつもの、例えば船着き場や網干し場などの可能性も考えられる。これらの時期は、ピット内出土土器から弥生時代中期中頃～後半(Ⅲ～Ⅳ期)とみられる。



第8図 自然流路西側微高地上の遺構平面図 (1/80)





第9図 A地区及びB地区北部の自然流路・杭列等平面図 (1/200)

### 3. 自然流路東側の杭列（第10図）

基本層序の第8M-1層下面において、自然流路とほぼ平行する杭列がA地区とB地区とにまたがって検出された。杭列の長さは23.7m、方向はN-23°E指す。この杭列は南端において東にほぼ直角に折れ、4.2mほど続いている。南北方向と東西方向の杭列は、いずれも直径5cm以下の細い自然木の先端を削った丸杭を用い、杭と杭との間隔は一定せずに雑然と打ち込まれている。杭の打ち込み面は確認できなかったが、杭のなかには第8M-2層内に10cm程度しか入っていないものがあることから、検出面よりも上層の第8U層下面より打ち込まれた可能性が考えられる。堆積層の状態より、杭列周辺は湿地であったとみられる。

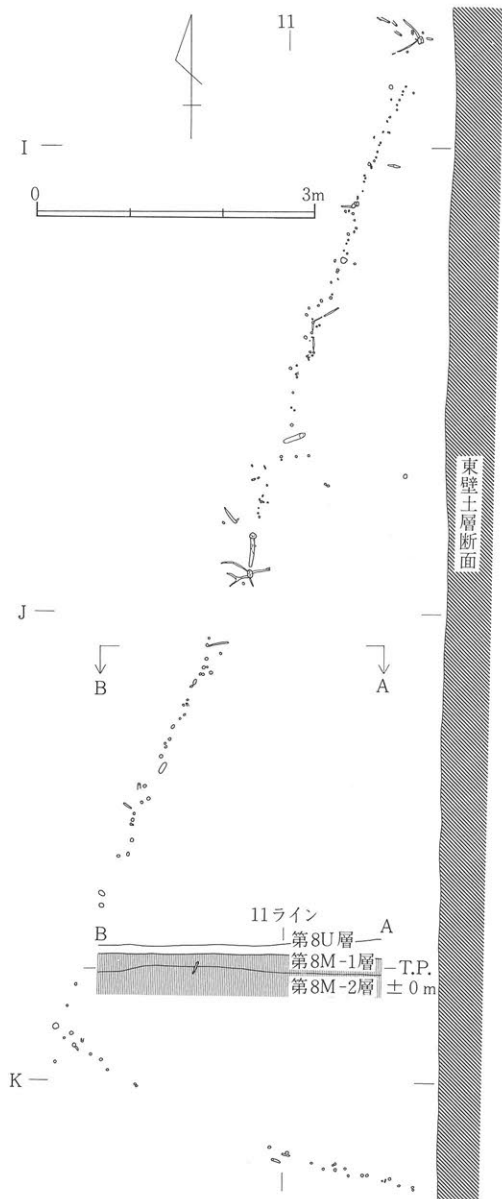
この杭列の性格については、平面長方形に区画する意図が認められるが、水田関係のものとするには打ち込んだ可能性のある層序においてプラントオパールがあまり多く検出されていないことから、疑問も残されている。打設時期は、第8U層の土器が示す弥生時代中期末（IV期）～6世紀初頭のあいだと考えておきたい。杭の樹種としては、広葉樹のコナラ・クヌギが多く使用されている。

### 4. 微高地南部で出土した人骨（第8図）

自然流路西側の微高地上、土坑やピット分布域の南約4mの地点において、頭・足指・踵などの人骨が一ヶ所よりまとまって出土した。人骨の周りに土壌や木棺の痕跡を見いだすことはできなかったが、おそらく自然流路の侵食によって壙底を残すだけとなった土壙墓あるいは木棺墓が存在したと思われる。人骨検出地点より第IV様式の壺上半部が1点押し潰された状態で出土した。この壺は墓に供献された可能性が考えられ、人骨の年代を示すものと思われる。なお、この人骨は、大阪市立大学医学部第二解剖学教室の多賀谷昭氏による鑑定の結果、成人男性の可能性が高いとされている。

### 5. 自然流路（第9図）

A地区からB地区西部にかけて、南から北に流れる弥生～古墳時代の自然流路が検出された。この流路は、B地区南西部より蛇行を繰り返しながら北西に流れ、一旦調査地の西に出たのち再び向きを変えてA地区南西部より調査地内を北々東に流れ、A地区北東部よりB地区北西端を経て調査地以北にのびている。流路の規模は、東西両肩が明瞭な弥生時代中期末～古墳時代前期において幅5～8m・深さ約0.6mを測る。横断面の形状は、西肩のほうが東肩よりも急傾斜のU字形を呈するが、これは西肩が調査地西部の微高地裾部に位置するのに対して、東肩は湿地状の低地に位置することによる。弥生中期末～古墳時代の流路内は、下面に砂層が薄く堆積し（第8U流路下面層）、その上部は植物遺体・砂混りの第8U層＝自然流路上部堆積層によって覆われている。遺物は、流路下面の砂層内より第IV様式の土器・石器が多量に出土し、その上の植物遺体・砂混り粘土層より梯子・鉄斧柄・櫂・弧紋円板・楯など多量の木製品と第IV様式～6世紀初頭の土器が出土した。木器はその大半がA地区より出土し、土器・石器の大半はA地区



第10図 自然流路東側の杭列平面図 (1/80)

とⅢEaライン以北のB地区より出土した。これより南のB地区では土器が少数出土しただけである。

以上の事実より、この流路は弥生時代中期末には砂層を堆積させるような流れがあったが、後期以後しだいに流れが滞ってヨシ等の湿地性植物が繁茂するようになり、6世紀にはほぼ埋積されたことが考えられる。また、遺物出土状況より、集落は弥生時代中期末いご急速に縮小したことが知られる。

ところで、弥生時代中期末～古墳時代の自然流路は、その前身がA・B両地区における第8M・L層の調査において確認されている。第8M・L層下面の段階すなわち弥生時代中期初頭の自然流路は、弥生中期末の段階よりも肩の位置が判然とせず、とくに東肩はゆるやかに立ち上がり、明瞭な肩部を形成していない。そのため流路の幅・深さを数値で表すことは難しいが、後の自然流路と比較すれば、この流路は幅が広く、浅いものであったとみられる。また、流路内下部に堆積した第8L層が細～中粒砂を主体とすることによって、水流の存在も確かめられる。貝層2上部はこの流路内に形成されたものである。それ以前の第9L層下部・上部～第9U層の段階すなわち縄紋時代晩期末～弥生時代前期末においては、流路西岸の位置に微高地が存在する点は変わらないが、東岸の立ち上がりはほとんど認められない。

最も初期の地形は、河内潟の干潟とみられる第11層上面にみられ、この段階においては河内潟の水域が岸辺の干潟域に幅30m程で湾入する古地形が推定される。その後、この水域に第9層が堆積して湿地状の陸地がしだいに拡大し、自然流路の前身が形作られていったと考えられる。A地区の貝層1と貝層2下部・中部は、河内潟湖の水域が縮小しつつある段階で形成されたものと思われる。

#### 4) B地区の調査

A地区の調査地を除く約6,000㎡が対象地となる。調査は、工事に平行してB1区からB7区までに7ブロックに分けて実施したが、遺構の記述は地区割にしたがってB地区全体を通しておこなうことにする。

B地区で検出した遺構は、3条の自然流路（SD69・SD71・SD72）及び溝・杭列・落ち込み遺構などを検出した。以下順に説明を加えていきたい。

##### 1 自然流路

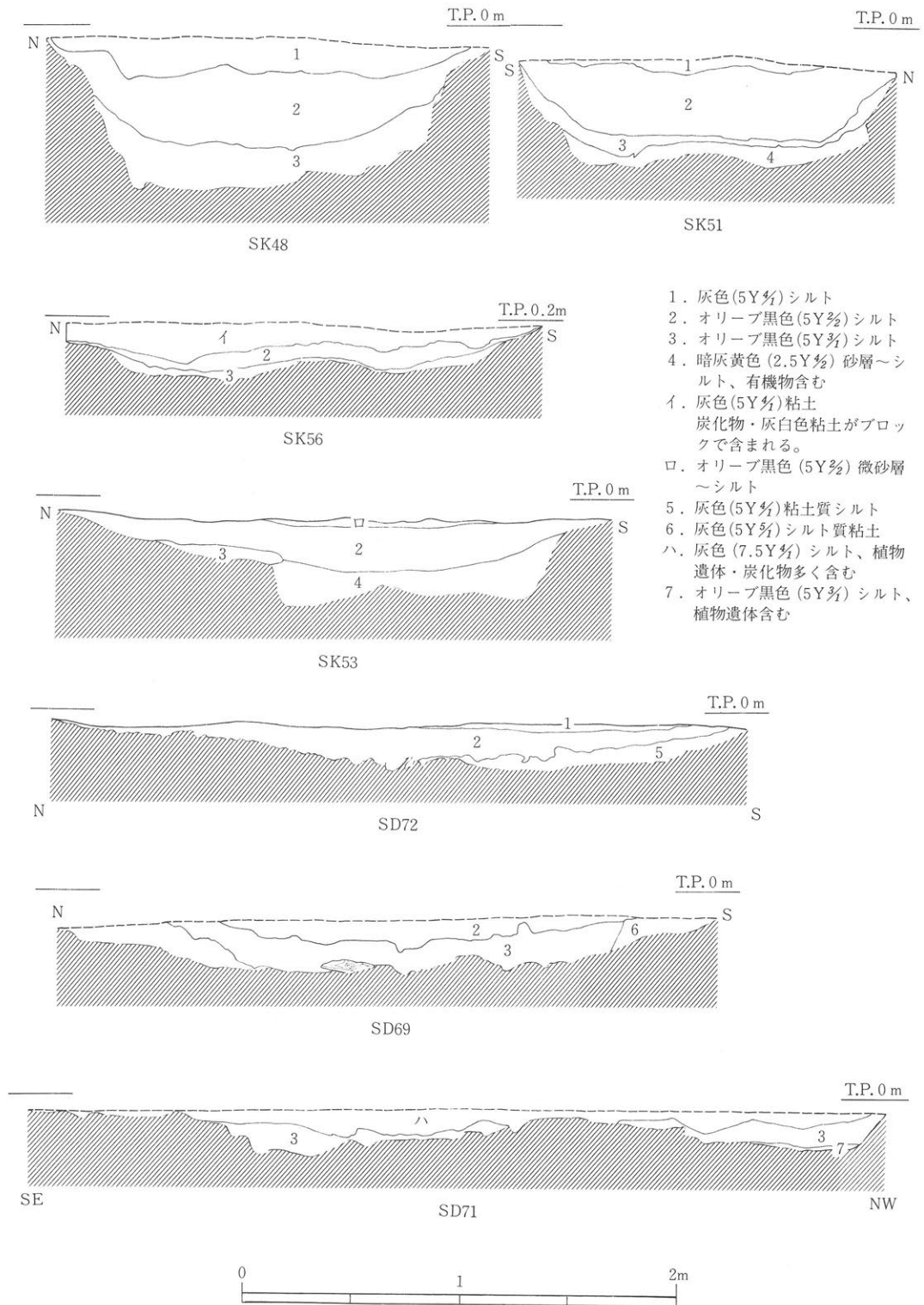
B地区内で3条の自然流路を検出した。いずれも東から蛇行しながら西へと向かう。B地区西側では、流路の輪郭は比較的明瞭であるが、それ以外はあまりはっきりしない。流路内では蛇行して広がったコーナに炭化物に混じって土器・木器が集中して出土した。いずれも集落内での不用品を自然の凹みを利用し、付近に遺棄した状態であった。

SD69は、B地区5R区より発してA地区南東コーナーまで総延長で約35m検出した。流路は、幅2m～5m、深さ10～30cmで底面も凹凸が認められ、不規則な状態であった。流路内の堆積土は、大きく2層に分けられる。下層のオリーブ黒色粘土内より多くの遺物が出土した。特に東端で流路が丸く終わっている部分では、炭化物に混じって多量の土器・木器が出土した。出土土器は、第Ⅱ・Ⅲ様式に属する土器であり、木器には鍬・加工木などが認められた。

SD72は、B地区3T区付近から発した流路が大きく蛇行しながら西へ向かい、10S区で二股に分かれて調査地西端につながっている。二股に分かれた中央部分は、マウンドのように高まりとして残されている。東端では幅30～40cm、深さ20～30cmと浅い。流路も中央部分では幅60～70cm、深さ60cmで断面U字形を呈する流路となっている。流路が二股に分かれているところでは、柳の根株が認められるとともに付近に径2mの範囲で小貝塚が検出された。遺物は、流路が大きく蛇行して広がった7区のコーナの部分に集中していた。土器は、多量の炭化物とともに甕が多く出土した。中には、(530・536)のように完形の甕も出土した。溝内の堆積は、大きく3層に分けられるが、中層内より多くの遺物が出土している。

SD71は、B地区の最も南で検出された。B地区南端より発した流路は、二股に分かれ一方は東へ、一方は西へのびている。東へ向かう流路は、幅30～40cm、深さ10～20cmと浅く、西へ向かう流路は、幅60、深さ50cmで徐々に深さを増しながら進み、B地区西で一旦SD72と合流し、さらに二股に分かれてトレンチ西端につながる。このため、SD71に囲まれたトレンチ南西角は、マウンドのように大きな高まりとなっている。溝内からの出土遺物は少ない。流路内の堆積は大きく2層に分けられる。上層は、灰色シルトで植物遺体・炭化物などと少量の遺物が含まれていた。下層は、オリーブ黒色シルトでほとんど遺物は認められなかった。

##### 2 土坑



- 1. 灰色(5Y $\frac{5}{2}$ )シルト
- 2. オリーブ黒色(5Y $\frac{2}{2}$ )シルト
- 3. オリーブ黒色(5Y $\frac{5}{2}$ )シルト
- 4. 暗灰黄色(2.5Y $\frac{5}{2}$ )砂層～シルト、有機物含む
- イ. 灰色(5Y $\frac{5}{2}$ )粘土  
炭化物・灰白色粘土がブロックで含まれる。
- ロ. オリーブ黒色(5Y $\frac{5}{2}$ )微砂層～シルト
- 5. 灰色(5Y $\frac{5}{2}$ )粘土質シルト
- 6. 灰色(5Y $\frac{5}{2}$ )シルト質粘土
- ハ. 灰色(7.5Y $\frac{5}{2}$ )シルト、植物遺体・炭化物多く含む
- 7. オリーブ黒色(5Y $\frac{5}{2}$ )シルト、植物遺体含む

第11図 遺構内土層断面実測図 (1/30)

土坑は、50箇所以上認められたが、人為的に掘削されたと思われるものは少なく、遺構面上の自然の凹凸によると思われるものが大半を占める。以下、比較的掘削が深く、人為的な遺構の可能性のある土坑について説明を加えていくことにする。

SK48は、9B区で検出された。内部に炭化物が多量に認められ、掘り込みも深いところから、何らかの遺構と考えられる。長辺約3m、短辺1.5mの不整形な長方形を呈し、深さ70cmを測る。坑内の堆積層は3層に分けられる。

SK49は、径3.5mの不整形な隅丸方形状を呈し、深さ約15～20cmを測り、内部より弥生土器が少量出土している。

SK51は、SD66につながっている土坑である。一辺2mの隅丸方形で深さ45cmを測る。SD66は、9T区から8T区まで延長10mを検出した。幅30～50cm、深さ10cmの溝で、東端は自然流路SD72に取り付いて終わる。

SK53は、9Q区で検出した。一辺約1mで三角形状を呈し、深さ5cmでSD69に取り付いて終わる。

SK42は、9Q区SK53に隣接して検出した。長辺1.3m、短辺70cm、深さ20cmを測る。土坑底面は、皿状に凹む。堆積土は、2層に分かれる。上層は、厚さ5cmの灰色シルト、下層は厚さ15cmのオリーブ黒色シルトである。

SK43は、11Q区で検出した。長辺2m、短辺1.2m、深さ30cmを測る。隅丸長方形状を呈する。堆積土は、上下2層に分かれる。上層は、厚さ20cmの灰色シルト、下層は厚さ10cmの暗灰色シルトである。

### 3 杭列

B地区内で多くの杭列及び杭を検出した。これらの杭及び杭列が弥生時代の遺構に伴うものか以後の時期に上層から打ち込まれたものか判断できない。ここでは自然流路に沿って並ぶ杭列について説明を加えておきたい。

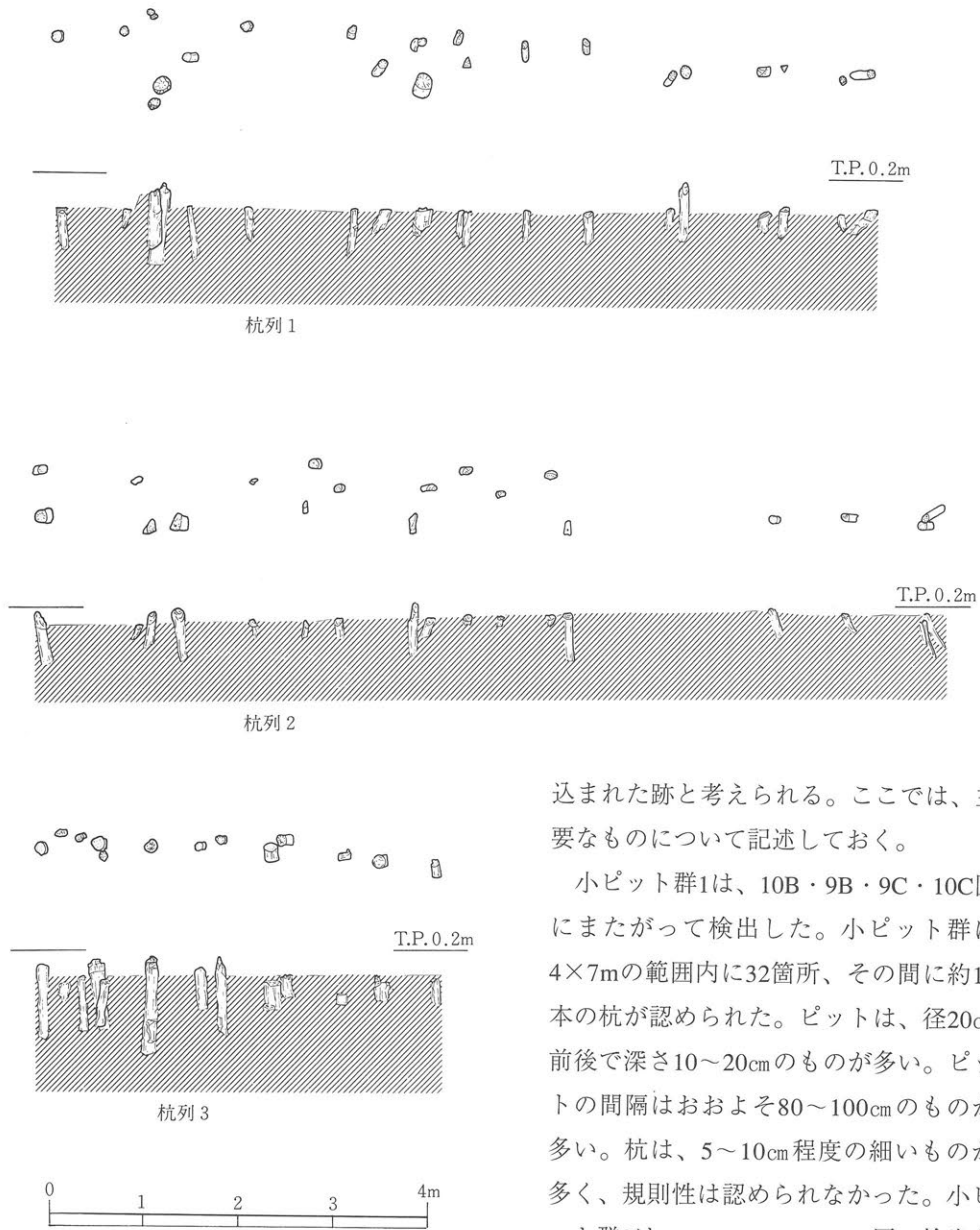
杭列1は、SD72の中央部分の南肩に沿って打ち込まれていた。東西方向7mの間に計22本の杭が認められた。杭の間隔には20～30cmのものと50cmのものがあり、かなりのバラツキが認められる。杭には先端を加工したものがあり、当初より杭材として用意されたと思われる。

杭列2は、杭列1の南約3mで平行する形で検出された。東西方向8mの間に計19本の杭が20～50cm間隔で検出された。径5～10cmで杭列1に比較して多少細い杭材が使用されている。

杭列3は、SD72の北肩で検出した。東側はSX17で削平されたものか続かない。東西方向3.5mの間に計15本が認められた。杭の間隔は、10～30cmと密に打ち込まれており、杭の径も10cm前後のものに統一されている。

### 4 小ピット群と杭

B地区内で小ピット群と呼ぶピット及び杭が認められた。これらのピットが何の目的につくられたものか判断できないが、掘方をもつものが少ないところから、柱材ではなく杭が打ち



第12図 杭列平面断面実測図 (1/80)

た。小ピットは、径10~30cm、深さ10~20cmの規模で径25cm前後のものが多い。密接するもの、50cm程度の間隔をもつものなど不規則である。ピットの配置は4m方形の輪郭内に収まる。杭は5~10cmの細いものが多い、ピットの少ないところに集中して見られるようである。その他に9N区には南北方向に並ぶ7箇所のピットを検出した。ピットは、径約30cmから15cm前後のものも多く比較的規模が大きい。柵列のようなものかもしれない。

込まれた跡と考えられる。ここでは、主要なものについて記述しておく。

小ピット群1は、10B・9B・9C・10C区にまたがって検出した。小ピット群は4×7mの範囲内に32箇所、その間に約10本の杭が認められた。ピットは、径20cm前後で深さ10~20cmのものが多い。ピットの間隔はおおよそ80~100cmのものが多い。杭は、5~10cm程度の細いものが多い、規則性は認められなかった。小ピット群2は、7B・7C・6B・6C区で検出された。SX15の周辺で4m方形の範囲内で25箇所のピットと約17本の杭を検出し



第13図 宮ノ下遺跡第1次調査B地区 弥生時代～古墳時代遺構面平面図 (1/200)



## 4. 出土土器

### 1) A地区出土土器・土製品

#### 1 縄紋土器

A地区の貝塚とその周辺よりコンテナ約8箱分の縄紋土器が出土した。これらの土器は船橋式～長原式の凸帯紋土器深鉢を主体とし、これに少数の浅鉢と壺が混じるものであり、他に滋賀里Ⅲ式に属するとみられる浅鉢が1点含まれている。凸帯紋土器の多くは貝層1・貝層2下部と中部及び周辺の第9L層より出土したものであるが、上層より2次的な状態で出土したものも多い。

#### 深鉢

口縁端部と頸胴部境にそれぞれ刻目を施した凸帯を貼り付けた二条凸帯の深鉢を主体とする。口縁部凸帯の貼り付け位置や凸帯上の刻目の大きさ・刻目をかるく施すものが多いなどの点で船橋式よりも長原式によりちかいかい構成とみられるものである。いっぽう、口縁端部だけに凸帯を貼り付けた一条凸帯の深鉢のなかには、二条凸帯紋深鉢よりも古相を示すものが僅かに含まれているが、大部分は口縁部凸帯と刻目の特徴が二条凸帯紋深鉢と共通することから、同時期とみられるものである。以下において、二条凸帯をもつ深鉢を深鉢A、一条凸帯をもつ深鉢を深鉢Bと区分し、それぞれの特徴を記述する。なお、胎土は特記しないかぎり角閃石を多量に含むいわゆる生駒西麓産胎土を使用する。

**深鉢A** 凸帯が口縁部と胴部にめぐるといゆる二条凸帯紋土器である。深鉢Aは、凸帯が口縁端部よりやや下に付くA1類、凸帯が口縁端部に接して付くA2類、凸帯が口縁端部に接して付くと共に胴部凸帯との間隔が狭いA3類、口縁端部外面に下方に長い断面三角形の凸帯をもつA4類とに細分される。また、凸帯に施された刻目は大型または普通のD字形・O字形（大D字形・大O字形・D字形・O字形）を呈するものをa類、小型のD字形やO字形（小D字形・小O字形）を密に施したものや細かくへらにより縦線を刻んだものなどをb類とする。

**深鉢A1類** 二条凸帯紋深鉢のうち凸帯が口縁端部より下がった位置に付くもの。刻目はa類（D字形・O字形）を主体とするが（1・3）、b類（小D字形）を施したものもみとめられる（11）。

1は胴部の凸帯を境に口頸部が内反する形態。外面の調整は、口頸部が板状の原体による横方向のナデ、胴部凸帯の下が右から左のケズリによる。これらの調整は二条の凸帯を貼付けたのちに行われている。内面の調整は、口縁部がユビオサエ+ナデ、頸部～胴部が板状原体によるナデ又は掻きならしにより行われている。刻目はD字形であるが、一部はO字形を呈する。3は頸部が直立したのち口縁部で僅かに外反する形態。外面の調整は、頸部が板状原体による横方向のナデ、胴部凸帯下部が右から左のケズリ、以下が下から上のケズリによる。内面の調整は口頸部がユビオサエ+ナデ、胴部凸帯付近より下はナデによる。刻目はD字形。1

は南北約7m、東西約5mの範囲より、貝層2下部主体一部中部混りで出土。3は接合資料が東西に約5m離れた貝層1と貝層2下部とに分かれて出土した。11は、胴部から口頸部にかけての立ち上がりやゆるやかな砲弾形の形態を呈し、器壁が全体に薄い土器である。口縁は上端部に僅かに面をもつ。口縁部凸帯は端部より幾分下った位置に付く。胴部凸帯は漸移的な頸胴部境に付く。二条の凸帯はともに細筋のもので、その上に小D字形の細かい刻目がかかるく施されている。外面調整は頸部に板状原体による横方向のナデ、胴部凸帯以下に下から上へのケズリが比較的丁寧に行われているが、調整痕の下には1.5cm程の間隔で粘土紐の接合痕も明瞭に残されている。内面は板状原体による横方向のナデ調整により平滑に仕上げられている。この土器の口頸部には、焼成後に穿たれた2個一対の小円孔が上下に二対みとめられる。その役割は明らかでないが、木製容器等にみられる補修孔に類似するものである。接合資料は貝層下部に相当する第9L層内の南北20m以上、東西5m以上の範囲より出土した。胴部を欠損するが二条凸帯をもつとみられる28も、b類刻目（極小O字形）を施した口縁部凸帯が端部よりやや下がった位置に付く。凸帯は低く粗雑に貼付けられたものである。口縁端部は器壁が薄く、上端は鈍い稜線となっておわっている。外面は板状原体によりナデあるいは掻きならし調整し、内面はユビあるいは巻貝腹部のようなもので横方向にナデている。非生駒西麓産の胎土を使用。貝塚上部を覆う第8U層より2次的に堆積した状態で出土した。

深鉢A2類 二条凸帯紋深鉢のうち口縁部凸帯が端部に付くもの。刻目はa類（大D字形）が一部みとめられるが、大半はb類（小D字形・O字形）で占められている。b類の刻目を施した深鉢A2類は、本貝塚出土の凸帯紋深鉢の大半を占めるものである（6・10・27・29・30・130）。

深鉢A2類のなかでは数少ないa類の刻目をもつ2は、胴部凸帯を境に口頸部が僅かに内反する厚手の深鉢である。口縁は端部に面をもつ。端部に接して貼り付けた凸帯は太筋で大きく突出し、その上に大D字形刻目が間隔をあけて施されている。調整は頸部外面と内面全体が板状原体によるナデあるいは掻きならし、胴部外面は凸帯下部が右から左のケズリ、その下に右下から左上へのケズリが施されている。非生駒西麓産の胎土を使用し、灰白色を呈する。貝層2下部下半より出土した。

b類の刻目をもつ深鉢A2類には、口径30cm前後の大型品と口径20cm以下の小型品とがある。大型・小型とも器形は口頸部が内反するもの、ほぼ直立するものとがみられ、また大型品には口頸部が大きく内傾するもの（7）もみられる。口縁部と胴部の凸帯は、大型品・小型品ともに細かい刻目に合わせて細く、突出度の小さいものが大半を占めている。大型品の外面調整は、二条の凸帯を貼付けた後、口頸部に板状原体による横方向のナデ、胴部凸帯直下に横方向のケズリを行い、以下の胴部に下から上へのケズリを行っている。口頸部の調整は比較的丁寧であるが、胴部には7のように2～3cmの間隔で粘土紐の接合痕が残るものもある。内面は、口縁部に指オサエ痕を残すものが多く、弥生土器のように丁寧なヨコナデ調整を加えたものはみとめられない。頸部～胴部内面は、板状原体による横方向のナデを行うが、7～10のように粘土紐の接合痕が明瞭に残るものもある。小型品の調整は、外面・内面とも大型品と

同様であるが、総じて丁寧である。b類の刻目をもつ深鉢A2類には非生駒西麓産胎土を使用するものはみとめられない。出土層位は、7が貝層1と貝層2下部、6・8・10・27・29・30が貝層2下部およびこれに相当する第9L層下半である。9は貝層2上部を覆う第8U層より2次堆積の状態で出土した。このうち6は接合資料が南北3m以上離れた地点より出土し、7は南北15m・東西10mの範囲より出土した。

**深鉢A3類** 二条凸帯紋深鉢のなかで、口縁部凸帯は深鉢A2類と同様であるが、胴部凸帯が上方に移動して頸部にめぐらるため、二条の凸帯間隔がとくに狭いものである(5・25・26)。凸帯は細筋のものや突出度の小さいものが付き、その上にb類(小D字形・小O字形)の刻目が施されている。とくに26は細く低い凸帯をもち、その上に極小D字形の刻目が弱々しく施されている。5は下部の凸帯を境に口頸部が内傾する点において深鉢A2類の特徴を残しているが、25・26は器体の最大径部付近に貼付けるといふ二条凸帯紋深鉢の下部凸帯に関する約束が崩れている。外面調整においては、5・25は下部凸帯を境にナデと下から上へのケズリとに変化する。これは深鉢A1・A2類と同様の方法である。いっぽう、26の外面は胴部下半をケズリ、胴部上半～口頸部を板状原体により縦にナデた後、下部凸帯を貼付けている。こちらは下部凸帯を境に調整方法が変化するといふ二条凸帯紋深鉢の伝統が崩れている。25は貝層2下部、5は接合資料が貝層2下部と中部に分かれて出土。26は貝層2中部とこれに相当する第9L層上半そして貝層2中部と上部の間層である第9U層とに分かれて出土した。このうち25の接合資料は南北15m以上離れて出土したものである。

**深鉢A4類** 1点(165)のみ出土。口縁部外面に粘土を貼り付けて断面が下に長い三角形を呈する凸帯を作り、口頸部と胴部の境にも低い凸帯を貼り付ける。凸帯上に共に極めて細かい刻みを弱々しく施したものである。非生駒西麓産胎土を使用。内外とも磨滅が著しいため調整は不明である。貝層1の上部を覆う粘土層より出土。

12・13・66～71・179～183・185～204は胴部凸帯をもつ深鉢Aの破片である。いずれも口頸部外面をヨコナデ調整した後、胴部凸帯を貼り付け、凸帯下の胴外面をケズリにより仕上げている。186は胴部凸帯に細い2条の凸帯をもつ。凸帯上の刻み目は12・13・71・186・190が極小D字形、193が極小O字形、69・179・185・188・194・199～201・204が小D字形、70はO字形、その他はD字形を呈する。66・188・189・191・198・203・204の胎土は非生駒西麓産。

**深鉢B** 凸帯が口縁端部にだけにめぐらる一条凸帯紋土器である。深鉢Bは深鉢Aと同じく凸帯が口縁端部よりやや下に付くB1類と口縁端部に接して付くB2類とに分けることができる。凸帯に施された刻目には、深鉢Aと同じく大D字形・大O字形・D字形・O字形を呈するa類と小D字・小O字・あるいはヘラによる縦線を刻むb類とがみられるほか、刻目を施さないc類が加わる。

**深鉢B1類** 96・98はいずれも太筋の凸帯を口縁よりやや下に貼り付けたもので、凸帯上の刻目は横長のD字形を呈する。口頸部と胴部の境は稜線がめぐることによって明確に区分できる。共に胴外面に行われた横方向のケズリが顕著である。口頸部外面と口頸部～胴部内

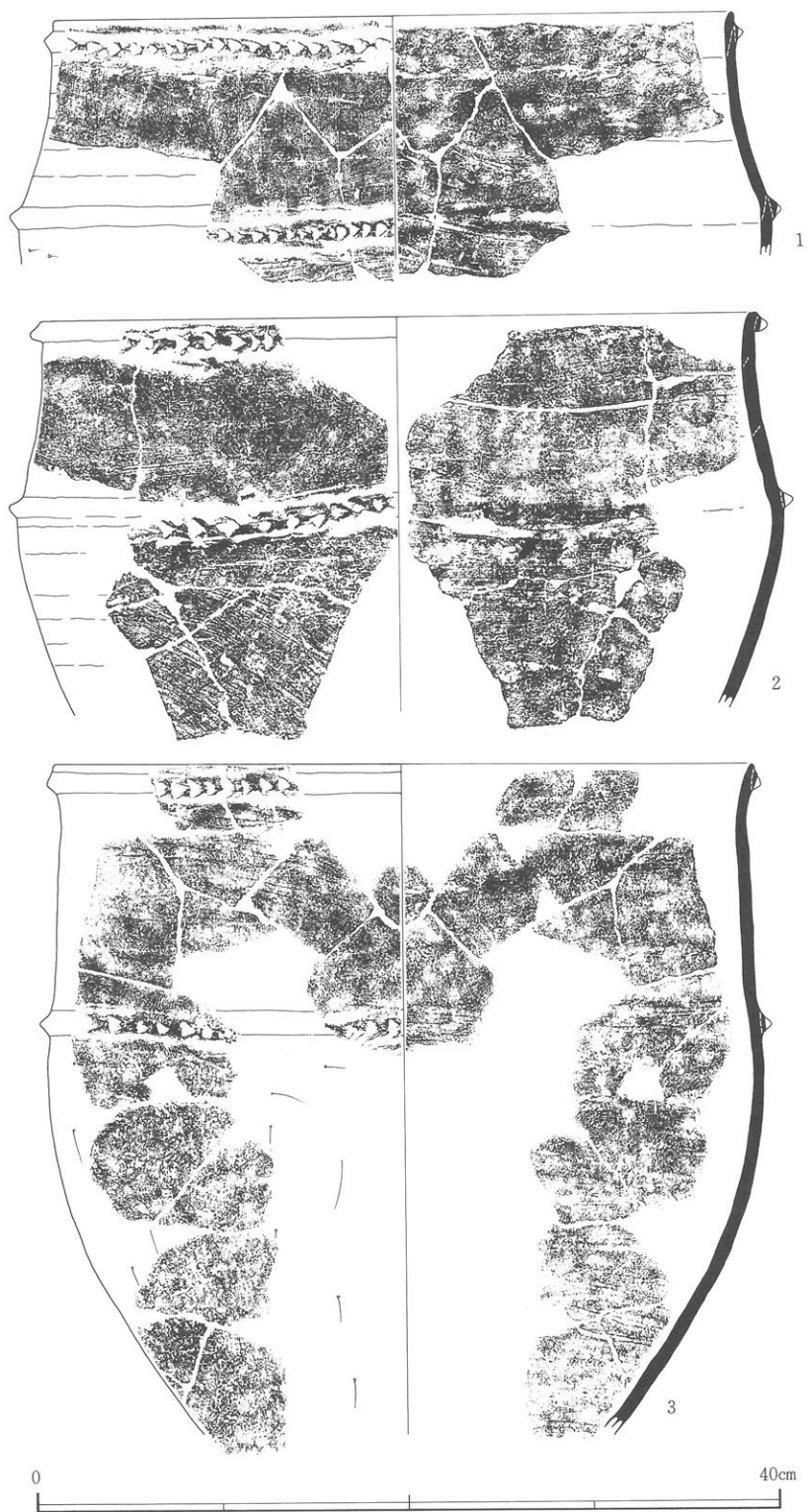
面はナデによる。96は貝層2中部、98は南北15m以上・東西10m以上離れた貝層1と第9L層最下部に分かれて出土した。

**深鉢B2類** 大型の40は胴部凸帯がない点を除くと深鉢A2類と同様の形態を呈し、凸帯上にa類（大D字形）の刻みを施したものである。口縁下から胴上部の外面には絵画ではないかとみられる線刻が施されているが、主題が何かは不明である。調整方法は口頸部外面が板状原体による横方向のナデ、最大径部以下の胴外面が下から上へのケズリ、内面全体が横方向のナデによる。39は口縁部に最大径をもち、断面台形を呈する凸帯を口縁端部に貼り付けたもの。凸帯上には爪形の刻目が密に施されている。調整は40と同じ。38は口縁部に最大径をもち、刻目を施さない断面三角形の凸帯をもつもの。外面調整は口縁下を横方向、以下を斜めまたは下から上へのケズリによる。内面は掻き削りにちかい横方向のナデにより調整する。137は口縁部上端を外側に折り返すことによって凸帯を作り出し、小D字形の刻目を施すものである。小型の32は、胴部に最大径をもつ形態を呈し、凸帯上に棒状の原体によるb類（小O字形）の刻目を施したもの。口頸部外面をナデ、胴部外面を下から上へのケズリ、内面全体を横方向のナデにより調整している。34は口縁部に最大径を有するやや浅い胴部をもつ。凸帯上にヘラを押し当てた縦線を密に施したものである。調整は、外面がミガキにちかいナデ、内面はハケ原体によるナデあるいは掻きならしを口縁下では横方向に、以下は下から上に行っている。35は同様の形態であるが、凸帯上に刻目を施さないもの。33は38をやや小型にした形態で、内外面をユビオサエ+ナデにより調整したもの。31は口頸部と胴部の境に2条の沈線紋を施し、内外面をナデ調整したもの、42は同様の形態であるが頸胴部の境に沈線をもたず胴外面をケズリによって調整したものである。b類刻目をもち32・34は非生駒西麓産胎土を使用。137は貝層2下部、31・32・34は貝層2下部相当の第9L層下半、33は貝層2下部と第9L層上半に分かれて出土。39は南北10m以上離れた貝層2中部と第9L層下半より出土。40は貝層2中部と下部とに分かれて出土した。その他の深鉢Bは貝層2上部を覆う第8U層より二次的な状態で出土したものである。

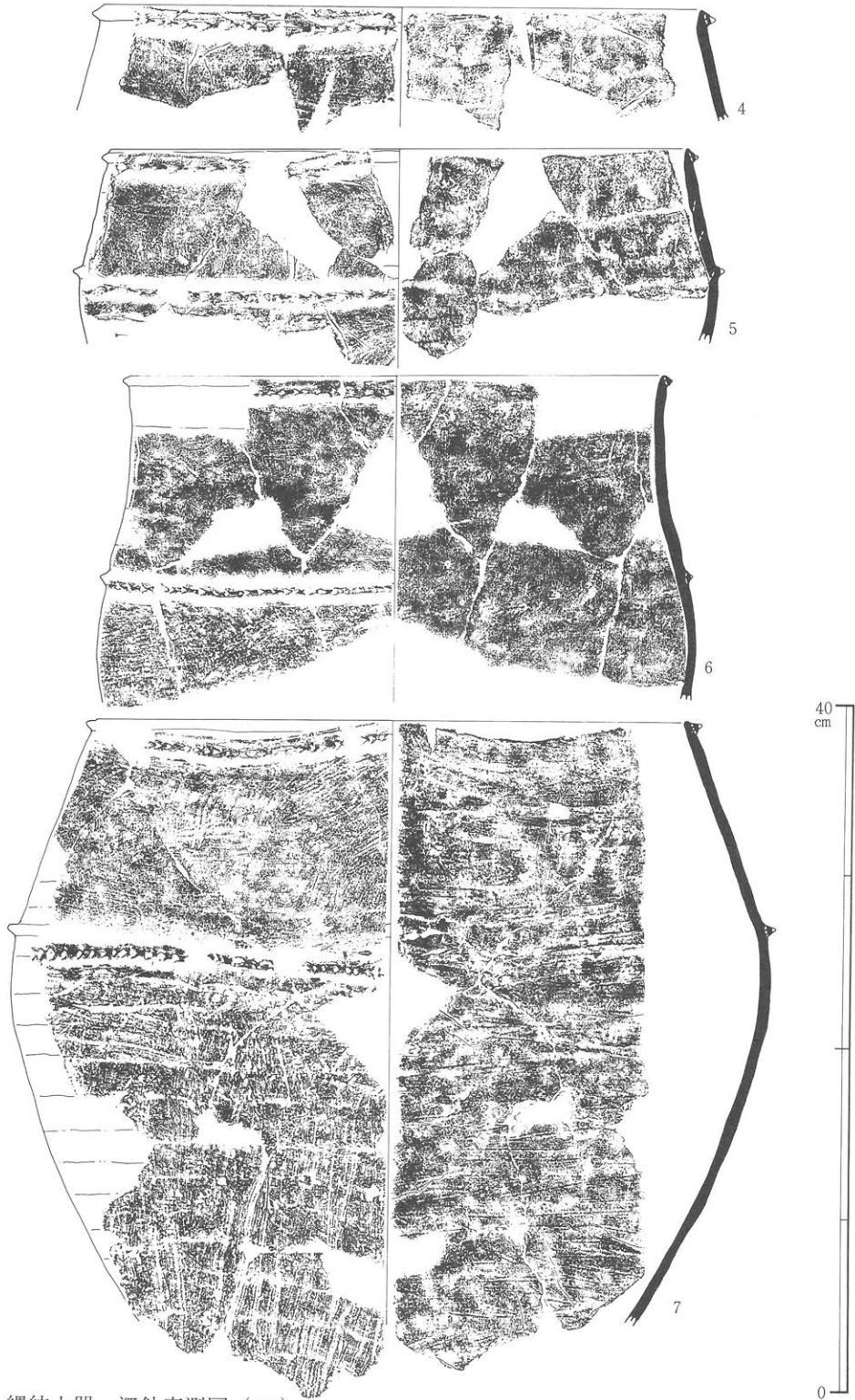
**深鉢AまたはBの口縁部** 口縁部凸帯が口縁端部よりやや下に付く1類（28・101・102・123・126・132・136・141・144・149・150・166）と口縁端部に接して付く2類（4・36・37・41・97・99・100・103～122・124・125・127～135・137～140・142・143・145～148・151～164・167～178）がある。このうち1類の101・102・150は口縁端部に面をもち、大D字形の刻目を施すが、その他の1類は口縁端部が尖りぎみで凸帯が細いものや低いもので、刻目は小D字形が多く、またその多くが非生駒西麓産の胎土を使用する。99・107～109・123・126・134・136・149・151・160・165・166・188・189・198・203は非生駒西麓産胎土。

**壺** 43は肩部から口頸部が立ち上がる小型の壺。口縁端部に接して断面三角形の小凸帯をめぐらす。凸帯に刻目は施されていない。口縁部の破片44は復原口径が11cmで深鉢としては小さいことから同じく壺の口縁部かとみられる。共に貝層2下部より出土した。

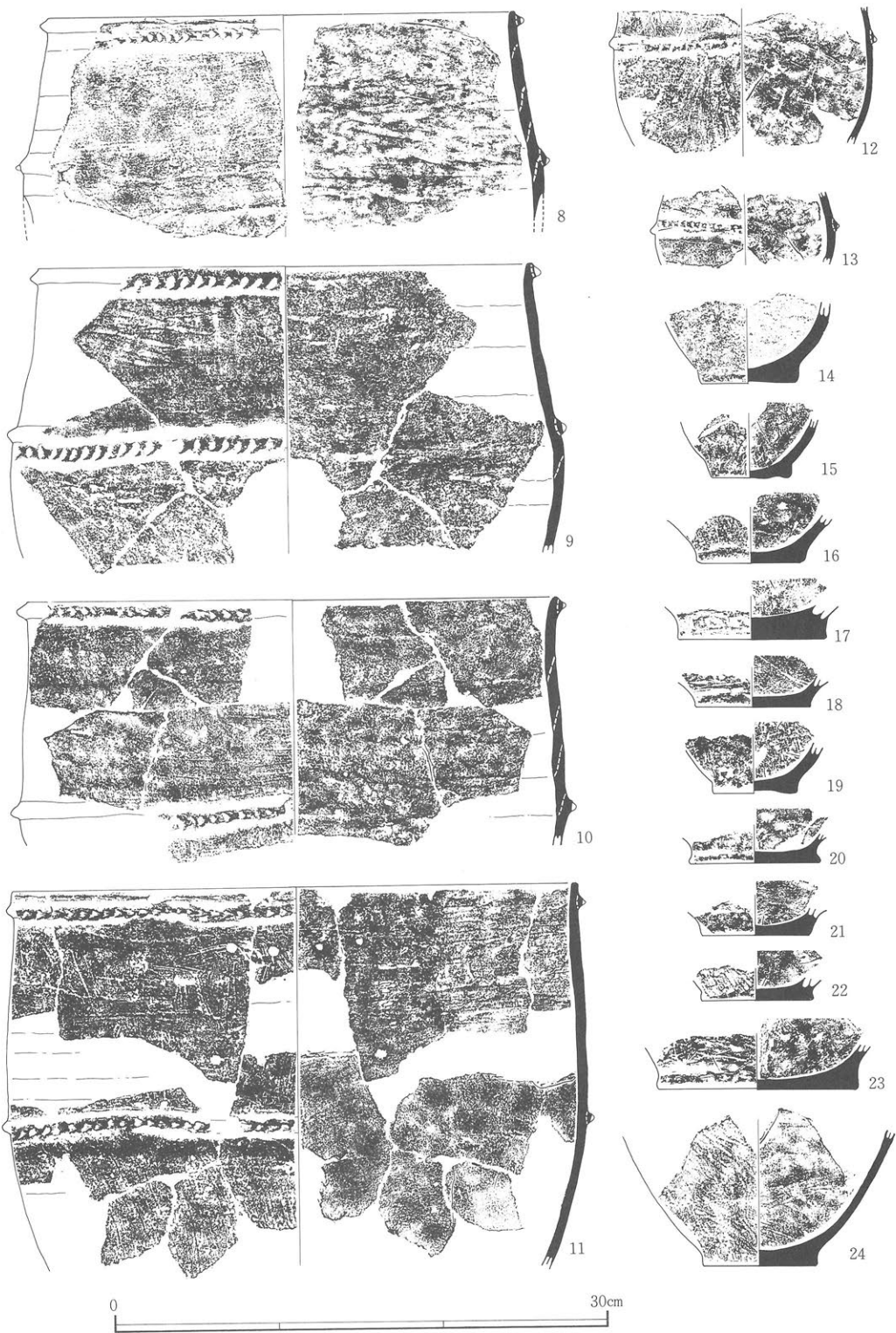
**底部** 尖り底ぎみの丸底が少数みられる（93～95）が、大半は平底である。これらの平



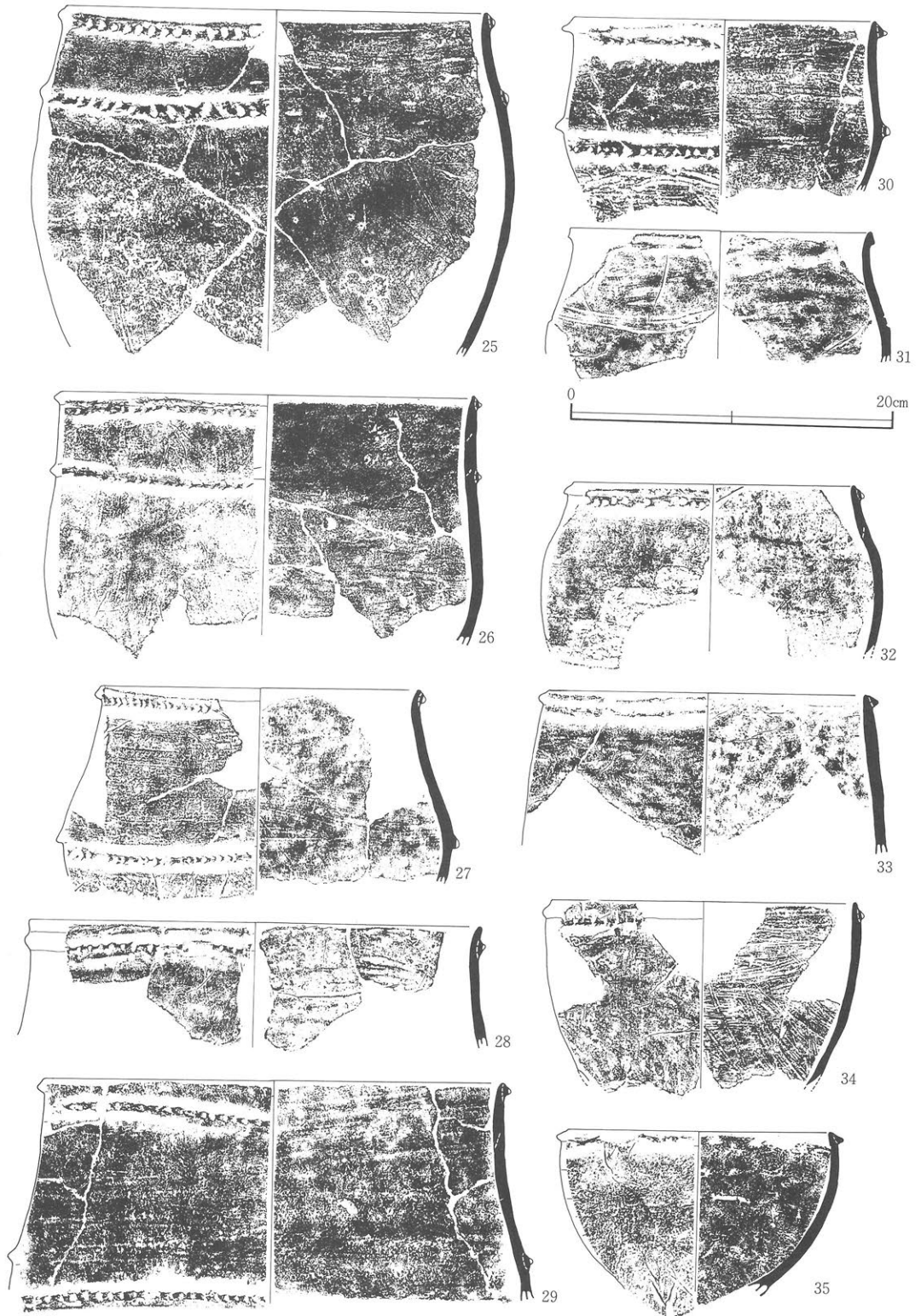
第14図 縄紋土器 深鉢実測図 (1/4)



第15図 縄紋土器 深鉢実測図 (1/4)

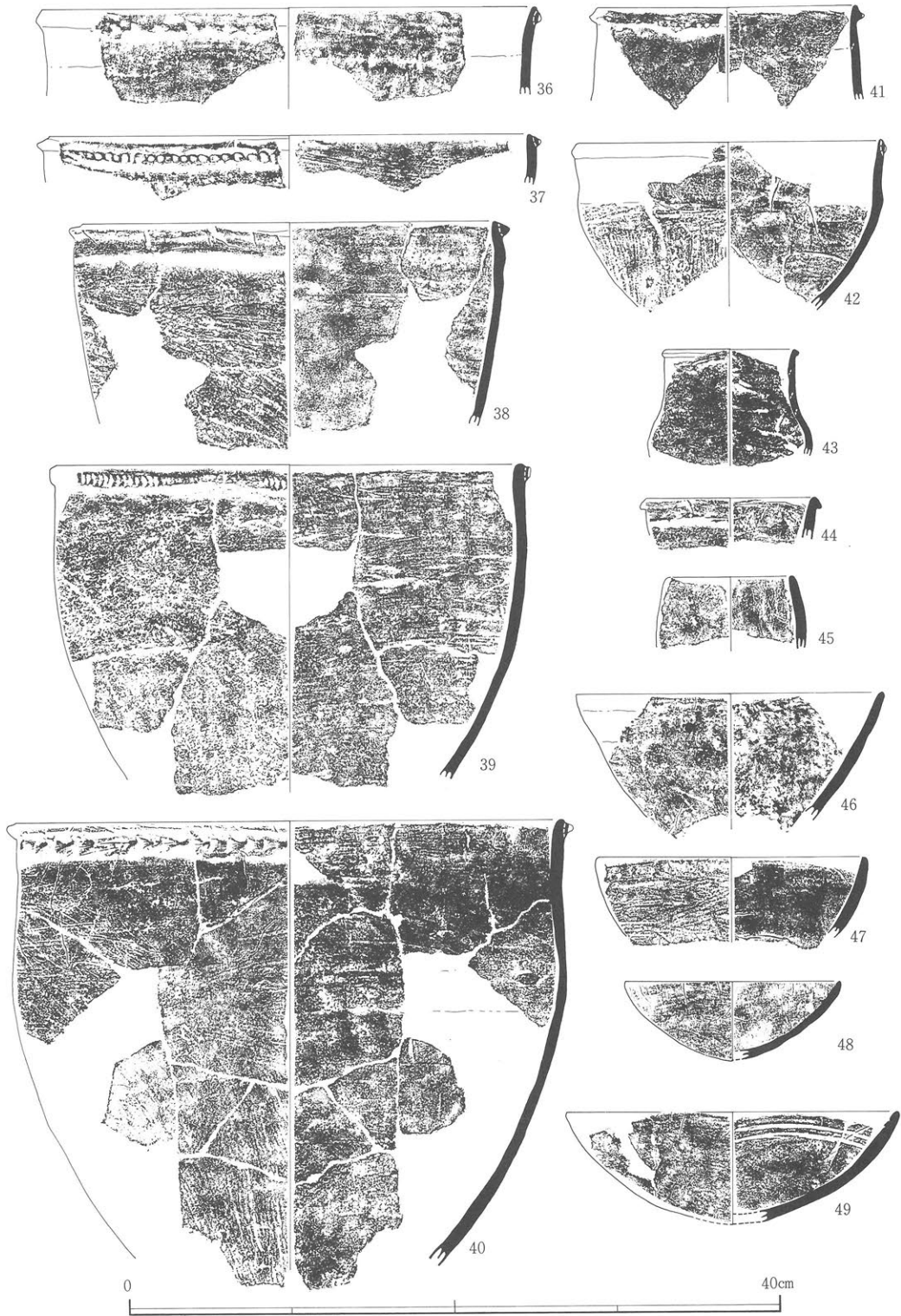


第16図 縄紋土器 深鉢実測図 (1/4)

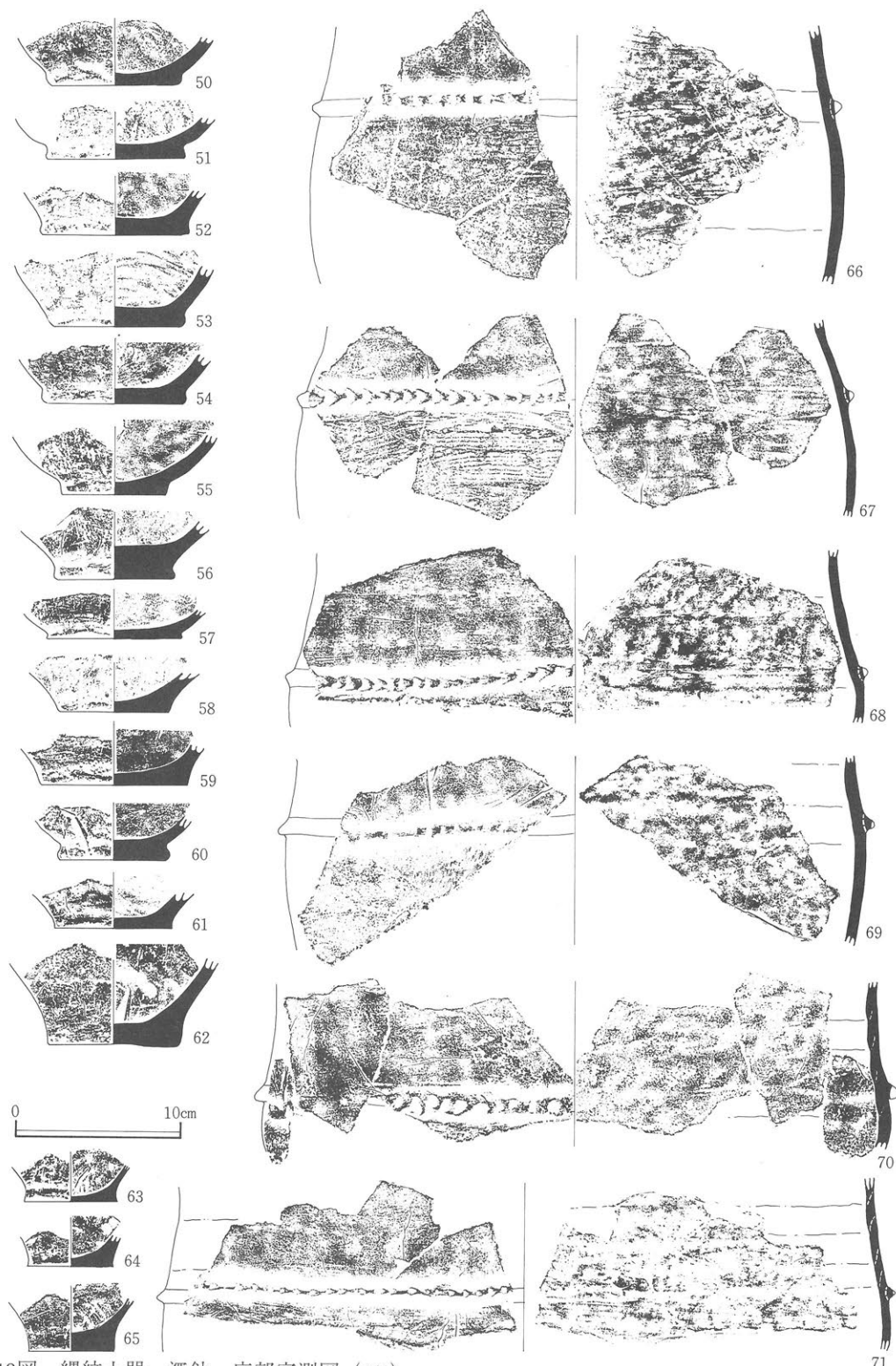


第17図 縄紋土器 深鉢実測図 (1/4)

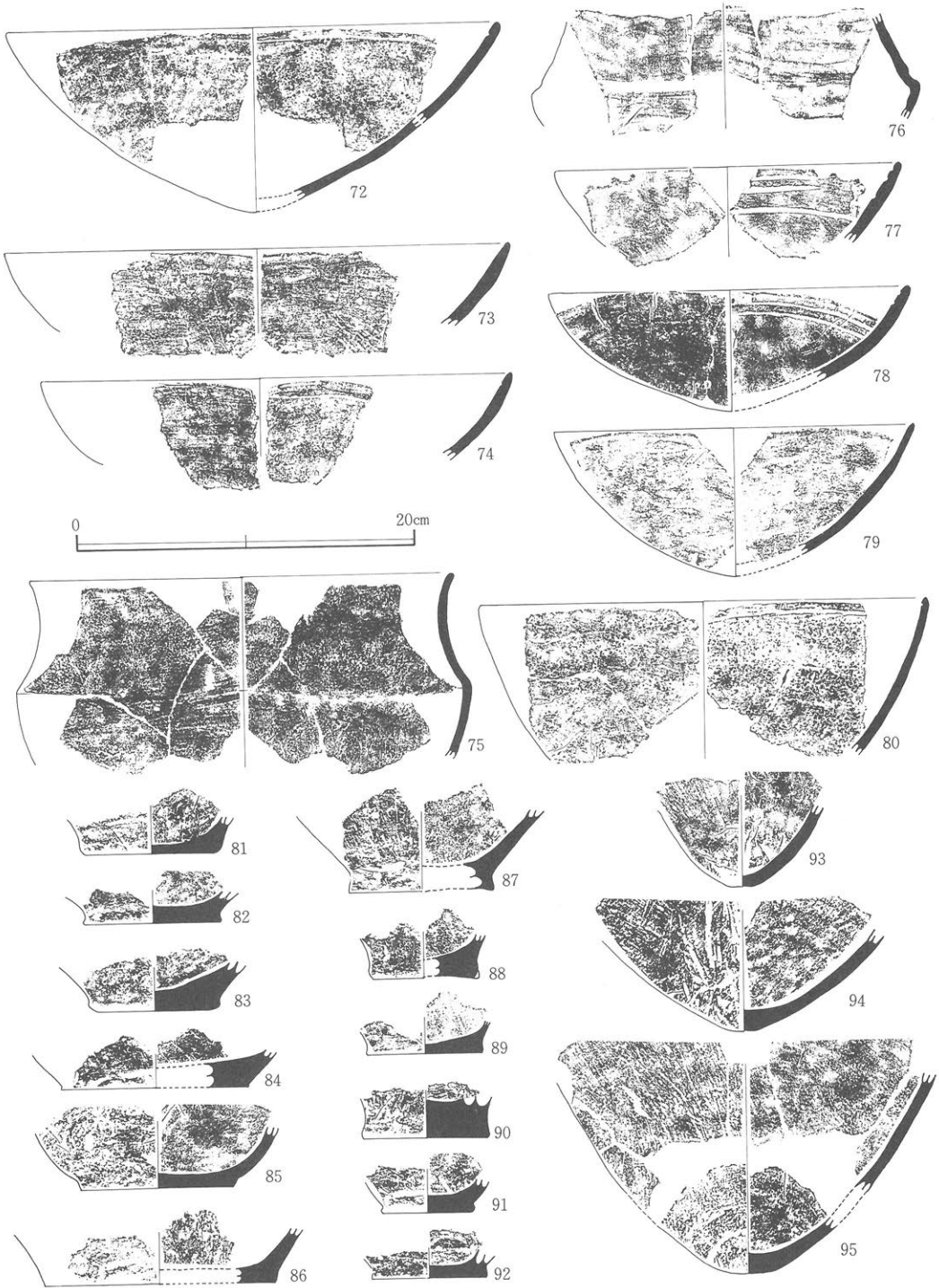




第18図 縄紋土器 深鉢・浅鉢・壺実測図 (1/4)



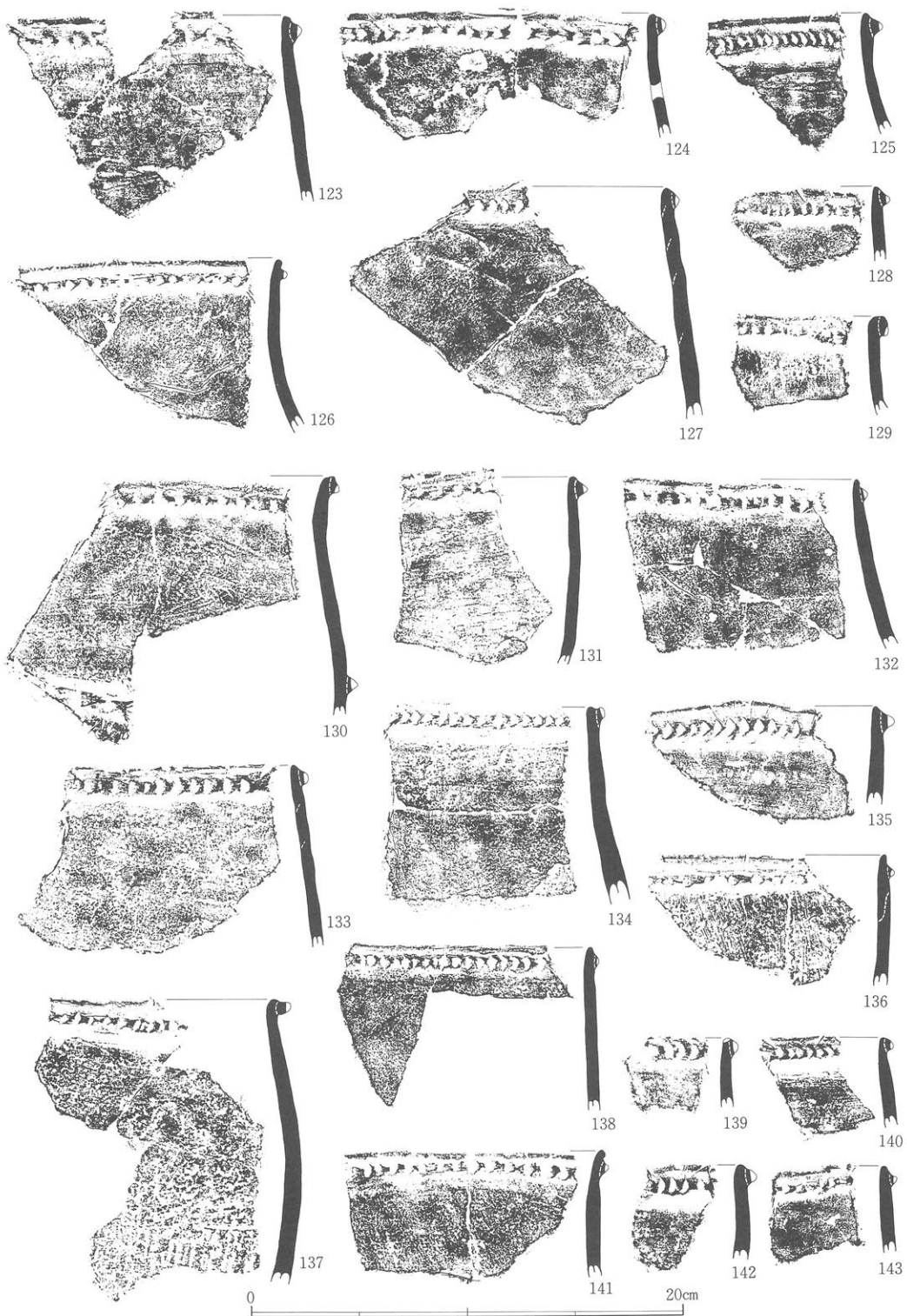
第19図 縄紋土器 深鉢・底部実測図 (1/4)



第20図 縄紋土器 浅鉢・底部実測図 (1/4)



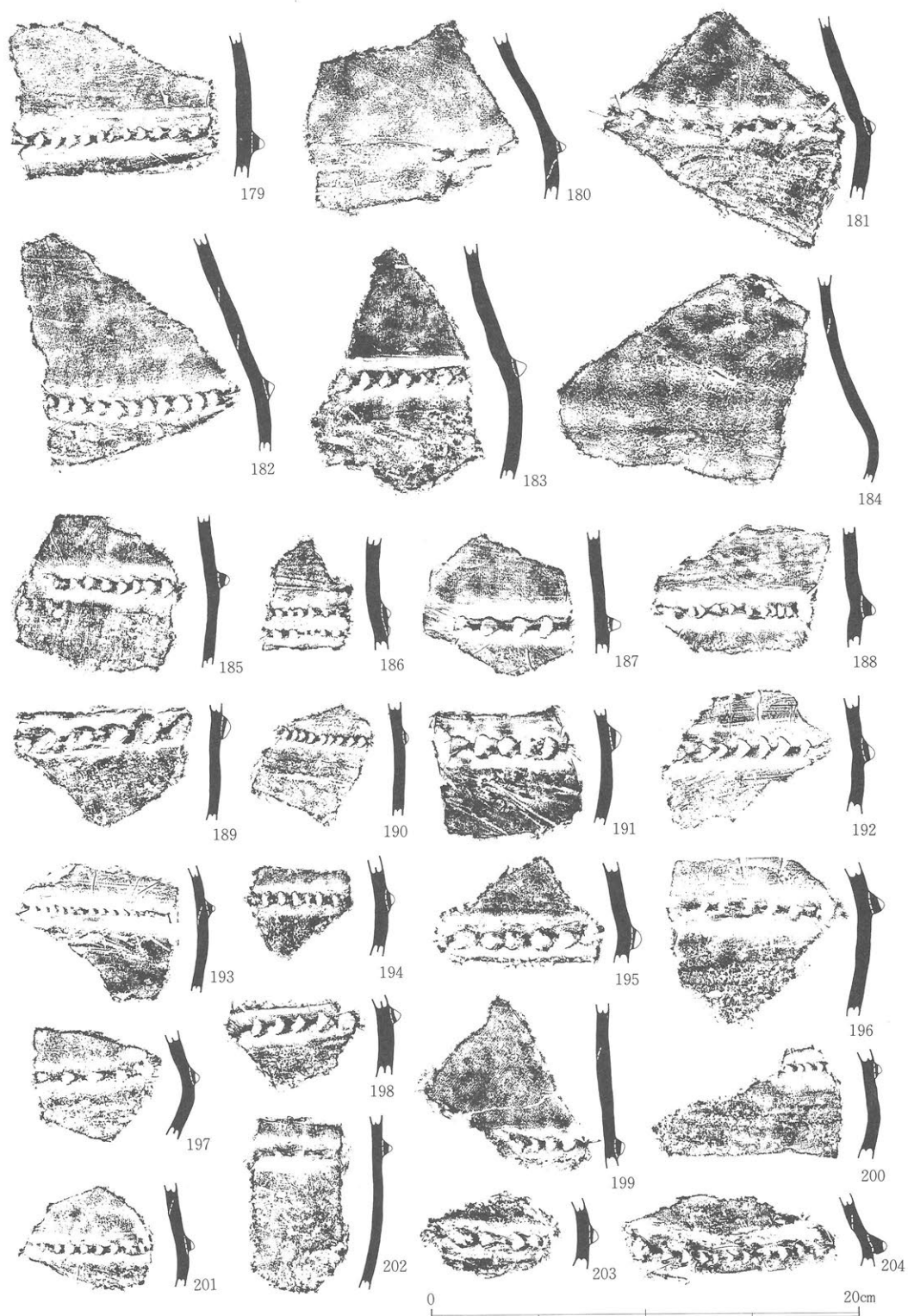
第21図 縄紋土器 深鉢拓影 (1/3)



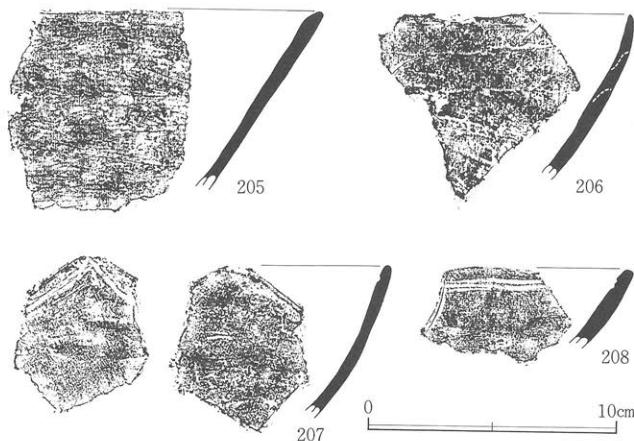
第22図 縄紋土器 深鉢拓影 (1/3)



第23図 縄紋土器 深鉢拓影 (1/3)



第24図 縄紋土器 深鉢拓影 (1/3)



第25図 縄紋土器 浅鉢拓影 (1/3)

底はいずれも外面をユビオサエとケズリ、内面をナデ・搔きならし・ケズリによって調整する特徴により凸帯紋土器の底部と判断される。これらのほとんどは深鉢の底部とみられ、胴部に比較して小さい底部が多いことが知られる。14・17・51・54・65・83・84・87・88・91は非生駒西麓産胎土を使用する。

浅鉢

半球形あるいはその浅い形態を呈するものが大半を占め (46

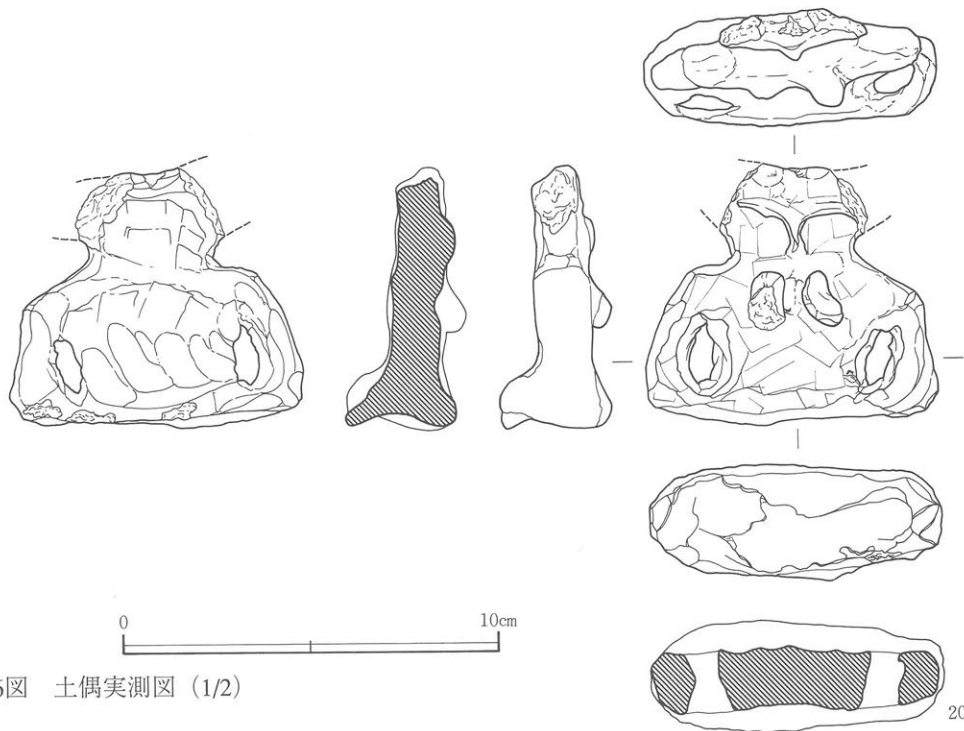
～49・72～74・77～80・206・208)、口縁内面に1～2条の沈線を施したものが多い (49・72・74・78・80・20)。77は口縁内面に3条の沈線をひき、口縁端部に山形の抉りを施す。207は唯一の波状口縁を呈する浅鉢。口縁内面に山形の沈線を施したものである。肩部より口頸部が内傾する浅鉢76は、頸部と肩部の境に一条の凹線をめぐらし、内外面とも丁寧に研磨している。生駒西麓産の精良な胎土を使用。貝層1出土。浅鉢の調整は内外面とも研磨によるものが目立つが、半球形の浅鉢にはナデ (80) やケズリによるもの (73・206) があり、また72・73・80は外面にスガが付着する。46・72～74・77・80・206は非生駒西麓産胎土を使用。72・76は貝層1、46・49・74・207は貝層2下部、47・48・73・78・79・208は貝層2下部相当の第9L層下半、77・80・206は貝層2中部よりそれぞれ出土した。以上の浅鉢の構成は深鉢と同様の時期を示すものである。

以上の半球形浅鉢あるいは口頸部が内傾する浅鉢に対して、75は浅い丸底の体部と張り出して明瞭な稜線を形成する肩部、内反して立ち上がる口頸部をもち、黒色を呈する薄い器壁の内外面を丁寧に研磨した浅鉢である。その形態より滋賀里Ⅲ式期のものと考えられる。貝層2下部より出土した凸帯紋土器期以前の唯一の土器である。

## 2 土偶

貝層2下部より高さ6.8cm・幅7.8cmを図る土偶が1点出土した (第26図)。厚さ約1.5cmの粘土板からユビ成形により頭部・胴部・両腕を作り出し、両肘を張った座位の姿勢を表現したものである。下半身は省略され、腰部に相当する部分は下面を平らに成形している。頭部は両側頭部を欠損するが、頭頂と両頬のカーブよりみて両側頭が斜上方に角状に張り出し、頭頂が窪む形状と推定される。顔面は平らで、中央に細い粘土帯を貼り付けて両眉から鼻を表現している。胸部には女性を示す乳房が貼り付けられている。乳房の一つは一部が欠損。胴部





第26図 土偶実測図 (1/2)

と両腕の表現は、肩から肘を張り出した外側の形を成形した後、腋下から細長い孔を下方に穿ち、孔壁とその周囲をユビナデして脇腹と腕の形に整形したものである。同様の方法で胴と腕を表現する土偶が東大阪市西ノ辻遺跡や大阪市長原遺跡より出土している。西ノ辻遺跡出土例は凸帯紋土器と弥生Ⅲ期～Ⅴ期の土器混じりの土層より出土し、凸帯紋土器に伴うと考えられるものであり、長原遺跡出土例は凸帯紋土器（長原式）段階のものとされている。また、東大阪市鬼塚遺跡より出土した凸帯紋土器期のものとみられる土偶は頭部を欠損するが、板状の粘土より腰部下面が平坦な上半身を成形したものであって、全体の形状が類似するほか、腕を貼り付けるのではなく両脇腹の粘土を抉りとり作り出す点においても共通する特徴がみとめられる。これらの類例より、凸帯紋土器期の土偶は全体が平面的で頭部と胴部上半身だけを表現し、腰部下面が平坦な形態的特徴をもつことが知られる。また、脇と腕の表現は胴部に円孔を穿つことで成形する特徴的な手法が用いられていることも特記される場所である。西ノ辻遺跡の例は欠損部分が多いが、今回出土したものにちかい形状とみられ、長原遺跡の例よりも写実的であることから、時期にはやや先行する可能性がある。今回出土例と西ノ辻遺跡出土例は共に生駒西麓産胎土を使用。

#### 4 弥生～古墳時代の土器

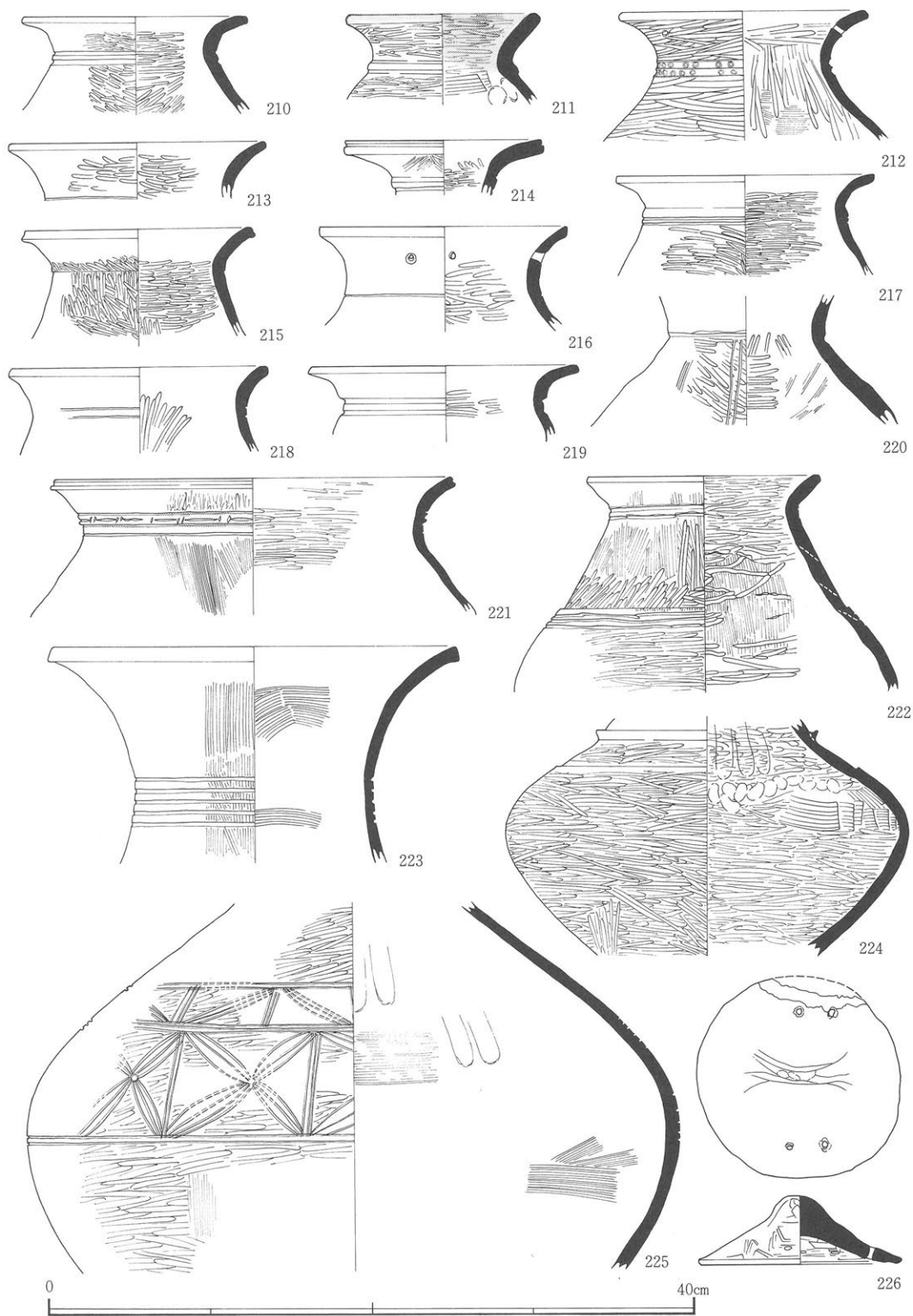
貝層2中部出土土器（第27図～第28図） 貝層2中部からは凸帯紋土器と共に少数の第Ⅰ様式に属する土器が出土した。壺222は短く外反する口縁部と肩部に段を有する胴部をもち、口頸部境と肩部にそれぞれ沈線をめぐらす中段階のもの。224は口縁部を欠損するが、肩部に段をもつと共に頸部と肩部の境に断面三角形の貼り付け凸帯を併せ持つ。貼り付け凸帯をもつ壺としては中段階に属する古い例となるものである。225は壺の胴上半部に平行沈線で描いた

区画のなかに有軸木葉紋をへら描きしたものである。この木葉紋は、軸交差点に先が丸い棒状具でかるく突いた圧痕をもつ特徴がみられる。212は口頸部と胴部の境に平行沈線をひき、そのあいだを竹管押捺紋で埋めた紋様をもつ。215・217は口頸部境に削り出し凸帯+へら沈線を施すもの、210・219は削り出し凸帯はもたないが同じ部位に平行沈線を施すものである。これらの壺は第Ⅰ様式中段階に属するものであるが、他に壺223のように口縁部が大きく外反し、頸部に5条の沈線を施す第Ⅰ様式新段階に属するものも僅かではあるが含まれている。甕は、ゆるく外反する口縁部をもち、口縁端部に刻目、口縁下の胴部に2~5条の沈線をもつもの(228・230~233・239・240)、口縁部が短く外反し、口縁端部に刻目、口縁下の胴部に2~5条の沈線をもつもの(227・229・237)とがある。228は胴部に平行沈線による山形紋を併せ持ち、237は胴部の沈線間を竹管押捺紋で充填したものである。

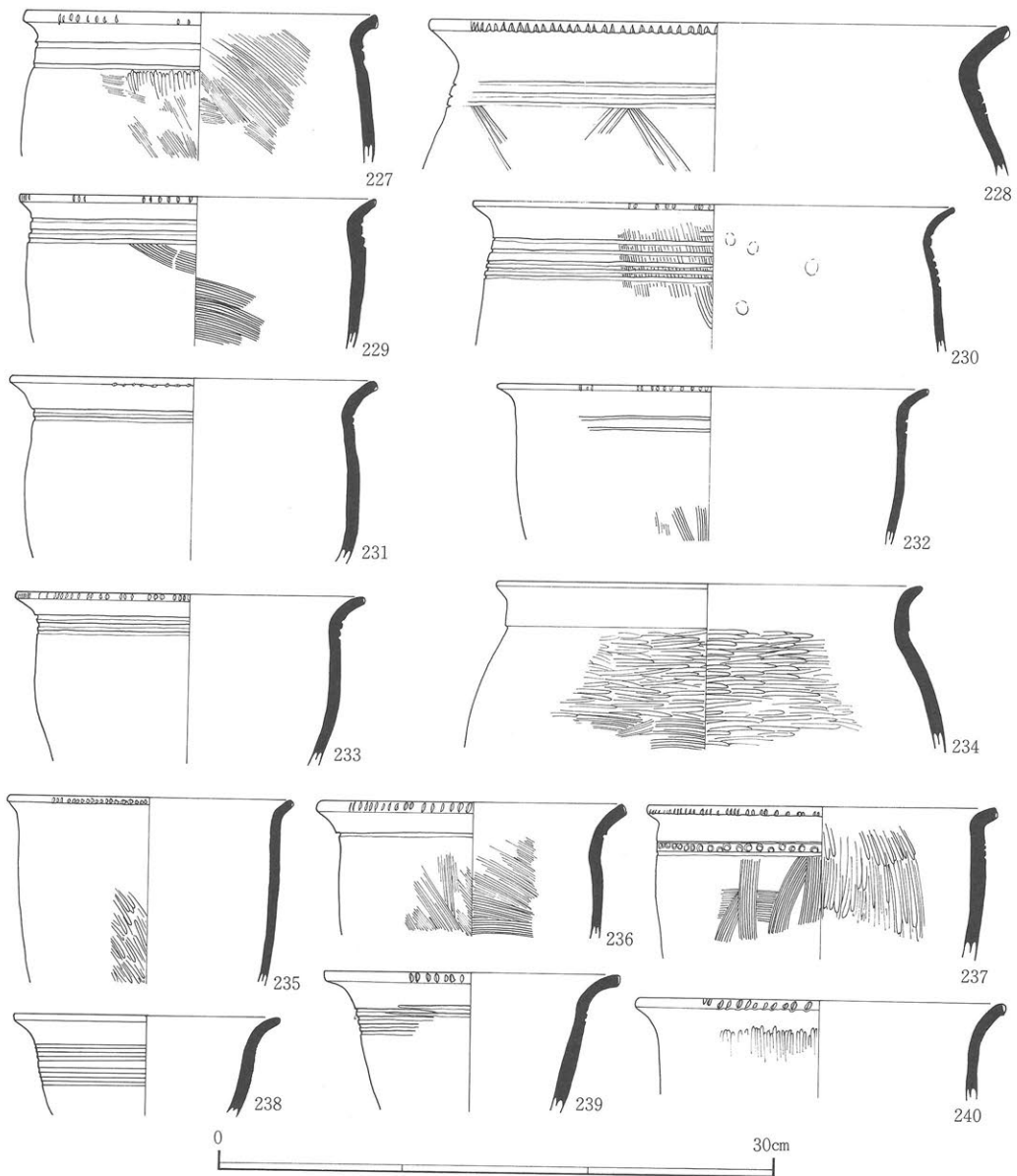
第9U層・貝層2上部出土土器(第27図~第30図) 第9U層からは、頸胴部境に明瞭な削り出し凸帯をもつ壺211・214、削り出し凸帯上に断続的な沈線を施し、浮き彫り紋様とした壺221、頸胴部境に段を有する壺243、頸胴部境に段を有すると共に肩部に垂下する平行沈線を施す壺220等の第Ⅰ様式中段階の土器と共に、大きく外反する口頸部に多条沈線をもつ第Ⅰ様式新段階の壺241、櫛描直線紋をもつ第Ⅱ様式の鉢255等が出土した。甕はゆるく外反する口縁部と胴部の境に段をもつ234、短く外反する口縁の端部に刻目をもつ235など第Ⅰ様式に属するものである。

貝層2上部出土土器は、頸部に貼り付け凸帯の剥離痕を有する壺244のように第Ⅰ様式新段階も含まれるが、大半は第Ⅱ様式に属するものである。第Ⅱ様式の壺には、口縁部が大きく外反すると共に口縁端部あるいは頸部に櫛描紋を施すもの(247・249~253)、短く立ち上がる口縁部をもつもの(248・251・254)とがある。251・254の頸部~胴上半部には直線紋が多数施されている。鉢は直口のもので、256の体部上半に直線紋が施されている。甕は口縁部がゆるく外反あるいは短く外折し胴部最大径が口径よりも小さいものである。259は口縁端部にハケメ原体による刻目、口縁下の胴外面に櫛描直線紋が施されている。

第8M層出土土器(第31図~第37図) 削り出し凸帯をもつ壺274・沈線紋をもつ壺275・277・甕327など第Ⅰ様式の土器も少数含まれているが、大半は第Ⅱ様式に属するものである。壺は口縁部が短く外反するものと口縁部が大きく外反し、長めの頸部をもつものがある。前者には頸部~胴上半に櫛目の粗い直線紋を施すものが多い(268・269・271・276・279)。後者は長い頸部に櫛目の細かい直線紋や擬似流水紋を重ね、口縁端部は無紋様または波状紋・直線紋・斜格子紋等の紋様を施す(270・273・280・282~284・290~293・297~305)。282は口縁端部に櫛による刺突列点紋、283は沈線と刻目を組合せた紋様をもつ。294~296は無頸壺で直口口縁をもつ。口縁下~胴上半に櫛描流水紋を施すもの、直線紋を重ねるもの、波状紋と直線紋を交互に施すものがある。鉢は直口口縁の体部に直線紋や櫛描流水紋を施すものが多い(308~314・316・317)。口縁部が外反する鉢306は口縁下にフジツボ状の突起を貼り付けたもの。甕322は口縁部から胴部にゆるやかに移行する形態と胴外面の顕著な横方向



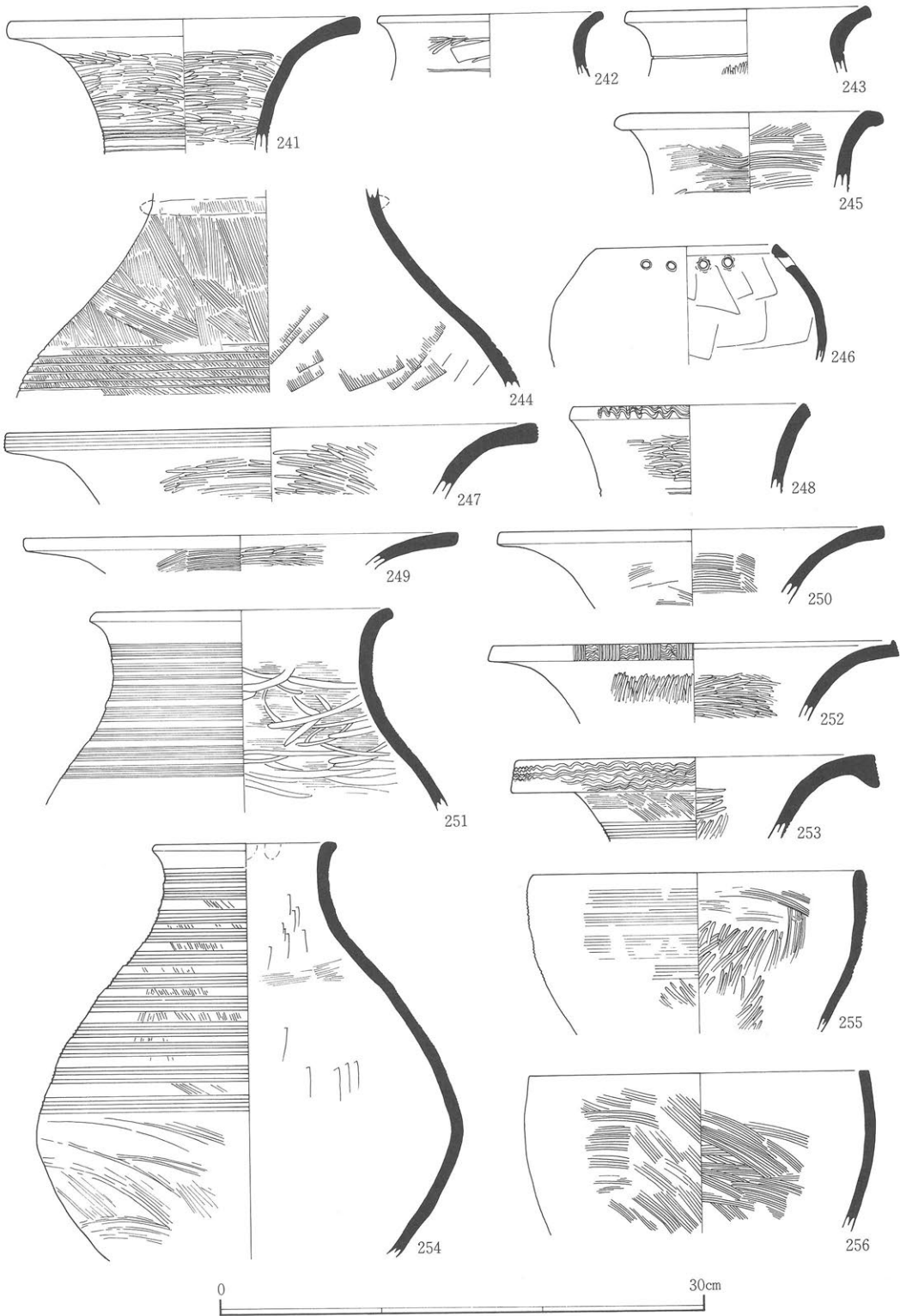
第27図 A地区貝層2中部・第9U層出土弥生土器実測図(1/4)



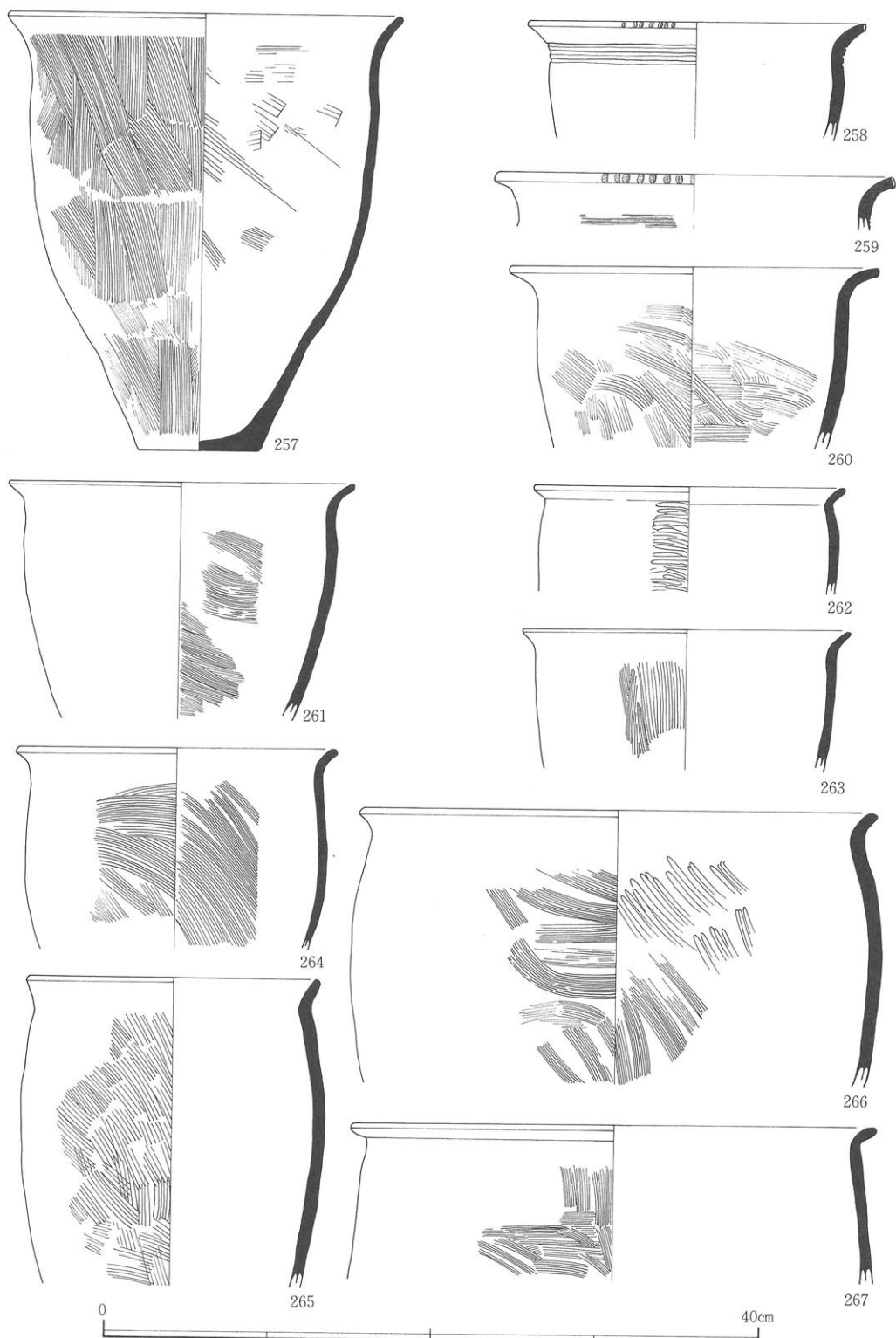
第28図 A地区貝層2中部・第9層出土弥生土器実測図 (1/4)

の削り、非生駒西麓産の胎土等によって紀伊型の甕と判断される。326・331・335は口縁端部の刻目と口縁部内外面の粗いハケメ調整によって、いわゆる大和型の甕とされるものである。323・334は口縁部に刻目をもつが、口縁部をハケメではなくヨコナデ調整するもの。完形の甕318・339は底部が大きく、胴部をミガキ調整したもの。大型甕328・339は短く外折する口縁部をもち、胴部内外面を丁寧にミガキ調整したものである。352・353は中型甕の蓋で、口縁に沿って煤が付着している。

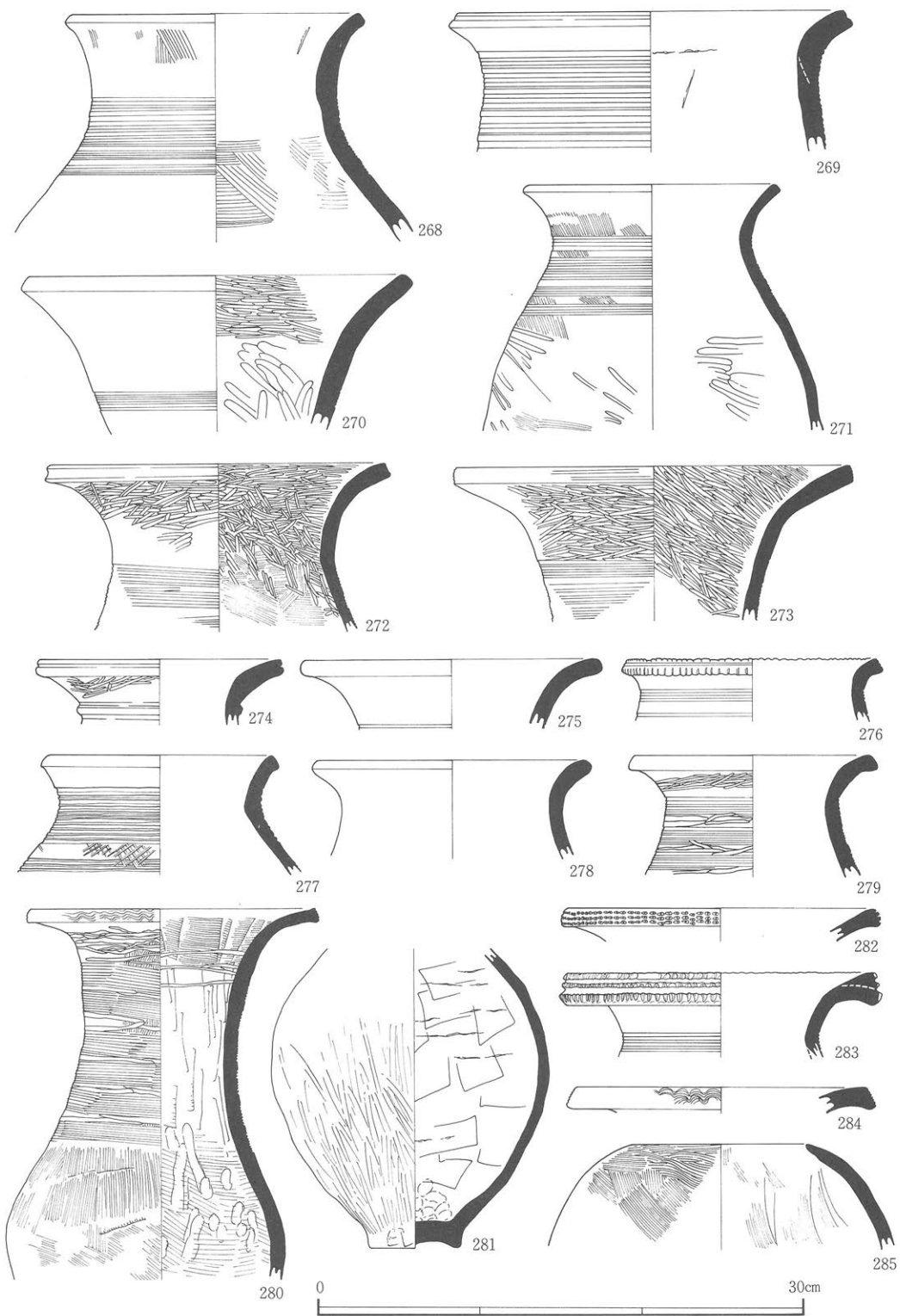
第8U層出土土器(第38図～第41図) 第8U層からは第Ⅱ～第Ⅳ様式の土器が多数出土した。



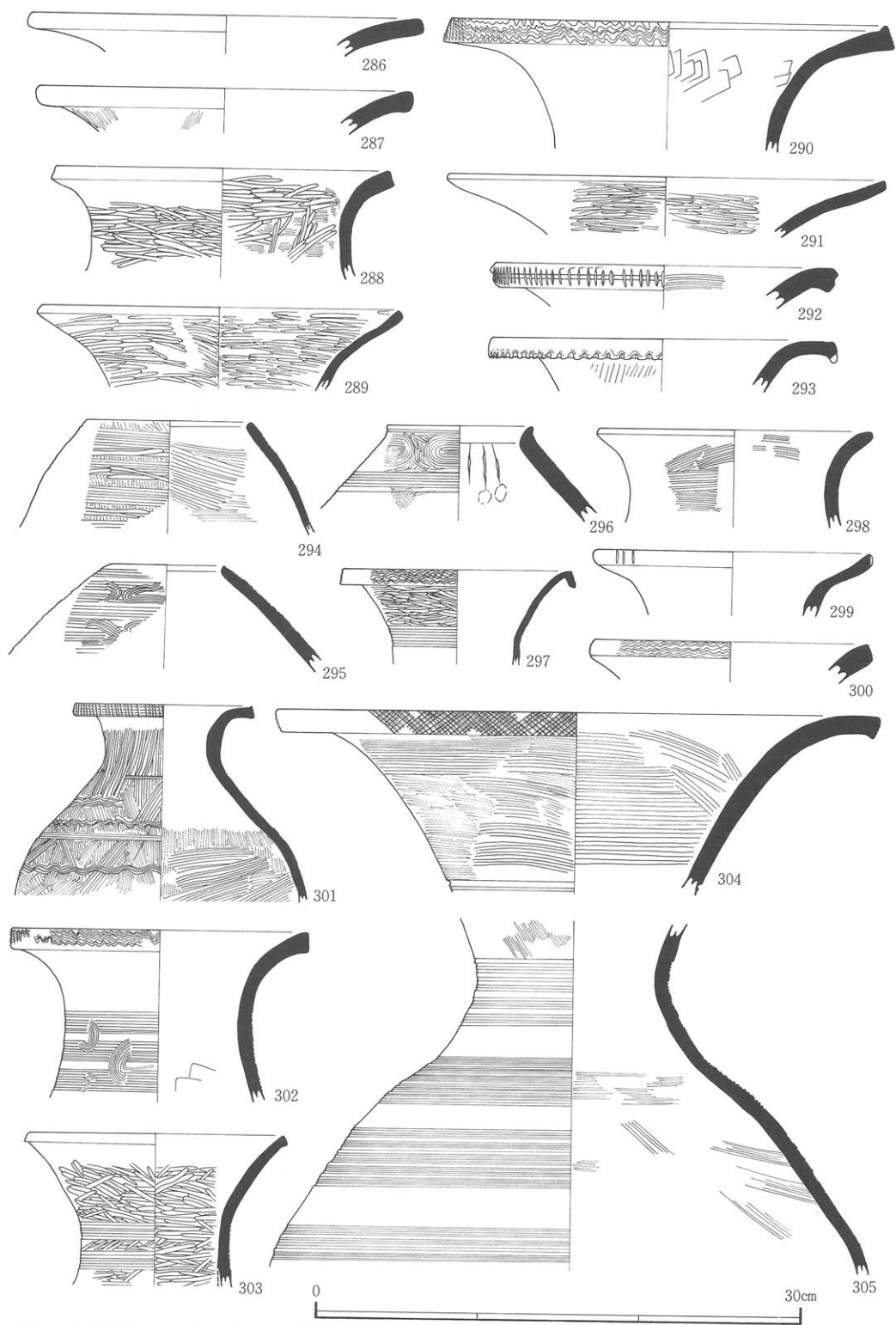
第29图 A地区第9U層・貝層2上部出土弥生土器実測図 (1/4)



第30图 A地区第9U層・貝層2上部出土弥生土器実測图 (1/4)

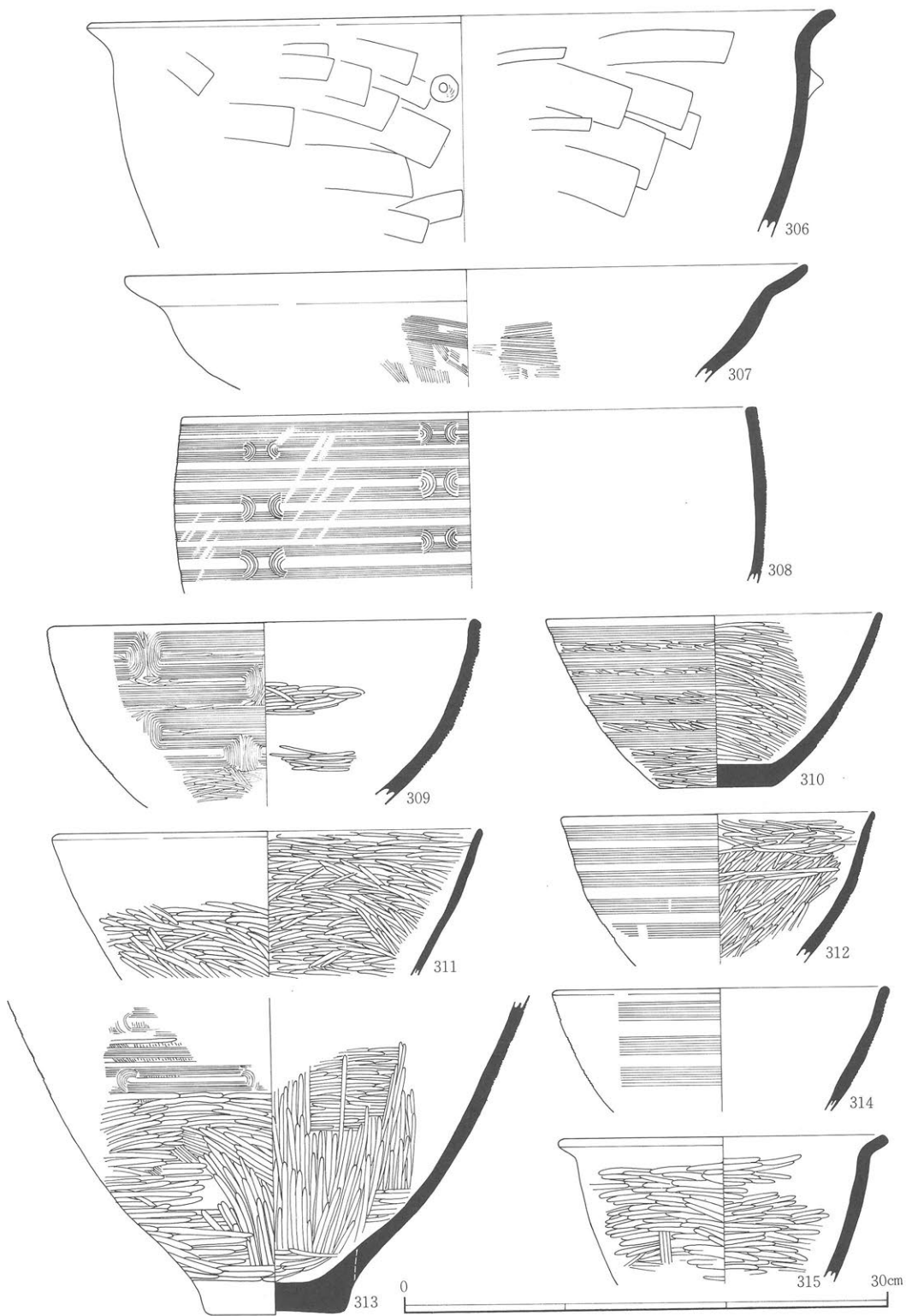


第31图 A地区第8M層出土弥生土器实测图 (1/4)

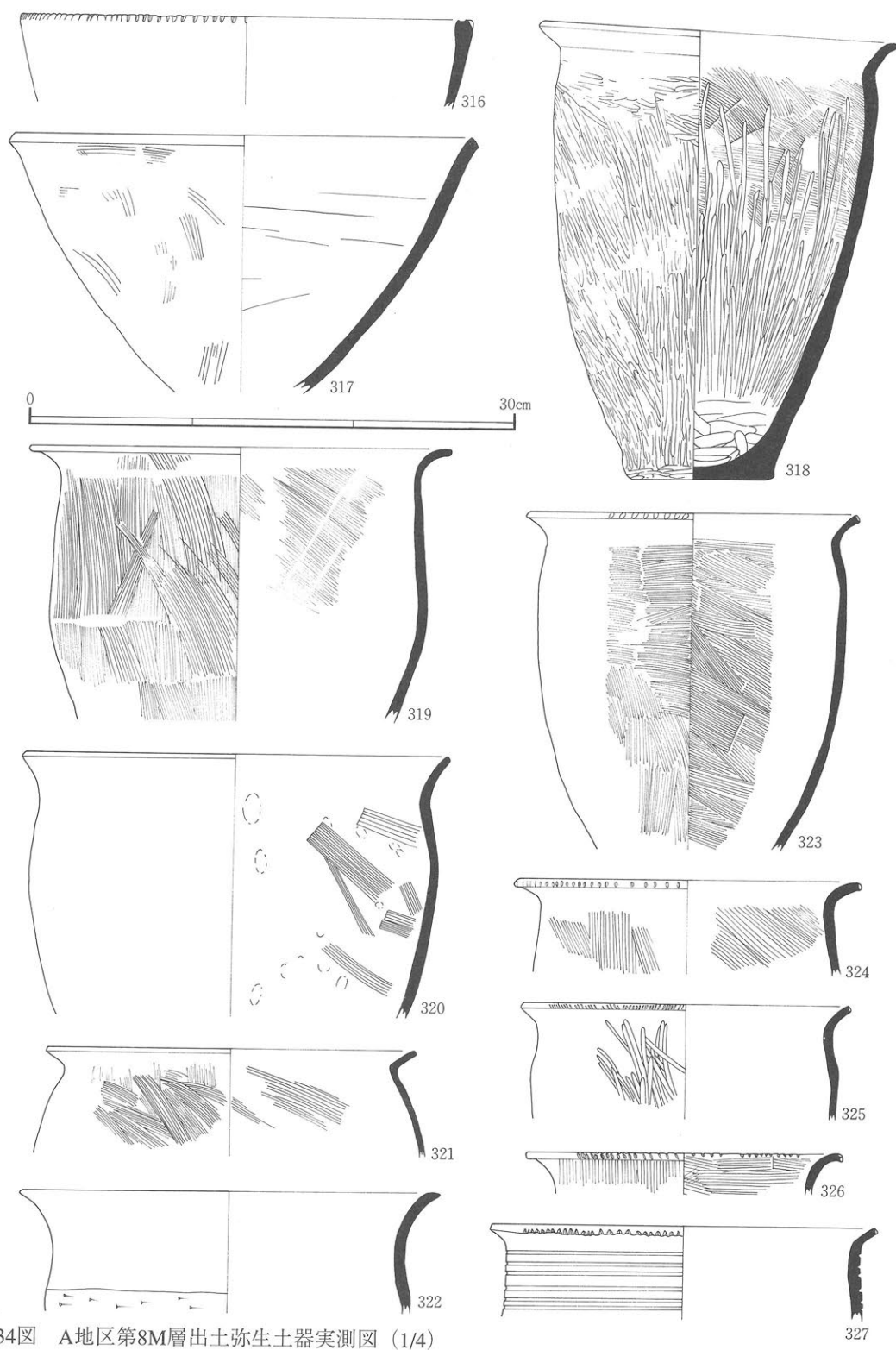


第32图 A地区第8M層出土弥生土器实测图 (1/4)

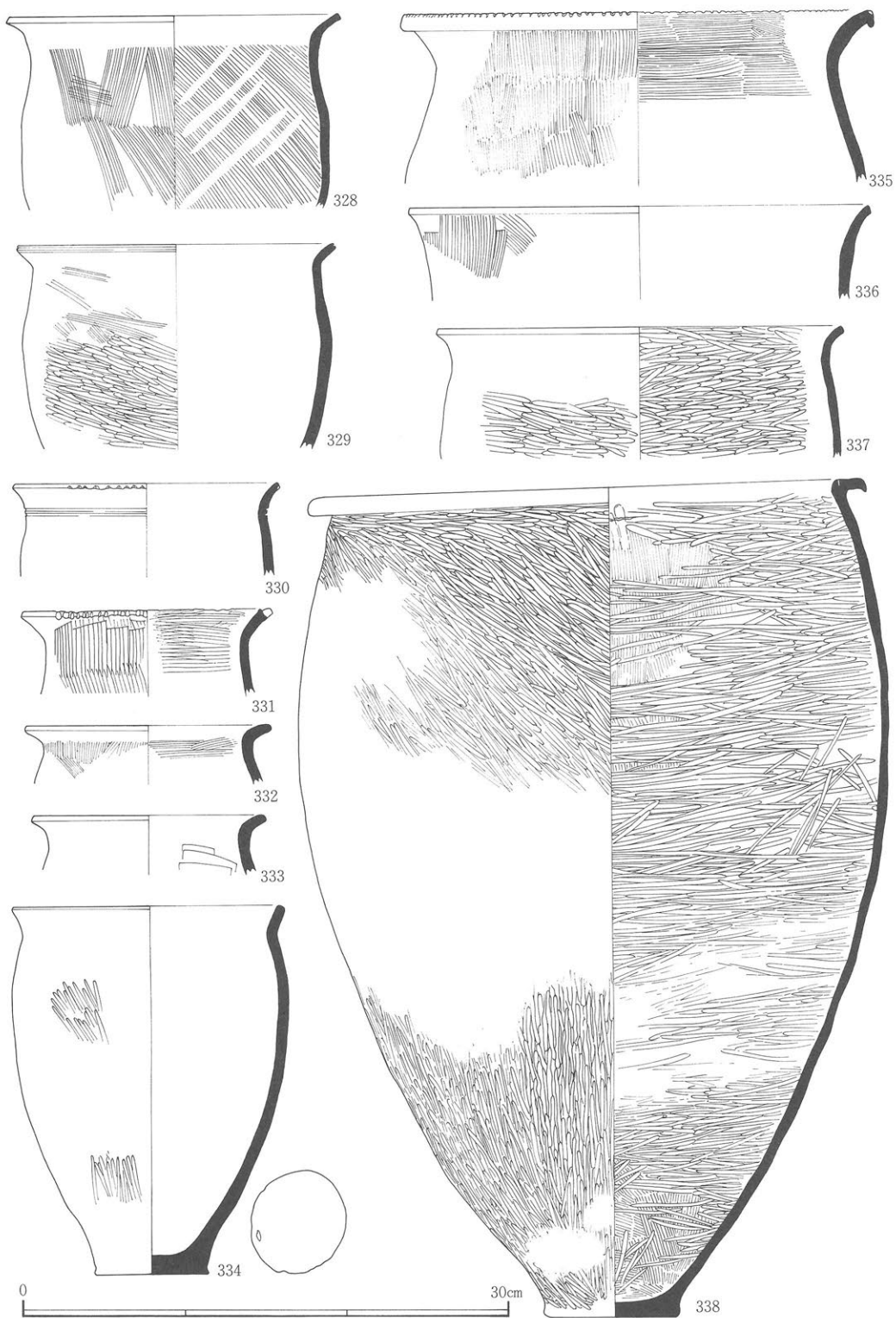




第33图 A地区第8M層出土弥生土器实测图 (1/4)



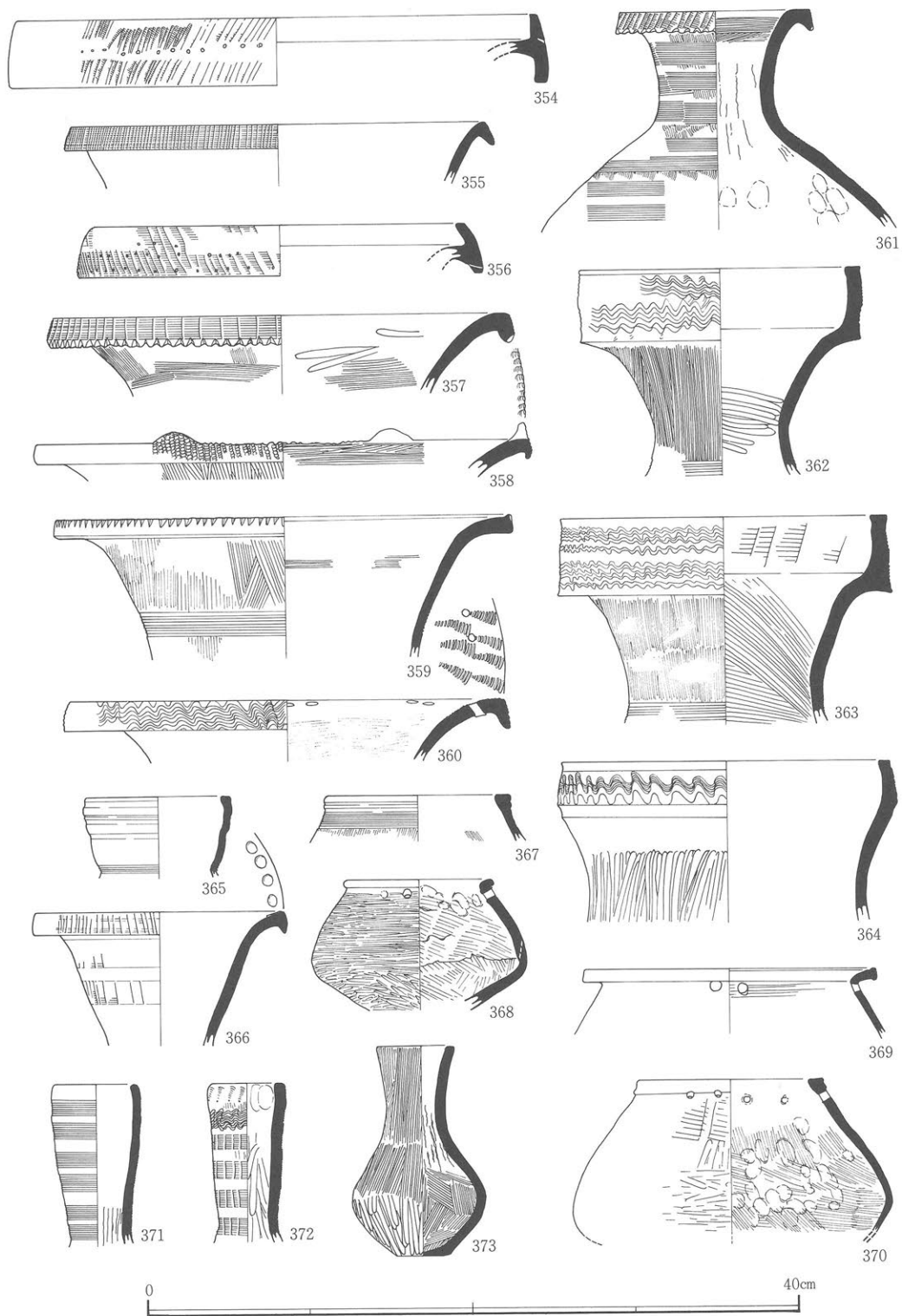
第34图 A地区第8M層出土弥生土器实测图 (1/4)



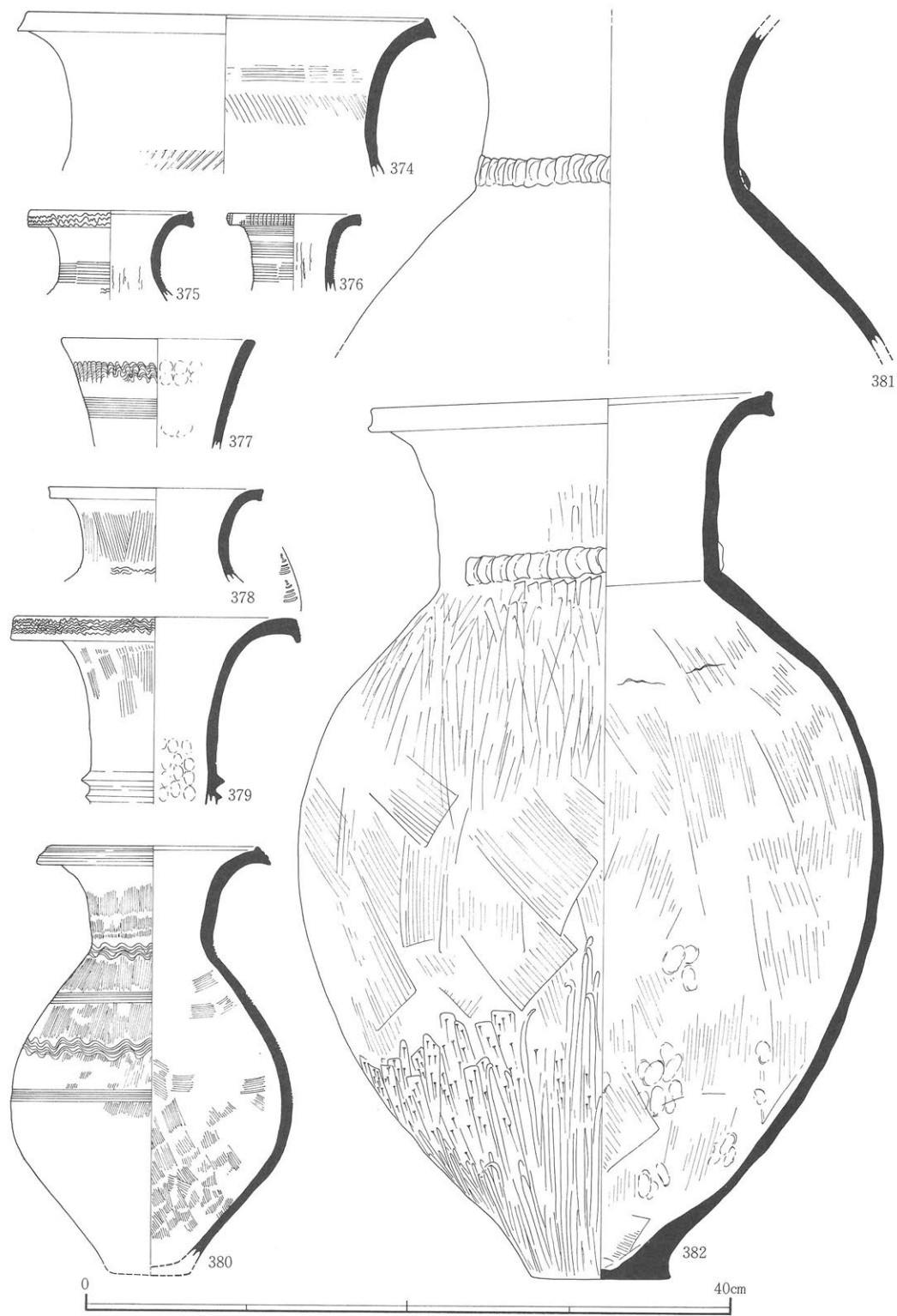
第35图 A地区第8M層出土弥生土器实测图 (1/4)



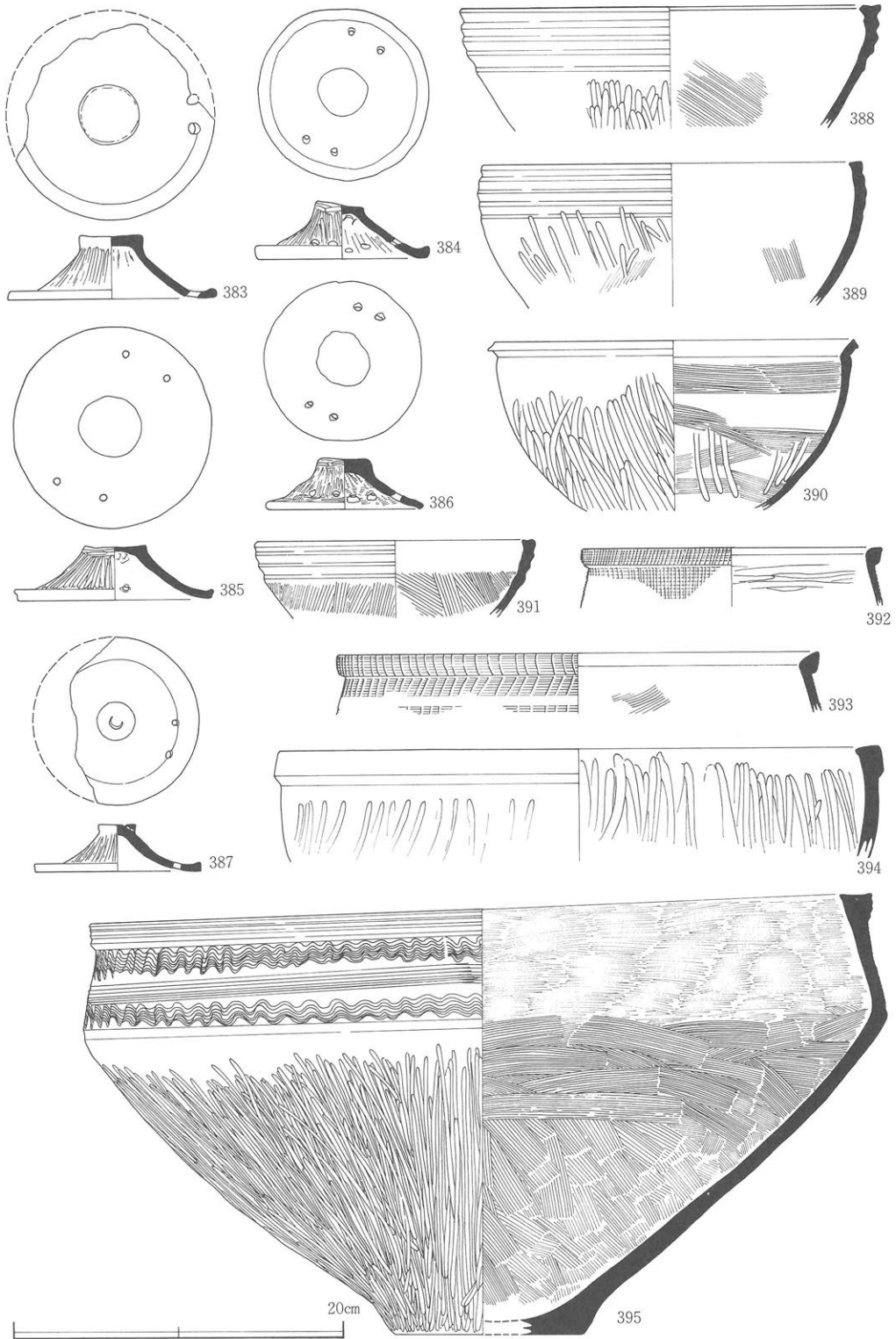
第36图 A地区第8M層出土弥生土器实测图 (1/4)



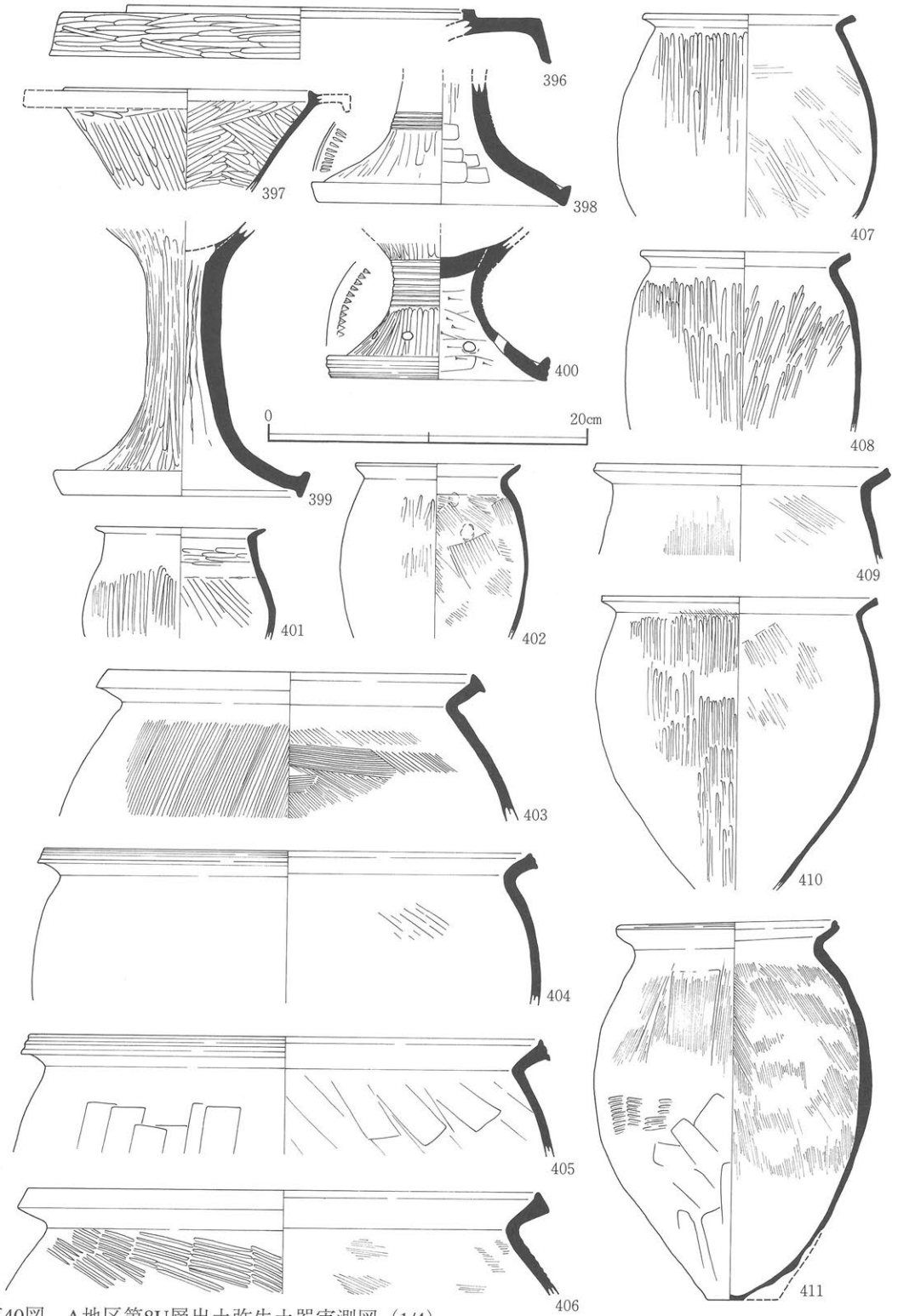
第37图 A地区第8U层出土弥生土器实测图 (1/4)



第38图 A地区第8U層出土弥生土器实测图 (1/4)

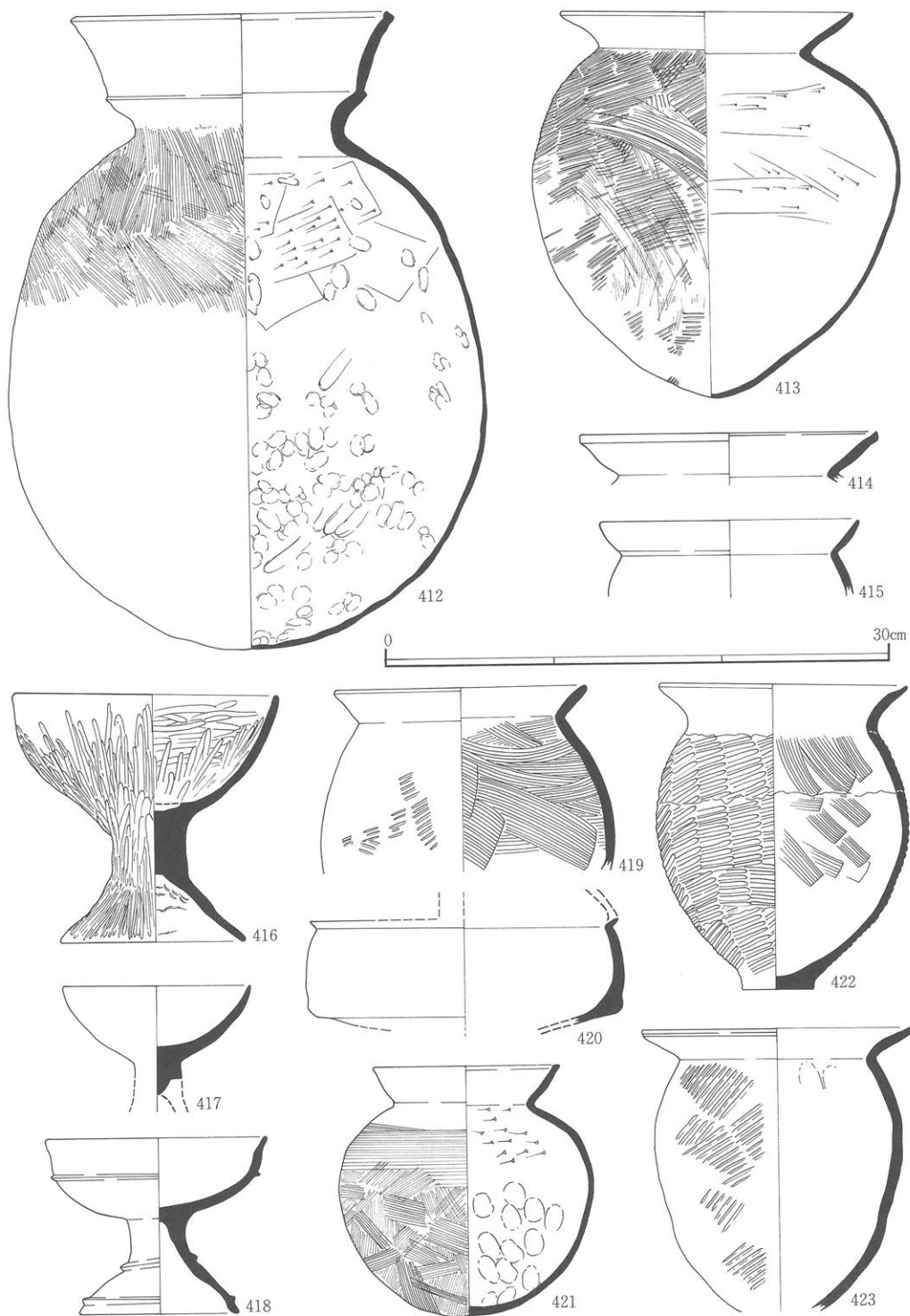


第39图 A地区第8U層出土弥生土器实测图 (1/4)



第40图 A地区第8U層出土弥生土器实测图 (1/4)





第41図 第8U流路内(自然流路上部堆積層)及び第7層出土弥生土器・土師器・須恵器実測図(1/4)

壺374・381・382は丈高の球形胴部から直立したのち外反する口頸部をもつ。頸胴部境に粘土帯を貼り付け、その上に刻目を施す他に紋様はない。374は粘土帯が剥離した痕に刻み圧痕を残している。375・376は小型の広口壺で、口縁端部に波状紋あるいは簾状紋、頸部に直線紋を施す。377は頸部に波状紋と直線紋を施す直口口縁の壺。379は口縁端部に波状紋、頸部に断面三角形の凸帯紋をもち、380は口縁端部に凹線紋、胴部上半に波状紋・直線紋を交互に施紋する。379・380は口縁内面に扇形紋を施す360と共に摂津地方に分布の中心をもつ形態・紋様の壺である。これらに対して、354～357・366は口縁端部に簾状紋、頸部に直線紋あるいは簾状紋をもち、いわゆる生駒西麓産の胎土を使用した広口壺である。361は胴部が大きく張る広口壺で、口縁端部に簾状紋、頸胴部には直線紋・扇形紋を施す。362～364は上方に拡張した口縁部に波状紋をもつもの。364は凹線紋を併せ持つ。371～373は細頸壺で、無紋様の373は小型の完形品。367～370は無頸壺。口縁が段状を呈するもの（367・368・370）と外反するもの（369）とがある。鉢388・389・391は体部から口縁部にゆるやかに移行し、内弯ぎみの口縁部に3～4条の凹線紋をもつもの。394は同様の形態を呈し、口縁端部外面に粘土帯を貼り付けた段状口縁の鉢。390は同様の体部に外反する口縁部をもつもので、共に無紋様である。392・393は底部から体部下半を欠くが、腰の張った体部下半から体部上半が上方に立ち上がり、段状の口縁端部に至る形態。口縁部に簾状紋が密に施されている。完形の395は同様の形態ながら、段状口縁の端部に凹線紋、口縁部外面に波状紋と直線紋を施紋する。体部外面をミガキ、内面をハケメにより調整する。383～387は口径9.5cm～12.5cmを測る小型壺の蓋である。いずれも口縁部に2個一対の紐孔をもつ。396・397は水平にのびる口縁部をもつ高杯杯部で、399のような脚部が付く。398は脚柱に櫛状直線紋をもつ高杯脚部。400は台付き鉢の脚台部。脚柱部と裾端部にヘラによる擬凹線、裾部上縁に鋸歯状の刺突紋をめぐらす。甕は小型・中型に器壁の薄いものが多い。ほぼ完形の411は外反する口縁の端部をつまみ上げ、端面に凹線が一条めぐるもので、胴部外面にタタキメの痕跡がみとめられる。大型甕はいずれも口縁端部を僅かに拡張したもの。404・405は拡張面に凹線を施す。406は胴部に左上がりのタタキメを明瞭に残している。

自然流路上部堆積層出土土器（第41図） 第Ⅳ様式土器混じりで第Ⅴ様式～6世紀初頭の土器が出土した。419・422・423は胴部に右上がりのタタキメを残す第Ⅴ様式の甕。小型甕422・423は肩の張りが小さくタタキ技法により手間をかけずに製作したもので、その形状より第Ⅴ様式末頃のものともみられる。413・414は尖り底と内面を削って器壁を薄くした球形の胴部、胴部外面の細筋のタタキメ、鋭く外折する口縁部等の特徴をもつ庄内式の甕である。椀状杯部をもつ高杯416・417も同時期のもの。手焙り形土器の体部420も同様。小型甕415・421は球形胴と内弯する口縁部の形状、肩部外面のヨコハケメ等の特徴より布留式甕と判断される。完形の壺412はやや長めの球形の胴部に二重口縁をもち、口縁端部が僅かに内面に肥厚する。胴部下半部は内面にユビオサエ痕が著しく、また半球形の器形が整っていることから、型作りによる製作されたことが知られる。製作時期は口縁や胴部形態、胴部の製作技法等

より布留式の新しい段階と考えられる。小型甕421も胴内面下部に残るユビオサエ痕より型作り法によるものとみられる。須恵器の無蓋高杯418は蓋杯の蓋を逆さにした恰好の杯部をもち、脚部に透し孔をもたず脚柱と裾にそれぞれ突線をめぐらすもの。杯部と脚部の形態及び突線等の特徴より5世紀中～後半のものとみられる。

## 2) B地区出土土器・土製品

### 1 SD69出土土器

壺形土器 広口壺には頸部が太く、短く外反する口縁部のもの (a) と長い筒状の頸部に小さく外反する口縁部のもの (b)、受口状口縁部をもつもの (c) がある。

(424～429) は、太い頸部に短く外反する広口壺aで無紋のものが多い。有紋のもの (424・429) は大きく外反する口縁部がつくものが多い。(434～440) は、算盤玉形の胴部に筒状に長くのびた頸部、わずかに外反する口縁部がつく丈高の土器である。筒状の頸部には5～8条の櫛描直線紋を配している。

壺用蓋 (446) 円形で笠形を呈し、中央部にいびつな突起物をつくり出している。周縁に二孔一対の紐孔を穿っている。

426・427・430・433・435・438・440・443・445・455は、生駒西麓産の土器である。

甕形土器 (460～463) はわずかに外反する口縁部にあまり胴の張らない体部をもつ。内外面ともヘラミガキを施す他、細かなハケメ調整を施す。(471～477) は、倒鐘形の器体に「く」の字形に外反する口縁部がつく。口径と胴径がほぼ同じもの、胴径が口径を上回るものがある。体部外面をヘラミガキで調整し、内面にもヘラミガキを施すものが多い。いわゆる河内型と呼ばれるタイプに属する。(480～494) は、倒鐘形の体部にゆるやかに外反する口縁部がつく。外面は縦方向に、内面は横方向にハケメ調整を行う。口縁部に刻目を施すものが多い。いわゆる大和型タイプである。

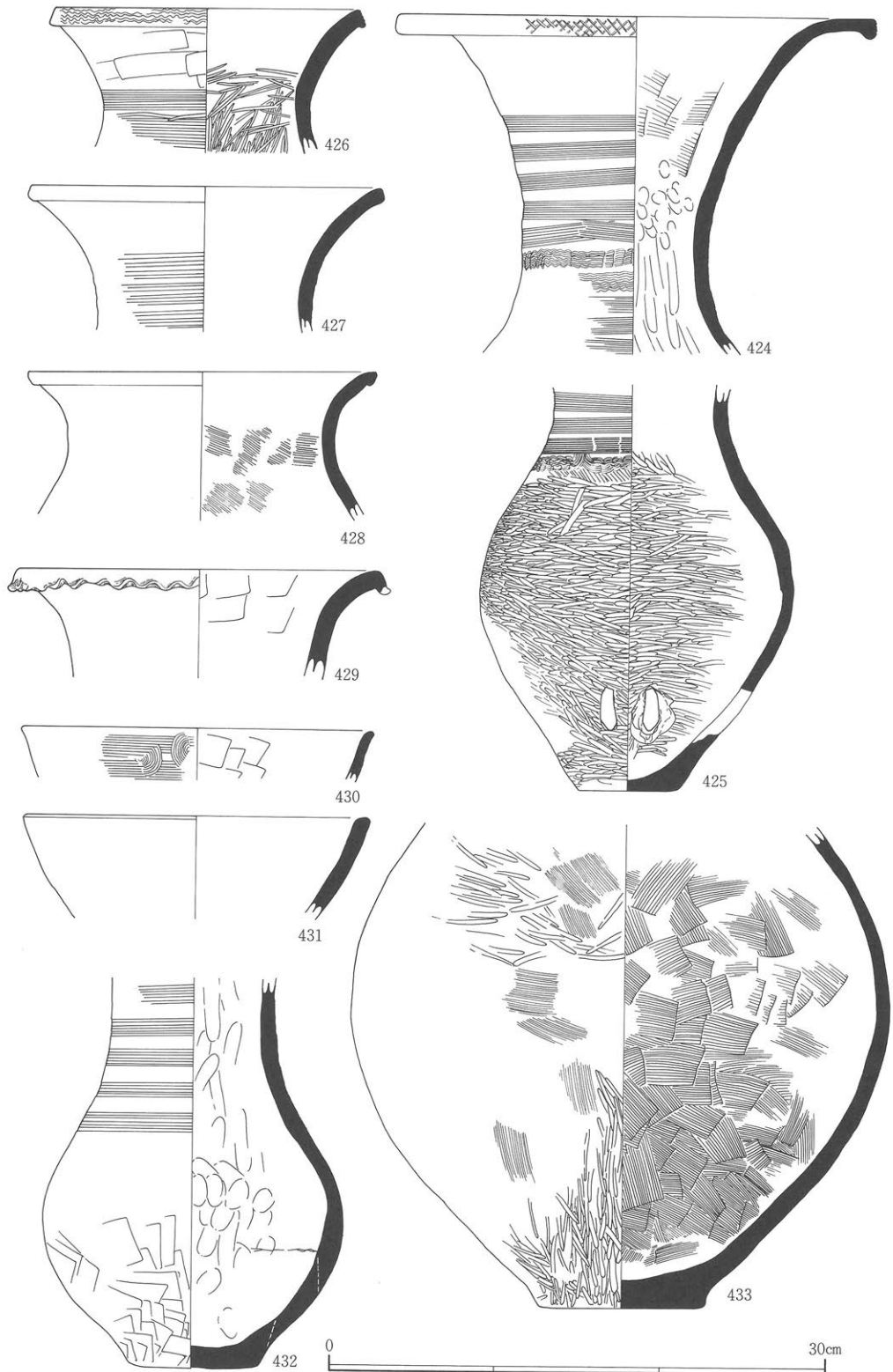
460・462・463・465・466・468・471～477・483～486・492・495・498・500・501・504・505は、生駒西麓産の土器である。

甕用蓋 (484) は口縁部を欠失しているが、平底の摘み部が残っている。

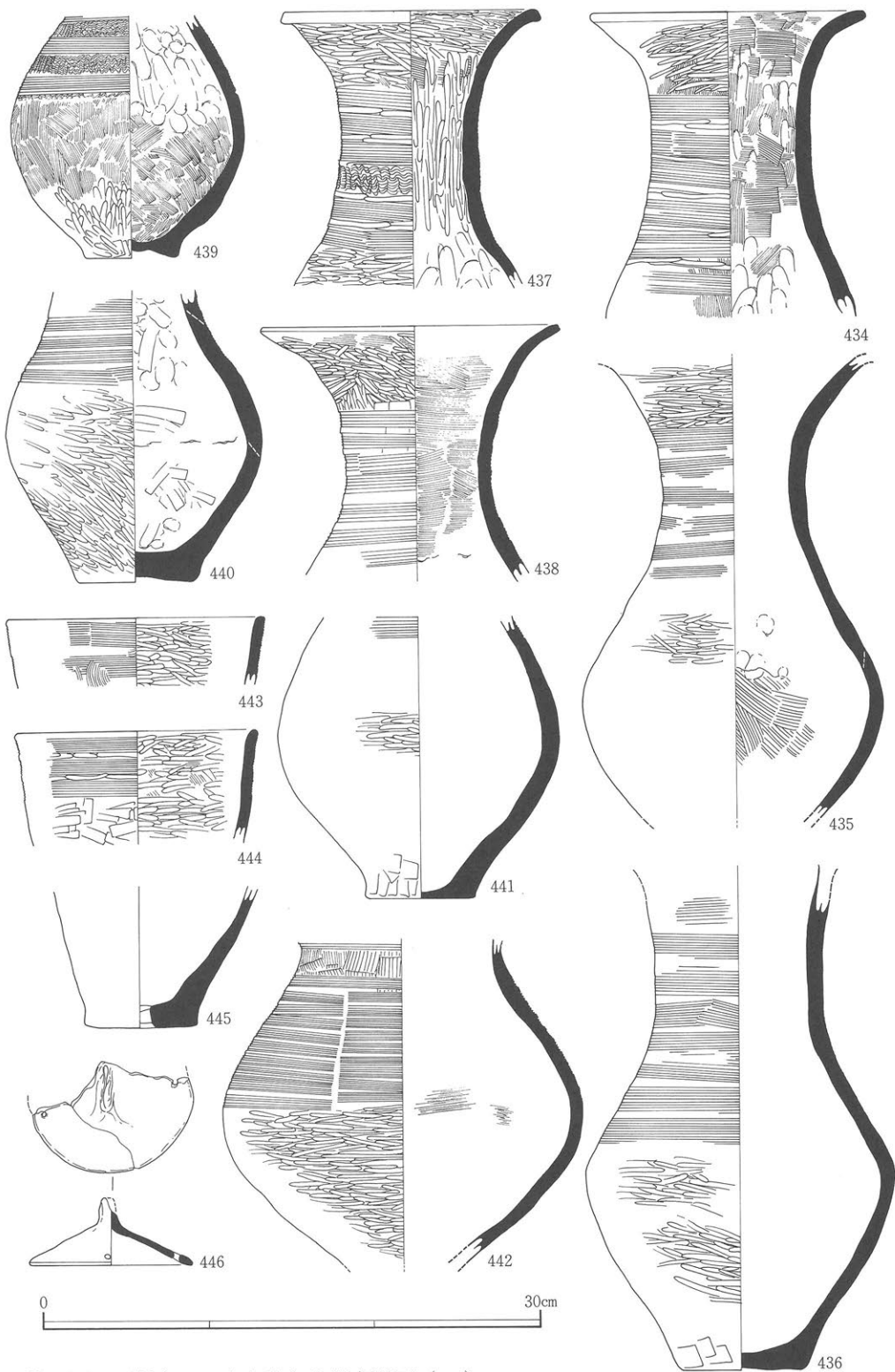
鉢形土器 (430・431・443・444) は、ゆるやかに内弯する体部に、直口の口縁部がつく。小型のもので内外面をヘラミガキで調整している。(430・443) は、生駒西麓産の土器である。

### 2 SD72出土土器・土製品

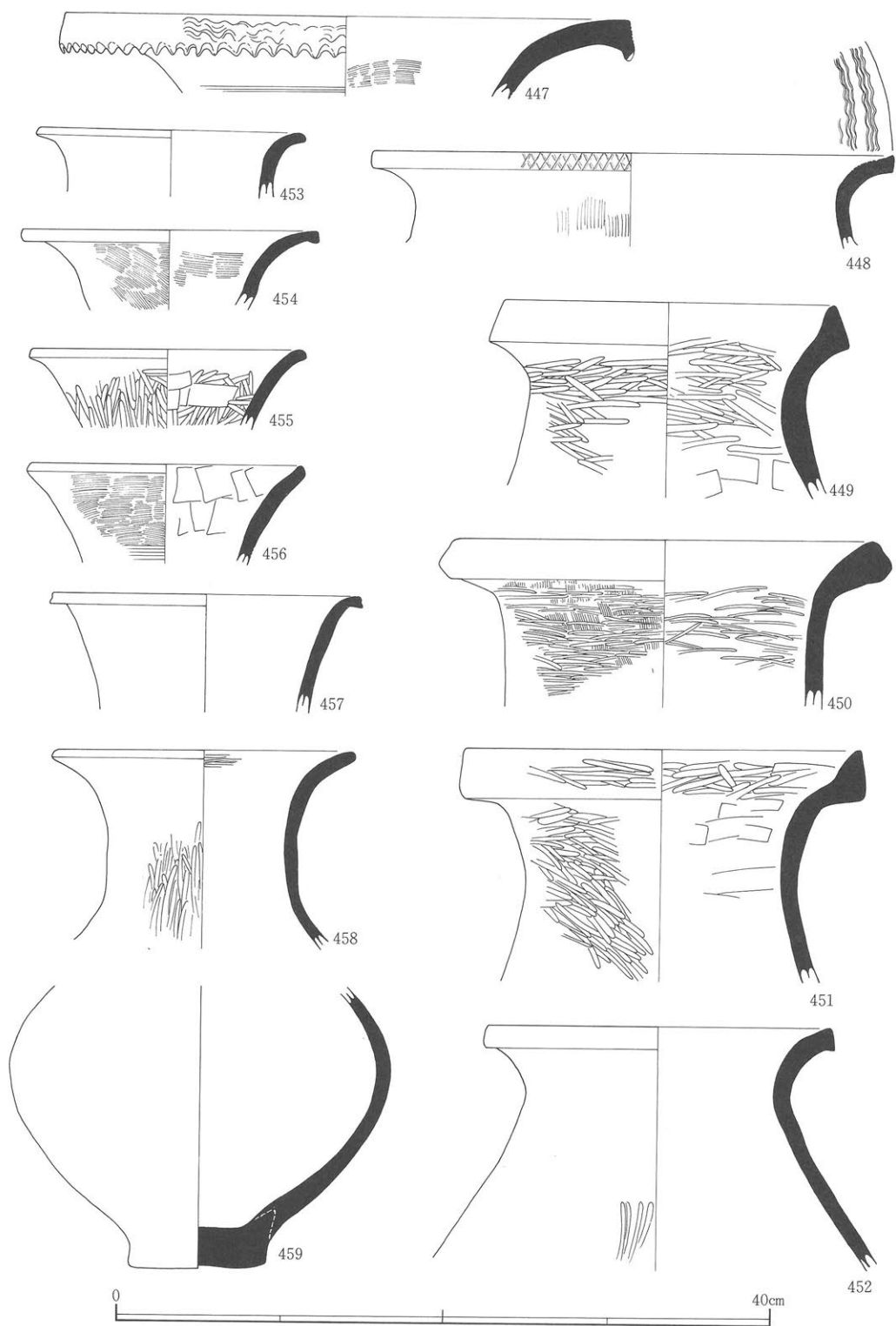
壺形土器 広口壺a (513・513・514・519～523・516・517) は、太く短い頸部に短く外反する口縁部がつく。頸部に櫛描直線紋を施すもの (513・518・521・523) もある。頸部に波状紋が見られる (516) は、他地域からの搬入品である。



第42图 B地区SD69出土弥生土器实测图 (1/4)



第43图 B地区SD69出土弥生土器实测图 (1/4)



第44图 B地区SD69(454·456~459) SD71(447) SD72(453·455·448~452)出土弥生土器实测图(1/4)

筒状の頸部をもつ広口壺b (524) は、無紋で内外面ともヘラミガキを施す。(522・513) は、生駒西麓産の土器である。

(448～451) は、口縁部を上方に拡張した受口状口縁部をもつ広口壺Cである。拡張した口縁端部に斜格子紋を配するもの(448)、無紋のものがある(449～452)。(449～451) は、内外面ともヘラミガキ調整を施した器壁の厚い生駒西麓産の土器である。

短頸壺(515) は、短く外反する口縁部がつき、頸部に櫛描直線紋+刺突紋、櫛描直線紋をめぐらす有紋の土器であり、いずれも他地域からの搬入品である。

無頸壺(571) は、内弯する体部に直口の口縁部がつき、体部に流水紋を施す。

ミニチュアの土器(573) は口径約5cmの小型の土器である。器壁2～3mmと薄い手捏ねの土器で、体部外面に粗い櫛描直線紋を施す。他地域からの搬入品である。

甕形土器 内外面を丁寧にヘラミガキで調整する河内型(526～536)のタイプと外面を縦方向にハケメで調整する大和型(537～547)がある。河内型には、口縁部がゆるやかに外反し胴の張らないもの(527・528・534)と「く」の字状に外反し端部に面をもつ(526・529・535)がある。(543・547) は、口縁端部に刻みを施した他地域産の土器である。

449～551・526～534・544～546・539・548・550・552・553・555・556・558は、生駒西麓産の土器である。

甕用蓋(559～561)は口縁部を欠失しているが、大きく裾広がりには開くと思われる。柄み部分にあたる底部をつくり出しもの、平底のまま鉢型土器の形態に近いものがある。(560) は、生駒西麓産の土器である。

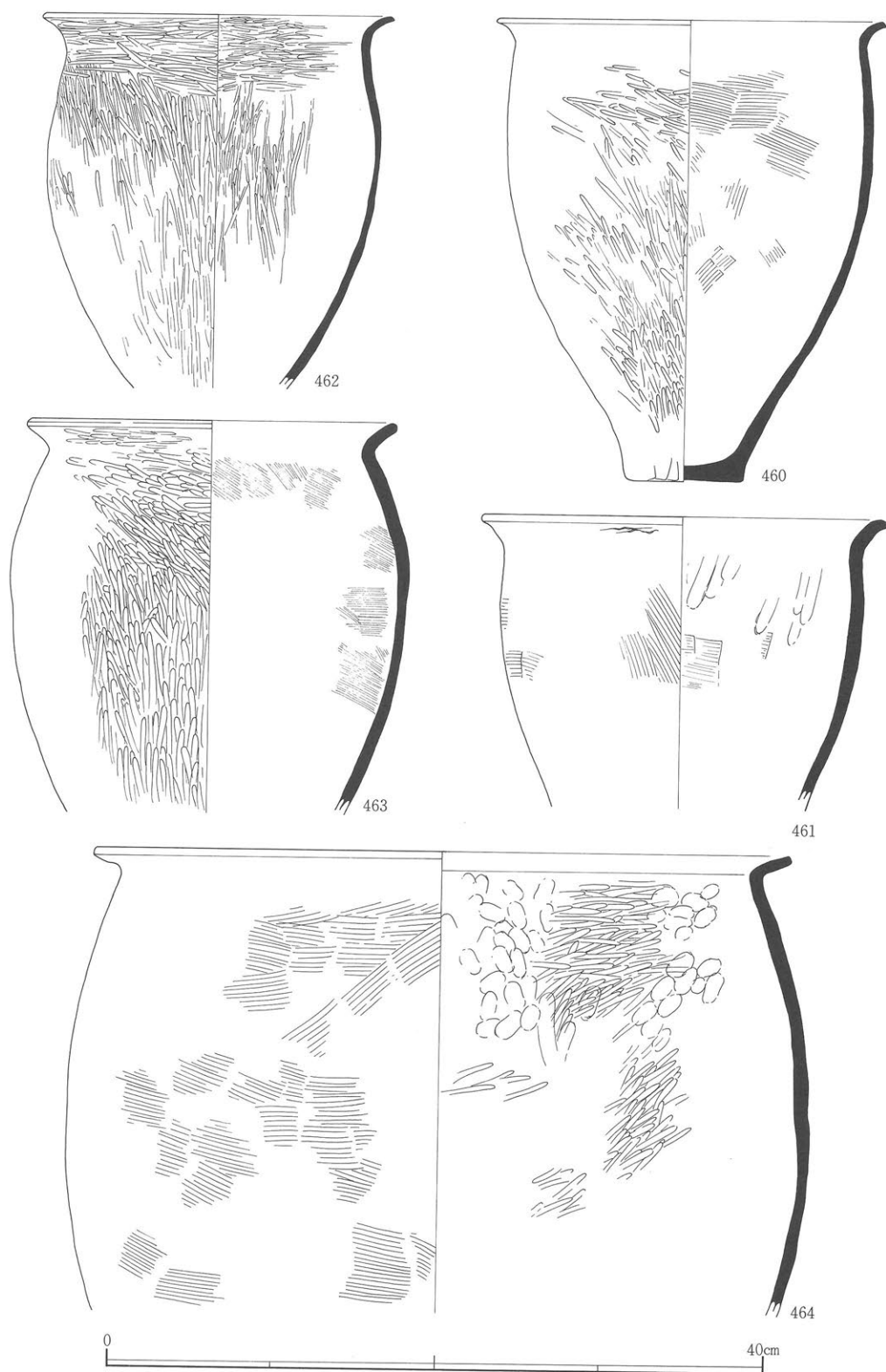
鉢形土器 体部が内弯し口縁部が直口の形態のものが大半を占める。内外面をヘラミガキ調整した大型のものは(565～567・576)すべて生駒西麓産の土器である。有紋の小型鉢(563・564)は体部に櫛描直線紋を施した他地域産の土器である。体部に流水紋をめぐらす(570)は、生駒西麓産の土器である。口縁部に段をもち、端部が屈曲する(577)は、体部外面に波状紋・簾状紋、口縁端部を波状紋で飾る大型の土器である。(577)は、生駒西麓産の土器である。

円盤状土製品(574・578～580) 土器破片の周縁を打ち欠いて円盤状につくっている。径4～5cm、厚さ1～1.5cmを測る。

### 3 その他の遺構から出土した土器

甕形土器 他の器種に比較して甕形土器の出土量が多いのが特徴としてあげられる。甕には大和型と河内型両方のタイプがある。

壺形土器 壺には第Ⅰ様式に属するものから第Ⅲ様式にまでさかのぼるものまで、かなりの幅が認められる。(627・628)は、第Ⅰ様式に属すると考えられる。(628)は、第9層の包含層中より出土した壺である。短く外反する口縁部に、胴下部がふくらむ古式の形態をもつ。頸部に3条のヘラ描沈線紋、体部中位にヘラ描沈線紋で重弧紋を配している。口縁部・体

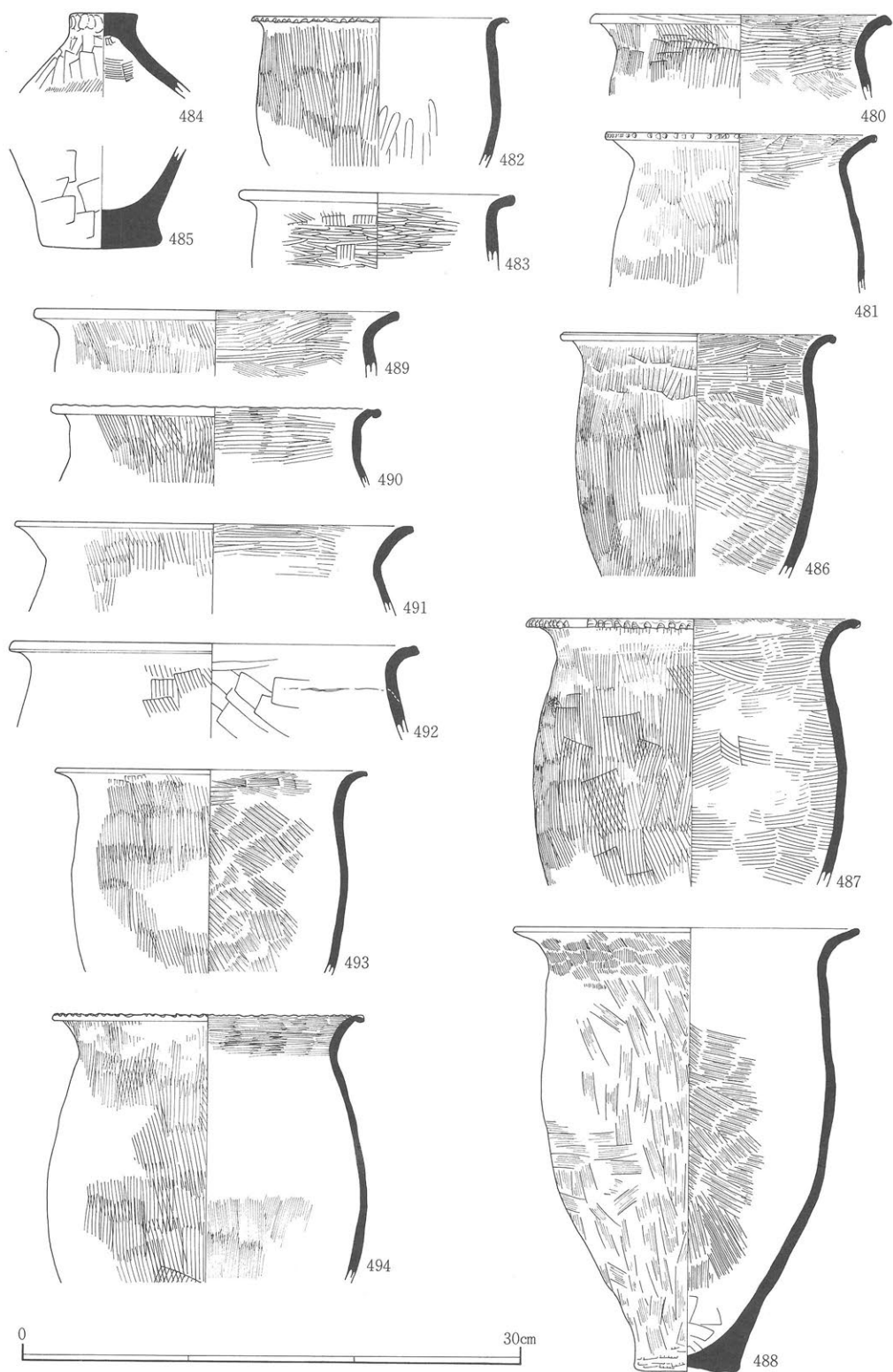


第45图 B地区SD69出土弥生土器实测图 (1/4)





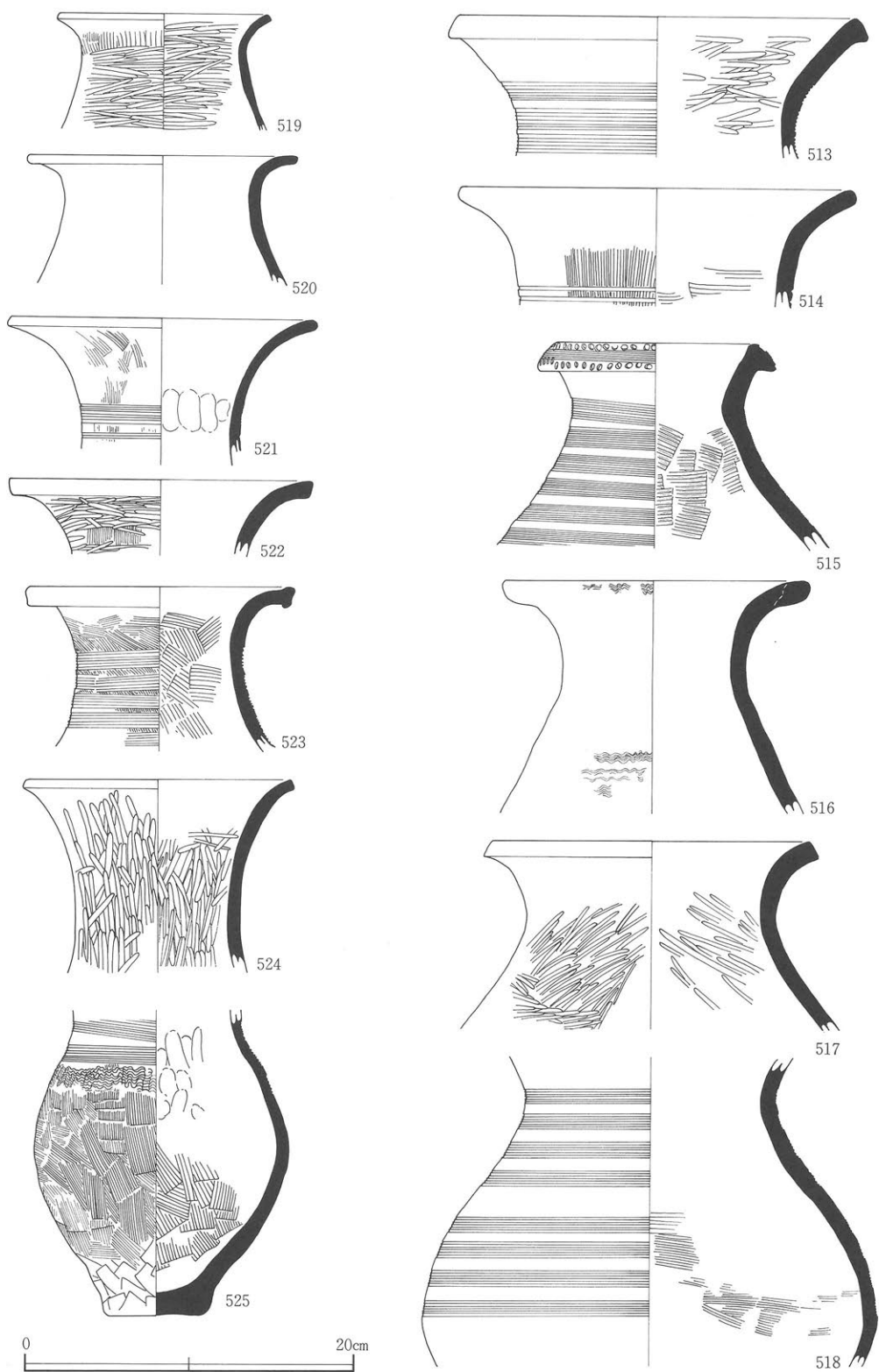
第46图 B地区SD69出土弥生土器实测图 (1/4)



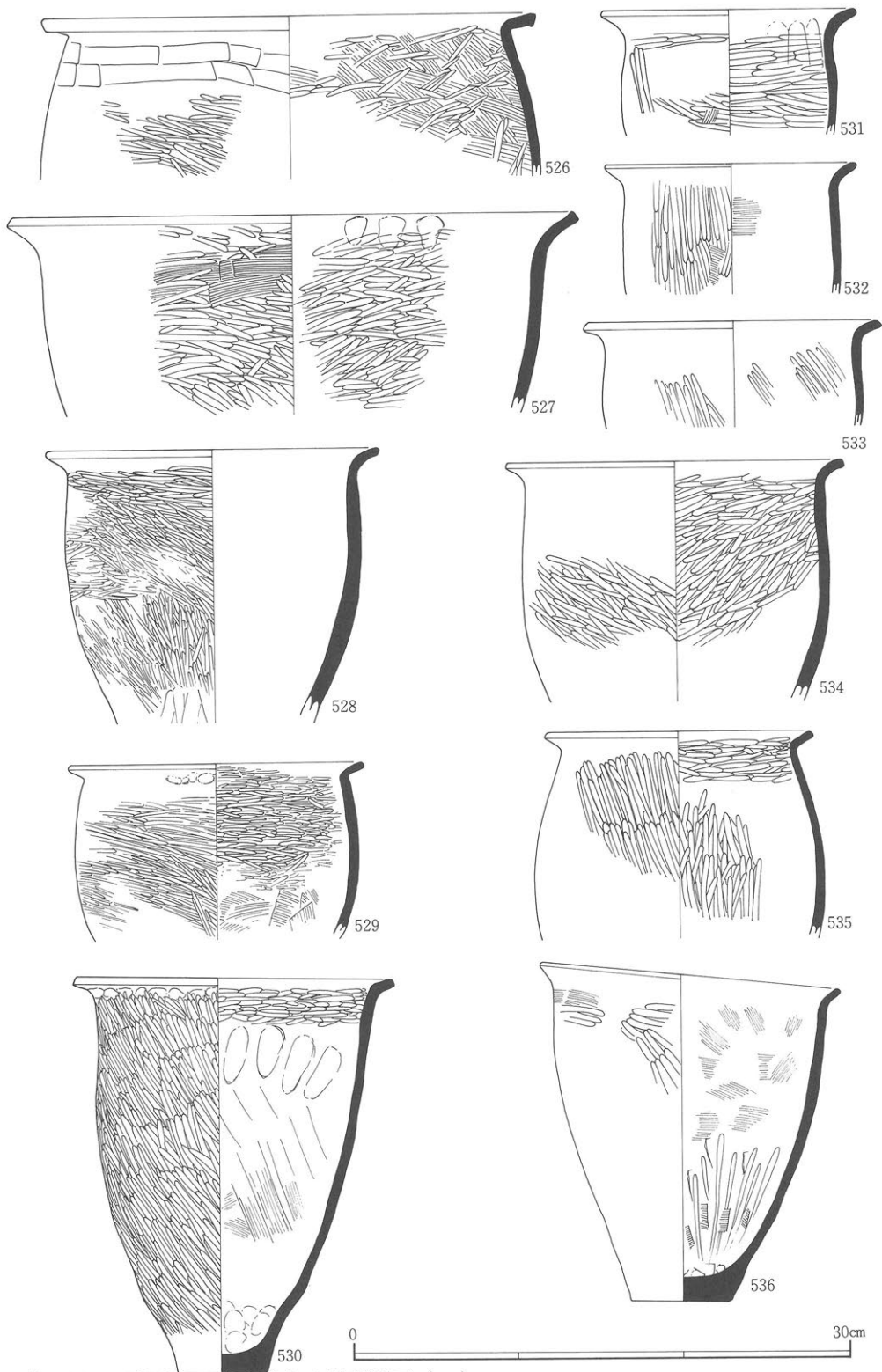
第47图 B地区SD69出土弥生土器实测图 (1/4)



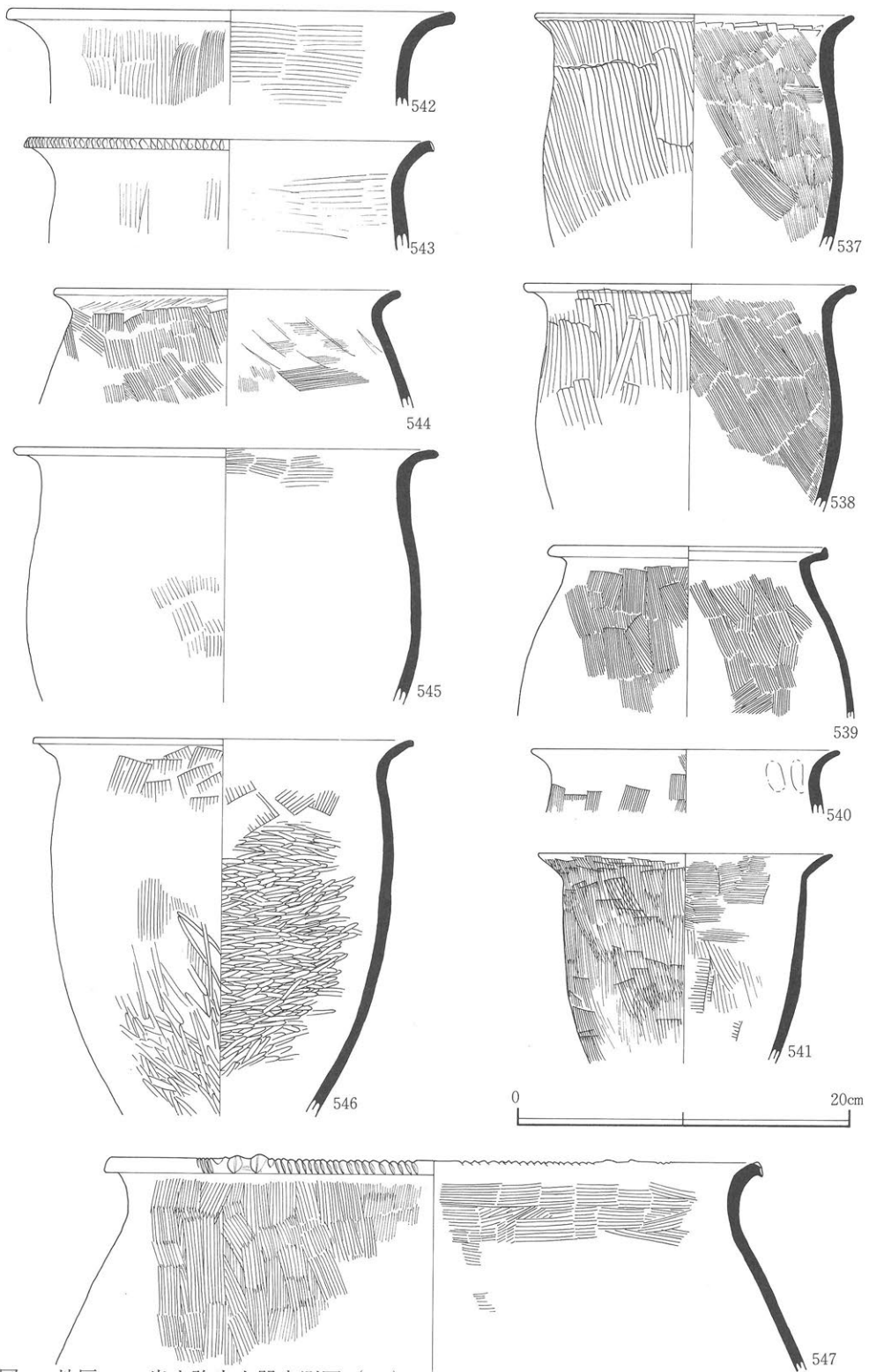
第48图 B地区SD69出土弥生土器实测图 (1/4)



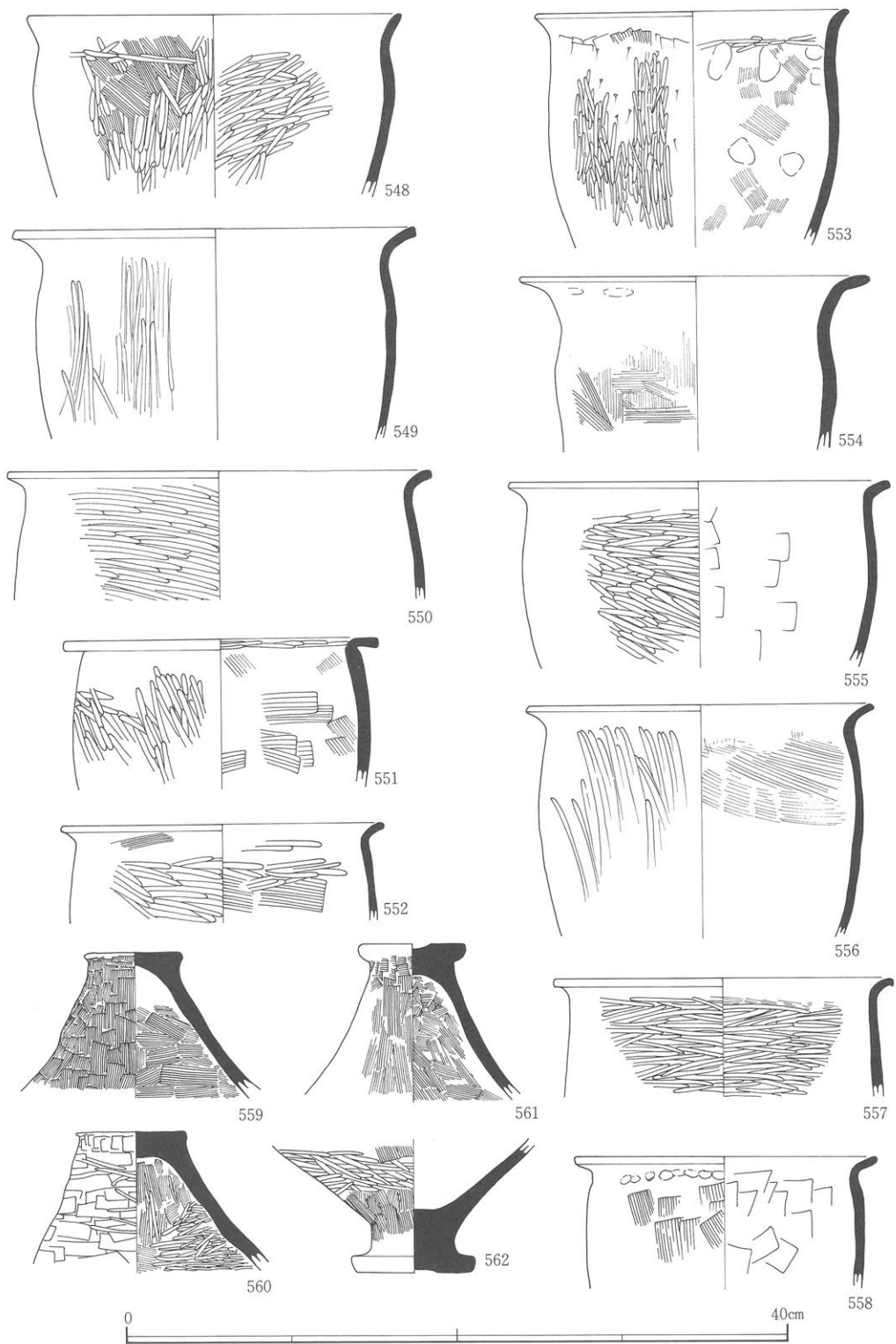
第49图 B地区SD69(516·521) SD72(513~515·517~520·522~525)出土弥生土器实测图(1/4)



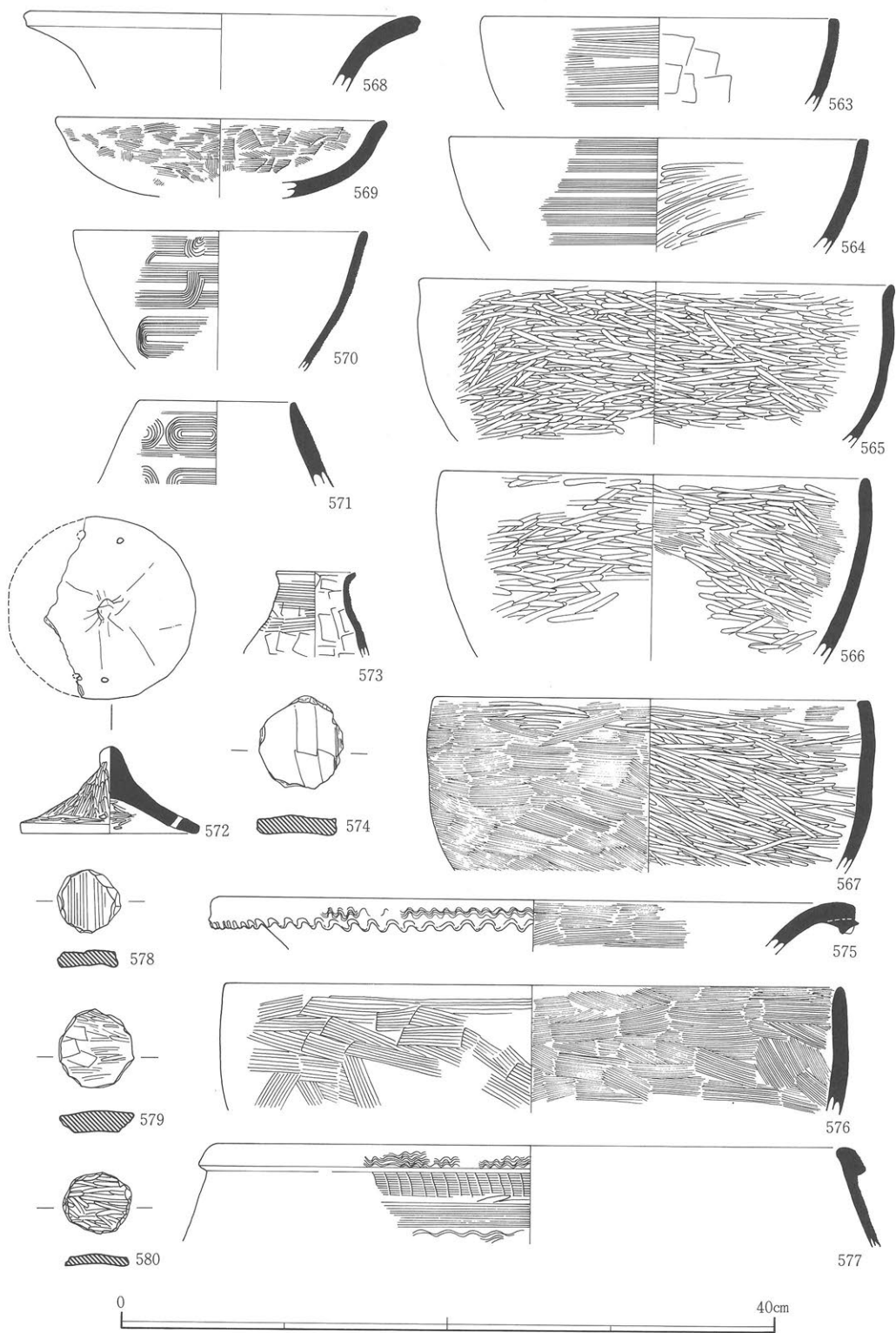
第50图 B地区SD72出土弥生土器实测图 (1/4)



第51图 B地区SD72出土弥生土器实测图 (1/4)



第52图 B地区SD72出土弥生土器实测图 (1/4)



第53图 B地区SD72出土弥生土器·土製品実測图 (1/4)

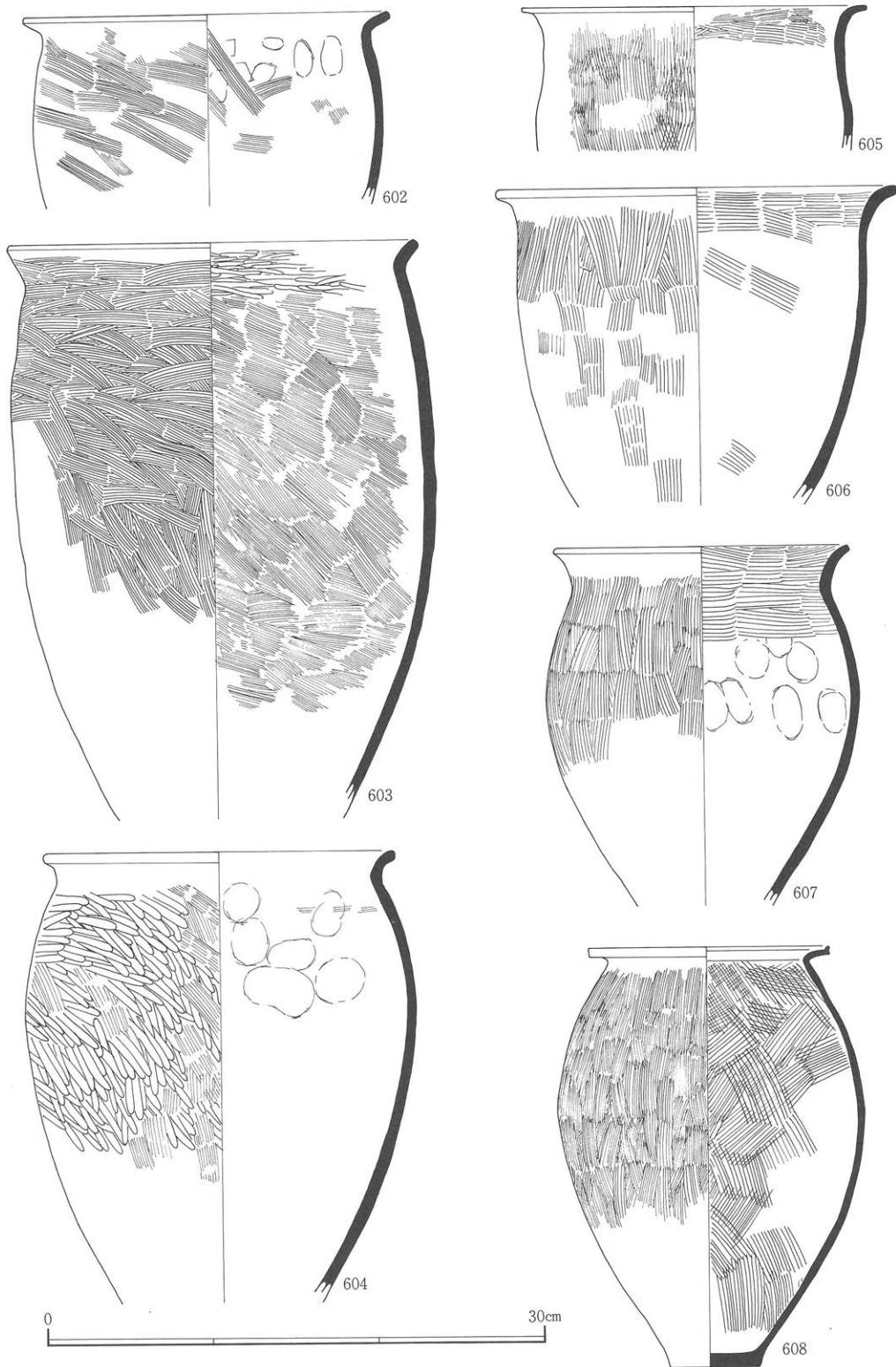




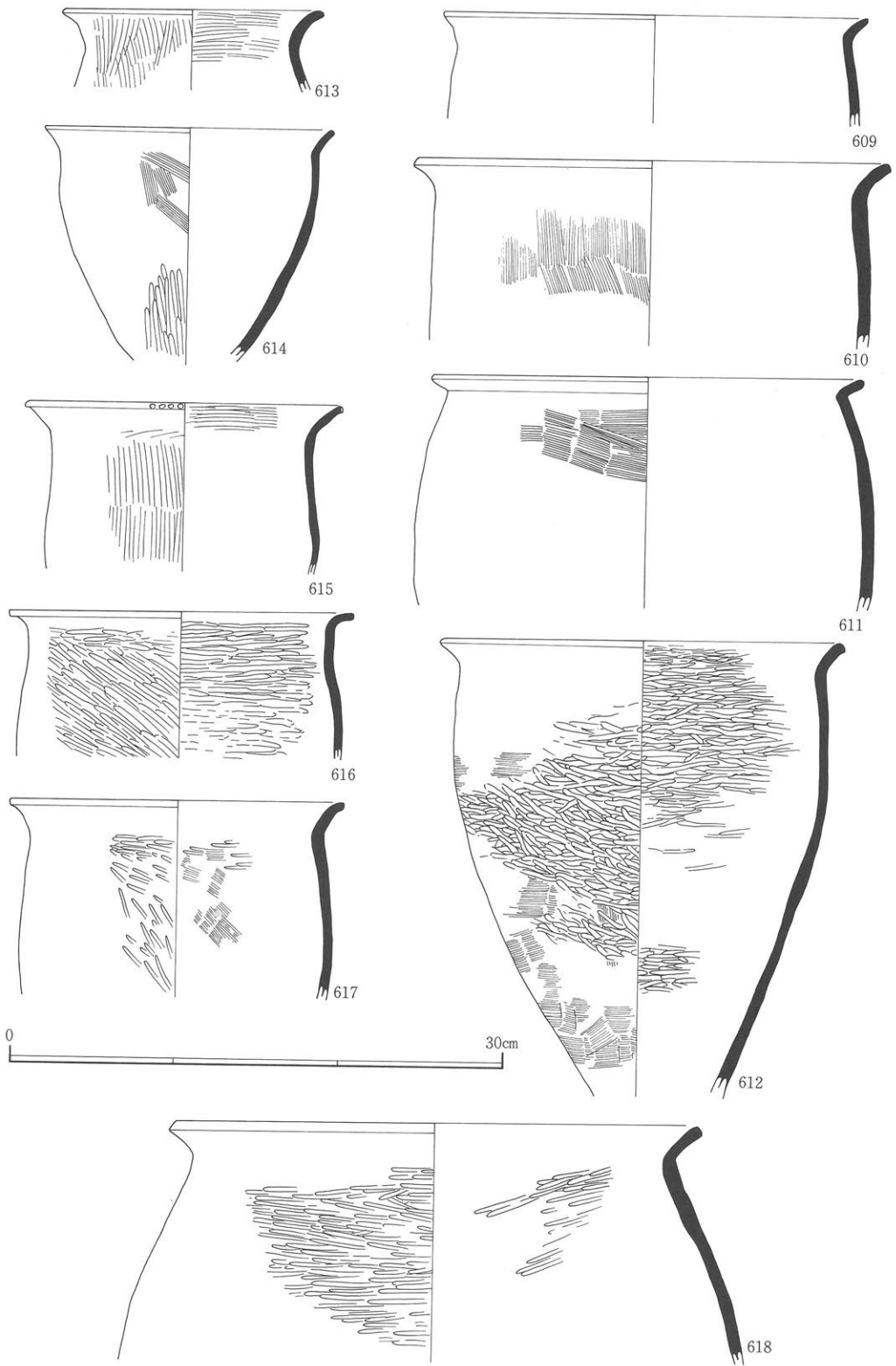
第54图 B地区SD61(581·582·588·589) SD66(583·587·591·592) SD71(584·585·590·593) SD69(586) 出土弥生土器实测图(1/4)



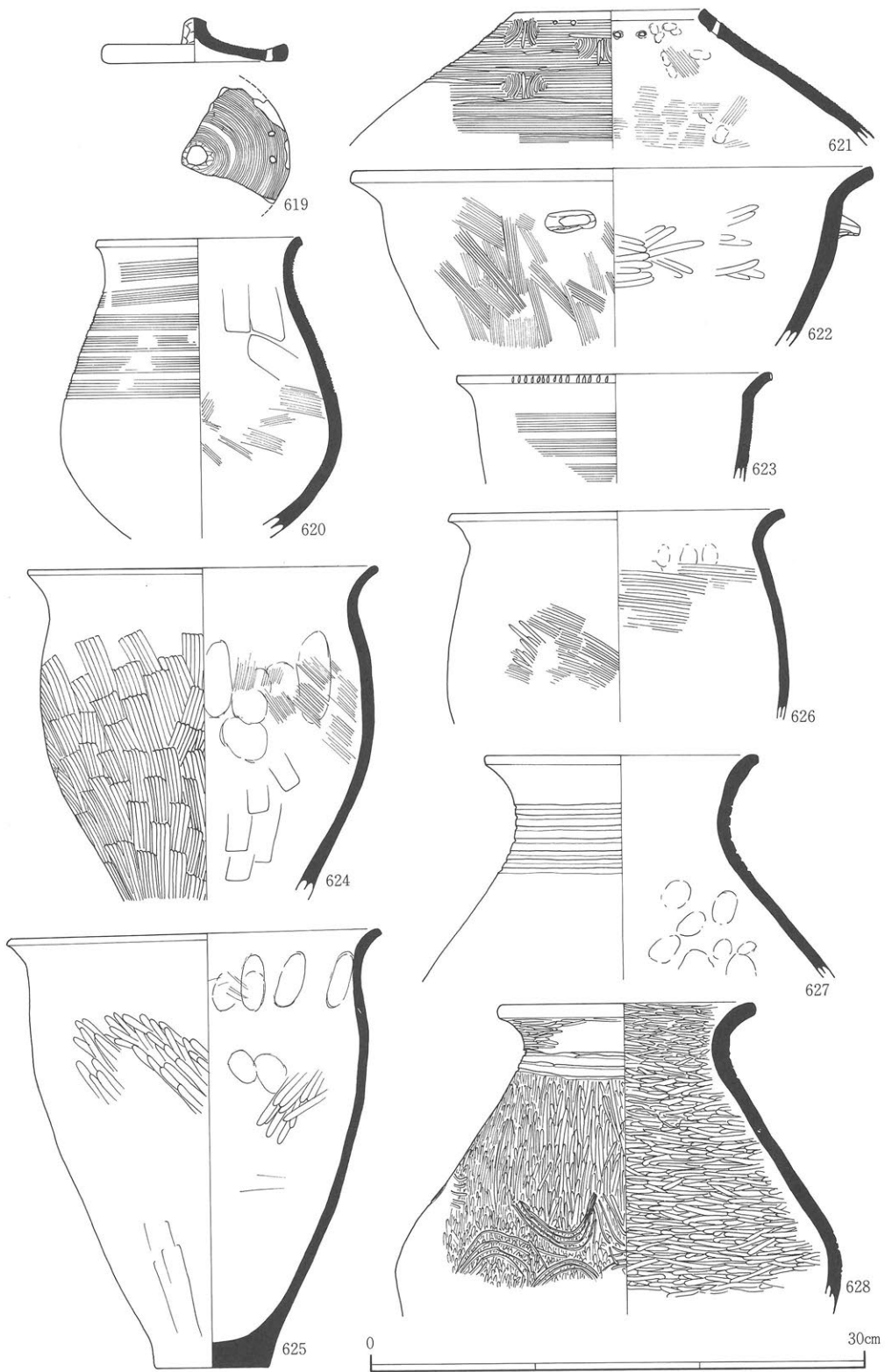
第55图 B地区SK35(600) SK47(597) SK48(598) SK50(601) SK51(594~596) SK63(599) 出土弥生土器实测图(1/4)



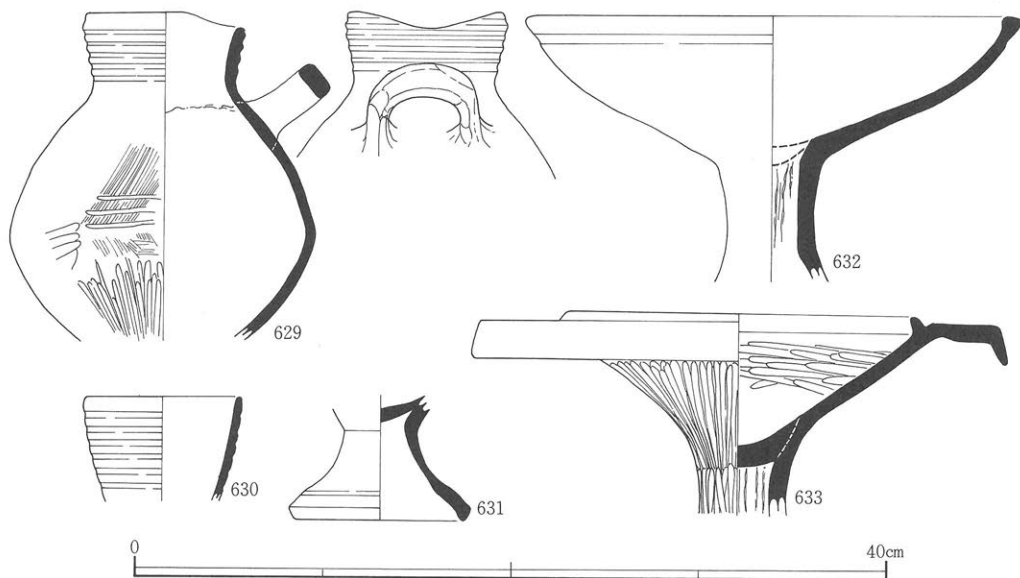
第56图 B地区SK48(602·608) SK50(606) SK55(603·604) SK59(607) SK67(608) 出土弥生土器实测图(1/4)



第57图 B地区SK44(612·614·615) SK47(618) SK48(609) SK49(610·616) K51(617) SK52(611) SK55(613) 出土弥生土器实测图(1/4)



第58图 B地区SX12(625) SX13(619·621) SX19(623·626) SP5(624) 8L~9層(622) 9層(628) 9U層(620) 出土弥生土器实测图(1/4)



第59図 B地区第7層出土弥生土器実測図 (1/4)

部内外面を丁寧なヘラミガキ調整をおこなっている。他地域からの搬入品である。(627)は、わずかに長くなった頸部に外反する口縁部がつく。長くなった頸部には7条のヘラ描沈線紋をめぐらしている。生駒西麓産の土器である。(594)は、広口壺で口縁部を欠失しているが、筒状の長い頸部に短く外反する口縁部がつくと思われる。頸部に直線紋を9条以上配し、体部外面を丁寧なヘラミガキで調整している。他地域からの搬入品である。(620)は、体部下半が張り頸部がわずかにくびれ、短く外反する口縁部がつく頸胴部に6条の直線紋を配する。他地域産の土器である。

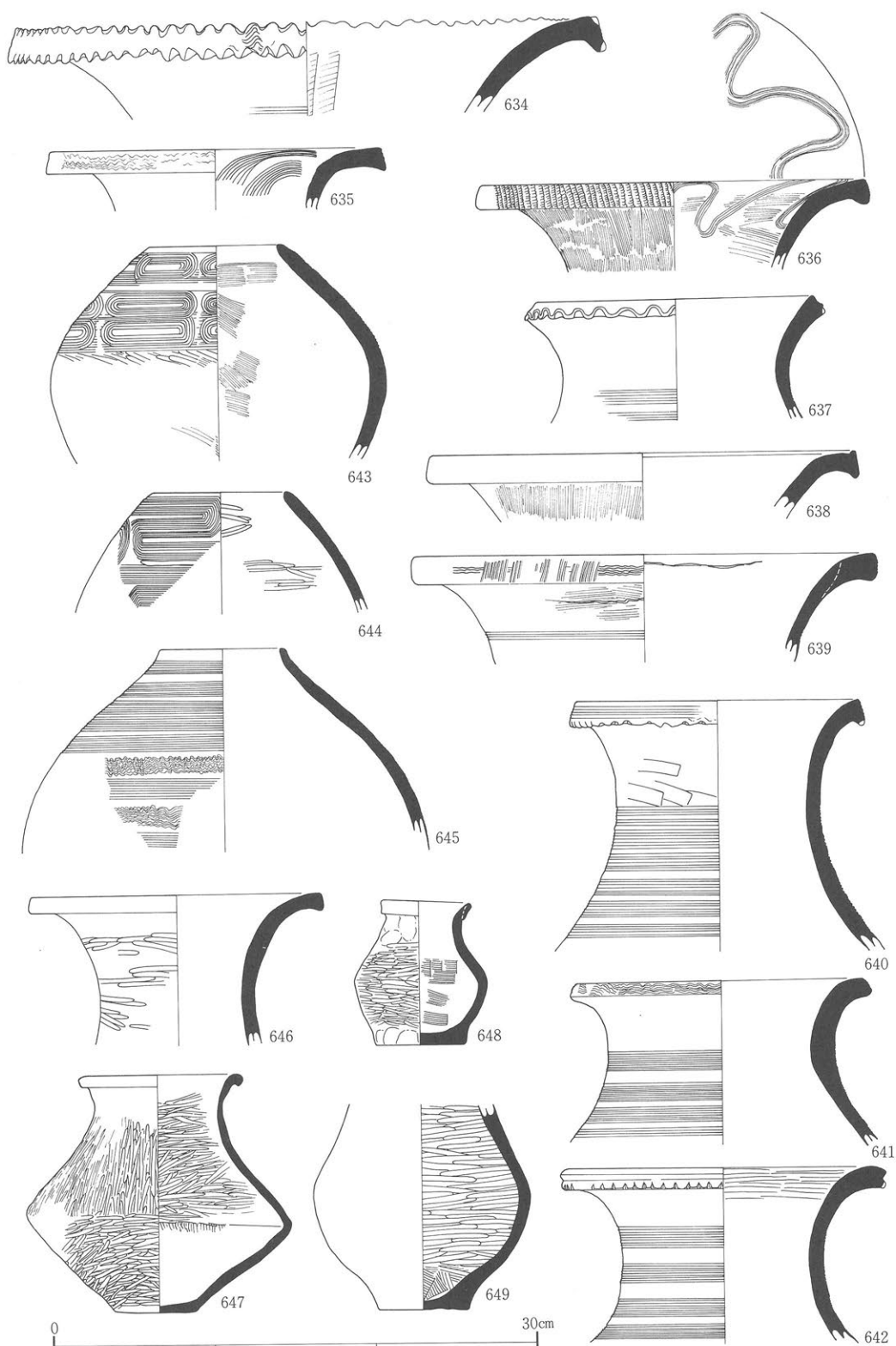
壺用蓋(619)は平板な円盤状の体部に小さな突起状の摘みが付く。口縁端部を肥厚し、面をつくる。体部外面につまみを中心にして、円形に櫛描直線紋を4条配している。

鉢形土器 (602)は、浅く椀状の体部にわずかに外反する口縁部がつく。口縁直下に舌状の把手を貼り付けている。内外面とも丁寧なヘラミガキを施す生駒西麓産の土器である。

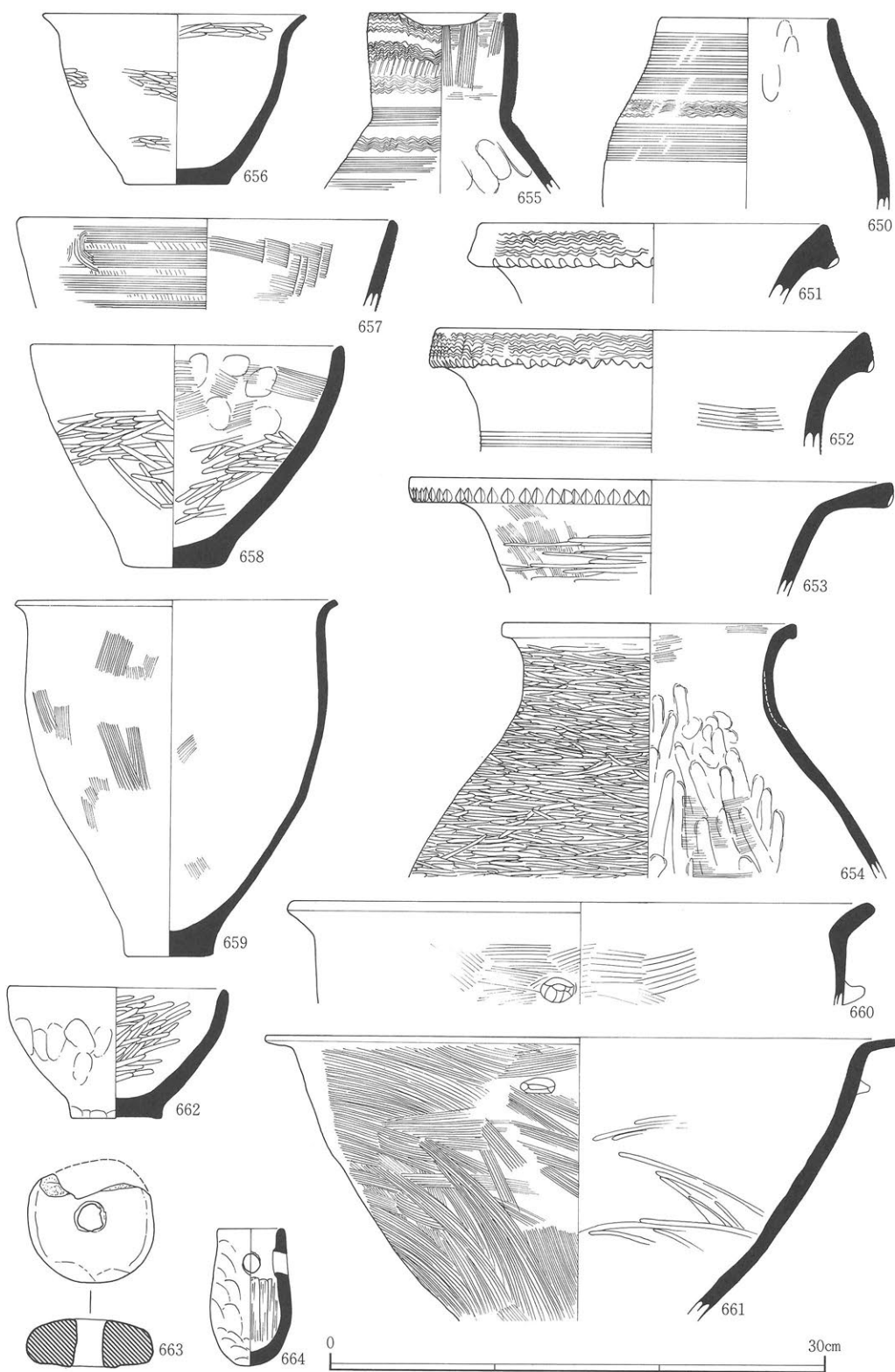
581・582・585・588・589・591～593・595～597・600～602・604・608・611・612・616～618・621・622・624・626・627は、生駒西麓産の土器である。

#### 4 包含層出土土器

第7層出土土器は、8P～10P・8Q～10Q区を中心にまとまって出土したが、遺溝などは検出されなかった。(629)の水差形土器は、胴部の張りがゆるやかで、丸みをもっている。口縁部に5条の凹線紋をめぐらし、肩部に断面台形状の把手を付けている。(632)の高杯形土器は、浅い鉢形の杯部に水平口縁がつき、外縁端部は下方に垂下し面をつくる。内端には一条の突起がめぐる。脚は細く中空で、杯面は円盤充填をする。内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。(633)の高杯は、皿状の杯部に直口する口縁部がつき、口縁端部は、やや肥厚し、外面に1条の凹線紋をめぐらす。第7層出土土器は、第Ⅳ様式に属するものが多い。(630)は、生駒西麓産の土器である。

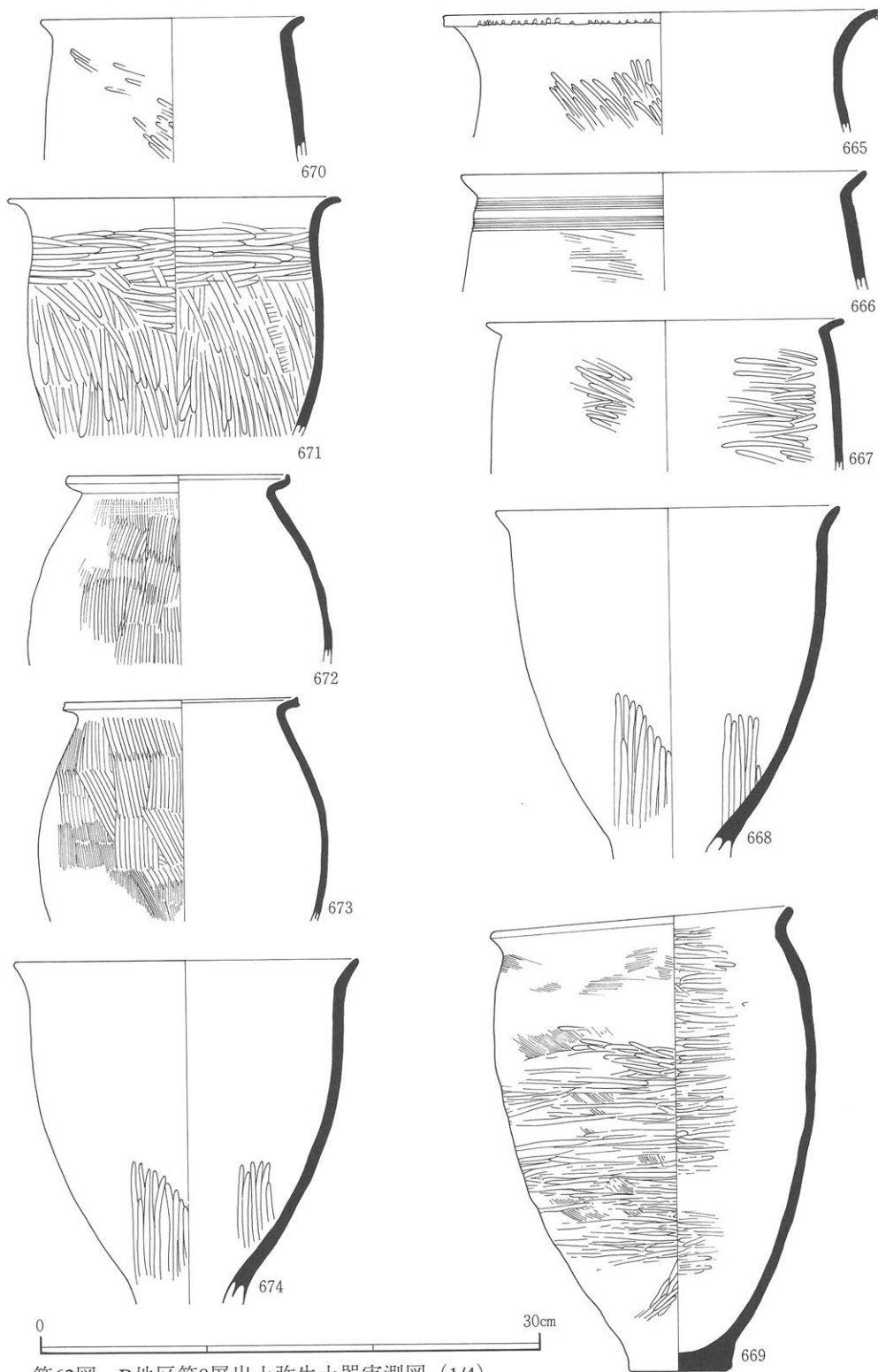


第60图 B地区第8層出土弥生土器实测图 (1/4)

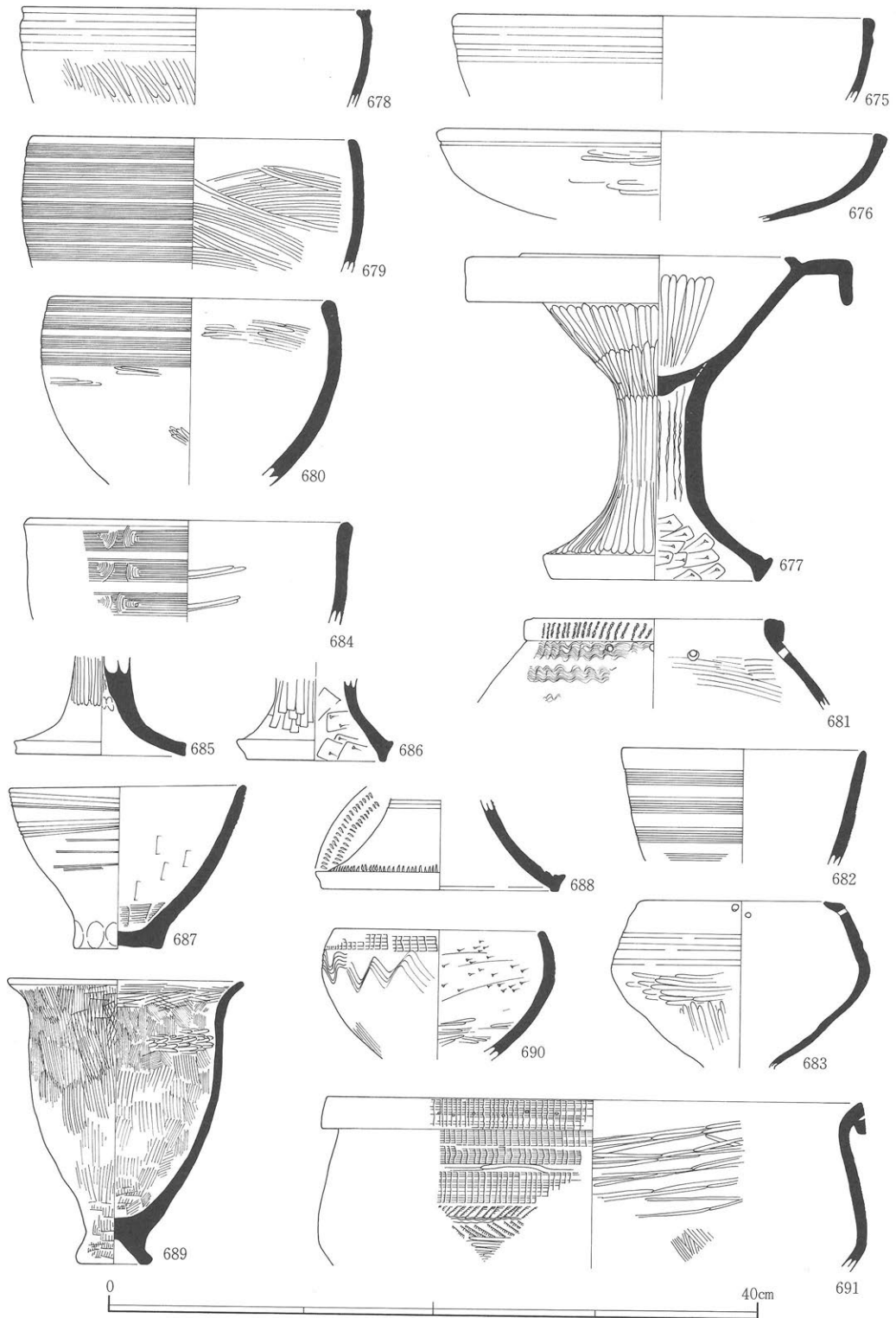


第61图 B地区第8层出土弥生土器实测图 (1/4)

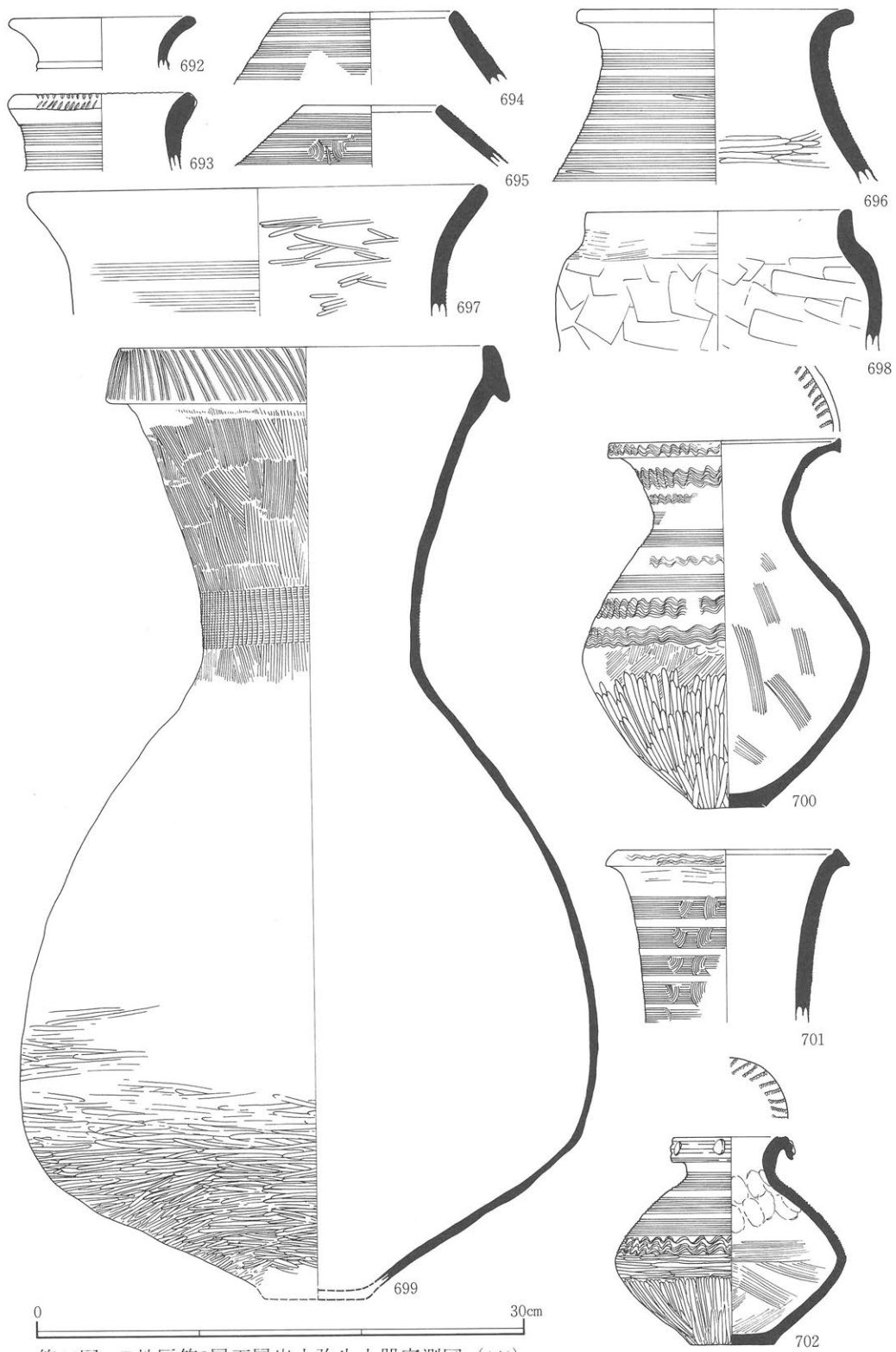




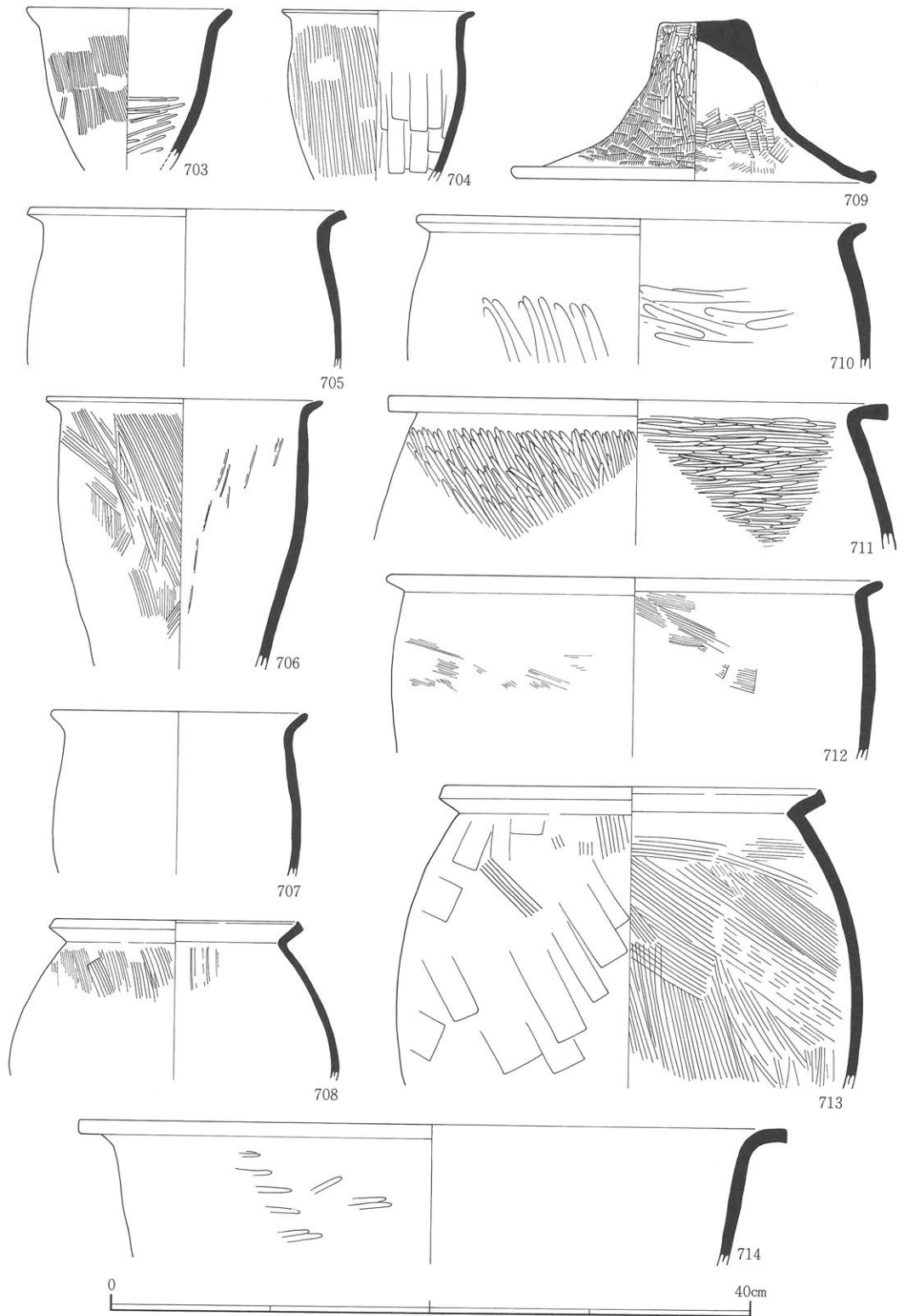
第62图 B地区第8層出土弥生土器实测图 (1/4)



第63图 B地区第8層出土弥生土器实测图 (1/4)



第64图 B地区第8層下層出土弥生土器実測图 (1/4)



第65图 B地区第8層下層出土弥生土器实测图 (1/4)

第8層出土土器 広口壺aには口縁部を大きく外反させ、端部に紋様を施すもの(634~639)、長い頸部に短く外反する口縁部がつき、口縁端部に紋様を配するもの(640~642・651~653)、無紋で丁寧なヘラミガキを施すもの(654)などがある。637・639・640・651~654は生駒西麓産の土器である。

無頸壺(643~645)は、球形の体部に直口の口縁部がつく。体部外面に流水紋を配するもの(643・644)、櫛描直線紋と波状紋を組み合わせるもの(645)がある。いずれも生駒西麓産の土器である。

甕には胴のあまり張らず、わずかに外反する口縁部をもつもの(659)、体部内外面を丁寧にヘラミガキする河内型のもの(676)、体部内外面をハケメで調整し、脚台をもつもの(689)、長胴の体部で内外面を粗いヘラミガキで調整する他地域からの搬入品と思われるもの(669)、丸みをもつ体部に「く」の字状の口縁部がつき、端部は面をもつタイプ(672・673)がある。これらの甕は、第Ⅱ様式~第Ⅲ様式の特徴をもっている。

鉢形土器は、小さな平底から内湾する体部に、口縁は直口をなすもの(658・659)、口縁部がわずかに外反するもの(656)などがある。また、直口で椀状の体部をもち、外面に櫛描直線紋、櫛描流水紋で飾るもの(678~680・682・684)がある。(683)は、腰の張った算盤状の体部、口縁端部は内側に肥厚する。口縁に蓋用の二孔一対の孔が穿たれている。

高杯は、水平口縁をもつもの(677)と直口のものがある(675・676)。他に土製品として紡錘車・タコ壺が出土している。いずれも他地域からの搬入品である。

637・639・640・643~646・652~654・666~678・670~672は、生駒西麓産の土器である。

第8層下層出土土器 広口壺aは、太い頸部に短く外反する口縁部がつき、頸部に櫛描直線紋を配するもの(696・697)と大きく外反する口縁部をもち体部外面に櫛描直線紋+波状紋で飾るもの(700・702)がある。いずれも他地域からの搬入品である。広口壺b(701)は、筒状の長い頸部をもつもので、頸部に櫛描直線紋を配する。広口壺cは、胴部中位より下部がふくらみ、玉葱状の体部に外方に直線的に開く頸部がつく。口縁端部は上下に拡張し、受口状をなす。体部外面・頸部を櫛描直線紋で飾る。河内型の壺である。(682・701)は、生駒西麓産の土器であり、それ以外はすべて他地域からの搬入品である。

甕形土器は体部内外面をヘラミガキ調整するもの(710~712)、ハケメ調整するもの(706)がある。体部が丸く張り、口縁端部をわずかに肥厚させ、面をもつもの(708・713)がある。703・712・713・707・708・714は、生駒西麓産の土器である。

甕用蓋(709)は、平底に大きく裾広がりの口縁部がつく。他地域産の土器である。

## 5. 出土木製品

出土木製品のうち縄紋時代晩期末の凸帯紋土器との共伴を確認できたものは小型環状の編物（第81図153）だけである。その他の大半は弥生時代とりわけⅡ～Ⅳ期の木製品であり、これに6世紀初頭以前の古墳時代に属するものが少数含まれている。これらの木製品を分類するにあたっては、奈良国立文化財研究所編『木器集成図録 近畿原始篇』（以下『木器集成』と省略する）に基づき、農具・工具・武器・祭祀具・漁撈具・容器など用途による分類を行った。そのため分類項目のなかに弥生特代のもものと古墳時代のもものを含む場合もあるが、この点については木器個々の共伴遺物を示すだけにとどめ、時期差による比較等は行わないこととする。

### 1) 農具

鍬・泥除・田下駄・臼・竪杵・もみすくい・櫛・鋤などがある。

鍬 耕起具である鍬は、『木器集成』分類による直柄平鍬・直柄又鍬・直柄横鍬・曲柄平鍬がみられる。使用される樹種は特記しないかぎりカシ類である。

直柄平鍬（1-28） 『木器集成』に基づき、本遺跡出土の直柄平鍬は鍬身の形態と刃部幅とによって、狭鍬Ⅰ式・狭鍬Ⅱ式・広鍬Ⅱ式・広鍬Ⅲ式に区分され、各型式はさらに柄孔周囲の隆起が明瞭な段をなすA型（A型はA1～A5型に細分される）と身の周囲から柄孔に向かって徐々に厚みを増すB型とに分けられる。

4は従前の諸手鍬、『木器集成』において狭鍬Ⅰ式とされたものに属する。鍬身中央に柄孔を穿ち、上下がそれぞれ彎曲する細長い形態を呈する。上下両端に刃縁の丸い刃をもつ。刃幅約10cmを測る。鍬身前面の柄孔の周囲には、上下に尖る紡錘形を呈するA1型隆起の剥離痕が残されている。第9層より第Ⅰ～Ⅱ様式と共伴した。1～3・4～10・16・17・27は鍬身が長方形を呈し、刃幅15cm以下の狭鍬Ⅱ式に属する。A型隆起をもつ5・16・17・27とB型隆起をもつ1～3・6～10とがみられる。6はSD69、8・17はSD71、5・9・10はSD72、16はSD87、その他は第8層よりいずれも第Ⅱ様式と共伴した。ⅡA式のうち、17は未成品。隆起は下方に長くのびるA2型ないしはA4型を呈する。16は身の上縁中央を刳込む特異な形態。隆起は上部が尖り、下方に長くのびるA2型である。27は狭鍬Ⅲ式と同様のA3型の高い隆起をもつものである。これらに対して、5は柄孔の周囲に方形の隆起を削り出している。ⅡB式のうち、1は二個体分を連ねた状態の未成品とみられるもの。2・3・7は身が下方に向かって幅を減ずる形態。このうち2・3はとくに刃幅の狭いもの、6～10は狭鍬と広鍬の中間的な形態を呈するものである。

28は身幅が狭く（幅5.2cm）、厚手のA4型隆起の下に幅の小さい刃部を削り出した狭鍬ⅢA式に属するものである。残存長36.8cmの柄が柄孔に装着状態で残されている。柄の樹種はシノキ属。24・26は厚手のA4型隆起の形態からみて、狭鍬ⅢA式またはⅡA式に属するものであろう。24はSD69、その他は第8層よりいずれも第Ⅱ様式と共伴した。

14は頭部が丸く、刃部に向かって広がる狭鋏ⅣB式に属する。20はA3型隆起をもつ狭鋏ⅣA式の破片か。14はSD72、20は第8M層より第Ⅱ様式と共伴した。

22・23・25はA3型の隆起だけが剥離したものであり、狭鋏・広鋏のいずれにもみられる特徴であるため型式の特定はできない。22は貝層2中部より第Ⅰ様式中段階と、25は第8L層より第Ⅱ様式と、23は第8U層より第Ⅱ～Ⅳ様式とそれぞれ共伴した。

11～13・15は鋏身が長方形を呈し、刃幅15cm以上の広鋏Ⅱ式に属する。狭鋏Ⅱ式と同じく、広鋏Ⅱ式にもⅡA式(15)とⅡB式(11～13)とがみられる。15の隆起はA3型を呈する。ⅡB式のうち、13はツブラジイを使用する点に加えて、鋏としては柄孔が大きすぎるように思われることから、鋏以外の用途を考えたほうがよいかもしいない。11はSD69、13は貝層2上部、15はSX19、12は第8L層よりそれぞれ第Ⅱ様式と共伴した。18・19は、鋏身が刃部にむかってひろがる台形を呈し、A4型隆起をもつ刃幅15cm以上の広鋏Ⅲ式に属する。共に第8L層より第Ⅱ様式と共伴した。

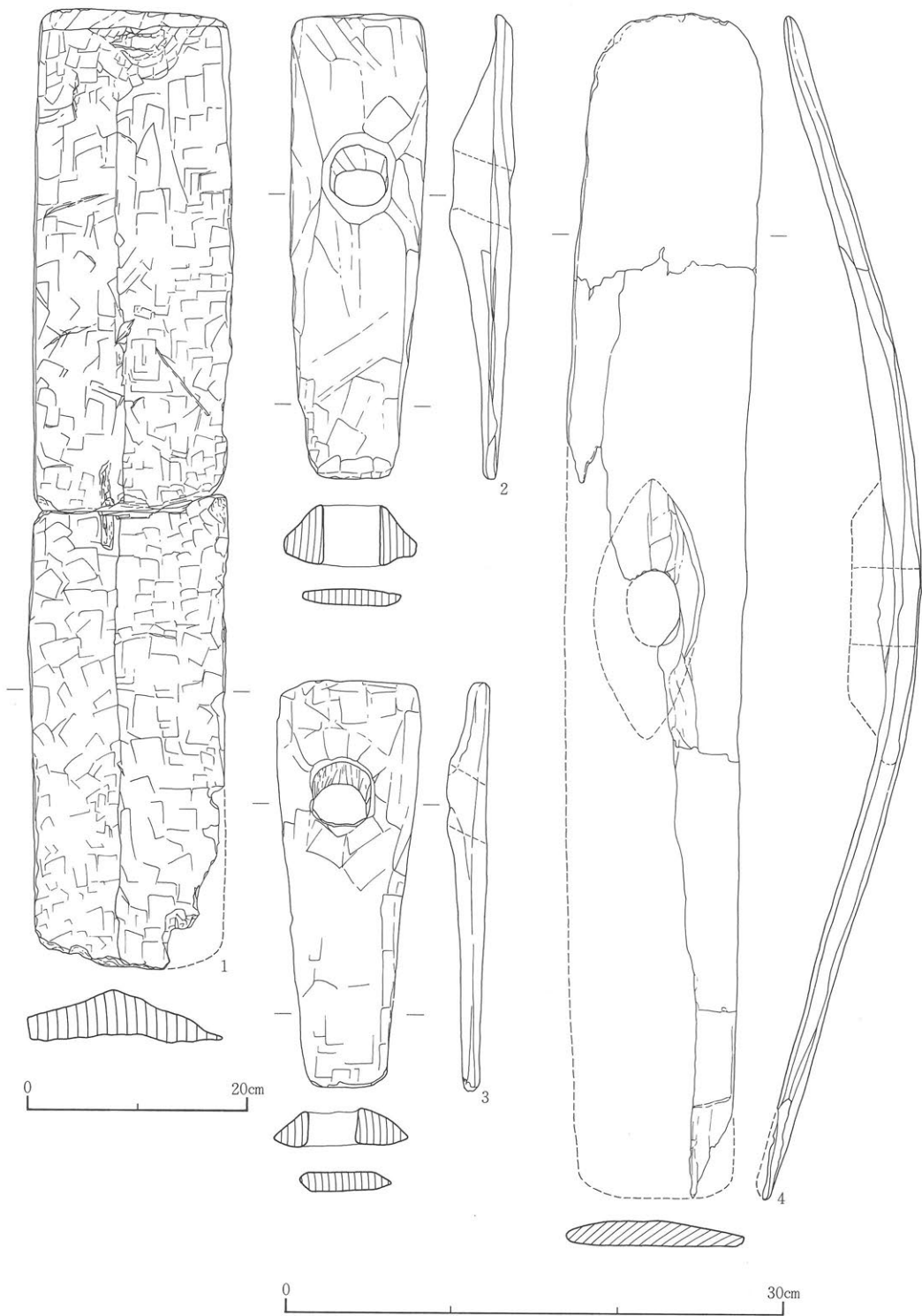
泥除(35) 笠形を呈する泥除Ⅰ式の未成品とみられる。内外面とも粗削りの状態で、表面には無数の削り痕が残されている。泥除Ⅰ式は上縁を直線的に作るのが普通であるが、本例はほぼ円形であって、平面形による上下の区別はできない。但し、笠形の頂部の位置が中心ではなく、上部に偏するという泥除Ⅰ式の特徴はみとめられる。泥除Ⅰ式は、弥生時代前期～後期の直柄平鋏に用いられたことが知られており、自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物とともに出土した本例はその下限年代を示すものと考えられる。使用樹種はクスノキ。

直柄又鋏(29) 方形の身下端にフォーク状の刃を削り出したもの。刃は5本とみられるが、すべて根元より折損している。円形の柄孔とB型隆起をもつ。SD72より第Ⅱ様式と共伴。

直柄横鋏(36) 半円形の身と一部が鋸歯状の刃縁をもつ。『木器集成』の分類による横鋏Ⅲ式に属する。身の中心に穿たれた方形の柄孔には、ヤマグワを使用した柄先が装着状態で残る。柄の先端は、柄孔から脱落しないように上端を肥厚させ、端面に楔が打ち込まれている。柄孔のすぐ下と刃縁ちかくに、それぞれ方形の小孔が穿たれているが、この二孔の役割については同様の小孔が身の一端の刃縁ちかくにもみられる点と共に不明である。鋏身にカシではなくクスノキを使用するが、クスノキの横鋏Ⅲ式は佐賀県菜畑遺跡に例が知られている。自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土した。

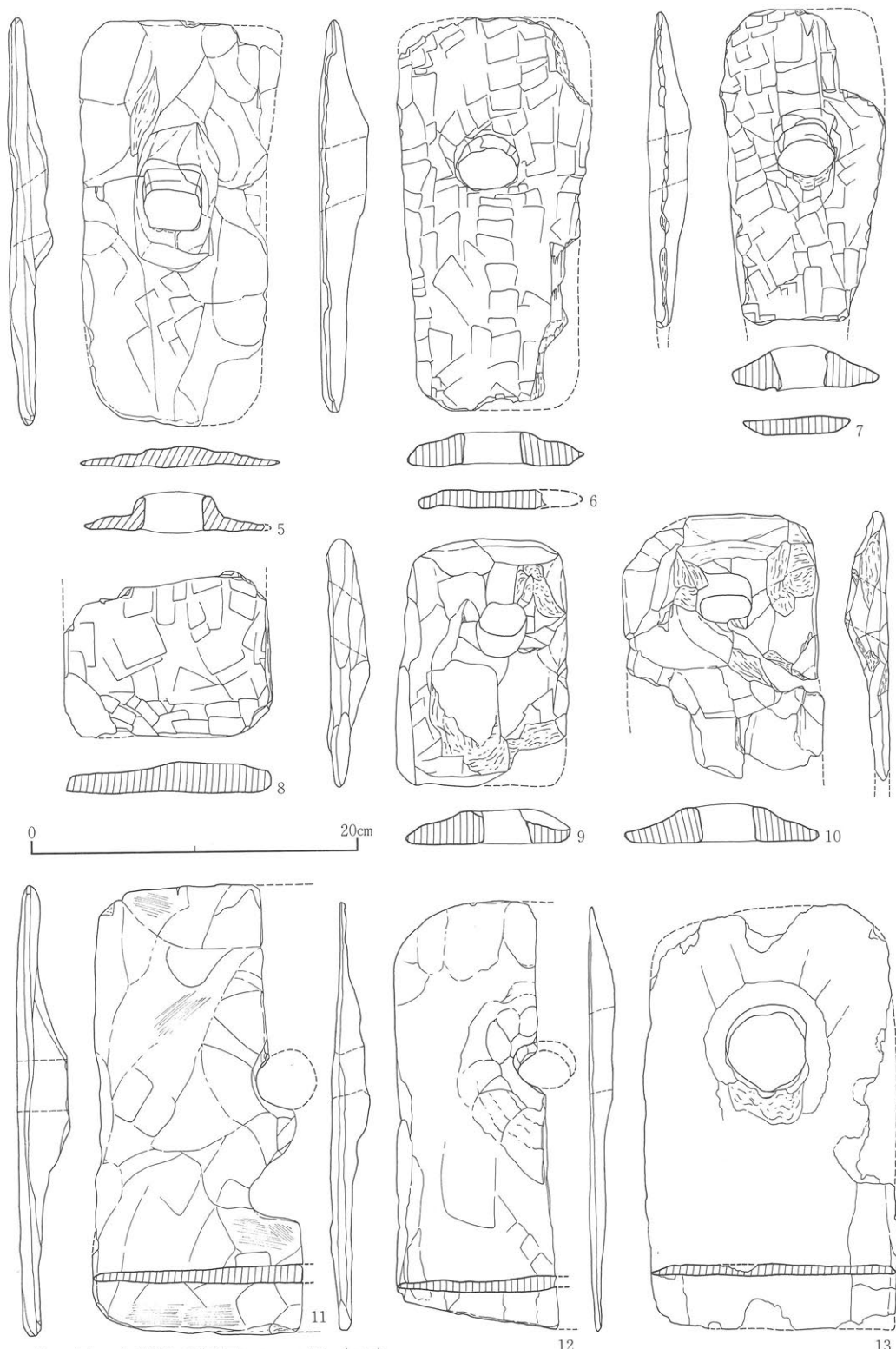
曲柄平鋏(34) 刃部が擦り減っているが、もとは下膨れで刃部幅が肩幅よりも大きいものと思われる。着柄軸部と肩部との境が明瞭な特徴により、本例は曲柄平鋏CⅠ式に属すると考えられる。着柄部の上端を紐かけのため両側に肥厚させる特徴は、CⅠ式に一般的であるが、本例はさらに軸部の中程にもう一カ所の紐かけ突起をもち、この突起を挟んで上下二ヶ所で膝柄の装着部と緊縛するものである。この突起は、古墳時代の曲柄平鋏D式の笠状突起の祖型と考えられるものである。SD72より第Ⅱ様式と共伴。

組合せ鋏柄(33) 34のような鋏と組合わせる膝柄の装着台の破片。紐かけ突起の形状よ

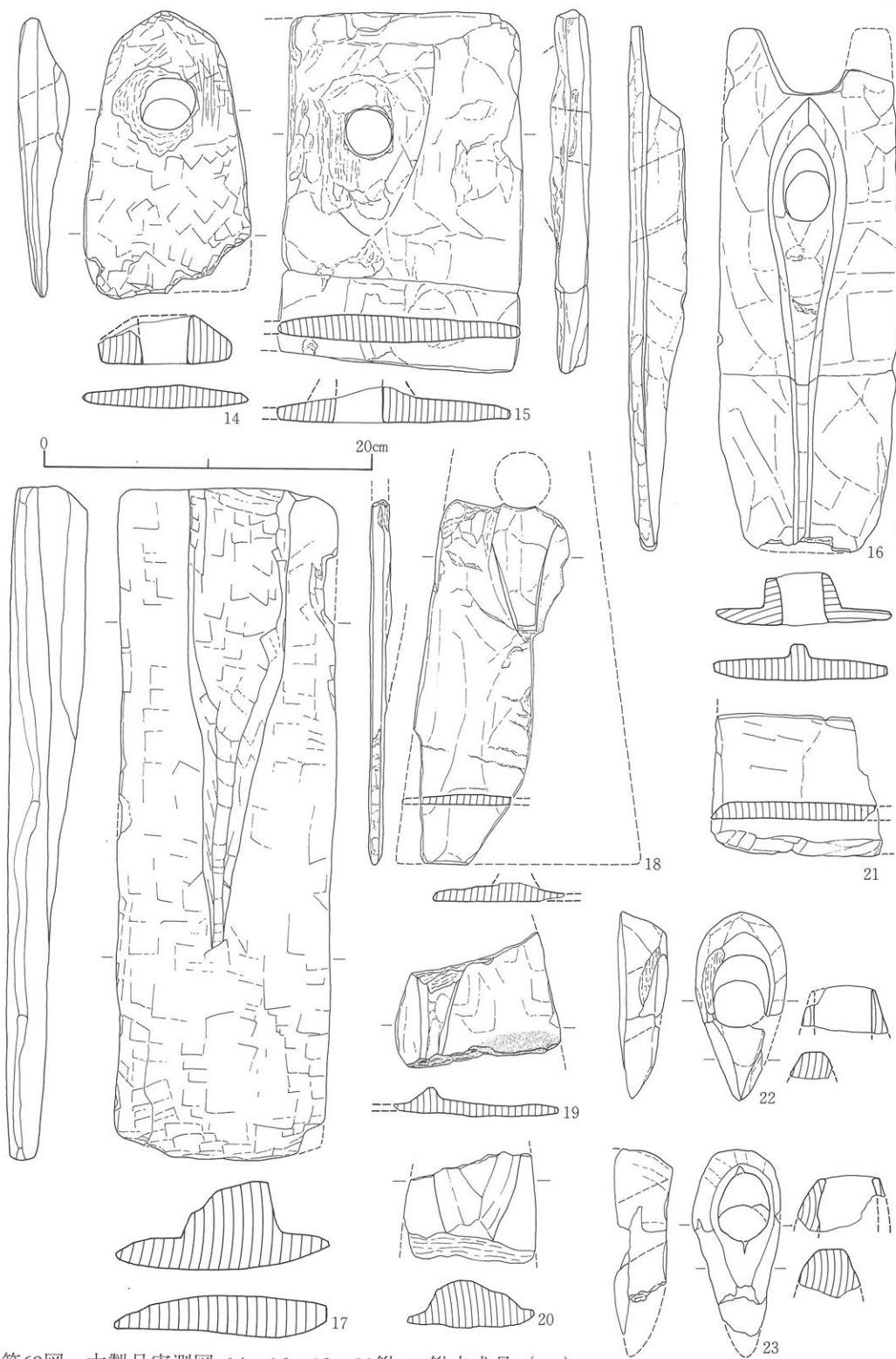


第66図 木製品実測図 1鋏未成品 (1/6) 2~4鋏 (1/4)

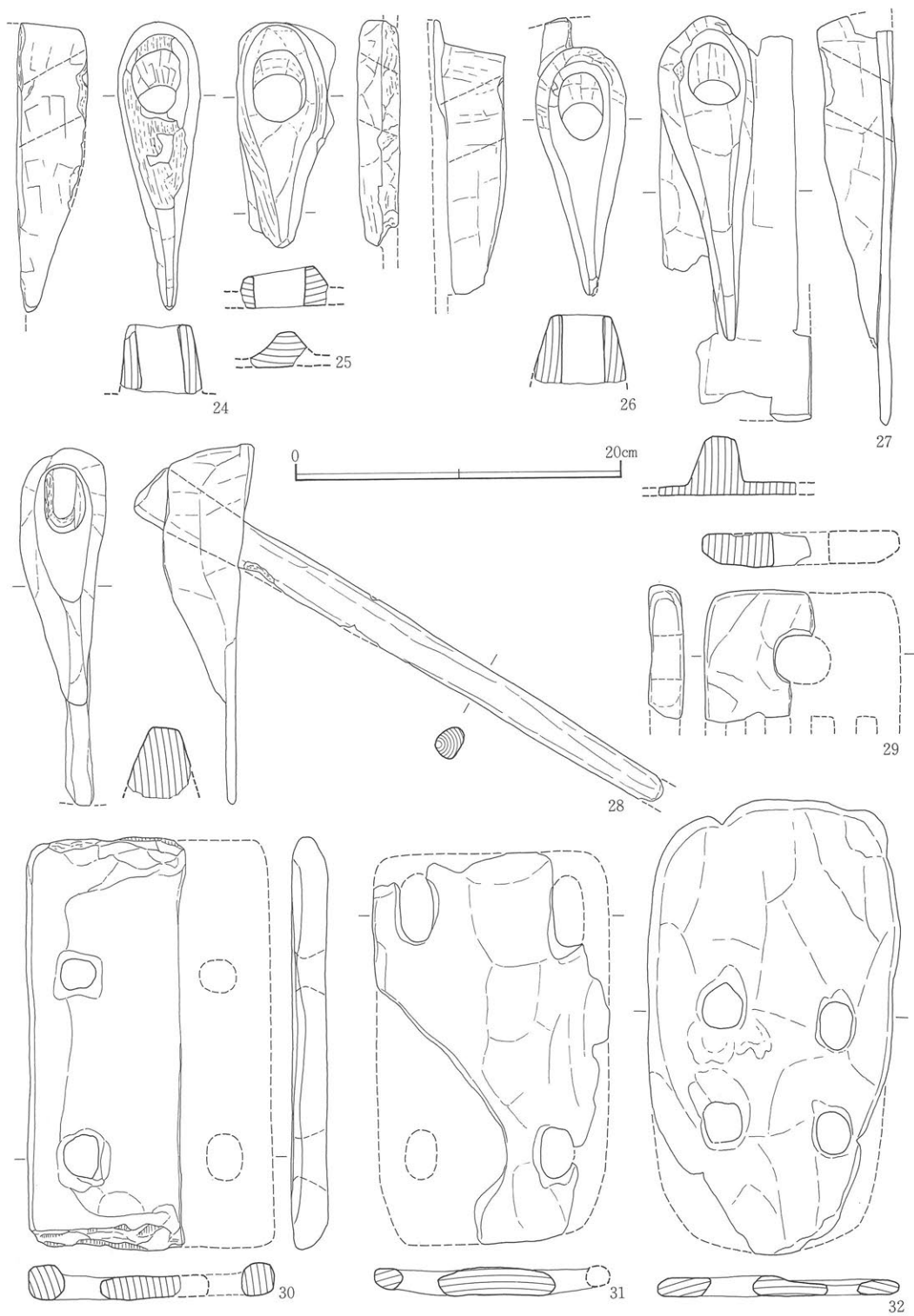




第67図 木製品実測図 5~13欸 (1/4)



第68図 木製品実測図 14~16・18~23 17 鋏未成品 (1/4)



第69図 木製品実測図 25~29鋏 30~32田下駄 (1/4)

り、装着台上端部とみられる。第8L層より第Ⅱ様式と共伴。

田下駄 (30~32) 長さ25cm前後・幅15cm前後の一枚板に4孔の緒孔を穿ち、足板とした縦長田下駄。30は足をのせる面の縁が隆起し、接地面は摩滅している。31は接地面が凸面を呈する。32は足板中央部に緒孔が寄る。30はSK20、31はSD72より第Ⅱ様式と、32は第8U層より第Ⅱ~Ⅳ様式とそれぞれ共伴。樹種は30がヒノキ属、31がヤマゲワ、32がクスノキ。

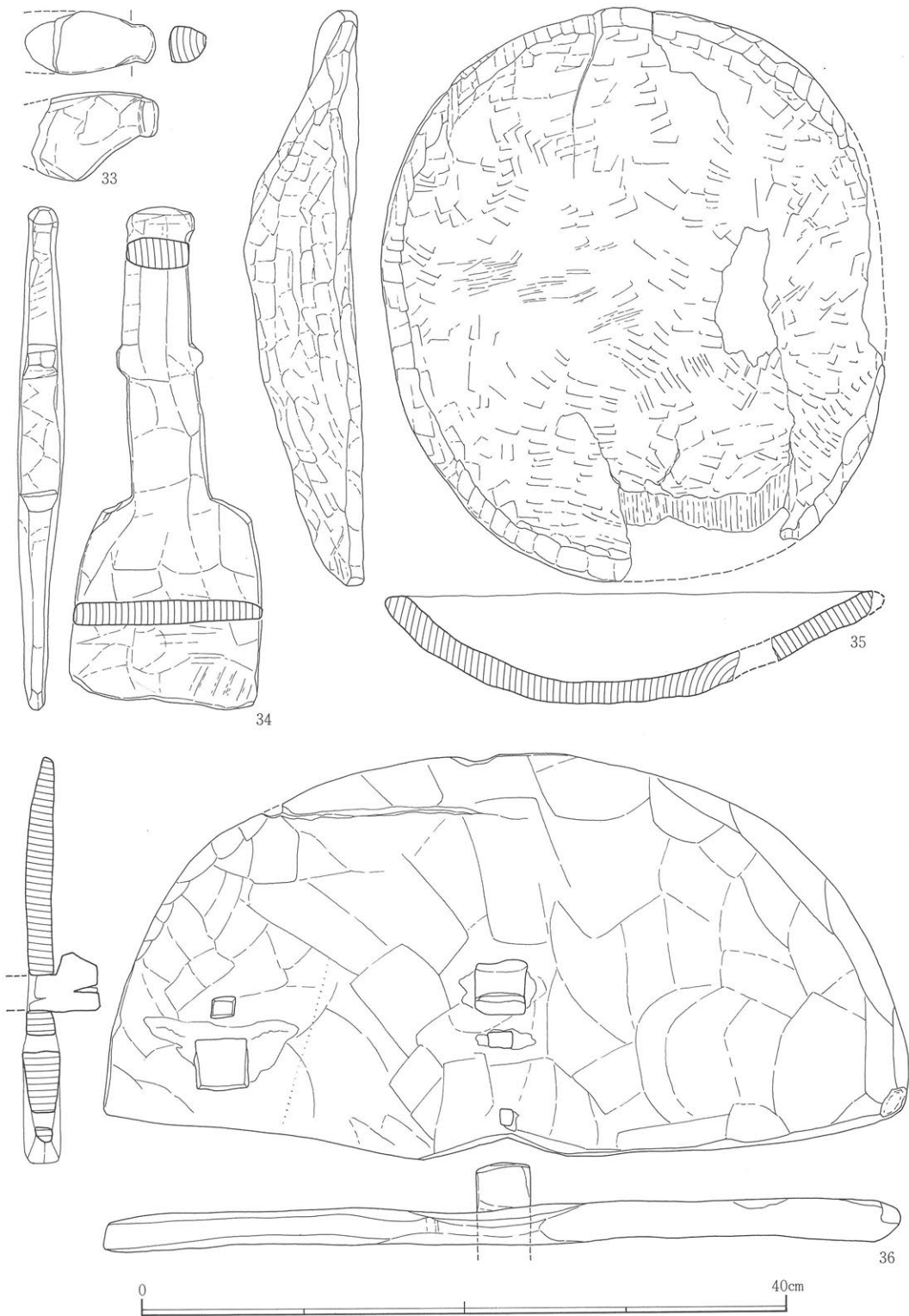
大型臼 (46) 内面・外面ともひび割れと摩滅が著しいが、クスノキの丸木を縦木取りで刳り込んだ大型臼で、全体の形は胴のくびれた鼓形を呈する。全体の1/5程の残存部より復原される法量は、口径40.7cm・裾部径37cm・高さ36.6cmを測る。SD69より第Ⅱ様式と共伴した。

小型臼 (37~45) 木取りが縦木取りである点は大型臼と同じであるが、器形は鉢形を呈する。復原口径7.8~19cm・高さ6.2~11cmを測る。内面の刳り込みが深いもの (37~39・42) と浅いもの (40・41・43~45) とがある。45は貝層2中部より第Ⅰ様式中段階、41はSD72より第Ⅱ様式、37~39・42・43は第8M層、44は第8L層よりそれぞれ第Ⅱ様式、40は第8U層より第Ⅱ~第Ⅳ様式とそれぞれ共伴した。樹種は37・38がクスノキ、39がクリ、41・43がシノキ属、42がタブノキ属、44がアカメガシワ、45がモミ属、40は広葉樹を使用。

堅杵 (48・49) 48は握り部の上下に節帯を削り出した二節式の堅杵。48は心持ち材を使用。49は握り部と節帯を欠損するが、搗き部の基部に4条の沈線からなる文様帯をもつ点や割材を使用する点などから、同じく二節式とみられる。48は第9U層より第Ⅰ様式新段階~第Ⅱ様式、49は第8L層より第Ⅱ様式と共伴した。樹種は48がアカガシ亜属、49がマテバシイ属。

粗すくい (47) ちり取り状の体部と基部より突き出た棒状の把手をもつ。出土したのは体部の半分程度の破片である。この種の木器は、船内に溜まった水を汲み出すアカカキとして漁撈具に含められることが多いが、本例は体部の縁の隆起が低く、民具の粗すきいと類似することから、農具に含めておく。第8M層より第Ⅱ様式と共伴した。樹種はヒノキ属。

櫓 (50・51・56・57) 部材の形状と使用痕そして出土地周辺の地理的環境などから、湿地の運搬具と推定されるものである。全体の形状は、積雪地帯で用いられる櫓と同じく滑走台を並べた上に荷台を載せたとみられるが、今のところ滑走台同士あるいは滑走台と荷台とが組合った状態の出土例は知られていない。東南アジアの民族例より、この種の湿地用櫓の用途は刈り取った稲の運搬や水田面平均化のための土砂運搬など、水田での農作業が中心であったとみられるが、河内潟湖周辺の干潟や低地の集落周辺における運搬具としてひろく用いられた可能性も考えられる。滑走台は、一木より削り出した滑板と装着台とからなる。滑板は接地面が左右に強く彎曲し、前後にもわずかに彎曲する。前後の彎曲は前端および後端ちかくでは大きく、中間部分ではわずかである。滑板の平面形はふつう前端が丸く、後端が直線的に仕上げられており、前後を区別することができる。この前後の違いは、未成品の段階より認められる (50)。荷台を載せる装着台は、滑板より一定の傾きをもって立ち上がる。装着台の傾きは櫓の前方に向かって右に傾くもの (57) と左に傾くもの (50) とがある。装着台が右に傾くものは櫓の進行方向に向かって右側の滑走台、左に傾くものは同じく左側の



第70図 木製品実測図 33鋤柄 34鋤 35泥除 36横鋤 (1/4)

滑走台と考えられる。

また、装着台には側面に等間隔で貫通孔が並ぶもの（57には4孔、51には5孔以上）と上面より蟻溝を彫り込んだものがある。これらの孔や蟻溝は二台の滑走台を結合するためのものであり、結合にはいくつかの方法が考えられる。第1は孔に紐を通して装着台の上に乗せた横木を緊縛する紐結合、第2は横木を直接孔に差し込む柄結合、第3は蟻溝に蟻柄を差し込む方法などである。宮ノ下遺跡出土の櫛滑走台のうち、56は第3の方法であり、57は装着台上面が平坦であることから第1の方法が用いられたものと思われる。51は装着台上面が連続する山形であって、この種の装着台は鬼虎川遺跡出土例では横棧を柄組した状態で出土している。51は装着台上面の連続する山形部分の頂部が平坦であること、側面孔の孔壁が仕上げに丁寧さを欠くことなどの事実を併せ考えると、第1の方法がもちいられた可能性が高いと思われる。50はSD69、57はSX19、51・56は第8M層よりそれぞれ第Ⅱ様式と共伴した。樹種は50がシキミ、51がハンノキ属、56がクスノキ科、57がマツ属を使用。

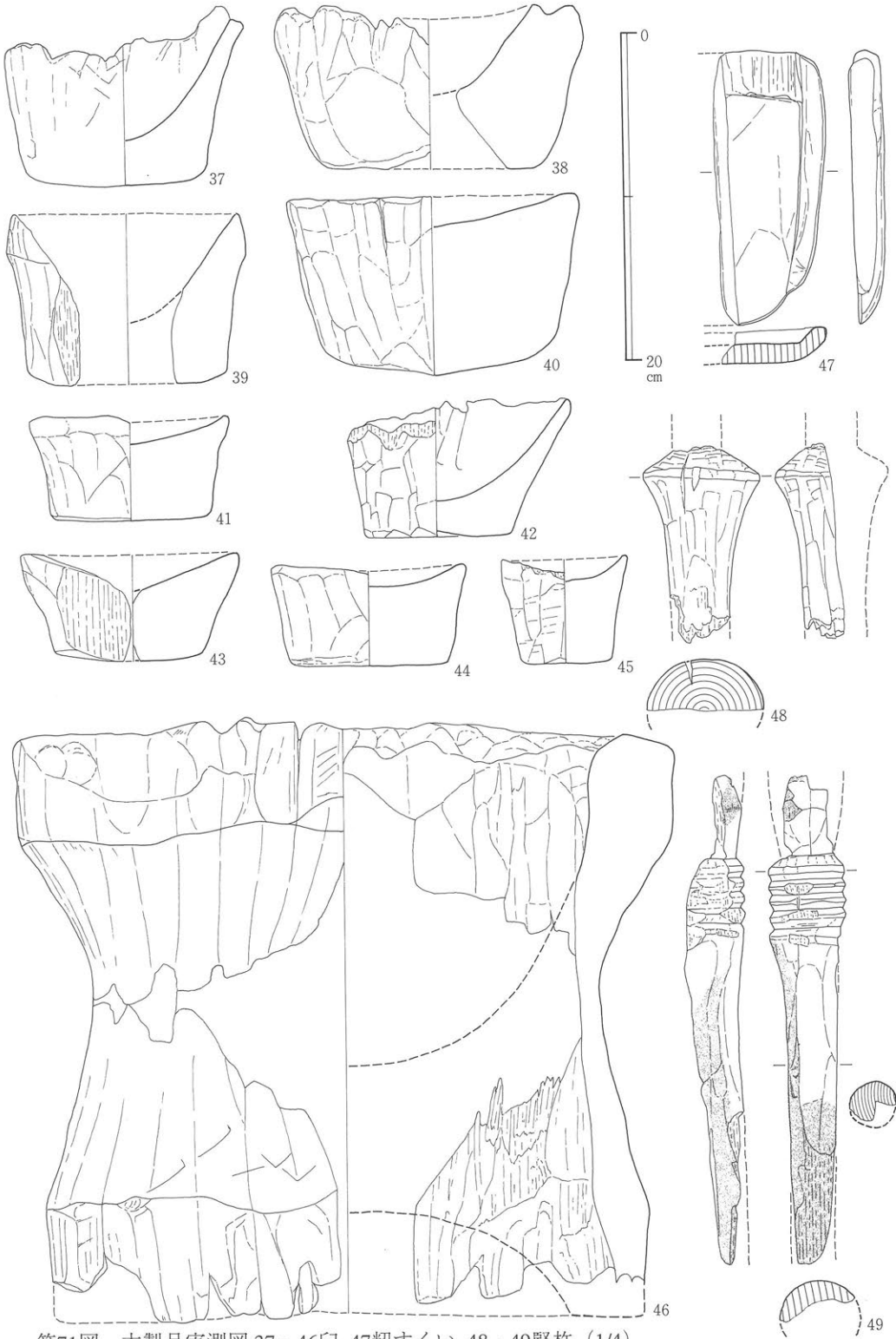
鏝（52～55） 民具のナワシロコテのように苗代作りで表面をならす可能性をもつ道具として記述するが、土壁塗りなどに用いられた可能性もある。52は長さ27.6cm・幅9.6cmを測る磨り板の中央部に山形の把手を削り出したものである。把手の側面には不整円形の1孔をもつ。この鏝は、磨り板・把手・把手孔などの形状が櫛滑走台に酷似しており、木取りや把手が磨り板に対して傾く点まで共通する。鏝のなかには本例よりも大型のものが鬼虎川遺跡などで知られており、なかには小型の櫛の滑走台と判別し難いものがある。55は把手の位置が磨り板の中央ではなく、後端に片奇ってつくもの。把手・把手孔の形状、把手が傾く点などは51と同じく櫛滑走台と酷似する。53は磨り板を欠く把手で、把手孔が1孔のもの。54は2孔をもつ把手の破片である。52はSD71、54は貝層2上部、53・55は第8M層よりそれぞれ第Ⅱ様式と共伴した。樹種は52がアカガシ亜属、53がマツ属、54がムクノキ、55がクリを使用。

## 2) 工具・日用雑具

工具としては、扁平片刃石斧または板状鉄斧柄・袋状鉄斧柄・サヌカイト縦長剥片石器を装着した縦斧・雇入れ斧柄、日用雑具としては火鑽臼・自在鉤が出土した。

扁平片刃石斧または板状鉄斧柄（59） 枝分かれした部分を利用して幹を斧台に、枝を握りに仕上げた膝柄である。斧台の先を一段削り込んで装着面を作る。装着面は長さ5.4cm、復原幅約3cmを測る。装着の際の紐かけ部分は3.8cmにわたり浅く彫りくぼめている。装着面の段には、斧身の基端の食い込み痕がみられ、厚さ0.8cm以下の斧身を装着したことが知られる。この装着痕からは、扁平片刃石斧か板状鉄斧かを判断できない。装着面の長さは扁平片刃石斧用としては長すぎるように思われるが、板状鉄斧用と断定できるほど長くもない。第8M層より第Ⅱ様式と共伴したことから、板状鉄斧柄であれば最も古い例となるが、現状では扁平片刃石斧柄の可能性をより大きく考えておきたい。樹種はサカキ。

袋状鉄斧柄（60） 全長54.7cmを測る膝柄の完形品。斧身装着部の形状より横斧の柄であ

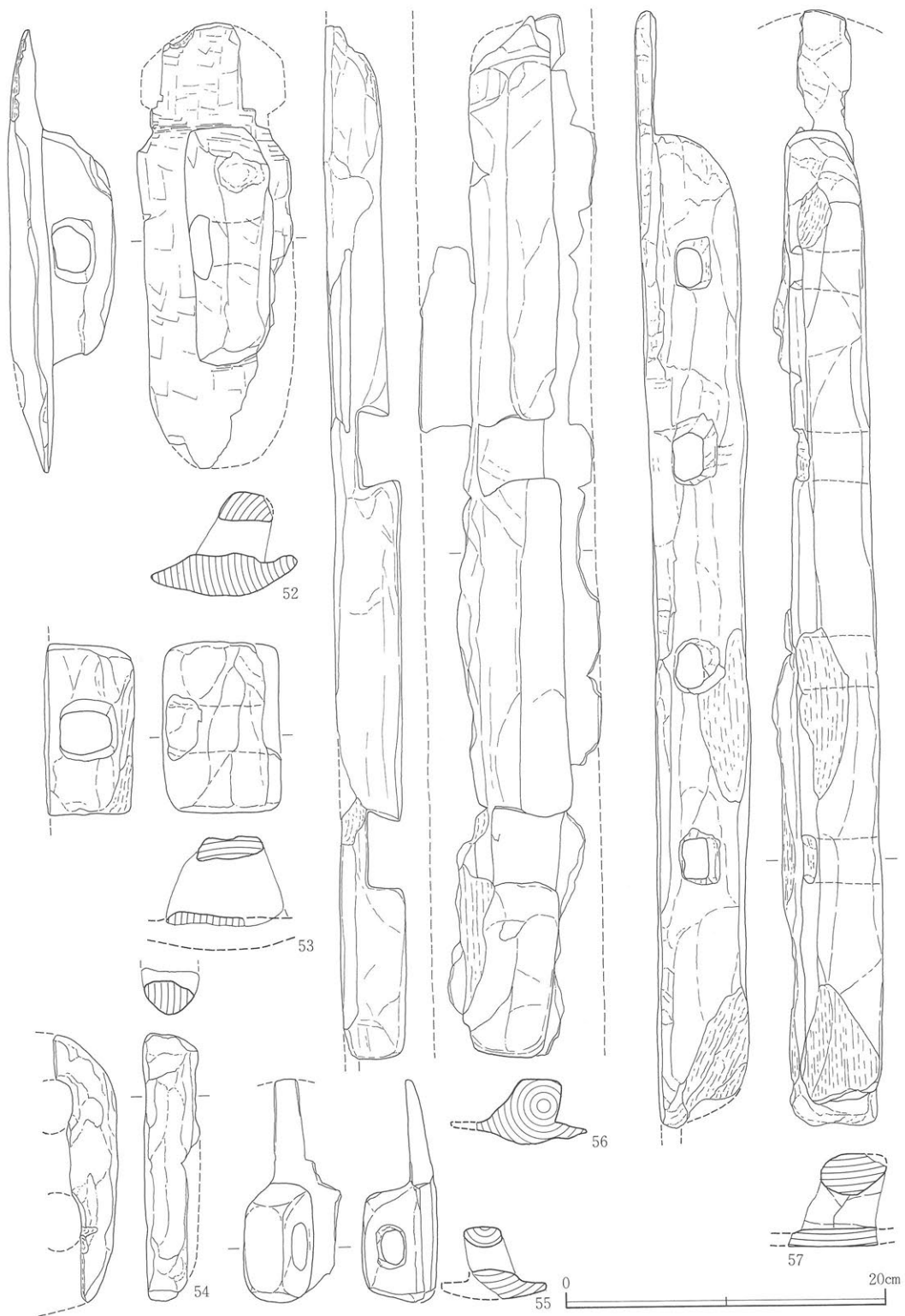


第71図 木製品実測図 37~46白 47初すくい 48・49豎杵 (1/4)



第72図 木製品実測図 50櫛未成品 51櫛 (1/6)





第73図 木製品実測図 52~55鍔 56・57櫃 (1/4)

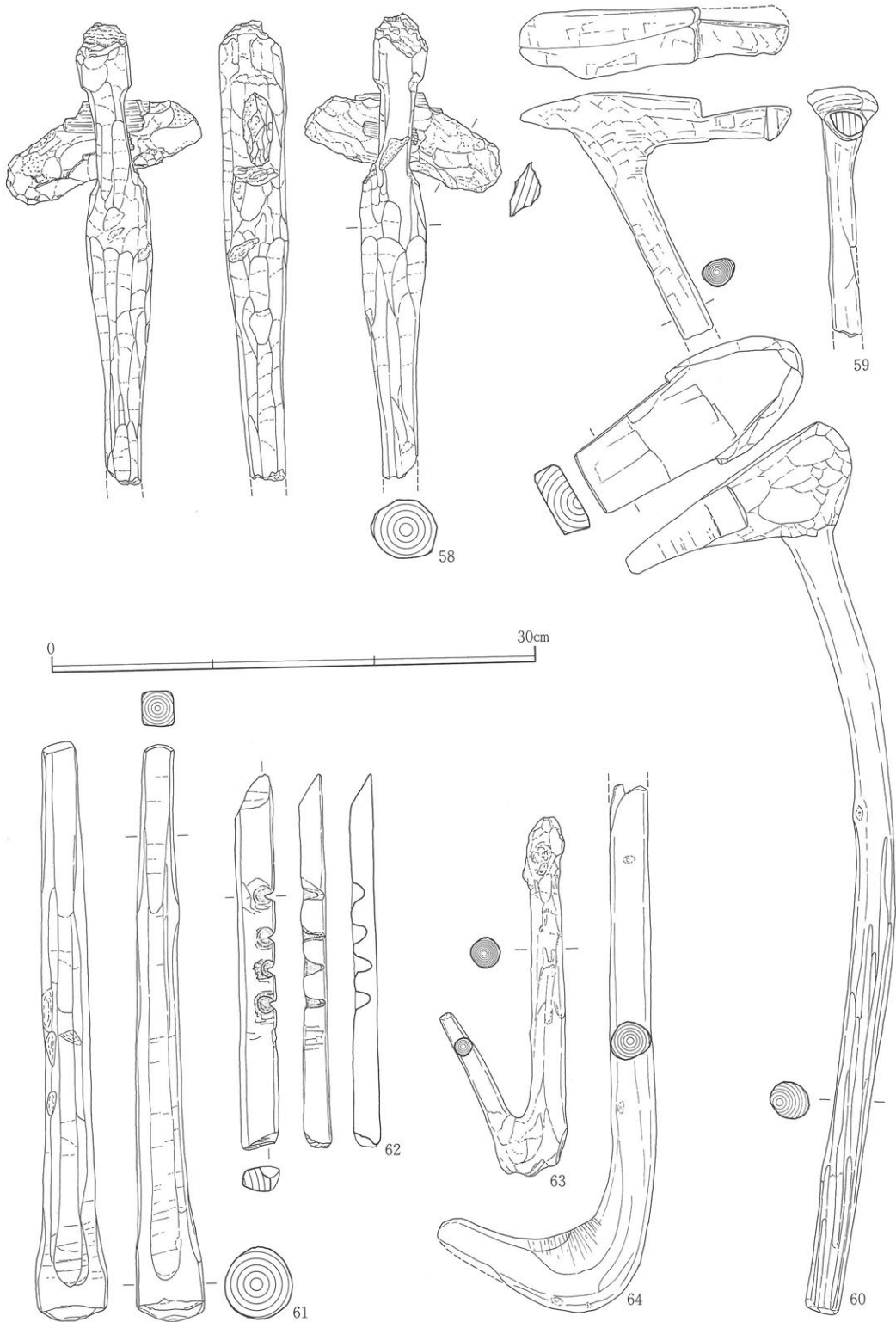
ることがわかる。カヤの枝分かれ部分を利用し、斧台は直径10cm程の幹あるいは太めの枝より削り出す。斧台に向かって内彎する握りは細い枝の樹皮を削ったものを用いる。斧台は、使い手からみて手前側となる前面が先端に向かってしだいにすぼまり、左右の側面には装着のための段をもつ。後面は平坦に仕上げる。装着部先端の幅4.2cm。斧台前面の先端より6cmのところ、袋状鉄斧身の基端が食い込んだ痕がみとめられる。この食い込み痕と側面の段とは一致しないことから、鉄斧基端は側面の段まで挿入されなかったものと思われる。自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土した。

サヌカイト縦長剥片石器を装着した縦斧 (58) マツの心持材を用いた柄の先端ちかくに穿った装着孔に、サヌカイ縦長剥片の短辺を刃部とする石器を挿入し、孔壁との隙間に楔を打ち込んで固定したものである。柄は握り部で折れ、現存長28.2cmを測る。柄は全体に粗雑な作りであって、先端は斧による切断痕をそのまま残し、装着孔周辺や握り部は粗削りのまま仕上げている。また、装着孔の左右の側壁は仕上げが粗く、ヒノキの木片を利用した楔による石器の固定方法と共に、強い衝撃に対しては耐え得ないものと思われる。いっぽう、柄に装着された石器は、長さ12.4cm・幅4.0cmを測り、片面に原礫面を残す縦長剥片の一方の短辺に刃部調整をおこなったものである。刃縁は一般の縦斧のように直線ではなく、刃先の一部が対象物にあたることで切削機能を果たすよう、丸く作り出されている。石器の主軸と柄との角度は約60度である。この装着角度と丸い刃縁そして脆弱な装着等の要素を総合すると、この縦斧は木の伐採加工などのように強い打ち込みを必要とする使用には不向きであり、石器先端周縁の鋭い刃によって引き切るような使用方法が考えられる。また、握り部の折損を使用の際の衝撃によるものとすれば、この縦斧はかるい打ち込みも合わせもつ用途、たとえばイノシシやシカ等動物の解体作業に使われた可能性が考えられる。第8M層より第Ⅱ様式と共伴した。

雇い入れの柄 (61) 長さ35.6cmを測る棒状の完形品。柄組を行う先端部は断面方形、握り部は断面円形に仕上げる。握りの基端は、円棒のまま一段太く削り残され、滑り止めとしている。全体の形状より、この木製品が何かの柄であることは間違いなく、先端部が断面方形を呈する点より、別部材との組合わせを強固に行う必要があるようなものが考えられる。柄の長さよりみて、最も可能性があるのは手斧柄とりわけ偏平片刃石斧または板状鉄斧の柄と思われる。第8U層より、第Ⅱ～第Ⅳ様式と共伴した。樹種はカヤ。

火鑽臼 (62) 長さ23cm・幅2.4cm・厚さ1.8cmの木片の上面に4個の火鑽穴が並ぶ。火鑽穴は中軸線上にはなく、一方の側に片奇る。また、これらの火鑽穴に空気が流れ込み、発火しやすくするために側面からV字形の溝が切り込まれている。自然流路上部堆積層より、第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土した。樹種はスギ。

自在鉤 (63・64) 枝分かれ部を利用して鉤状とし、上端に紐かけを削り出したもの。64は上端を欠損するため確証はないが、いちおう自在鉤に含める。63はSX11より第Ⅱ～第Ⅳ様式、64は第8M層より第Ⅱ様式とそれぞれ共伴した。樹種は共にヒノキ属。



第74図 木製品実測図 58打製石斧装着の縦斧 59・60横斧柄 61柄 62火鑽白 63・64自在鉤 (1/4)

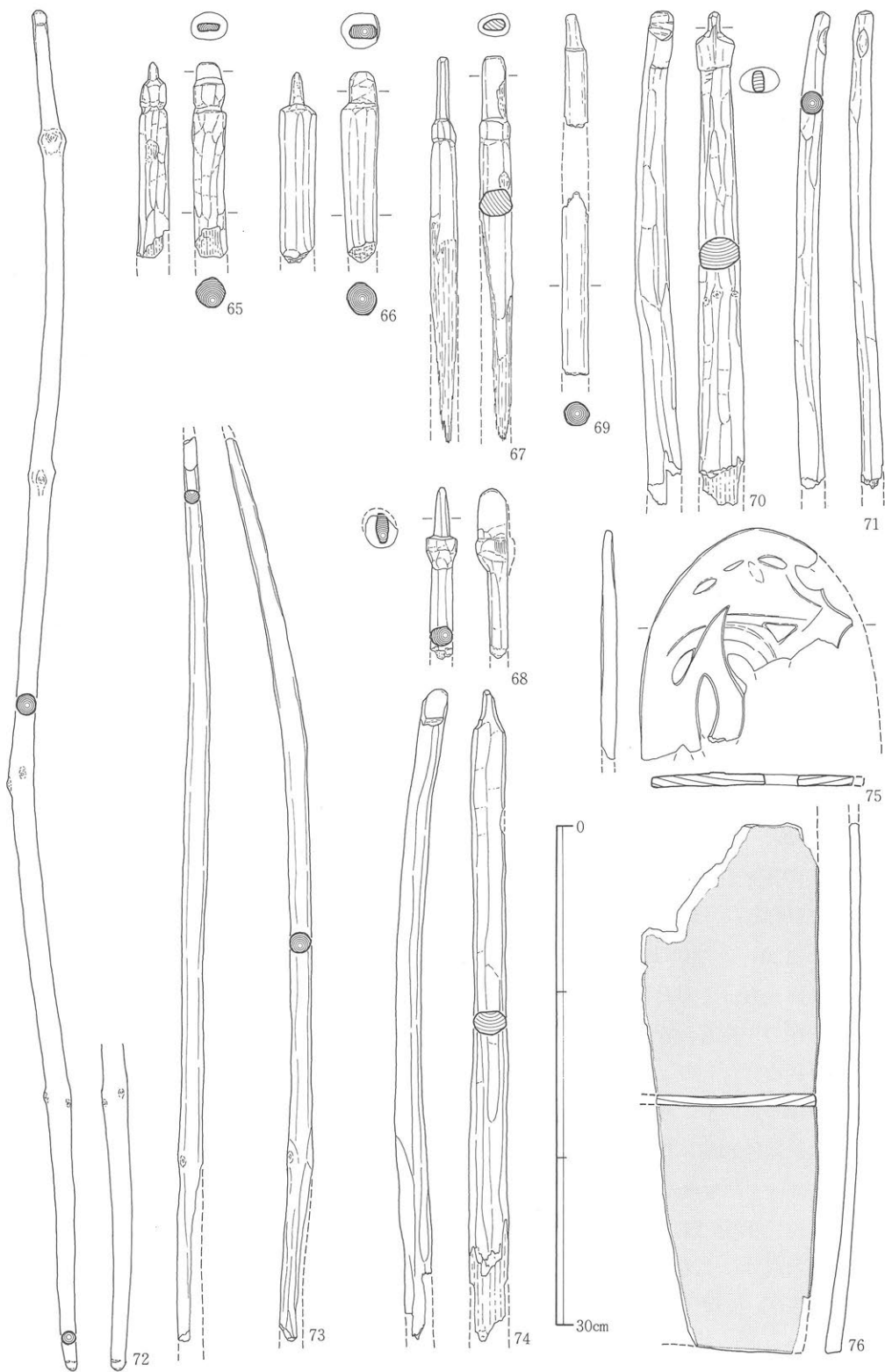
### 3) 武器・祭祀具

武器として弓・楯、祭祀具として弧紋円板・刀形木製品などがある。

弓 (65~74) イヌガヤやカヤなど弾力を有する樹種の枝を削って仕上げた弓幹の両端に弦をかけるための弭を突起または刻みによって施した丸木弓である。全形の残るものは少なく、弭部分が遺存するだけのものが大半を占める。弭を除く弓幹は、部分的には網杵と見分けがつかない場合がある。完形の72は、カヤの細い枝をそのまま利用した全長82cmを測る小型弓。弓幹は削りによる整形の痕がみられない粗雑な作り、弭は末弭・本弭とも両側から小さく刻みを施しただけのものである。弓幹も細いことから、武器や狩猟具として実際に使用されたかどうか疑問である。71の弭も両側から刻みを施すもの。69・73は、端部を周囲から削って円錐形を呈する弭としたもの。65~68・70・74は凸形を呈する弭を削り出したもの。このうち70を除く凸形弭は、弓幹と弭との境に明瞭な段をつくるものであり、さらに65・67・68・70には弭突起の基部に節帯がめぐらされている。65はSD69・68はSD72よりともに第Ⅱ様式と共伴。その他も第9U層~第8M層より第Ⅱ様式を下限とする遺物と共伴した。樹種は56がイヌマキ、66・68~70・72~74がカヤ、67・71がヒノキ属を使用。

楯 (76) 厚さ0.6~1.0cmを測る板材の一面に朱塗りを施した楯。朱塗り面を楯面とすれば右側端および基端のそれぞれ一部が残るものである。楯面は基端に向かって反りをもつ凹面を呈し、補強および飾りを綴じるための小孔列はみられない。裏面は基端ちかくに朱塗りの痕がわずかに残るが、その他は板地のままであって、遺存部分に把手を取り付けた痕は認められない。この種の楯は、モミの板目材を用いるのを普通とするのに対して、本例はモクレン属の板目材を用いている。楯面に綴孔列がない事実とともに疑問の残るところであるが、厚さからみて短甲の飾り板でもなく、また他の用途も考えにくいことから、いちおう楯として報告しておく。自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式~6世紀初頭の遺物と共に出土した。

弧紋円板 (75) 復原長約27cm・復原幅約14.5cm・厚さ0.7cmを測る楕円形の板の一面に杏仁形および三角形の透し孔と弧線および直線とを組合わせた線刻紋様を施したものである。古墳時代前期を中心とする時期の畿内~東海・北陸地方において、祭祀具として用いられたとされるいわゆる弧紋円板の一種と考えられる。弧紋円板に施された紋様は、吉備地方に祖源をもつ特殊器台や特殊器台形埴輪に伴って定型化した直弧紋とされる紋様であって、畿内では奈良県纏向遺跡出土の弥生時代終末期~古墳時代初頭の木製弧紋円板に施されたものが古い例として知られている。纏向遺跡例は直線と円弧が複雑に絡み合った直弧紋であるのに対して、本例は直線と円弧の絡みがすくなく、線刻紋様のほかに杏仁形を主とする透し孔が多数施されていることなどが特徴としてあげられる。こうした特徴は、吉備地方でもやや新しい時期の特殊器台にみられることから、本例も纏向遺跡の弧紋円板より新しい時期のものかと考えられる。本例は自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式~6世紀初頭の遺物と共に出土したため共伴遺物による時期の限定はできないが、紋様の特徴などから布留式頃のものと考えられる。樹種はクスノキ。



第75図 木製品実測図 65~74弓 75弧紋円板 76朱塗り楯 (1/4)

#### 4) 漁撈具

刺突具・網杵・櫂などがある。刺突具（77～112）長さ10.8～20.2cm・直径0.5cm前後の細い棒の一端を尖らせたもので、ヤスとしての用途をもっていたと考えられるが、長さ10cm前後の短いものは木鏝の可能性もある。また、単純な形状を呈することから、その他の用途もあったかもしれない。選材の特徴としてはモミの使用が一般的である。鬼虎川遺跡では、土坑からの一括出土品に刺突具の制作工程を示す未成品多数が含まれており、それらとの比較により106・110～112は刺突具の未成品であることがわかる。出土層位は、SD61（90）・SD69（94・109）・SD71（108）・SD72（96・105）・貝層2上部（77・82・92・100・107）・小貝塚（89）などの遺構と第9U層～8M層（78・81・84・86～88・91・93・95・97・98・104・106・110～112）よりいずれも第Ⅱ様式と共伴し、その他は第8U層より第Ⅱ～第Ⅳ様式と共伴した。樹種は83・87・110・112がヒノキ属、その他はモミ属を使用。

網杵（113） 彎曲する杵材に網を留めるための小孔を等間隔で穿ったもの。杵材内側の表面を削り込み、段を作り出したうえで上下方向より穿孔を行っている。第8M層より第Ⅱ様式と共伴した。樹種はヒノキ属。

櫂（114～117） 棒状の握りより幅が徐々に広がり、水かきとしたもの。ほぼ完形の117は長さ82cm・握り幅3.3cm・水かき幅9.2cmを測る。水かき先端の平面形はゆるく弧を描く。116は握り部。114は握りから水かきへの移行部分。115は水かき部分で先端が尖る平面形を呈する。115は第8M層より第Ⅱ様式と共伴。その他は自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土した。樹種は115がアカガシ亜属、その他はシイノキ属。

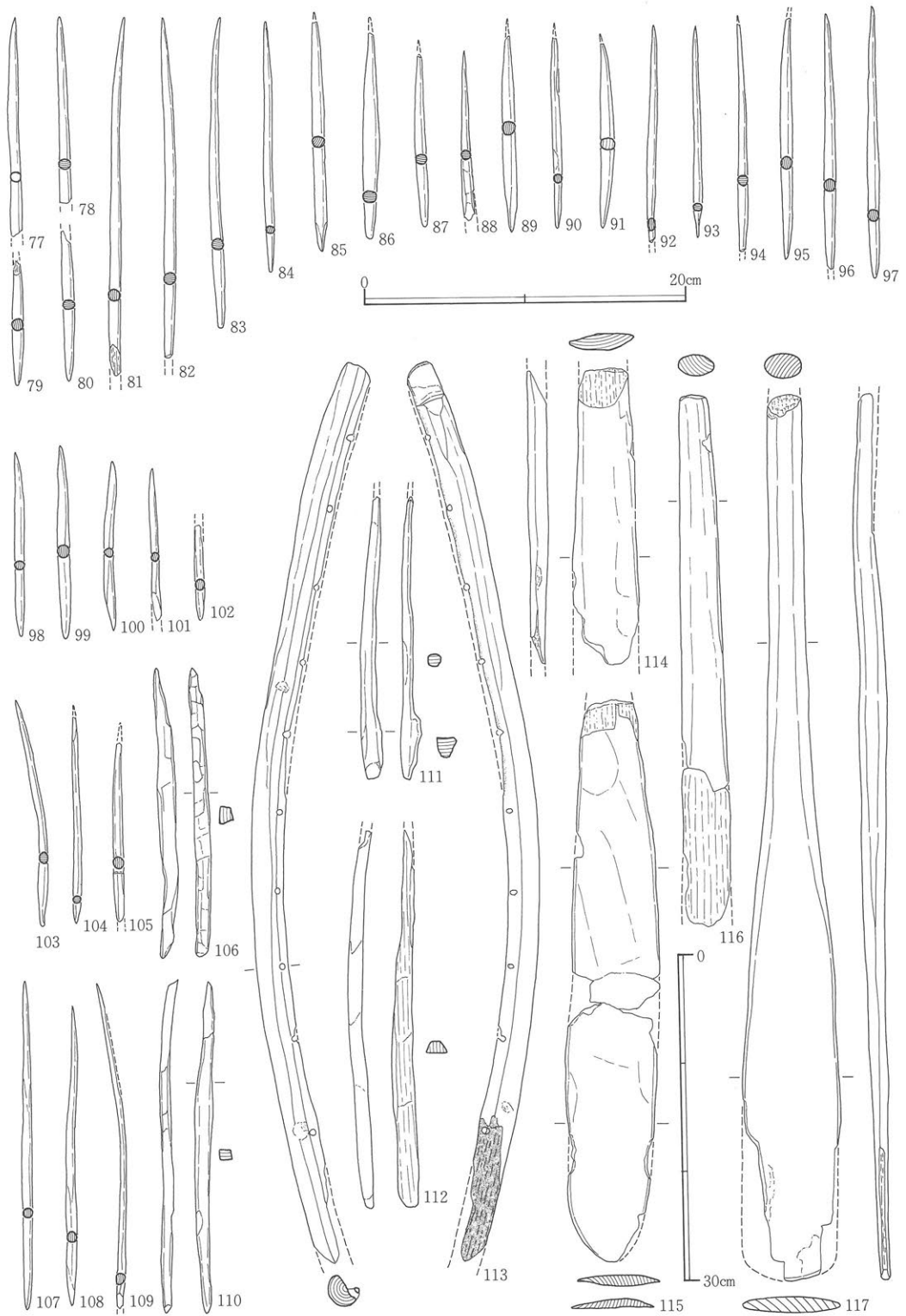
#### 5) 容器・食事具

容器として高杯・合子・鉢・槽・曲物底板・曲物蓋などがあり、食事具として横杓子・縦杓子・匙などがある。

高杯（118～120） 119は杯底部より内彎ぎみに外上方にのびる杯口縁部をもち、口縁端部はそのまま面をもっておわる器形を呈する。復原口径約42cm・杯部高9.2cmを測る。この高杯は、脚柱内面の中空部分が杯底部に貫通するところから、別々に作った杯部と脚部を柄結合によって組合わせたものとみられる。120は碗状を呈する杯部に双把手を削り出したものである。脚部も含めて一木より作られている。脚部118は水平な裾部からゆるやかに脚柱部が立ち上がる形態。裾径20cmに復原される。119・120はSD69、118は第8M層より第Ⅱ様式と共伴した。木取りはいずれも横木取り。樹種はいずれもヤマグワを使用する。

合子（122） 平面円形で、口縁部に一对の紐孔突起を有するもの。口径12.7cm・器高6.0cmを測る。横木取りによる精製品であるが、器表面は内外共に摩滅している。第8L層より第Ⅱ様式と共伴した。樹種はヤマグワ。

把手付鉢（123） 平面円形で体部に把手をもつ鉢の未成品。器表面の内外に多数の削り痕を残す。把手部分は体部より鱗状に削り出された状態で、これをさらに彫り込んで半環状



第76图 木製品実測図 77~105・107~109刺突具 106・110~112刺突具未成品 113手網柁 (1/4) 114~117櫂 (1/6)

把手に仕上げるのであろう。片把手か双把手かは欠損のため不明である。第8M層より第Ⅱ様式と共伴した。横木取りで樹種はヤマグワ。

槽 (121・133・134・137・139) 横木取りで製作された平面方形の容器である。121・137・133・139は平底のもの、134は底部に四脚を削り出したものである。139は幅30cm以上を測る大型の槽。121のほかは自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土した。法量は、134が長さ41.6cm・器高8.2cm・復原幅約28cmを測り、137が長さ38.5cmを測る。133・139は短辺の側板を他の部分よりも分厚く作る特徴をもつが、これは木取りとの関係で、木目と直交する短辺の強度不足を補うためであろう。121は第8L層より第Ⅱ様式と共伴した。樹種は121がケヤキ、133・134がコウヤマキ、137がマツ属、139がモクレン属を使用。

盤 (138) 底部に四脚を削り出し、内面を平らに仕上げたものである。体部の立ち上がりから口縁部を欠損するが、内底面の状態より平面長方形または楕円形を呈し、口縁部がわずかに立ち上がる程度の浅い体部がつくものと思われる。自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土した。樹種はモクレン属。

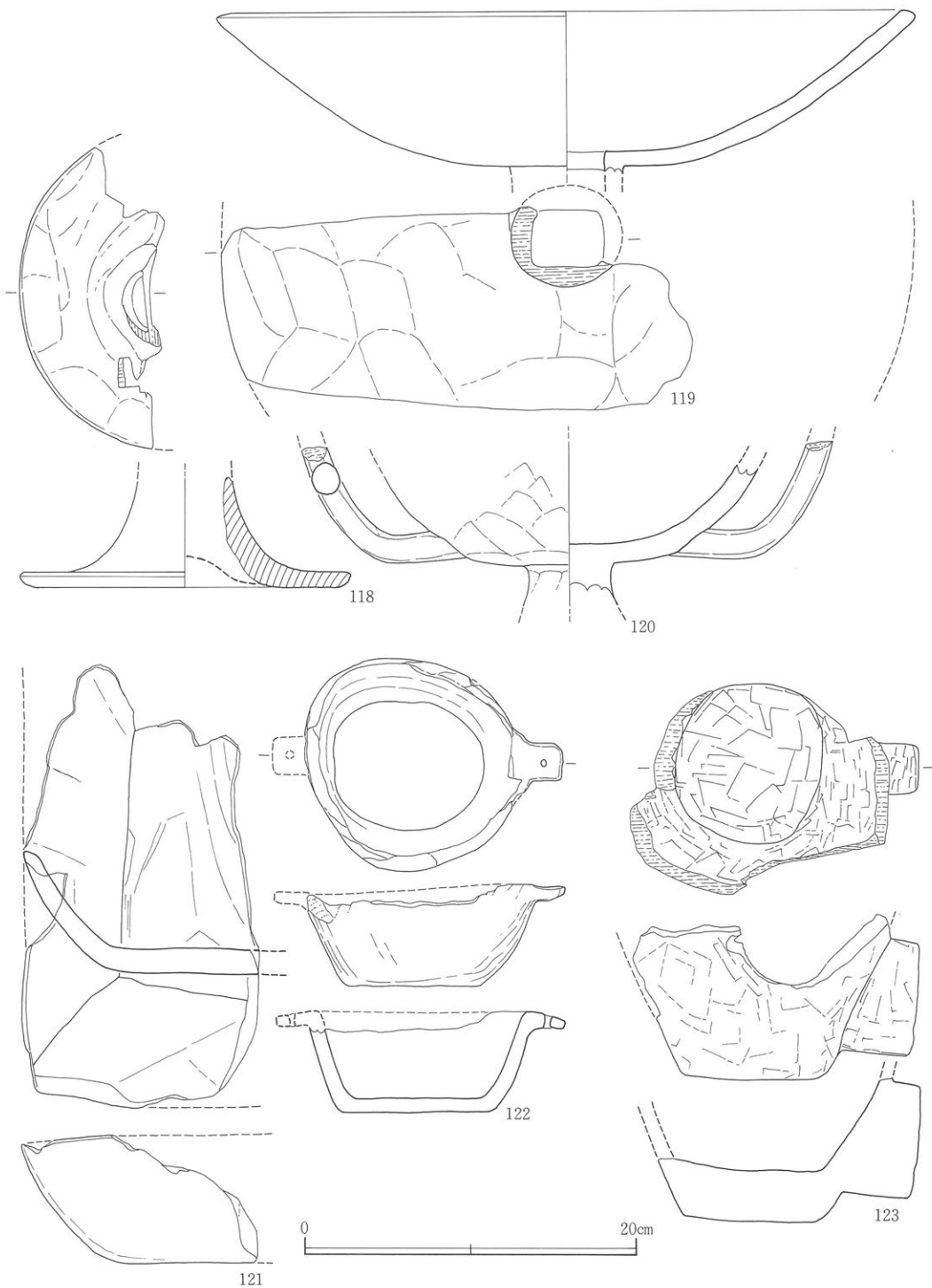
曲物底板 (132) 平面が楕円形の曲物の底板。長径40.4cm・復原短径約30cmを測る。底板は側板と組合わせる部分が最も厚く、周縁はしだいに薄くなる。また、底板中央は凹面を呈する。側板との組合わせ部分は、幅0.5cm前後の溝を彫って曲物をはめこみ、裏面より木釘を打込んで固定している。自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土したが、曲物の出現はいまのところ古墳時代以後と考えられるので6世紀頃のものと思われる。樹種はヒノキ属。

蓋 (131) 平面円形または楕円形に復原され、天井部が山形を呈する刳物の蓋。口縁部の周縁に身と組合わせるための段が彫り込まれたいわゆる栓蓋に属し、132のような曲物の蓋の可能性が考えられる。自然流路上部堆積層より出土したことから、132と同時期と思われる。樹種はヒノキ属。

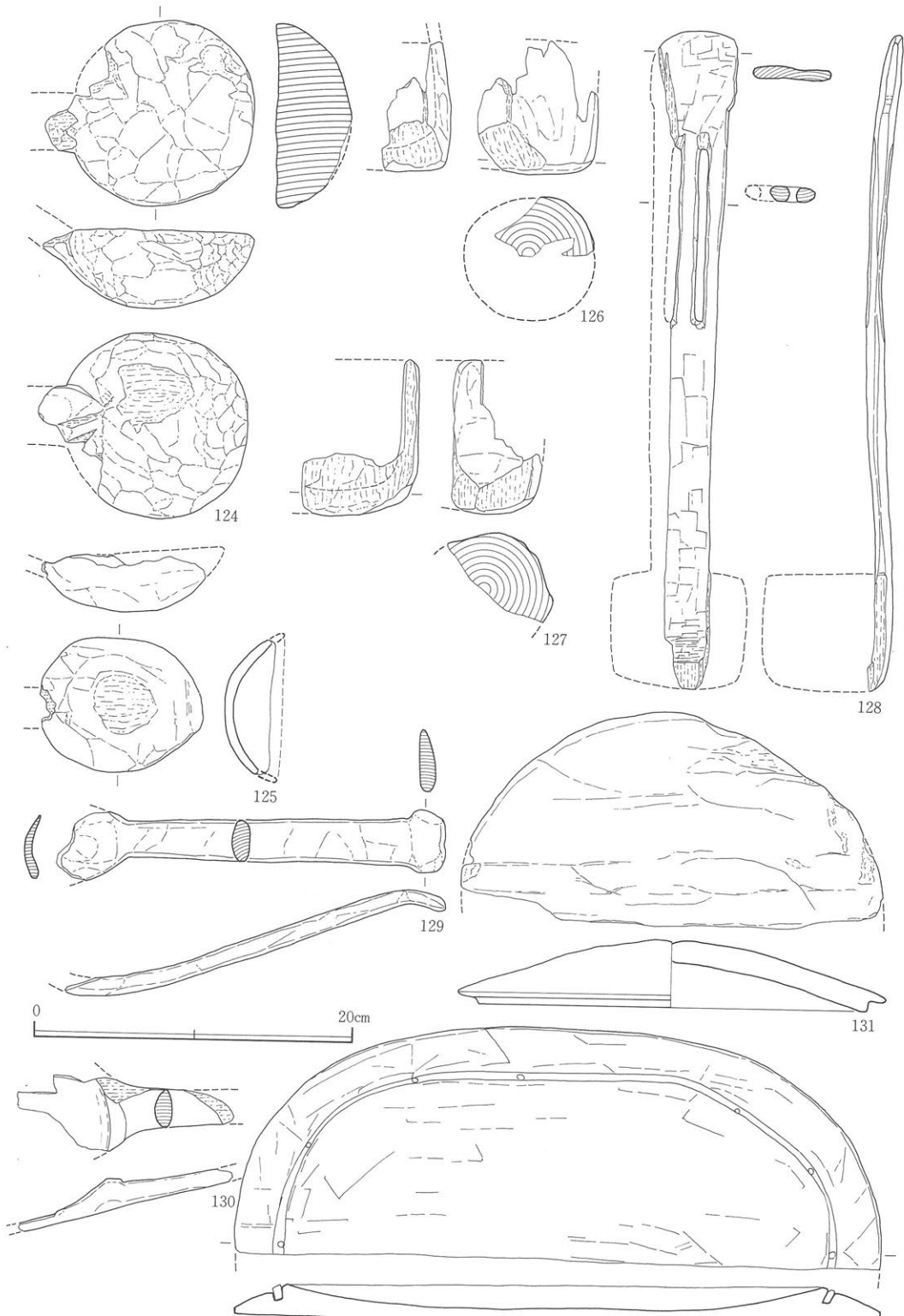
横杓子・匙 (124・125・129・130) 124は直径11.5cmを測る平面円形を呈する横杓子の身。内面を削り込む前の未成品である。身の側面に残る柄基部の形状より、柄と身は鈍角をなすとみられる。125は平面楕円形を呈する匙身。129は長さ約20cmの匙柄完形品。柄端は端が広がり、屈曲する。130は匙の柄基部と身の一部の破片。身の口縁を柄よりも一段高くつくる。124・129・130は第8U層より第Ⅱ～第Ⅳ様式と、125はSD72より第Ⅱ様式とそれぞれ共伴した。いずれも横木取りで製作され、樹種は不明の129を除きいずれもヤマグワを使用。

縦杓子 (126～128) 縦木取りで制作され、平面円形の身に対して柄が直角にとりつくもの。128の柄は長さ33.5cm・幅4.9cm・厚さ1.2cmを測り、柄端の輻が若干広がるとともに握り部に縦長の平行する透し孔が存在する。身の大半を欠損するが、柄先端から底部までの全長40.8cmを測る。126・127は身と柄のとりつき部分の破片である。128は第8M層・126は第8L層・127は貝層2上部よりいずれも第Ⅱ様式と共伴した。樹種は126がエゴノキ属、127がハンノキ属、128がイヌガヤを使用。

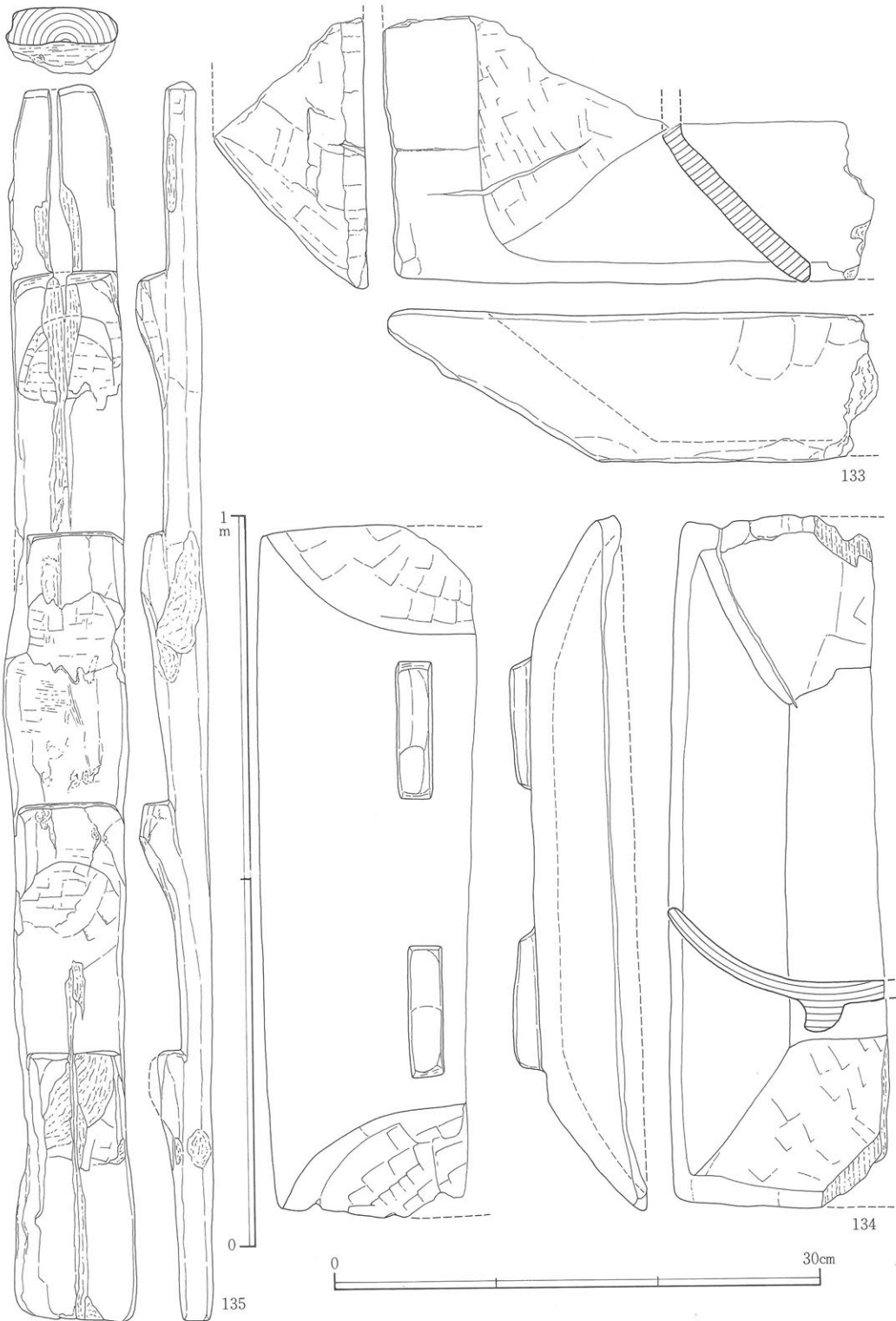




第77図 木製品実測図 118~120高杯 121容器 122合子 123把手付鉢未成品 (1/4)



第78図 木製品実測図 124・125・130横杓子 126~128縦杓子 129匙 131曲物蓋 132曲物底板 (1/4)<sup>132</sup>



第79図 木製品実測図 133槽 (1/6) 134槽 (1/4) 135梯子 (1/9)

## 6) 建築部材

梯子 (135) トネリコ属の心持ち材を使用し、表面に足掛けを削り出したものである。全長166cmを測り、足掛けはほぼ35cm間隔で五ヶ所につくられている。梯子の両端や足掛け上面に使用による摩滅あるいは欠損がみられる。自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土した。

## 7) 用途不明品

第80図～第88図に掲げた木製品の大部分は用途がわからないもの、何かの部材でそれ自体では何に使われたかわからないものなどである。これらの多くは解説し難いことから、以下の記述は数多い用途不明品のなかの一部のものに限られている。樹種についても繁雑を避けるため本文記述を省略したので、後記の樹種同定結果一覧表を参照されたい。

用途不明品 (第80図) 136は長さ39.4cmを測り、一端に直径約8cmの環状部が作り出されている。身の側面は丁寧に面取りされ、一側面は弧状に削り込まれている。環状部が取付く基部は細くくびれ、丸くて大きい一方には中央に直径約1.5cmの孔が貫通している。孔壁の整形は丁寧である。樹種はムクロジ。140は何かの柄とみられるもの。141は細長い板の一端に直径0.7cmの円孔をあけたもの。142はカシ材を使用し、鋤身の破片のような形であるが、周縁がすべて削り面である。141・140・142は第9U層・第8L層・第8M層よりいずれも第Ⅱ様式と共伴。その他は自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土した。

用途不明品 (第81図) 144～147は何かの柄とみられるもの。148と154はおなじ形状で部材とみられるもの。小型の栓状木製品149・151も同様。152は木心に樺巻きしたもの。153は輪状の芯に樺を巻付け、樺の端と端とを結び付けて撚りが解けないようにしたもの。輪の直径2cmを測る。全体に丁寧な作りで装飾的なものかと思われる。貝層2下部より縄文晩期凸帯紋土器(船橋式～長原式)と共伴した唯一の木質製品である。155は長方形の板の短辺に棒状の突起を削り出したもの。板状部に両側に一对の抉りを施す。抉りは他の部材と組み合わせるための紐かけ、棒状突起は把手であろうか。156はへら状のもの。157は弧状を呈する縁の端面に、紡織具の緯打具にみられる使用痕のような小刻みな圧痕がみられる。158は自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土し、152と156が第8U層より第Ⅱ～Ⅳ様式、その他はSD69・72・第9U～8M層などから第Ⅱ様式と共伴した。

用途不明品 (第82図) 板や棒に孔をあけたものが多いが、孔壁が丁寧に整形された159・164は棒状のものを装着して用いる用具の一部とみられる。孔の形や孔壁が不整形な160～162・170は紐結合などによる組み合わせ部材の一つであろう。163は紐かけ突起をもつ部材で、紐磨れによる磨滅がみられる。166～169はカシ材を使用し、農具の一部である可能性をもつが、166～168に穿たれた小孔の意味は不明である。169はナスビ形の曲柄鋏身の笠状突起部かとみられるが、磨滅のため断定は難しい。175は平らな板の上面に方形の突起をもつ。形状は櫛や鋺に類似するが、用途は違うと思われる。攪乱層出土の174を除くと、161・169・170・

172は自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土し、その他はSD72・69・第8M・L層などから第Ⅱ様式と共伴した。

用途不明品（第83図） 177・183・184は網杵など何かの杵材の一部。178・181・186・187は紐かけ突起をもつ部材。181は組合わせ孔を併せもつ。182は板材に2孔と潜孔1ヶ所をみるものである。176・178・182・183・187は自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物とともに出土し、その他はSD69・72・第8M層などから第Ⅱ様式と共伴した。

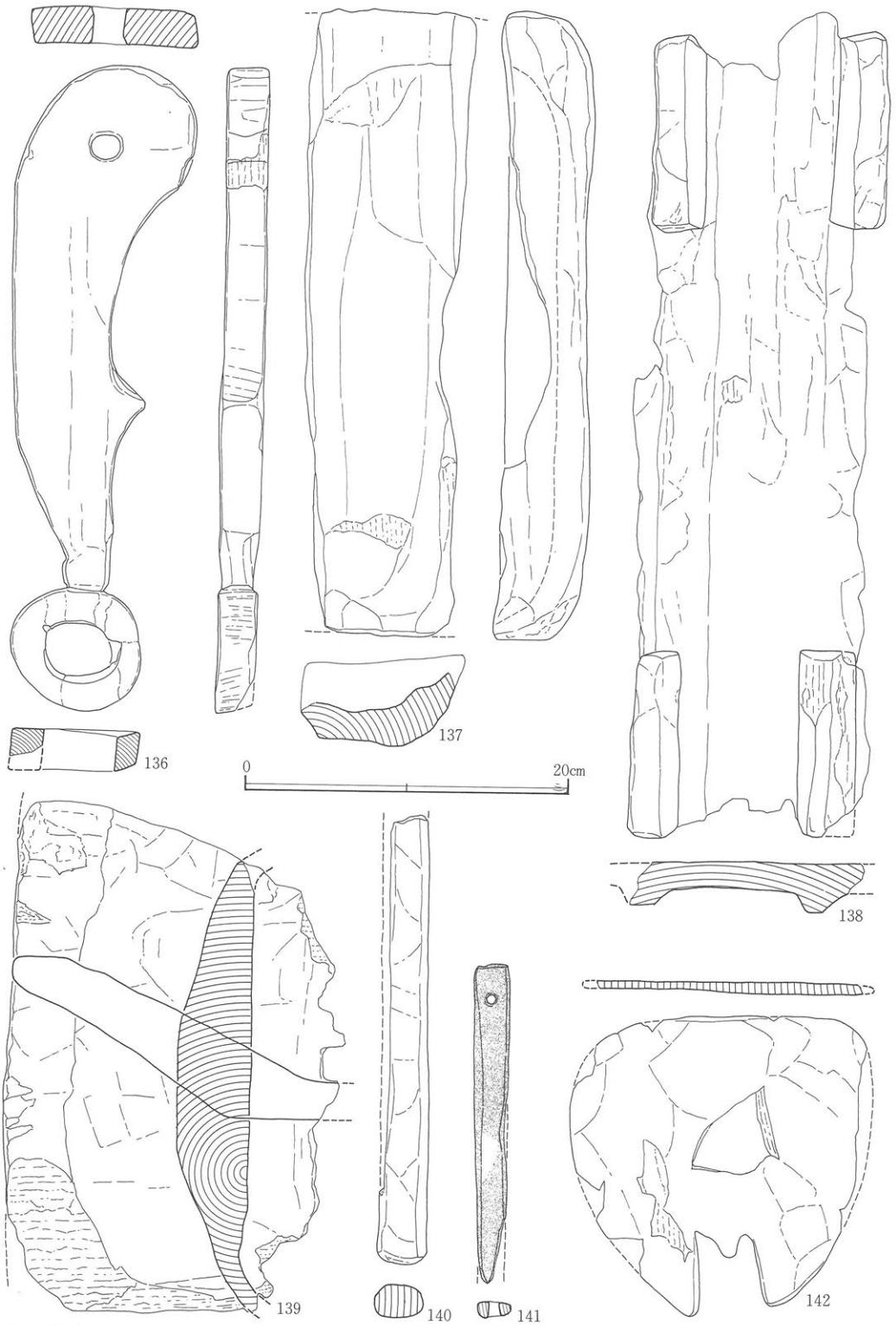
用途不明品（第84図） 197・198は板材を樺綴じするもので、樹種・木取り・削りなどより同一個体とみられる。古墳時代の箱などの一部か。その他の板や棒も部材とみられるものである。189～192・194～196・198・200は自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土し、その他はSD69・71・第8M層などから第Ⅱ様式と共伴した。

用途不明品（第85図） 板材に孔をあけた203、断面紡錘形の材の短辺に二又突起をつくる202、棒の一端に紐かけ突起をもつ208・209、何かの未成品かとみられる206などがある。202・203・205～207は自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土し、その他はSD71・SX19・第8M層などから第Ⅱ様式と共伴した。

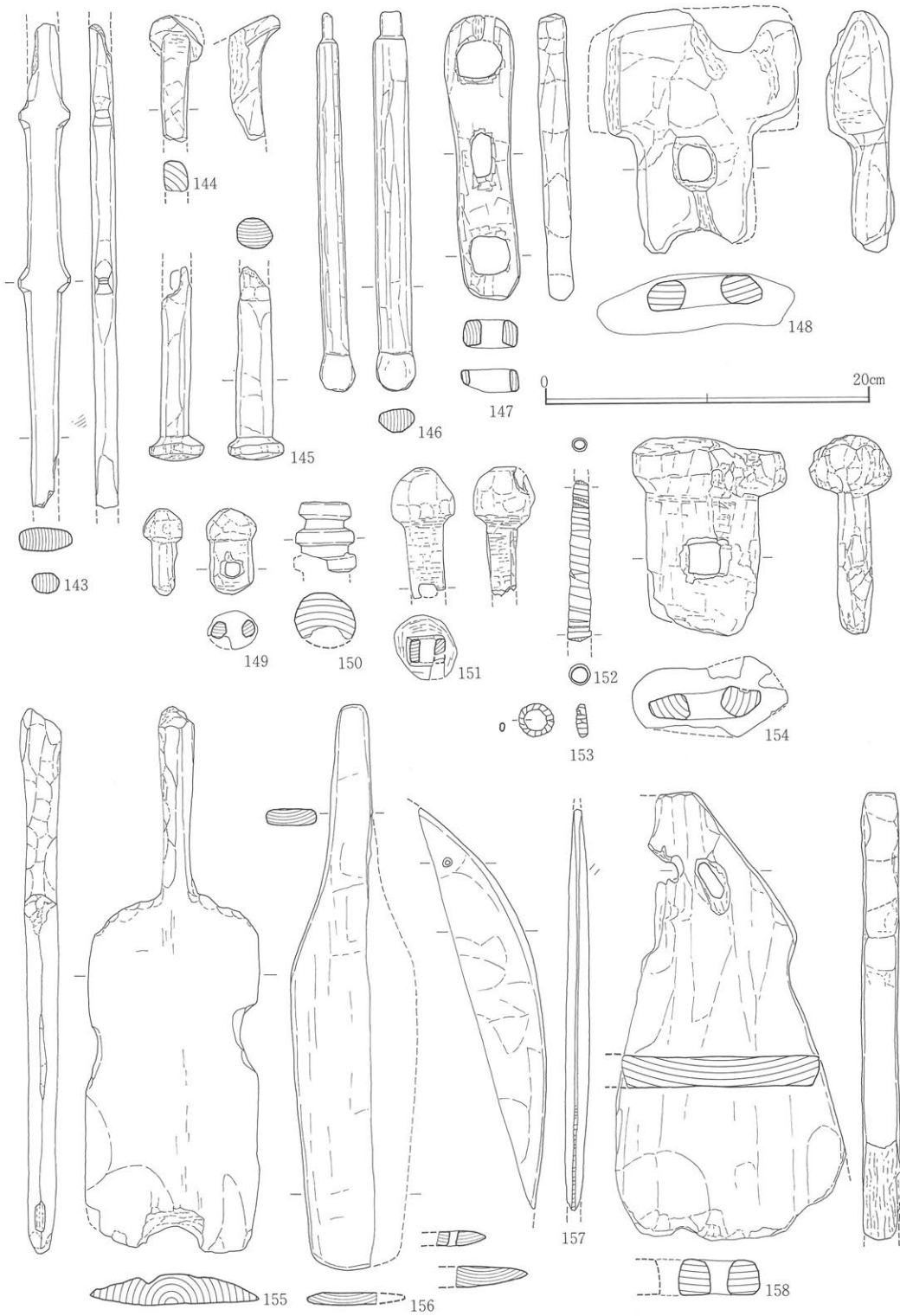
用途不明品（第86図） 212は長さ32.4cm・直径9cmを測る丸太の一端を両側から削って先端を尖らせ、別の端には他の材と組み合わせるための段をつくり、その下に段と直交する方形の柄孔を設けたものである。213～215は板材に1～4孔をもつもの。216・217は紐かけ突起を先端につくり出した部材。215はSD72より第Ⅱ様式と共伴し、その他は自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土した。

用途不明品（第87図） 紐かけ突起を先端につくり出した棒219・225、杭のように一端を尖らせた棒222、丁寧にあけた長方形の2孔をもつ板227、幅広の基部ちかくに方形孔をあけた断面紡錘形の先細り材228。このほか224は丸木弓に類似するが、直径が3cmあるため何かの部材であろう。229は長さ63.6cm・幅16.1cm・厚さ1.8cmを測る半月形の板状品で、直線を呈する縁に沿って長方形の孔が6個並んでいる。この縁は弧状の縁よりも分厚く作られ、端面は面取りされている。全体の形状は農具の柄振に類似するが、柄孔がないため用途不明品に含めておく。219・220・227～229は自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土し、その他はSD72・第8L・M層より第Ⅱ様式と共伴した。

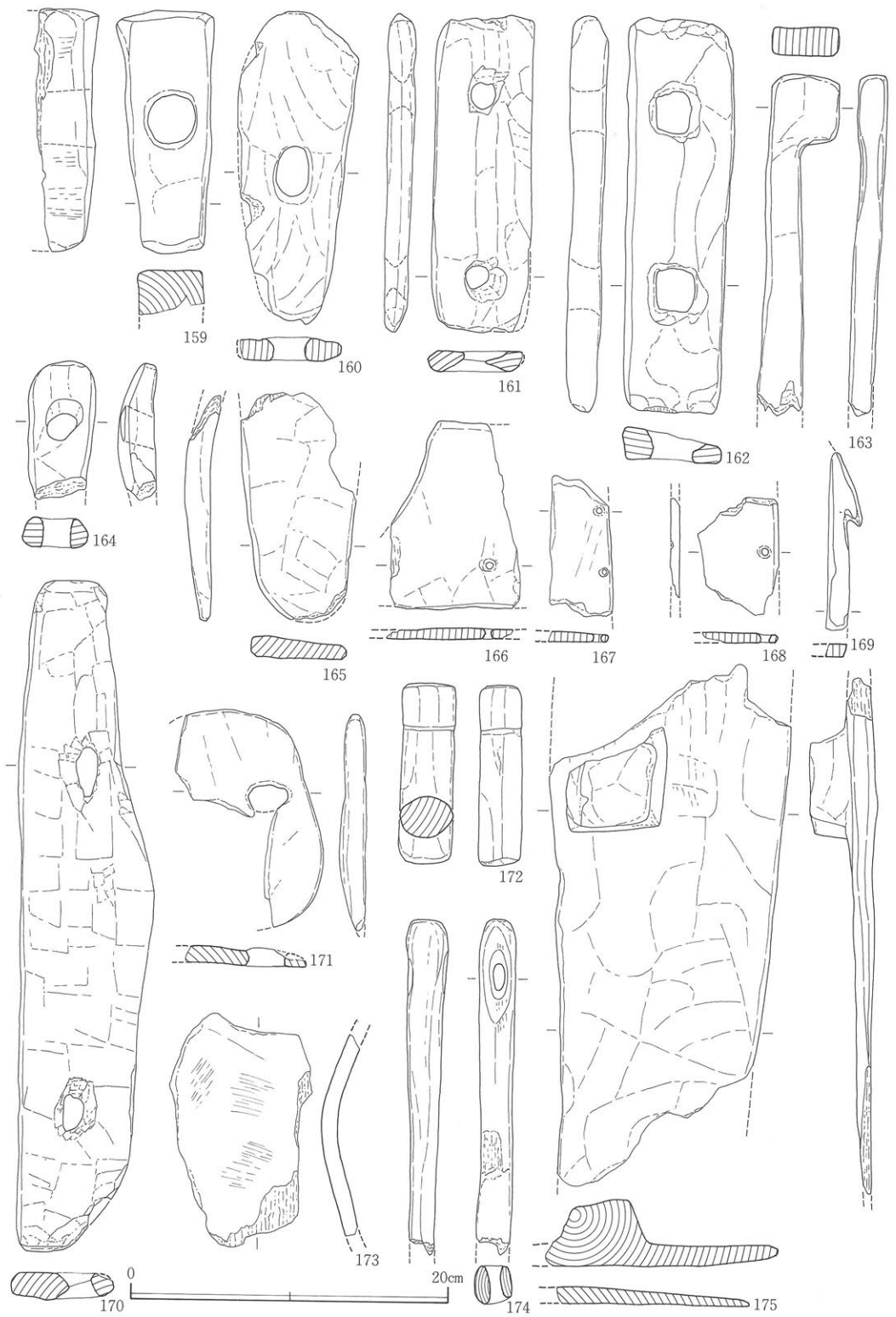
用途不明品（第88図） 長さ105cm以上・幅20cm・厚さ3.7cm測る板材230、長さ86cm以上の細長い杭231、孔や削り込みをもつ板232～236、長さ106cm以上の角材の一端に孔をあけた237、長さ102cm以上の棒238など。いずれも自然流路上部堆積層より第Ⅳ様式～6世紀初頭の遺物と共に出土。板233・234は第8L・M層より第Ⅱ様式と共伴した。



第80図 木製品実測図 139槽 137容器 140柄 136・138・141・142用途不明 (1/4)



第81図 木製品実測図 143~158用途不明又は部材 (1/4)

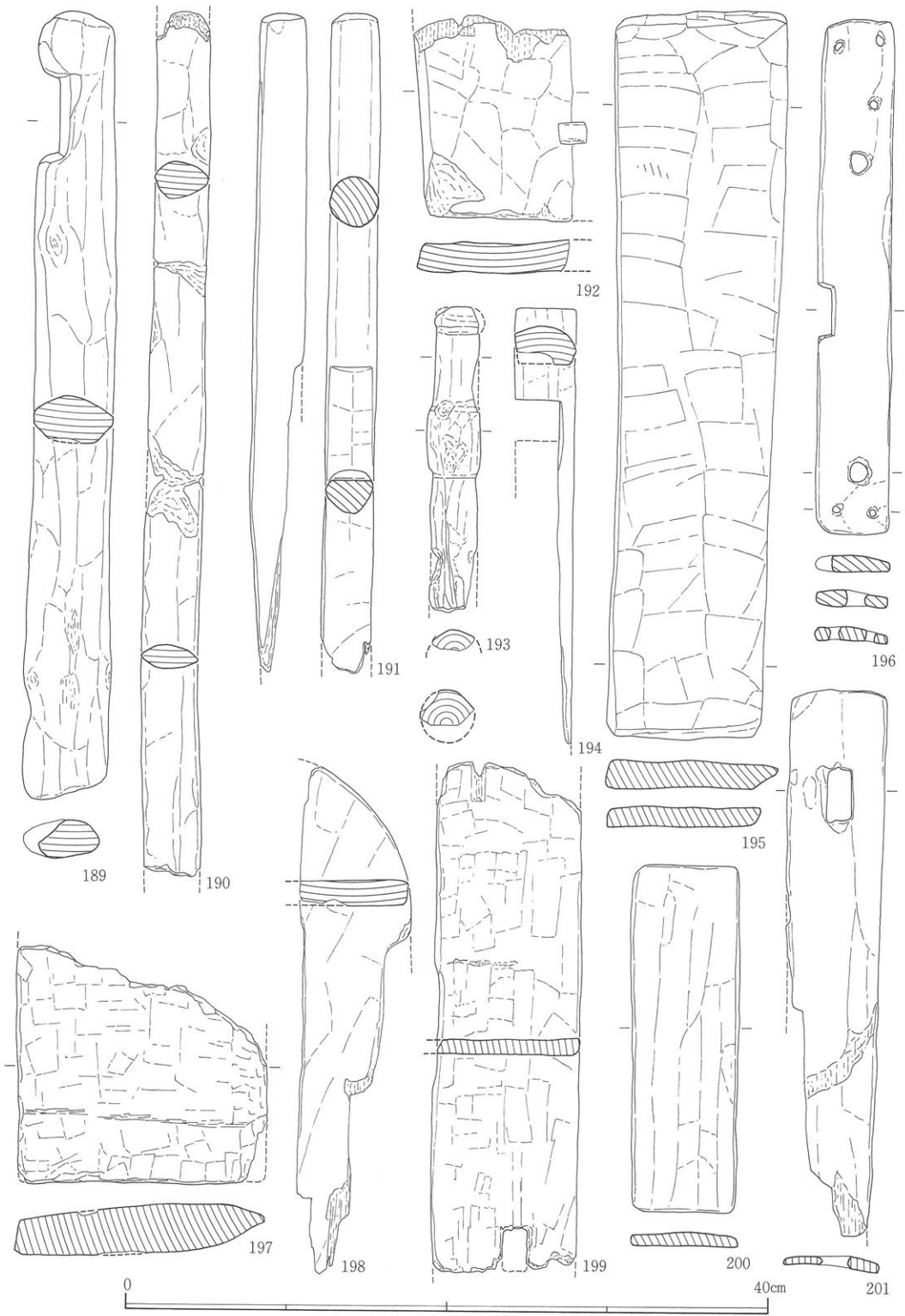


第82図 木製品実測図 159~175用途不明又は部材 (1/4)

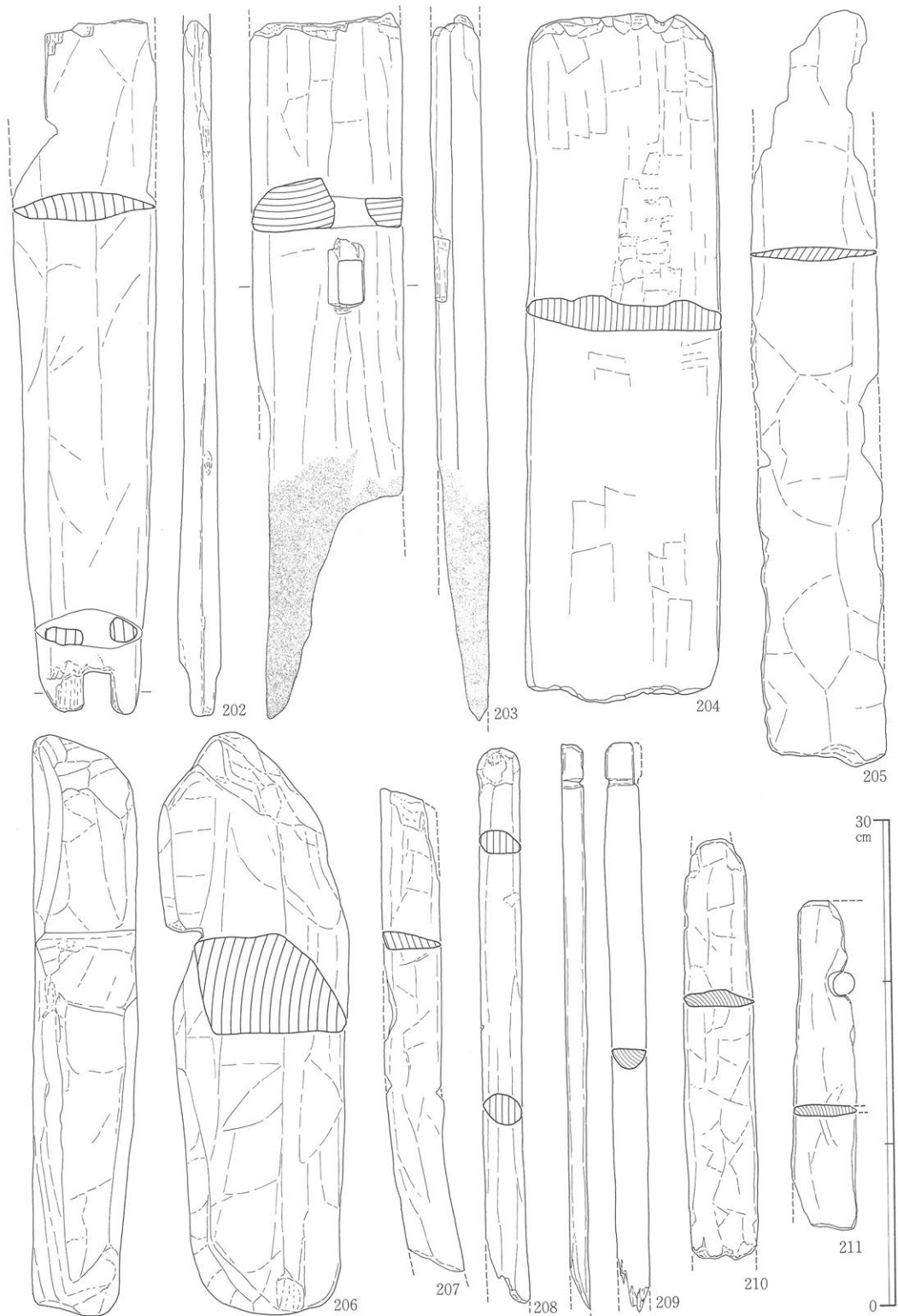




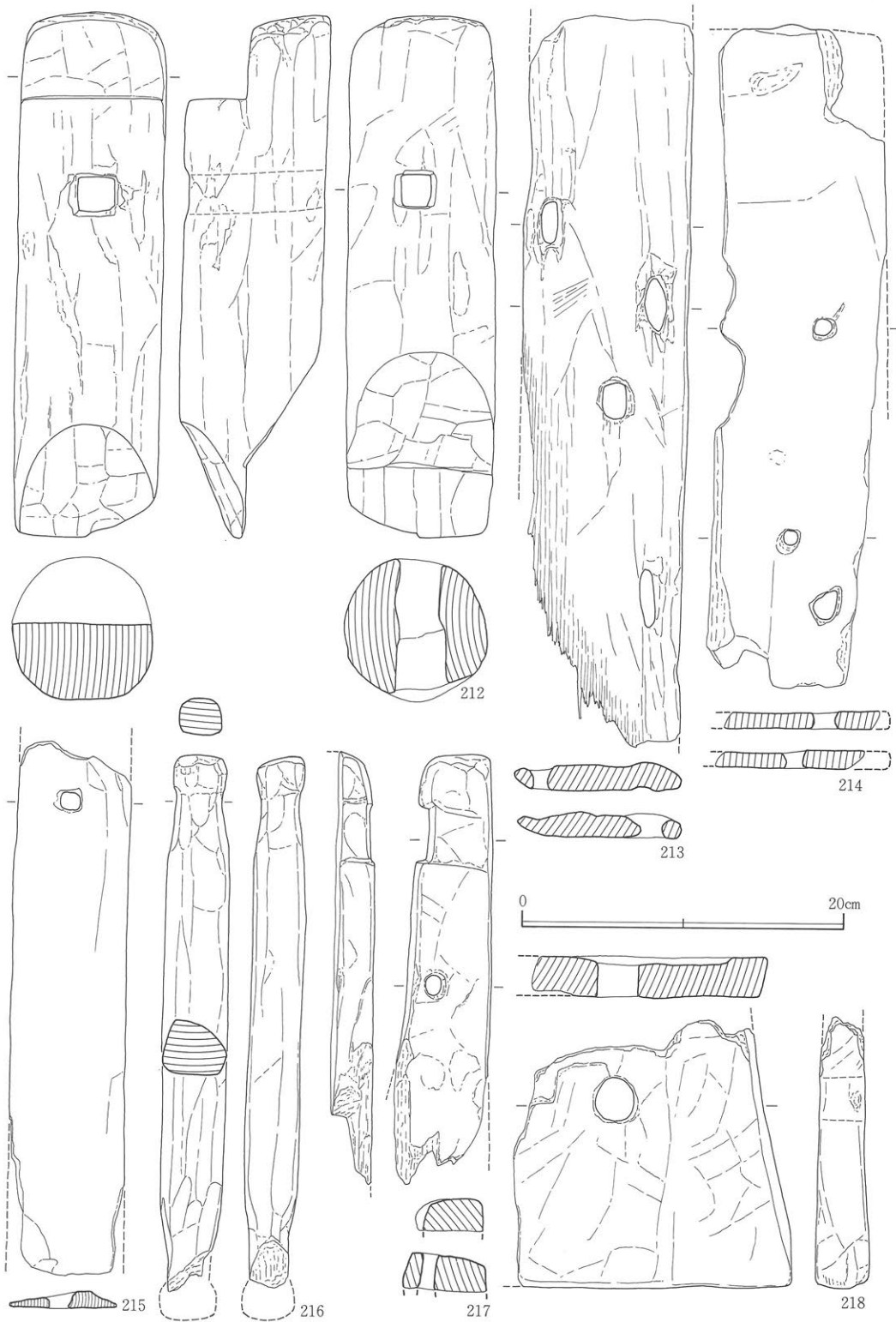
第83図 木製品実測図 176~188用途不明又は部材 (1/4)



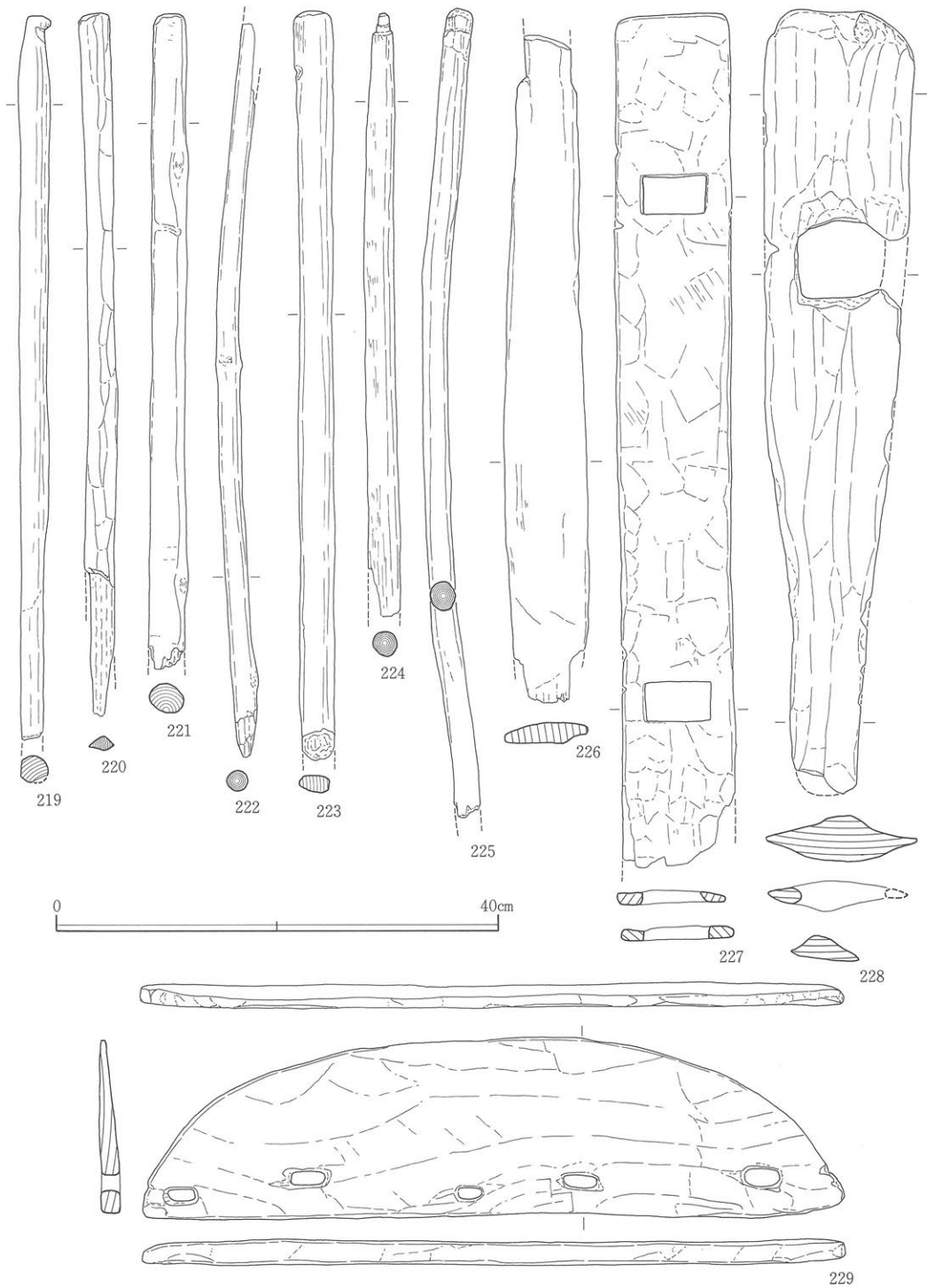
第84図 木製品実測図 189~201用途不明又は部材 (1/4)



第85図 木製品実測図 202~211用途不明又は部材 (1/4)



第86図 木製品実測図 212~218用途不明又は部材 (1/4)



第87図 木製品実測図 219~229用途不明又は部材 (1/6)



第88図 木製品実測図 230~239用途不明又は部材 (1/6)

## 6 出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

東大阪市では、これまでも多くの遺跡で出土した木製品の樹種同定が行われてきた。その結果、本地域における過去の木材利用が明らかになりつつある。これまでの結果を見ると、刺突具にはモミ属、高杯にはヤマグワ、鋏にはアカガシ亜属など、製品によっては樹種が特定される傾向がみられる。しかし、木製品の中には用材選択の傾向が把握されていないものも多く、また把握されているものにも例外が見られることがある。そのため、過去の用材選択を知るためにはさらに多くの資料蓄積が必要である。

本報告では、宮ノ下遺跡から出土した木製品などの樹種を明らかにし、過去の用材選択に関する資料を得る。

### 1) 試料

試料は、出土した木製品253点（試料番号1～3, 4a, 4b, 5, 6a, 6b, 7～13, 14a, 14b, 15～39, 40a, 40b, 41～244, 246～250）と、杭材373点（試料番号1～363：試料番号8, 80, 111, 116, 120, 122, 169, 282, 351は複数の試料がある）である。各試料の詳細については、樹種同定結果とともに表1および表2に示した。

### 2) 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとした。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

### 3) 結果

木製品の樹種同定結果を表1に、杭材の樹種同定結果を表2に示す。木製品の試料番号213は、保存状態が良好でないために同定にいたらず、広葉樹（環孔材）とした。また、試料番号196は組織の観察が行えず不明とした。杭材の試料番号15, 101, 127, 143, 225, 301, 348は試料の保存状態が良好でないために同定にいたらず、観察できた範囲内で木材組織の形態などを記した。また試料番号240は樹皮であった。その他の試料は、針葉樹9種類（マツ属複雑管束亜属・モミ属・ツガ属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ属・マキ属・イヌガヤ・カヤ）、広葉樹30種類（ヤナギ属・ハンノキ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ツブラジイ・シイノキ属・マテバシイ属・ブナ科・ムクノキ・エノキ属・ケヤキ, ヤマグワ・モクレン属・シキミ・クスノキ・タブノキ・クスノキ科・ヤブツバキ・サカキ・サクラ属・マメ科・アカメガシワ・ユズリハ属・ムクロジ・タラ

ノキ・シャシャンボ・エゴノキ属・トネリコ属)に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.) マツ科

採取した試料にはいずれも年輪が含まれていなかった。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1~15細胞高のものと水平樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

・モミ属 (*Abies* sp.) マツ科

早材部から晩材部への移行は比較的緩やか。傷害樹脂道が認められる試料がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、しゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

・ツガ属 (*Tsuga* sp.) マツ科

早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は厚い。樹脂細胞が認められる。傷害樹脂道が認められる試料がある。放射組織は仮道管と柔細胞よりなり、柔細胞壁は滑らかで、しゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はヒノキ型で1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は厚い~薄い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔は窓状。放射組織は単列、1~5 (10) 細胞高。

・ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・マキ属 (*Podocarpus* sp.) マキ科

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞は早・晩材部の別なく散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1~2個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch f.) イヌガヤ科イヌガヤ属

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞は早・晩材部の区別なく散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個。放射組織は単列、1~10細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は薄い。放射組織は柔細胞のみで構成



され、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

・ヤナギ属 (*Salix* sp.) ヤナギ科

散孔材で、道管は年輪全体にはほぼ様に分布するが年輪界付近でやや管径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。

・ハンノキ属 (*Alnus* sp.) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独もしくは放射方向に2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は密に対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のものと集合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidalanus* sect. *Cerris* sp.) ブナ科

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidalanus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc) ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シイノキ属

環孔材～放射孔材で孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。

・シイノキ属 (*Castanopsis* sp.) ブナ科

環孔材～放射孔材で孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

上記のツブラジイまたはスダジイ (*C. cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) であるが、両者を分けるには至らなかった。

・マテバシイ属 (*Pasania* sp.) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合～集合放射組織とがある。

・ブナ科 (*Fagaceae* sp.)

道管の配列などは不明である。道管は単穿孔を有している。放射組織は単列同性と複合放射組織とがある。以上の特徴から、ブナ科のブナ属・コナラ属コナラ亜属（クヌギ節・コナラ節）、アカガシ亜属のいずれかと考えられるが、特定には至らなかった。

・ムクノキ (*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon) ニレ科ムクノキ属

散孔材で横断面では角張った楕円形、単独または2~3個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1~5細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

・エノキ属 (*Celtis* sp.) ニレ科

環孔材で孔圏部は1~3列、孔目外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1~15細胞幅、1~50細胞高で鞘細胞が認められる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1~10細胞幅、1~30細胞高で、60細胞高を越えることもある。しばしば結晶を含む。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で孔圏部は1~5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ~Ⅲ型、1~6細胞幅、1~50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・モクレン属 (*Magnolia* sp.) モクレン科

散孔材で管壁厚は中庸~薄く、横断面では角張った楕円形~多角形、単独および2~4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状~対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1~2細胞幅、1~40細胞高。

・シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科シキミ属

散孔材で管壁厚は中庸~薄く、横断面では多角形、単独または2~4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段は多数、壁孔は階段状~対列状に配列する。道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ~Ⅰ型、1~2細胞幅、1~20細胞高。

・クスノキ (*Persea thunbergii*) クスノキ科クスノキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では楕円形、単独まれに2~3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状~真状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。

・タブノキ (*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科タブノキ属

散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および2~3個が放射方向に複合する。道管は単および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ~Ⅱ型、1~3細胞

胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状、翼状および散在状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。

・クスノキ科 (*Lauraceae* sp.)

故孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独まれに2~3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔または階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞組、1~20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。上記のクスノキ・タブノキ以外のクスノキ科であるが、樹種を特定するには至らなかった。

・ヤブツバキ (*Camellia japonica* L.) ツバキ科ツバキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形~角張った楕円形、単独および2~3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段の数は10~30、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ~Ⅰ型、1~2 (3) 細胞幅、1~20細胞高であるが時に上下に連結する。柔細胞は時に結晶を含む。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2~3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段の数は20前後、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1~20細胞高。

・サクラ属 (*Prunus* sp.) バラ科

散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2~8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1~3細胞幅、1~30細胞高。以上の特徴から、サクラ属の中でも落葉性のサクラ亜属やウワミズザクラ亜属と考えられる。

・マメ科 (*Leguminosae* sp.)

環孔材で、孔圏部は1~4列、孔圏外でやや管径を減じたのち、多数の道管が集まって接線方向、斜方向に複合し、木口面で帯状の模様をつくる。連管は単穿孔を有している。小道管は階層状に配列し、内壁には螺旋肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型~同性、1~8細胞幅、1~80細胞高。

以上の特徴から、マメ科のイヌエンジュが最も近いが、特定するには至らなかった。

・アカメガシワ (*Mallotus japonicus* (Thunb) Muell. Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属

環孔材で孔圏部は1~5列であるが不明瞭。孔圏外で管径を減じたのち、漸減しながら放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は単列異性、1~30細胞高。

・ユズリハ属 (*Daphniphyllum* sp) トウダイグサ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独および2~3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1~2 (3) 細胞幅、1~20細胞高であるが時に上下に連結し60細胞高を越える。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

環孔材で孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減したのち漸減、塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~3細胞幅、1~40細胞高。柔組織は周囲状~連合翼状、帯状およびターミナル状。

・タラノキ (*Aralia elata*) ウコギ科タラノキ属

環孔材で、孔目部は4~5列、孔圏外小道管は、2~3列が接線状に紋様を描きながら長く連なる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状、道管内腔にはチロースが存在する。放射組織は異性、1~6細胞幅、5~60細胞高で鞘細胞が認められる。

・シャシャンボ (*Vaccinium bracteatum* Thunb.) ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に分布し、その分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ型、単列で8細胞高前後のもの5~7細胞幅、30~60細胞高のものがある。放射組織には鞘細胞が認められる。

・エゴノキ属 (*Styrax* sp.) エゴノキ科

散孔材で、検断面では楕円形、2~4個が複合または単独で、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔を有し、段数は5~10。放射組織は異性Ⅱ型、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組

織は短接線状および散在状。

・トネリコ属 (*Fraxinus* sp.) モクセイ科

環孔材で孔圏部は2~3列、孔圏外で急激に管径を減したのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形~楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性 (~異性Ⅲ型)、1~3細胞幅、1~40細胞高であるが、20細胞高前後のものが多い。

#### 4) 考察

##### 1 木製品の用材選択について

同定を行った木製品は、農具・工具・発火具・雑具・武器・祭祀具・漁労具・容器・食事具・建築部材・用途不明に分類される。

農具では、鋏・田下駄・柄振・臼・臼すくい・堅杵・櫛・鏝について樹種同定を行った。表3には各農具の樹種構成を示した。

鋏には身と柄が一体のものや組み合わせ式のものがある。多くはアカガシ亜属が使用されているが、鋏身の一部にはツブラジイ、鋏柄にはシイノキ属やシキミが認められる。また、泥除けにはクスノキが確認された。本地域ではこれまでも多くの遺跡で鋏の樹種同定が行われてきているが、その結果では鋏の形態や時代に関わらずアカガシ亜属が圧倒的に多い(松田, 1980; 嶋倉, 1990; 奈良国立文化財研究所, 1993)。アカガシ亜属は、本邦産の木材

表3 農具の製品別樹種構成

製品名 樹種名	鍬	又鍬	ナスビ型鍬	組合鍬		泥除	田下駄	柄振		小型臼	大型臼	粗すくい	堅杵	堅杵握り部	櫛	鍬	合計
				鍬身	鍬柄			先端	柄								
複維管束亜属															1	1	2
モミ属										1							1
ヒノキ属												1					2
ハンノキ属							1								1		1
アカガシ亜属	28	1	1	2										1		1	34
クリ										1						1	2
ツブラジイ	1																1
シイノキ属				1						2							3
マテバシイ属													1				1
ムクノキ																1	1
ヤマグワ							1	1									2
シキミ					1										1		2
クスノキ						1	1		1	2	1						6
タブノキ										1							1
クスノキ科															1		1
アカメガシワ										1							1
環孔材										1							1
合計	29	1	1	2	2	1	3	1	1	9	1	1	1	1	4	4	60

の中でも堅く強度が高いが、複合放射組織を利用することで放射方向に割ることは比較的容易である。アカガシ亜属でつくられた鍬身の木取りは、形態に関わらず広い平坦面が柃目面となることが多い。このことから、木材の材質を知った上で、最も適した加工を施していたことが推定される。今回の結果はこれまでに得られてきた傾向とほぼ一致しており、用材選択についても同様のことが指摘できる。しかし、これまでの報告でもコナラ亜属などの環孔材が確認されており、必ずしもアカガシ亜属のみが選択されていたわけではない。今回のツブラジイもそのような一例であるが、これが鍬の用途などどのような関係にあるのかは現時点では明らかではない。今後の検討課題として残される。また、環孔材系の木材とアカガシ亜属のような放射孔材系の木材とでは、同じ鍬であっても加工法が異なる可能性がある。すなわち、アカガシ亜属では鍬身の広い面が柃目板となるが、コナラ亜属などの環孔材では板目板になる可能性がある。今後、木材組織と加工法との関係についても明らかにする必要がある。

柄は、これまでの調査で鍬身と同様にアカガシ亜属が多数確認されているが、鍬身に比較するとアカガシ亜属以外の木材が使用されている例も多い。その樹種は、サカキ・ツバキ・ツブラジイ・シイノキ属・クスノキ科などである（奈良国立文化財研究所，1993）。これらの木材は、アカガシ亜属と同様に、比較的強度の高い木材が多い。このことから、柄にも強度の高い木材が選択されていたことがうかがえる。組み合わせの場合は、一木作りのように木

材を丸く加工して柄をつくる必要が無い。周辺に生育している樹木の中で、径・長さ・形状・強度などの条件を有していれば、とくに樹種に関係なく柄として利用していたことが推定される。泥除けに確認されたクスノキは、これまでの調査でも比較的多く確認されている樹種である。クスノキの木材は比較的耐水性が高く、このことが用材選択の際に考慮された可能性がある。また、大径木が得易いことや加工性が高いことなども、多く確認されている背景に挙げられる。

田下駄は、ヒノキ属・ヤマグワ・クスノキが同定された。これらは、いずれもこれまでの調査で確認されており、他にはモミ属・スギ・コウヤマキ等が多く確認されている（奈良国立文化財研究所，1993）。これらの木材は、耐水性・保存性が比較的高い点で共通点があり、これらの点を考慮した用材選択があったと考えられる。

柄振は、先端がヤマグワ、柄がクスノキであった。この結果は、柄振の用途・機能から鋳ほど丈夫な木材でなくても使用可能であり、実際にそのような用材選択が行われていたことを示している可能性がある。しかし、詳細は明らかではなく、今後さらに資料蓄積が必要である。

臼は大型と小型があり、小型臼にはモミ属・クリ・シイノキ属・クスノキ・タブノキ・アカメガシワ・環孔材、大型臼にはクスノキがそれぞれ確認された。このうち、クリ・クスノキはこれまでの調査でも多数確認されている。大型臼にクスノキが確認されていることから、両者の用材選択には共通点があるようにも見える。しかし、全体的に小型臼のほうが種類数が多く、中にはアカメガシワなどあまり適材とは思えない樹種も見られる。このことから、小型臼の使用条件が大型臼ほど樹種を選択しなくても良いものであったことや本来の用途とは異なった用途を持った小型臼もあったことなどが推定される。しかし、単に大型臼の場合は大径木となる種類が限られているために種類数が少ないとも考えられ、現時点では詳細は明らかではない。

臼とセットで使用される堅杵には、アカガシ亜属とマテバシイ属が確認された。両種ともよく似た木材組織を有する。その使用目的を考慮すれば、強度の高い木材が適材と考えられる。これまで調査された結果を見ても、アカガシ亜属を中心にヤブツバキやコナラ亜属など堅い材質を有する木材が多く使用されている（奈良国立文化財研究所，1993）。一方鬼虎川遺跡では、木取りが割材から芯持材に変化するのに伴ってアカガシ亜属からシキミ・ヤブツバキへと変化することが指摘されている。このような加工法および使用樹種の変化は、加工工具の変遷や製品の形態の変化とも密接な関係があると考えられる。

初すくいにはヒノキ属であった。初すくいについては、鬼虎川遺跡で行われた調査でヒノキ属・アカガシ亜属・ヤマグワ・クスノキが各1点確認されている（島地ほか，1987；林ほか，1988）。今回の結果は、鬼虎川遺跡の結果と一致しており、同様の選択が行われていたことが推定される。

櫓には複雑管束亜属、ハンノキ属、シキミ、クスノキ科が確認された。ハンノキ属を除く3

種類は、いずれも鬼虎川遺跡でも確認されている（島地ほか，1987）。これらの槿は、周辺に広がる低湿地内や干潟、または集落内での運搬等に利用されたと考えられている（芋本，1987a；奈良国立文化財研究所，1993）。樹種が異なる背景には、使用条件などが考えられる。すなわち、湿地や干潟などでは複雑管束亜属などの耐水性の高い木材、集落内などの乾いた環境ではシキミなどのやや重硬な木材が使用されていた可能性がある。

鏝には複雑管束亜属、アカガシ亜属、クリ、ムクノキが確認されされていることがうかがえる。同様の用材選択は、鬼虎川遺跡7次調査で出土した鏝にも見ることができる（島地ほか，1987）。このことから、使用方法を考慮した上で適材を選択していたことが推定される。

工具では打製石斧の柄および石斧をとめるくさび、斧柄、柄が出土している（表4）。打製石斧・鉄斧柄・斧柄・柄の樹種には、複雑管束亜属、ヤマグワ、サカキ、カヤ、コウヤマキ、ヒノキ属が同定され、特定の樹種が使用される傾向は認められない。これまでの調査では、アカガシ亜属やサカキが多く、ヤマグワも比較的多く見られ、やや一部の樹種に使用が集中する傾向がある。樹種が多くなる背景には、斧の性格などによる用材選択の違いが挙げられる。しかし、周辺で入手できる木材の中から大きさや強度が適当なものを選択し、特に樹種の選択は行っていなかった可能性もあり、今後さらに調査が必要である。

武器では、弓にヒノキ属・マキ属・カヤ、楯にモクレン属がそれぞれ同定された（表5）。弓については、近畿以西のカヤを使用する地域と、関東～近畿に至るイヌガヤを使用する地域があり、登呂遺跡周辺地域ではマキ属を使用する例も見られる（松田，1984）。本地域はカヤの弓を使用する地域とイヌガヤの弓を使用する地域の境界付近と考えられている（松田，1984；芋本，1987b）。しかし、今回の結果ではイヌガヤは確認できなかった。一方、イヌガヤの弓と分布範囲が重なるマキ属が1点確認でき、マキ属の使用が本地域まで至ることが推定される。このことは、確認はできなかったもののイヌガヤも本遺跡で使用されていた可能性を示唆する。いずれの材もやや重硬で、弾力に富む材質を有しており、このことが選択された背景に考えられる。地域による用材選択の違いについては、植生との関係が考えられるが、詳細は不明である。今後、資料の蓄積をさらに各地で行うと共に、古植生に関する資料との比較も行う必要がある。

楯は、これまでの調査でモミ属が圧倒的に多くモクレン属が確認された例はない。広葉樹

表4 工具の製品別樹種構成

製品名 樹種名	打製石斧		斧柄	鉄斧柄	柄	合計
	柄	くさび				
複雑管束亜属	1					1
コウヤマキ					1	1
ヒノキ属		1			1	2
カヤ				1	1	2
ヤマグワ			1			1
サカキ			1			1
合計	1	1	2	1	3	8

表5 武器の製品別樹種構成

製品名 樹種名	弓	盾	合計
マキ属	1		1
カヤ	7		7
モクレン属		1	1
合計	10	1	11

が確認された例では、ケヤキとクスノキが各1点ある（奈良国立文化財研究所，1993）。これらはいずれも大径木が得られる点で共通点がある。楯はある程度の大きさの板材が必要であるから、当然大径木になる木が選択されるはずである。モクレン属の大径木は、現在では非常に珍しく、当時においても大径木の入手は容易ではなかったことが考えられる。そのため、今画のモクレン属の楯は、非常に珍しかったと推定される。この楯がどのような意味を持つのかについては今後の課題である。

表6 漁労具の製品別樹種構成

製品名 樹種名	刺突具	櫂	手網杵	合計
モミ属	32			32
ヒノキ属	6		1	7
シイノキ属		2		2
合計	38	2	1	41

漁労具では、刺突具、櫂、手網杵が出土した。刺突具にはモミ属が圧倒的に多く、他にヒノキ属が認められる（表6）。刺突具については、これまでの調査でもモミ属が圧倒的に多い（奈良国立文化財研究所，1993）。その出土例が多くの遺跡におよぶことや、時期差に関係なくモミ属が多く確認できる結果は、モミ属が選択的に利用されていた可能性を示唆する。しかし、刺突具は1本の枝からも大量に作成することができるため、現時点で選択的な利用を断定するには至らない。モミ属は柱などにも多数使用されており、加工性が高いことや他の目的で伐採されたモミ属の枝が大量にあったなどの理由でモミ属が利用されたとも考えられる。

櫂は2点ともシイノキ属であった。同様の例は、これまでも西岩田遺跡などで確認されている（奈良国立文化財研究所，1993）。櫂の樹種としては、アカガシ亜属・ヒノキ属・スギなど、丈夫な木材が比較的多い。その点で今回のシイノキ属の利用はこれまでの傾向に一致する。

手網杵はヒノキ属であった。これまでの調査ではカヤが多い。選択する木材には、曲げ強度が高いことが必要と考えられるが、ヒノキ属は曲物に使用していることから分かるように、比較的曲げには強い。その点で弾性が高いカヤと共通点がある。

弧文円板はクスノキであった。同様の製品は、これまでに滋賀県入江内湖遺跡と奈良県纏向遺跡で確認されており、纏向遺跡から出土した製品は今回と同じクスノキに同定されている。クスノキは、加工が比較的容易であるが、交錯木理を有するために割って柁目板や板目板をつくることは難しい。この点は纏向遺跡でも指摘されていることである（嶋倉，1976）。板状に加工するのであれば、モミ属やヒノキ属など他にも適材はある。にもかかわらずクスノキが使用された背景には、本製品が祭祀に関係していることが大きく関与していると思われる。すなわ

表7 容器の製品別樹種構成

製品名 樹種名	高杯脚部	高杯	把手付高杯	容器	曲物底板	槽	蓋	合計
複維管束亜属				1				1
コウヤマキ				1		1		2
ヒノキ属					1		1	2
ケヤキ				1				1
ヤマグワ	1	1	1	5				8
モクレン属						1		1
合計	1	1	1	8	1	2	1	15



ち、クスノキは香木であり、強い香りをはなつことが祭祀に使用する木材に結びつたと考えられる。しかし、現時点では資料数が少ないために断定には至らない。

容器では高杯、容器、曲物、槽、蓋が出土した（表7）。このうち、高杯は全てと容器の多くがヤマグワである。一方、曲物や槽では針葉樹のコウヤマキ・ヒノキ属が使用されている。高杯については、これまでも鬼虎川遺跡等でも確認されてきたが、樹種同定の結果はヤマグワが多く、他にケヤキが認められる。これは、今回の結果も見られる傾向である。ヤマグワが多用されていることについては、鬼虎川遺跡の調査において、「堅硬で耐久性が高く、美しい空が出ることもあり、雅味があること」が理由として挙げられている（林ほか，1988）。美しい空については、当時使用していた人々に現代人と同じような感覚があったか否か疑問もあるが、堅硬で耐久性が高いことは選択された背景の一つであったと考えられる。

槽は、高杯とは異なった加工法であり、その形能から木理が通直なコウヤマキは適材といえる。また、同様のことは曲物についても指摘でき、板状の加工が容易なヒノキ属は適材である。また、両種とも耐水性が高いことから、このことも選択された背景に考えられる。

食器具では横杓、堅杓、匙について調査を行い、横杓にはヤマグワ、堅杓にはイヌガヤハンノキ属・エゴノキ

属がそれぞれ同定された（表8）。横杓に確認されたヤマグワは、高杯にも多用されているが、横杓は高杯の部分と形状が似ており、今回の結果から用材選択にも共通点が見られる。しかし、これまで行われた調査で特にヤマグワが多いというわけではなく、高杯同様の感覚で用材選択が行われていたか否かは不明である。

堅杓は、3点とも異なる樹種であり、特定の樹種が選択されていた様子は見られない。同様のことはこれまでの調査結果にも指摘できる。資料数が少ないため、今後さらに資料を蓄積した上で検討すべき課題として残される。

匙の樹種は特定できなかった。これまでの組査では鬼虎川遺跡で1点がカヤに同定されている（島地ほか，1987）。匙については、本地域で樹種同定を行った例が少なく、今後さらに調査が必要である。

建築部材では梯子と部材について同定を行った（表9）。このうち部材については、8種類もの木材が確認されているが、詳細な部位が不明であるため用材選択の傾向などはつかめない。梯子はトネリコ属であった。本地域における梯子の調査例は少ないが、その中でも強度の高い木材を選択している様

表8 食器具の製品別樹種構成

製品名 樹種名	横杓	堅杓	匙	合計
イヌガヤ		1		1
ハンノキ属		1		1
ヤマグワ	1			1
エゴノキ属		1		1
不明			1	1
合計	1	3	1	5

表9 建築部材の製品別樹種構成

製品名 樹種名	梯子	部材	合計
複維管束亜属		1	1
モミ属		2	2
スギ		4	4
ヒノキ属		22	22
カヤ		1	1
アカガシ亜属		1	1
ツブラジイ		2	2
サカキ		1	1
トネリコ属	1		1
合計	1	34	35

子がうかがえる。その点で、今回のトネリコ属も調和的であり、強度の高い木材が選択的に利用されていたことが推定される。

雑具では、火鑽臼・自在鉤・鈎・網材・杭について樹種同定を行った（表10）。火鑽臼はスギであった。これまでの調査でもスギは多く確認されている（島地・伊東，1988；伊東，1990；奈良国立文化財研究所，1993）。火鑽臼には熱電導率が低いもの、すなわち保温性が高く、火がつきやすいものが適材である（小口，1991）。スギは熱伝導率が比較的 low、火鑽臼の用材としては適材といえる。このことが選択された背景に考えられる。

表10 雑具の製品別樹種構成

製品名 樹種名	火鑽臼	自在鉤	鈎	網材	杭	合計
複維管束亜属				1		1
スギ	1					1
ヒノキ属		1	1			2
アカガシ亜属					1	1
合計	1	1	1	1	1	5

自在鉤については、これまでの調査でマツ属・ヒノキ属・イヌガヤ・ヤナギ属・コナラ亜属などが確認されている（奈良国立文化財研究所，1993）。制作方法としては股木を利用するため、樹種よりも樹木の形態の方が重要な意味を持つと考えられる。そのため、特定の樹種が利用されたとは考えにくい。これまでの調査で樹種が多い結果も特定の樹種がなかったことを示している。

網材では複維管束亜属が利用されていることから、丈夫で耐水性の高い木材が選択された可能性がある。しかし、資料蓄積が充分ではなく、現時点では用材選択の傾向などについては明らかではない。今後さらに資料を蓄積することが必要である。

## 2 杭材の選択された背景について

杭材には針葉樹6種類（複維管束亜属・モミ属・ツガ属・ヒノキ属・マキ属・カヤ）、広葉樹27種類（ヤナギ・属ハンノキ属・クヌギ節・コナラ節・アカガシ亜属・クリ・ツブラジイ・シイノキ属・マテバシイ属・ムクノキ・エノキ属・ケヤキ・ヤマグワ・シキミ・クスノキ・タブノキ・クスノキ科・ヤブツバキ・サカキ・サクラ属・マメ科・ユズリハ属・ムクロジ・タラノキ・シャシャンボ・エゴノキ属・トネリコ属）が確認され、多くの樹種が使用されていたことが明らかとなった。

同様の杭材については、鬼虎川遺跡第5次調査で出土した307点の杭材の樹種が明らかにされている（林ほか，1988）。その際には広葉樹を中心とした多くの種類が確認でき、地区によって種類構成が異なること、自然木の同定結果とも調和的であること等から、周辺に生育していた樹木が利用されたと指摘されている。今回の結果についても、種類数が豊富であることから特定の樹種が選択されたとは考え難く、鬼虎川遺跡と同様に周辺に生育していた樹木が利用されたと考えられる。また、確認した樹種の多くは木製品に確認されている種類である。そのため、木製品をつくるために伐採された樹木の小枝などが杭に使用されている可能性もある。

杭列の樹種を見ると、同じ種類が連続する様子がしばしば見られる。このような結果から、伐採した柾木や小枝から杭材を複数本作成し、連続的に杭を打っていた様子がうかがえる。

<引用文献>

林昭三・島地謙・植田弥生（1988）出土木製品の樹種（第4・5次）。「鬼虎川遺跡調査概要遺物編 木製品」, p.69 - 94, 財団法人東大阪市文化財協会.

芋本隆裕（1987a）弥生時代の榿。「鬼虎川の木質遺物 ー第7次発掘調査報告書 第4冊ー」, p.75 - 77, 財団法人東大阪市文化財協会.

芋本隆裕（1987b）樹種と撰材。「鬼虎川の木質遺物 ー第7次発掘調査報告書 第4冊ー」, p.80 - 82, 財団法人東大阪市文化財協会.

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木製品の樹種とその用途Ⅱ. 木材研究・資料, 26, p.95 - 189.

松田隆嗣（1980）木製運物の樹種について。「池上・四ツ池遺跡 第6分冊 自然遺物編」, p.131 - 144, 財団法人大坂文化財センター.

松田隆嗣（1984）山賀（その3）遺跡より出土した木製遺物の樹種について。「山賀（その3）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 ー本文編ー」, p.429 - 436, 大阪市教育委員会・財団法人大坂文化財センター.

奈良国立文化財研究所（1993）木器集成図録 近畿原始編. 410.

小口正七（1991）火をつくる ー発火具の変遷ー. 182p., 裳華房.

島地謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.

島地謙・林昭三・植田弥生（1987）鬼虎川遺跡出土木製品の樹種（第7次）。「鬼虎川の木質遺物 ー第7次発掘調査報告書 第4冊ー」, p.39 - 67, 財団法人東大阪市文化財協会.

嶋倉巳三郎（1976）木製品の材質。「纏向 奈良県櫻井市纏向遺跡の調査」, p.394 - 412, 櫻井市教育委員会.

嶋倉巳三郎（1990）東大阪市鬼虎川遺跡から出土した加工木の樹種. 鬼虎川遺跡第1～3発掘調査報告」, p.54 - 56, 財団法人東大阪市文化財協会.

図番号	試料番号	出土地区・遺構(層位)	用途	時期	樹種名
1	46	ⅢD4E 北壁内8M層	鉄未成品	Ⅱ	コナラ属アカガシ亜属
2	5	ⅢD11I 8M層	鉄	〃	コナラ属アカガシ亜属の一種
3	73	ⅢE13A 8M層	〃	〃	コナラ属アカガシ亜属
4	79	ⅢD11E 9層	〃	I~Ⅱ	〃
5	136	ⅢD9S SD72	〃	Ⅱ	〃
6	85	ⅢD8P SD69	〃	〃	〃
7	80	ⅢD12O 8M-2層	〃	〃	〃
8	86	ⅢD SD71	〃	〃	〃
9	193	ⅢD8T SD72	〃	〃	〃
10	190	〃	〃	〃	〃
11	121	ⅢE8Q SD69	〃	〃	〃
12	31	ⅢD10G 8L層	〃	〃	〃
13	16	ⅢD11HSW 貝層2上部	〃	〃	ツブラジイ
14	71	ⅢD7T SD72	〃	〃	コナラ属アカガシ亜属
15	176	ⅢE10A SX19	〃	Ⅱ~Ⅳ	〃
16	206	ⅢD9N SD87	〃	〃	〃
17	84	ⅢD SD72	〃	Ⅱ	〃
18	185	ⅢD13L 9U層	〃	〃	〃
19	187	ⅢD11T 8L~9層	〃	〃	〃
20	156	ⅢD11F 8M層	〃	〃	〃
21	77	ⅢD13T 8M層	〃	〃	〃
22	112	ⅢE13K NW 貝層2中部	〃	I	〃
23	104	ⅢE4B 8U層	〃	Ⅱ~Ⅳ	〃
24	81	ⅢD5R SD69	〃	Ⅱ	〃
25	189	ⅢD11T 8L~9層	〃	〃	〃
26	15	ⅢD11J 8M層	〃	〃	コナラ属アカガシ亜属の一種
27	13	ⅢD11D 8M層	〃	〃	〃
28	14a	ⅢD11J 8M層	鉄身	〃	コナラ属アカガシ亜属
	14b	〃	鉄柄	〃	シイノキ属の一種
29	131	ⅢE7A SD72	又鉄	〃	コナラ属アカガシ亜属
30	27	ⅢD8F SK20	田下駄	〃	ヒノキ属の一種
31	93	ⅢD10S SD72	〃	〃	ヤマグワ
32	209	ⅢD11O 8U層	〃	Ⅱ~Ⅳ	クスノキ
33	154	ⅢE12C 8L~9層	組合せ鉄柄	Ⅱ	シキミ
34	98	ⅢD9R SD72	曲柄平鉄	〃	コナラ属アカガシ亜属
35	56	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	泥除未成品	Ⅳ~6c	クスノキ
36	4a	ⅢD11E 自然流路上部堆積層	横鉄身	〃	ヤマグワ
	4b	〃	横鉄柄	〃	クスノキ
37	106	ⅢD13Q 8M層	小型白	Ⅱ	〃
38	149	ⅢE10B 8M層	〃	〃	〃
39	111	ⅢE9D 8L~9層	〃	〃	クリ
40	213	ⅢD10T 8U層	〃	Ⅱ~Ⅳ	広葉樹(環孔材)
41	197	ⅢD10R SD72	〃	Ⅱ	シイノキ属
42	23	ⅢD11I 8M層	〃	〃	タブノキ属の一種
43	110	ⅢD12R 8M層	〃	〃	シイノキ属
44	124	ⅢD11E 8L層	〃	〃	アカメガシワ
45	113	ⅢE13K NW 貝層2中部	〃	I	モミ属
46	171	ⅢD6Q SD69	大型白	Ⅱ	クスノキ

表1 木製品の樹種同定結果(2)

図番号	試料番号	出土地区・遺構(層位)	用途	時期	樹種名
47	96	ⅢD11S 8M層	初すくい	Ⅱ	ヒノキ属
48	59	ⅢD12K 9U層	竖杵握り部	〃	コナラ属アカガシ亜属
49	208	ⅢD13T 8L層	竖杵	〃	マテバシイ属
50	248	ⅢD8P SD69	櫛未成品	〃	シキミ
51	89	ⅢD10F 8M層	櫛	〃	ハンノキ属
52	88	ⅢD6C SD71	鏝	〃	コナラ属アカガシ亜属
53	137	ⅢE10C 8M層	〃	〃	マツ属複維管束亜属
54	161	ⅢD12I SE 貝層2上部	〃	〃	ムクノキ
55	95	ⅢD11S 8M層	〃	〃	クリ
56	159	ⅢD10E 8M層	櫛	〃	クスノキ科
57	174	ⅢD10A SX19	〃	Ⅱ～Ⅳ	マツ属複維管束亜属
58	40a	ⅢD14P 西壁沿い 8M-2層	打製石斧柄	Ⅱ	〃
	40b	〃	石斧装着部くさび	〃	ヒノキ属の一種
59	69	ⅢD13P 8M層	斧柄	〃	サカキ
60	3	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	鉄斧柄	Ⅳ～6c	カヤ
61	117	ⅢD11O 8U層	柄	Ⅱ～Ⅳ	〃
62	83	ⅢD11F 自然流路上部堆積層	火鑽臼	Ⅳ～6c	スギ
63	192	ⅢD4C SX11	自在鉤	Ⅱ～Ⅳ	ヒノキ属
64	11	ⅢD11J 8M層	〃	Ⅱ	ヒノキ属の一種
65	125	ⅢD2Q SD69	弓	〃	イヌマキ
66	163	ⅢD14K 8M層	〃	〃	カヤ?
67	132	ⅢD14T 8M層	〃	〃	ヒノキ属
68	100	ⅢD7T SD72	〃	〃	カヤ
69	39	8M層	〃	〃	〃
70	57	ⅢE12A 8L層	〃	〃	〃
71	99	ⅢD13 8M層	〃	〃	ヒノキ属
72	119	ⅢE9O 9U層	〃	〃	カヤ
73	129	ⅢD12O 8M層	〃	〃	〃
74	58	ⅢE13T 8L層	〃	〃	〃
75	7	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	弧紋円板	Ⅳ～6c	クスノキ
76	6a	ⅢD11E 自然流路上部堆積層	楯	〃	モクレン属の一種
77	37	ⅢD12I NE 貝層2上部	刺突具	Ⅱ	モミ属の一種
78	38	ⅢD11F 8L層	〃	〃	〃
79	236	ⅢD13I 8U層	〃	Ⅱ～Ⅳ	ヒノキ属
80	62	ⅢD12G 8U層	〃	〃	モミ属
81	225	ⅢD7M 8M層	〃	Ⅱ	〃
82	36	ⅢD12J NE 貝層2上部	〃	〃	モミ属の一種
83	67	ⅢD12T 8U層	〃	Ⅱ～Ⅳ	ヒノキ属
84	66	ⅢD13T 8M層	〃	Ⅱ	モミ属
85	60	ⅢD11F 8U層	〃	Ⅱ～Ⅳ	〃
86	63	ⅢD13P 8M層	〃	Ⅱ	〃
87	65	ⅢD11R 8M層	〃	〃	ヒノキ属
88	250	ⅢD8M 8M層	〃	〃	モミ属
89	241	ⅢD13R 小貝塚	〃	〃	〃
90	68	ⅢD6Q SD61	〃	〃	〃
91	228	ⅢD14K 8M層	〃	〃	〃
92	223	ⅢD11J NW 貝層2上部	〃	〃	〃
93	242	ⅢD12G 9U層	〃	〃	〃

図番号	試料番号	出土地区・遺構(層位)	用途	時期	樹種名
94	231	ⅢD9P SD69	刺突具	Ⅱ	モミ属
95	226	ⅢD12J 8M層	〃	〃	〃
96	229	SD72	〃	〃	〃
97	232	ⅢD12S 8L層	〃	〃	〃
98	237	ⅢD12R 8L層	〃	〃	〃
99	239	ⅢD11F 自然流路上部堆積層	〃	Ⅳ～6c	〃
100	243	ⅢD12I 貝層2上部	〃	Ⅱ	〃
101	240	北壁内 自然流路上部堆積層	〃	Ⅳ～6c	〃
102	61	ⅢD12G 8U層	〃	Ⅱ～Ⅳ	〃
103	230	ⅢD3J 自然流路上部堆積層	〃	Ⅳ～6c	〃
104	244	宮ノ下1次試掘NO.7トレ貝層直上	〃	Ⅱ	〃
105	235	ⅢD9S SD72	〃	〃	〃
106	249	ⅢD12I 8M層	刺突具未成品	〃	〃
107	224	ⅢD13I NE 貝層2上部	刺突具	〃	〃
108	227	ⅢE7D SD71	〃	〃	〃
109	234	ⅢD8P SD69	〃	〃	〃
110	211	ⅢD13R 8L～9層	刺突具未成品	〃	ヒノキ属
111	238	ⅢD11F 8M層	〃	〃	モミ属
112	210	ⅢD13R 8L～9層	〃	〃	ヒノキ属
113	103	ⅢD11H 8M層	網杵	〃	〃
114	92	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	椀	Ⅳ～6c	シノキ属
115	158	ⅢD11J 8M層	〃	Ⅱ	〃
116	30	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	〃	Ⅳ～6c	シノキ属の一種
117	2	ⅢD12G 自然流路上部堆積層	〃	〃	〃
118	207	ⅢD11T 8L～9層	高杯脚部	Ⅱ	ヤマグワ
119	107	ⅢD6Q SD69	高杯	〃	〃
120	91	ⅢD7P SD69	把手付高杯	〃	〃
121	122	ⅢD13R 8L～9層	槽	〃	ケヤキ
122	128	ⅢE12B 8L層	合子	〃	ヤマグワ
123	74	ⅢD14Q 西壁沿い8M-2層	把手付鉢	〃	〃
124	186	ⅢE8D 8U層	横杓子	Ⅱ～Ⅳ	〃
125	140	ⅢD8S SD72	匙	Ⅱ	〃
126	130	ⅢE12C 8L～9層	縦杓子	〃	エゴノキ属
127	198	ⅢD12J SW 貝層2上部	〃	〃	ハンノキ属
128	90	ⅢD14R 8M～L層	〃	〃	イヌガヤ
129	196	ⅢD6T 8U層	匙	Ⅱ～Ⅳ	不明
130	142	ⅢD13G 8U層	〃	〃	ヤマグワ
131	203	ⅢD10E 自然流路上部堆積層	蓋	Ⅳ～6c	ヒノキ属
132	52	ⅢD12E 自然流路上部堆積層	曲物底板	〃	〃
133	29	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	槽	〃	コウヤマキ
134	94	ⅢD12L 自然流路上部堆積層	〃	〃	〃
135	1	ⅢD11F 自然流路上部堆積層	梯子	〃	トリネコ属の一種
136	21	ⅢD11E 自然流路上部堆積層	用途不明	〃	ムクロジ
137	138	ⅢD4C 自然流路上部堆積層	槽	〃	マツ属複雑管束亜属
138	164	ⅢD13G 自然流路上部堆積層	用途不明	〃	モクレン属
139	246	自然流路上部堆積層	槽	〃	〃
140	151	ⅢD14T 8L～9層	柄	Ⅱ	ムクロジ
141	115	ⅢD10D 9U層	部材	Ⅰ～Ⅱ	ヒノキ属

表1 木製品の樹種同定結果(4)

図番号	試料番号	出土地区・遺構(層位)	用途	時期	樹種名
142	133	ⅢD12M 南壁8M-2層	用途不明	Ⅱ	コナラ属アカガシ亜属
143	109	ⅢD7F 8M層	〃	〃	ヒノキ属
144	141	ⅢD11G 8M層	〃	〃	サカキ
145	108	ⅢD8T SD72	〃	〃	ヒノキ属
146	105	ⅢD10S SD72	〃	〃	コウヤマキ
147	82	ⅢD12T 8L砂層	部材	〃	カヤ
148	201	ⅢD7Q SD69	〃	〃	クスノキ
149	32	ⅢD11H 貝層2上部	〃	〃	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
150	34	ⅢD11L 8M層	用途不明	〃	コナラ属アカガシ亜属の一種
151	64	ⅢD12R 8M層	部材	〃	マツ属複雑管束亜属
152	247	8U層	用途不明	Ⅱ～Ⅳ	ヒノキ属(樺卷)
153	245	ⅢD12J SW 貝層2下部	〃	縄文晩期末	不明(植物質の編物)
154	70	ⅢD13Q 8M層	〃	Ⅱ	エノキ属
155	12	ⅢD13K 8M層	〃	〃	モミ属の一種
156	157	ⅢE10C 8U層	〃	Ⅱ～Ⅳ	ヒノキ属
157	199	ⅢE10E 南壁9U層	〃	Ⅰ～Ⅱ	〃
158	173	ⅢD12L 8U層	〃	Ⅱ～Ⅳ	クスノキ
159	26	ⅢD11G 8L層	部材	Ⅱ	ヤマグワ
160	194	ⅢD8T SD72	〃	〃	クスノキ
161	114	ⅢD10N 8U層	〃	Ⅱ～Ⅳ	モミ属
162	25	ⅢD8F 8M層	〃	Ⅱ	ヒノキ属の一種
163	116	ⅢD14R 8L層	〃	〃	ヒノキ属
164	120	ⅢE11I 8M層	用途不明	〃	コナラ属アカガシ亜属
165	152	ⅢD14T 8L～9層	〃	〃	ケヤキ
166	33	ⅢD13L NE 貝層2上部	〃	〃	コナラ属アカガシ亜属の一種
167	191	ⅢE8B SK44	〃	〃	不明
168	24	ⅢD13L SE 貝層2上部	〃	〃	コナラ属アカガシ亜属の一種
169	22	ⅢD10E 自然流路上部堆積層	曲柄鋸身?	Ⅳ～6c	〃
170	54	ⅢD11F 自然流路上部堆積層	部材	〃	マツ属複雑管束亜属
171	155	ⅢD11K 8M層	用途不明	Ⅱ	クスノキ
172	178	ⅢD12G 自然流路上部堆積層	部材	Ⅳ～6c	ヒノキ属
173	126	ⅢD7Q SD69	容器?	Ⅱ	ヤマグワ
174	101	攪乱層	用途不明	不明	ヒノキ属
175	150	ⅢD14T 8L～9層	〃	Ⅱ	サカキ
176	18	ⅢD8E 自然流路上部堆積層	〃	Ⅳ～6c	シノキ属の一種
177	205	8M層	網杵?	Ⅱ	マツ属複雑管束亜属
178	184	ⅢD12F 自然流路上部堆積層	部材	Ⅳ～6c	スギ
179	118	ⅢD11O 8M層	〃	Ⅱ	ヒノキ属
180	75	ⅢD13Q 8M層	棒	〃	〃
181	72	ⅢD14Q 8M層	部材	〃	スギ
182	20	ⅢD12L 自然流路上部堆積層	用途不明	Ⅳ～6c	スギ
183	55	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	部材	〃	ヒノキ属
184	195	ⅢD8T SD72	〃	Ⅱ	〃
185	188	ⅢD8P SD69	用途不明	〃	〃
186	216	ⅢE10A 自然流路上部堆積層	部材	Ⅳ～6c	〃
187	217	ⅢE5C 自然流路上部堆積層	〃	〃	〃
188	78	ⅢD13T 8M層	板材	Ⅱ	モミ属
189	222	ⅢD12L 自然流路上部堆積層	部材	Ⅳ～6c	ツブラジイ

図番号	試料番号	出土地区・遺構(層位)	用途	時期	樹種名
190	168	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	棒	Ⅳ～6c	シイノキ属
191	218	〃	部材	〃	ヒノキ属
192	202	ⅢD12G 自然流路上部堆積層	用途不明	〃	ヒノキ属(樺綴)
193	200	ⅢD6Q SD69	斧柄?	Ⅱ	ヤマグワ
194	212	ⅢD11E 自然流路上部堆積層	部材	Ⅳ～6c	ヒノキ属
195	102	ⅢD12F 自然流路上部堆積層	板	〃	〃
196	139	ⅢD13L 自然流路上部堆積層	部材	〃	スギ
197	87	ⅢD6C SD71	用途不明	Ⅱ	コナラ属コナラ亜属コナラ節
198	202	ⅢD12G 9U層	用途不明	Ⅰ～Ⅱ	ヒノキ属
199	76	ⅢD13T 8M層	板	Ⅱ	〃
200	214	ⅢD10T 自然流路上部堆積層	〃	Ⅳ～6c	〃
201	123	ⅢD9P SD69	部材	Ⅱ	〃
202	219	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	〃	Ⅳ～6c	〃
203	221	ⅢD12L 自然流路上部堆積層	〃	〃	〃
204	53	ⅢD12H 8M層	板	Ⅱ	〃
205	166	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	用途不明	Ⅳ～6c	シイノキ属
206	204	ⅢD8E 自然流路上部堆積層	〃	〃	〃
207	167	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	〃	〃	〃
208	134	ⅢD12M 南壁8M-2層	部材	Ⅱ	サカキ
209	148	ⅢD12G 8M層	〃	〃	ヒノキ属
210	175	ⅢE10A 8M層	用途不明	〃	マツ属複雑管束亜属
211	144	ⅢE6C SD71	部材	〃	コナラ属コナラ亜属
212	220	ⅢD11E 自然流路上部堆積層	用途不明	Ⅳ～6c	ヒノキ属
213	181	ⅢD12E 自然流路上部堆積層	〃	〃	スギ
214	97	ⅢD5R SD69	〃	Ⅱ	モミ属
215	145	ⅢD7T SD72	部材	〃	ヒノキ属
216	183	ⅢD12E 自然流路上部堆積層	〃	Ⅳ～6c	〃
217	182	〃	〃	〃	〃
218	177	ⅢD12G 自然流路上部堆積層	用途不明	〃	〃
219	51	ⅢD12E 自然流路上部堆積層	部材	〃	スギ
220	44	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	〃	〃	ヒノキ属
221	75	ⅢD13Q 8M層	棒	Ⅱ	不明
222	49	ⅢD11J 8M層	用途不明	〃	カヤ
223	50	ⅢD14K 8M層	棒	〃	ヒノキ属
224	48	ⅢD11H 8L層	用途不明	〃	〃
225	47	ⅢD11K 8M層	〃	〃	〃
226	146	ⅢD7T SD72	〃	〃	〃
227	17	ⅢD8E 自然流路上部堆積層	〃	Ⅵ～6c	シイノキ属の一種
228	179	ⅢD10E 自然流路上部堆積層	〃	〃	シイノキ属
229	172	Ⅲ6Q SD69	〃	Ⅱ	クスノキ
230	10	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	板材	Ⅳ～6c	ヒノキ属の一種
231	28	ⅢD12E 自然流路上部堆積層	杭?	〃	コナラ属アカガシ亜属の一種
232	45	ⅢD12I 自然流路上部堆積層	部材	〃	ヒノキ属
233	160	ⅢE12A 8L～9層	〃	Ⅱ	〃
234	147	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	〃	Ⅳ～6c	ツブラジイ
235	165	ⅢD13H 自然流路上部堆積層	〃	〃	ヒノキ属
236	41	ⅢD12F 自然流路上部堆積層	〃	〃	〃
237	42	ⅢD12G 自然流路上部堆積層	〃	〃	モミ属



表1 木製品の樹種同定結果(6)

図番号	試料番号	出土地区・遺構(層位)	用途	時期	樹種名
238	43	ⅢD11F 自然流路上部堆積層	部材	Ⅳ～6c	ヒノキ属
	8	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	板材	〃	ツブラジイ
	9	〃	〃	〃	クスノキ
	19	ⅢD11J 自然流路上部堆積層	用途不明	〃	ヒノキ属の一種
	127	ⅢD7Q SD69	棒	Ⅱ	サカキ
	135	ⅢD12J SE貝層2上部	鋏	〃	コナラ属アカガシ亜属
	143	ⅢD9O 自然流路上部堆積層	〃	Ⅳ～6c	〃
	153	ⅢD13H 自然流路上部堆積層	用途不明	〃	サカキ
	162	ⅢE13A 8M層	〃	Ⅱ	ヒノキ属
	169	ⅢD12H 自然流路上部堆積層	棒	Ⅳ～6c	シノキ属
	170	〃	〃	〃	〃
	180	ⅢD10E 自然流路上部堆積層	用途不明	〃	スギ
	215	ⅢD7Q SD69	板材	Ⅱ	カヤ
	233	ⅢD11A 8M層	刺突具	〃	ヒノキ属

表2 杭材の樹種同定結果 (1)

番号	検出位置など	樹種
1	ⅢD 東壁 8M-1層	シイノキ属
2	ⅢD7E 8U層流路下面	ムクロジ
3	ⅢD10F 東壁貝層2上部相当層	コナラ属アカガシ亜属
4	ⅢD11F アゼ8U層流路下面	コナラ属アカガシ亜属
5	ⅢD11F 8U層流路下面	モミ属
6	ⅢD11F 8U層	シキミ
7	ⅢD11G 8M層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
8	ⅢD11H NW貝層②上部下半	コナラ属コナラ亜属コナラ節 ヤマグワ
9	ⅢD12M 8層	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
10	ⅢD12K NE 貝層②上部	コナラ属アカガシ亜属
11	ⅢD12J NE 貝層②上部	コナラ属アカガシ亜属
12	ⅢD12H 木⑥ 8U層	ヤブツバキ
13	ⅢD12H 木② 8U層	シイノキ属
14	ⅢD12H 10層上面ビット群	マツ属複雑管束亜属
15	ⅢD12H 9L層上半	広葉樹(散孔材)
16	ⅢD12H 8U層	コナラ属アカガシ亜属
17	ⅢD12H NE 貝層-2下部	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
18	ⅢD12G 9U1層	ユズリハ属
19	ⅢD13F 8U層黒色粘土	コナラ属コナラ亜属コナラ節
20	ⅢD13F 8U層黒色粘土下面	モミ属
21	ⅢD13G 8U層	モミ属
22	ⅢD13I 8U層	コナラ属アカガシ亜属
23	ⅢD13J SW 貝層②中部	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
24	ⅢD13J 8U層	カヤ
25	ⅢD13L 8M層	カヤ
26	ⅢD14E 西壁断面	コナラ属コナラ亜属コナラ節
27	ⅢD14Q トレンチ内8M層	コナラ属アカガシ亜属
28	ⅢD 杭列北側9T No.1	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
29	ⅢD 杭列北側9T No.2	ヒノキ属
30	ⅢD 杭列北側9T No.3	ヒノキ属
31	ⅢD 杭列北側9T No.4	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
32	ⅢD 杭列北側9T No.5	ヒノキ属
33	ⅢD 杭列北側9T No.6	コナラ属コナラ亜属コナラ節
34	ⅢD 杭列北側9T No.7	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
35	ⅢD 杭列北側9T No.8	ツブラジイ
36	ⅢD 杭列北側9T No.9	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
37	ⅢD 杭列北側9T No.10	コナラ属アカガシ亜属
38	ⅢD 杭列北側9T No.11	ムクノキ
39	ⅢD 杭列北側9T No.12	コナラ属コナラ亜属コナラ節
40	ⅢD 杭列北側9T No.13	ツブラジイ
41	ⅢD 杭列北側9T No.14	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
42	ⅢD 杭列北側9T No.15	コナラ属コナラ亜属コナラ節
43	ⅢD 杭列北側9T No.16	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
44	ⅢD 杭列北側9T No.17	コナラ属コナラ亜属コナラ節
45	ⅢD 杭列北側9T No.18	モミ属
46	ⅢD 杭列北側9T No.19	ツブラジイ
47	ⅢD 杭列北側9T No.20	シイノキ属
48	ⅢD 杭列北側9T No.21	シイノキ属
49	ⅢD 杭列北側9T No.22	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
50	ⅢD 杭列南側9T No.1	モミ属
51	ⅢD 杭列南側9T No.2	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
52	ⅢD 杭列南側9T No.3	シイノキ属
53	ⅢD 杭列南側9T No.4	ヒノキ属

表2 杭材の樹種同定結果 (2)

番号	検出位置など			樹種
54	ⅢD	杭列南側9T	No.6	シイノキ属
55	ⅢD	杭列南側9T	No.7	コナラ属コナラ亜属コナラ節
56	ⅢD	杭列南側9T	No.8	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
57	ⅢD	杭列南側9T	No.9	コナラ属コナラ亜属コナラ節
58	ⅢD	杭列南側9T	No.10	カヤ
59	ⅢD	杭列南側9T	No.11	コナラ属コナラ亜属コナラ節
60	ⅢD	杭列南側9T	No.12	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
61	ⅢD	杭列南側9T	No.13	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
62	ⅢD	杭列南側9T	No.14	ヒノキ属
63	ⅢD	杭列南側9T	No.15	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
64	ⅢD	杭列南側18T	No.16	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
65	ⅢD	杭列南側18T	No.17	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
66	ⅢD	杭列南側18T	No.18	コナラ属コナラ亜属コナラ節
67	ⅢD	杭列南側18T	No.19	コナラ属コナラ亜属コナラ節
68	ⅢD	杭列南側18T	No.20	ヒノキ属
69	ⅢD	2E	杭	タブノキ
70	ⅢD	2E	杭	タブノキ
71	ⅢD	2E	杭	タブノキ
72	ⅢD	2E	杭	タブノキ
73	ⅢD	2E	杭	サカキ
74	ⅢD	2E	杭	サカキ
75	ⅢD	立ち枯れ木サンプル 10S SD72		ヤナギ属
76	ⅢD	10H	杭1	ヤナギ属
77	ⅢD	10H	杭2	ヤナギ属
78	ⅢD	10H	杭3	ヤナギ属
79	ⅢD	10H	杭4	ヤナギ属
80	ⅢD	10H	杭5-A	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	ⅢD	10H	杭5-B	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
81	ⅢD	10H	杭6	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
82	ⅢD	10H	杭7	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
83	ⅢD	10G	杭8	ヤナギ属
84	ⅢD	10G	杭9	ヤナギ属
85	ⅢD	10G	杭10	ヤナギ属
86	ⅢD	10G	杭11	ヤナギ属
87	ⅢD	10G	杭12	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
88	ⅢD	10G	杭13	ヤナギ属
89	ⅢD	10G	杭14	ヤナギ属
90	ⅢD	10G	杭15	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
91	ⅢD	10G	杭16	ヤナギ属
92	ⅢD	10G	杭17	ヤナギ属
93	ⅢD	10G	杭18	ヤナギ属
94	ⅢD	10G	杭19	ヤナギ属
95	ⅢD	10G	杭20	ヤナギ属
96	ⅢD	10G	杭22	ヤナギ属
97	ⅢD	10G	杭23	ヤナギ属
98	ⅢD	10G	杭24	マメ科
99	ⅢD	10G	杭25	ヤナギ属
100	ⅢD	10G	杭26	ヤナギ属
101	ⅢD5C	東側アゼ7層		広葉樹 (散孔材)
102	ⅢD4C	8M層		コナラ属コナラ亜属クヌギ節
103	ⅢD4B	SK13		マツ属複雑維管束亜属
104	ⅢD5T	SK23		ヤマグワ
105	ⅢD8T	8M2層		コナラ属アカガシ亜属
106	ⅢD8Q	SD69		ヤナギ属

表2 杭材の樹種同定結果 (3)

番号	検出位置など	樹種
107	ⅢD8P SP29	サクラ属
108	ⅢD8D 北壁8U流路-2	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
109	ⅢD7T SD72	カヤ
110	ⅢD7S SD67	ツガ属
111	ⅢD9N 8M-2層	エノキ属
		コナラ属アカガシ亜属
		タブノキ
112	ⅢD9N SD87	モミ属
113	ⅢD9O 8M-2層	マツ属複雑管束亜属
114	ⅢD9P SD22	コナラ属アカガシ亜属
115	ⅢD9R 8M-2層	マツ属複雑管束亜属
116	ⅢD9S SD72	エノキ属
		マツ属複雑管束亜属
		ツブラジイ
117	ⅢD11Q 8M層杭列	エゴノキ属
118	ⅢD 7層立合	カヤ
119	ⅢD 8U層北壁	ムクノキ
120	ⅢD 西側トレンチ	クリ
121	ⅢD10M 8M-2層	マツ複雑管束亜属
		マツ複雑管束亜属
122	ⅢD10O 8M-2層	ヤマグワ
		クスノキ
		クスノキ科
123	ⅢD10T 8M層	クスノキ科
124	ⅢD1B 杭9	ヤマグワ
125	ⅢD1B 杭51	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
126	ⅢD12Q 8U層	モミ属
127	ⅢD11F 8U層	広葉樹 (散孔材)
128	ⅢD11P 8M層 杭1	コナラ属コナラ亜属コナラ節
129	ⅢD12P 8M層 杭2	コナラ属コナラ亜属コナラ節
130	ⅢD12P 8M層 杭3	ツブラジイ
131	ⅢD11Q 8M層 杭4	ケヤキ
132	ⅢD11Q 8M層 杭5	ヒノキ属
133	ⅢD11R 8M層 杭6	カヤ
134	ⅢD12P 8M層 杭7	ヤナギ属
135	ⅢD12P 8M層 杭8	マテバシイ属
136	ⅢD11P 8M層 杭9	ケヤキ
137	ⅢD11R 8M層 杭10	コナラ属アカガシ亜属
138	ⅢD5A 杭No.35	コナラ属アカガシ亜属
139	ⅢD6A 杭No.36	サカキ
140	ⅢD1A 杭No.38	サカキ
141	ⅢD6A 杭No.39	ヤナギ属
142	ⅢD5A 杭No.40	ヒノキ属
143	ⅢD7A 杭No.41	広葉樹 (散孔材)
144	ⅢD6T 杭No.42	ヤナギ属
145	ⅢD6T 杭No.43	タブノキ
146	ⅢD6T 杭No.44	クスノキ科
147	ⅢD6T 杭No.45	サカキ
148	ⅢD6T 杭No.48	シイノキ属
149	ⅢD7S 杭No.49	コナラ属コナラ亜属コナラ節
150	ⅢD7T 杭No.50	トリネコ属
151	ⅢD7T 杭No.51	マツ属複雑管束亜属
152	ⅢD7T 杭No.52	シイノキ属
153	ⅢD5S 杭No.53	モミ属
154	ⅢD5S 杭No.54	モミ属

表2 杭材の樹種同定結果 (4)

番号	検出位置など	樹種
155	ⅢD6S 杭No.55	モミ属
156	ⅢD6S 杭No.56	マツ属複維管束亜属
157	ⅢD6S 杭No.57	マツ属複維管束亜属
158	ⅢD6S 杭No.58	マキ属
159	ⅢD6S 杭No.59	モミ属
160	ⅢD6S 杭No.60	ヒノキ属
161	ⅢD6S 杭No.61	モミ属
162	ⅢD7S 杭No.62	ヒノキ属
163	ⅢD7R 杭No.63	カヤ
164	ⅢD6R 杭No.65	マツ属複維管束亜属
165	ⅢD6R 杭No.66	ヤマグワ
166	ⅢD7R 杭No.67	シイノキ属
167	ⅢD7R 杭No.68	クリ
168	ⅢD7R 杭No.69	コナラ属コナラ亜属コナラ節
169	ⅢD7R 杭No.70	コナラ属コナラ亜属コナラ節 コナラ属コナラ亜属クヌギ節
170	ⅢD7R 杭No.71	タラノキ
171	ⅢD7R 杭No.72	コナラ属コナラ亜属コナラ節
172	ⅢD7R 杭No.73	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
173	ⅢD7R 杭No.74	ケヤキ
174	ⅢD6R 杭No.75	コナラ属コナラ亜属コナラ節
175	ⅢD6R 杭No.76	ツブラジイ
176	ⅢD6R 杭No.77	クリ
177	ⅢD7Q 杭No.79	コナラ属コナラ亜属コナラ節
178	ⅢD7Q 杭No.80	コナラ属コナラ亜属コナラ節
179	ⅢD7Q 杭No.81	シイノキ属
180	ⅢD7Q 杭No.82	コナラ属アカガシ亜属
181	ⅢD7Q 杭No.83	コナラ属アカガシ亜属
182	ⅢD7Q 杭No.84	ツブラジイ
183	ⅢD7Q 杭No.85	ツブラジイ
184	ⅢD7Q 杭No.86	コナラ属アカガシ亜属
185	ⅢD7Q 杭No.87	コナラ属コナラ亜属コナラ節
186	ⅢD7Q 杭No.88	シキミ
187	ⅢD7Q 杭No.89	コナラ属コナラ亜属コナラ節
188	ⅢD7Q 杭No.90	シキミ
189	ⅢD7Q 杭No.91	コナラ属アカガシ亜属
190	ⅢD7Q 杭No.92	モミ属
191	ⅢD7Q 杭No.93	コナラ属コナラ亜属コナラ節
192	ⅢD7Q 杭No.94	クスノキ
193	ⅢD7Q 杭No.95	コナラ属コナラ亜属コナラ節
194	ⅢD7Q 杭No.96	ケヤキ
195	ⅢD7Q 杭No.97	コナラ属コナラ亜属コナラ節
196	ⅢD7Q 杭No.98	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
197	ⅢD8Q 杭No.99	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
198	ⅢD7Q 杭No.101	コナラ属アカガシ亜属
199	ⅢD7Q 杭No.102	コナラ属コナラ亜属コナラ節
200	ⅢD11T 杭No.103	ヒノキ属
201	ⅢD9T 杭No.104	タブノキ
202	ⅢD9T 杭No.105	コナラ属アカガシ亜属
203	ⅢD9T 杭No.106	マテバシイ属
204	ⅢD11R 杭No.107	マツ属複維管束亜属
205	ⅢD11R 杭No.108	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
206	ⅢD11R 杭No.109	ツブラジイ
207	ⅢD11R 杭No.110	モミ属

表2 杭材の樹種同定結果 (5)

番号	検出位置など	樹種
208	ⅢD11R 杭No.112	マツ属複雑管束亜属
209	ⅢD10R 杭No.113	ヒノキ属
210	ⅢD10R 杭No.114	モミ属
211	ⅢD10R 杭No.115	コナラ属アカガシ亜属
212	ⅢD10R 杭No.116	ハンノキ属
213	ⅢD10R 杭No.117	クリ
214	ⅢD10R 杭No.118	コナラ属コナラ亜属コナラ節
215	ⅢD10R 杭No.119	コナラ属アカガシ亜属
216	ⅢD10R 杭No.120	コナラ属コナラ亜属コナラ節
217	ⅢD10R 杭No.121	クリ
218	ⅢD10R 杭No.122	コナラ属コナラ亜属コナラ節
219	ⅢD10R 杭No.123	サカキ
220	ⅢD10R 杭No.124	クスノキ科
221	ⅢD9R 杭No.125	サカキ
222	ⅢD8Q 杭No.126	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
223	ⅢD8Q 杭No.127	コナラ属アカガシ亜属
224	ⅢD8Q 杭No.128	モミ属
225	ⅢD8Q 杭No.130	広葉樹 (散孔材)
226	ⅢD8Q 杭No.131	クリ
227	ⅢD8Q 杭No.132	サカキ
228	ⅢD8Q 杭No.133	コナラ属コナラ亜属コナラ節
229	ⅢD8Q 杭No.134	コナラ属アカガシ亜属
230	ⅢD8Q 杭No.135	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
231	ⅢD8Q 杭No.136	エノキ属
232	ⅢD8Q 杭No.137	コナラ属コナラ亜属コナラ節
233	ⅢD8Q 杭No.138	コナラ属コナラ亜属コナラ節
234	ⅢD8Q 杭No.139	モミ属
235	ⅢD8Q 杭No.141	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
236	ⅢD8Q 杭No.142	コナラ属コナラ亜属コナラ節
237	ⅢD8Q 杭No.143	クスノキ科
238	ⅢD8Q 杭No.144	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
239	ⅢD8Q 杭No.147	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
240	ⅢD8Q 杭No.148	広葉樹 (樹皮)
241	ⅢD8P 杭No.150	ヤマグワ
242	ⅢD8Q 杭No.151	クスノキ科
243	ⅢD9Q 杭No.152	コナラ属コナラ亜属コナラ節
244	ⅢD9Q 杭No.153	シイノキ属
245	ⅢD9Q 杭No.134	ツブラジイ
246	ⅢD9Q 杭No.155	シイノキ属
247	ⅢD10Q 杭No.156	シイノキ属
248	ⅢD10Q 杭No.157	シイノキ属
249	ⅢD10Q 杭No.158	モミ属
250	ⅢD10Q 杭No.159	ツブラジイ
251	ⅢD10Q 杭No.160	シイノキ属
252	ⅢD10Q 杭No.161	ヒノキ属
253	ⅢD10Q 杭No.162	コナラ属コナラ亜属コナラ節
254	ⅢD10Q 杭No.163	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
255	ⅢD10Q 杭No.164	シイノキ属
256	ⅢD10Q 杭No.165	コナラ属コナラ亜属コナラ節
257	ⅢD10Q 杭No.166	シイノキ属
258	ⅢD10Q 杭No.167	コナラ属コナラ亜属コナラ節
259	ⅢD10Q 杭No.169	シイノキ属
260	ⅢD10Q 杭No.170	コナラ属コナラ亜属コナラ節
261	ⅢD11Q 杭No.172	コナラ属コナラ亜属コナラ節

表2 杭材の樹種同定結果 (6)

番号	検出位置など	樹種
262	ⅢD11Q 杭No.173	コナラ属コナラ亜属クスギ節
263	ⅢD11Q 杭No.174	クスノキ科
264	ⅢD11Q 杭No.175	シイノキ属
265	ⅢD11Q 杭No.176	シイノキ属
266	ⅢD11Q 杭No.177	ヒノキ属
267	ⅢD11Q 杭No.178	コナラ属アカガシ亜属
268	ⅢD10P 杭No.180	コナラ属コナラ亜属コナラ節
269	ⅢD10P 杭No.181	コナラ属コナラ亜属クスギ節
270	ⅢD10P 杭No.182	シイノキ属
271	ⅢD10Q 杭No.184	クスノキ科
272	ⅢD10P 杭No.184	コナラ属アカガシ亜属
273	ⅢD8R 杭No.185	コナラ属コナラ亜属コナラ節
274	ⅢD8R 杭No.186	コナラ属コナラ亜属クスギ節
275	ⅢD8R 杭No.187	コナラ属アカガシ亜属
256	ⅢD10P 杭No.189	コナラ属アカガシ亜属
277	ⅢD10P 杭No.190	ツブラジイ
278	ⅢD10P 杭No.191	コナラ属コナラ亜属クスギ節
279	ⅢD10P 杭No.192	ブナ科
280	ⅢD10P 杭No.193	コナラ属アカガシ亜属
281	ⅢD10P 杭No.194	コナラ属アカガシ亜属
282	ⅢD10P 杭No.195	コナラ属コナラ亜属クスギ節 コナラ属アカガシ亜属
283	ⅢD10P 杭No.197	コナラ属コナラ亜属コナラ節
284	ⅢD10P 杭No.198	コナラ属コナラ亜属コナラ節
285	ⅢD10P 杭No.199	コナラ属アカガシ亜属
286	ⅢD10P 杭No.200	コナラ属コナラ亜属コナラ節
287	ⅢD10P 杭No.201	コナラ属アカガシ亜属
288	ⅢD10P 杭No.201	サカキ
289	ⅢD10P 杭No.203	コナラ属コナラ亜属クスギ節
290	ⅢD10P 杭No.204	サカキ
291	ⅢD10P 杭No.205	モミ属
292	ⅢD10P 杭No.206	コナラ属コナラ亜属コナラ節
293	ⅢD10P 杭No.207	コナラ属コナラ亜属コナラ節
294	ⅢD10P 杭No.208	シイノキ属
295	ⅢD10P 杭No.209	ヤナギ属
296	ⅢD10P 杭No.210	コナラ属コナラ亜属コナラ節
297	ⅢD10P 杭No.211	コナラ属コナラ亜属コナラ節
298	ⅢD10P 杭No.212	スギ
299	ⅢD10P 杭No.213	コナラ属コナラ亜属コナラ節
300	ⅢD10P 杭No.215	コナラ属コナラ亜属クスギ節
301	ⅢD10P 杭No.216	広葉樹 (散孔材)
302	ⅢD9P 杭No.217	シイノキ属
303	ⅢD6R 杭No.219	シャシャンボ
304	ⅢD6R 杭No.220	ツブラジイ
305	ⅢD6R 杭No.221	シイノキ属
306	ⅢD6R 杭No.222	ヤナギ属
307	ⅢD5R 杭No.223	シイノキ属
308	ⅢD5R 杭No.224	シイノキ属
309	ⅢD5R 杭No.225	シイノキ属
310	ⅢD5R 杭No.226	シイノキ属
311	ⅢD5S 杭No.227	ハンノキ属
312	ⅢD6S 杭No.228	シイノキ属
313	ⅢD6R 杭No.229	シャシャンボ
314	ⅢD6R 杭No.230	マツ属複維管束亜属

表2 杭材の樹種同定結果 (7)

番号	検出位置など	樹種
315	ⅢD4E 杭7	ヤナギ属
316	ⅢD4E 杭8	コナラ属コナラ亜属コナラ節
317	ⅢD4E 杭89	コナラ属コナラ亜属コナラ節
318	ⅢD4E 杭10	コナラ属コナラ亜属コナラ節
319	ⅢD4E 杭11	コナラ属コナラ亜属コナラ節
320	ⅢD4E 杭12	ケリ
321	ⅢD4C 杭13	コナラ属コナラ亜属コナラ節
322	ⅢD3B 杭15	コナラ属コナラ亜属コナラ節
323	ⅢD4B 杭18	コナラ属コナラ亜属コナラ節
324	ⅢD4B 杭20	ヒノキ属
325	ⅢD4B 杭21	ツブラジイ
326	ⅢD5E 杭No.1	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
327	ⅢD6E 杭No.2	モミ属
328	ⅢD5E 杭No.3	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
329	ⅢD6E 杭No.4	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
330	ⅢD6E 杭No.5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
331	ⅢD6E 杭No.6	モミ属
332	ⅢD6E 杭No.7	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
333	ⅢD6F 杭No.8	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
334	ⅢD6F 杭No.9	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
335	ⅢD6F 杭No.10	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
336	ⅢD6F 杭No.11	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
337	ⅢD7F 杭No.12	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
338	ⅢD6E 杭No.13	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
339	ⅢD6E 杭No.14	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
340	ⅢD8D 杭No.15	ヤマグワ
341	ⅢD7C 杭No.16	サカキ
342	ⅢD7C 杭No.17	コナラ属コナラ亜属コナラ節
343	ⅢD7C 杭No.18	コナラ属コナラ亜属コナラ節
344	ⅢD7B 杭No.19	マツ属複雑管束亜属
345	ⅢD7B 杭No.20	ヤブツバキ
346	ⅢD7B 杭No.21	ヒノキ属
347	ⅢD7B 杭No.22	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
348	ⅢD7B 杭No.23	広葉樹(環孔材)
349	ⅢD7B 杭No.24	ヤナギ属
350	ⅢD7B 杭No.25	タブノキ
351	ⅢD7B 杭No.26	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 サクラ属
352	ⅢD7B 杭No.27	マツ属複雑管束亜属
353	ⅢD10B 杭No.28	コナラ属コナラ亜属コナラ節
354	ⅢD9C 杭No.29	コナラ属アカガシ亜属
355	ⅢD10B 杭No.31	コナラ属アカガシ亜属
356	ⅢD10C 杭No.32	コナラ属アカガシ亜属
357	ⅢD6B 杭No.33	モミ属
358	ⅢD6B 杭No.34	クスノキ科
359	ⅢD8C SK49一括	クスノキ
360	ⅢD13B 8M-1下面	エノキ属
361	8M-1下面	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
362	13B 8L下面	広葉樹(散孔材)
363	6E 南側トレンチ層位不明	コナラ属コナラ亜属クヌギ節



版 圖

図版1 宮ノ下遺跡第1次調査 A地区の遺構

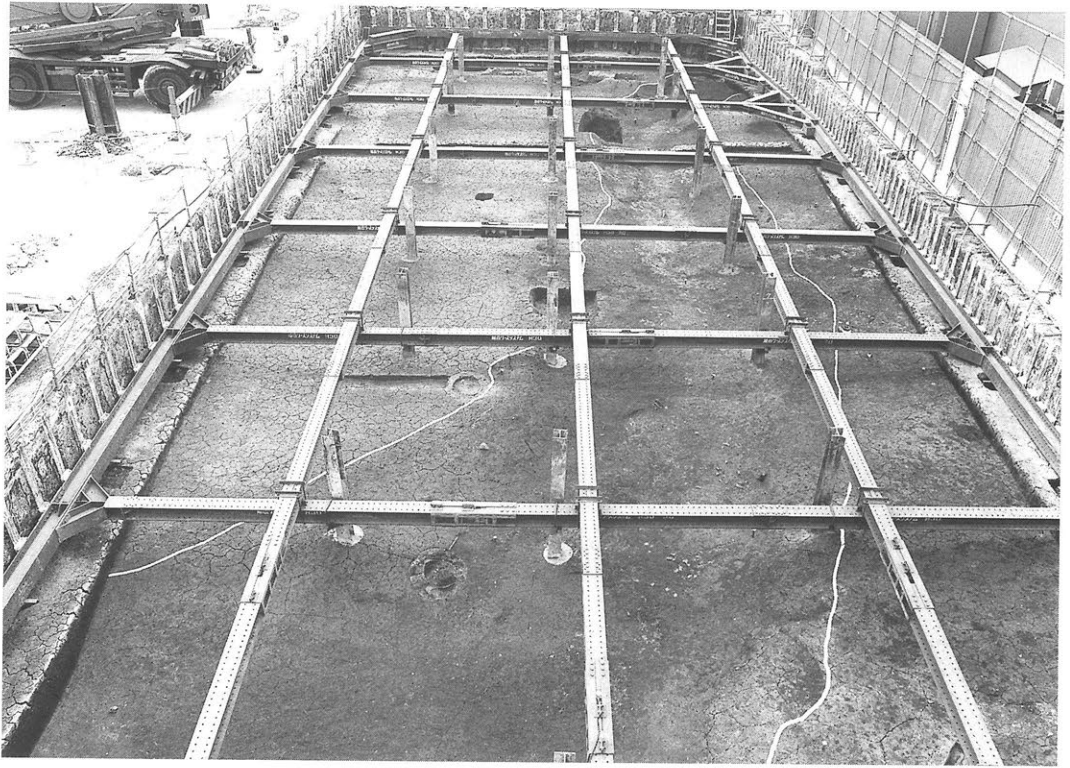


1 調査地全景（写真中央がA地区、その他が調査前のB地区）

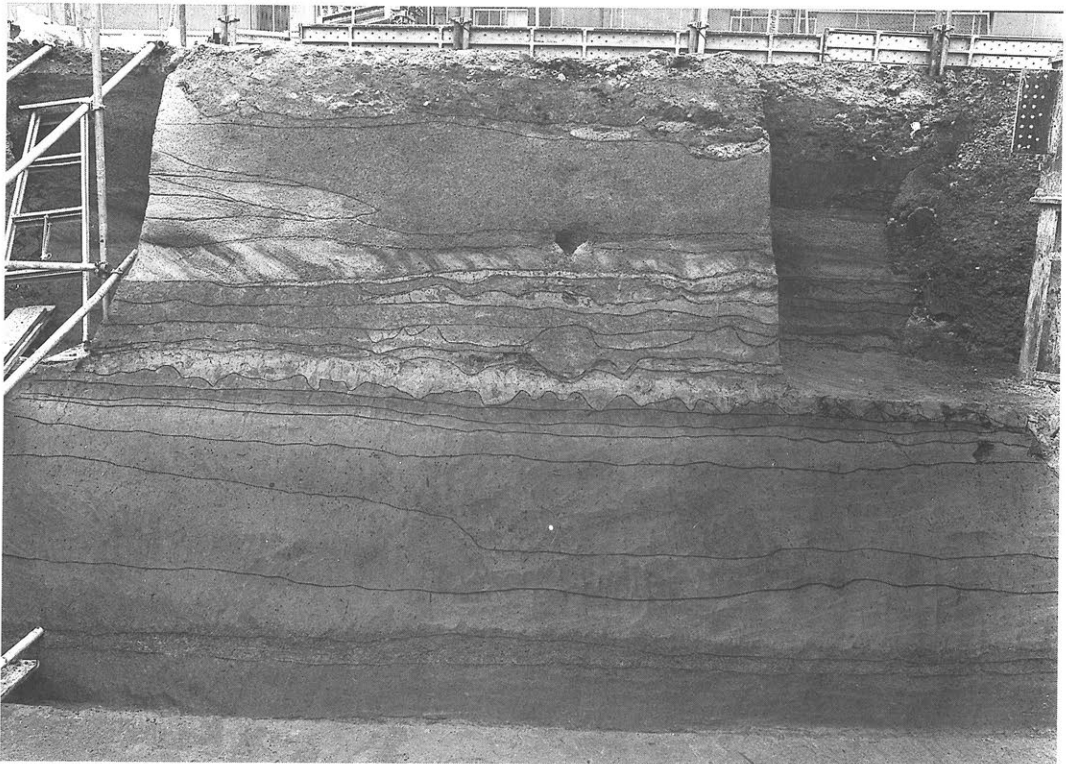


2 中世以後の遺構

図版2 宮ノ下遺跡第1次調査 A・B地区の遺構



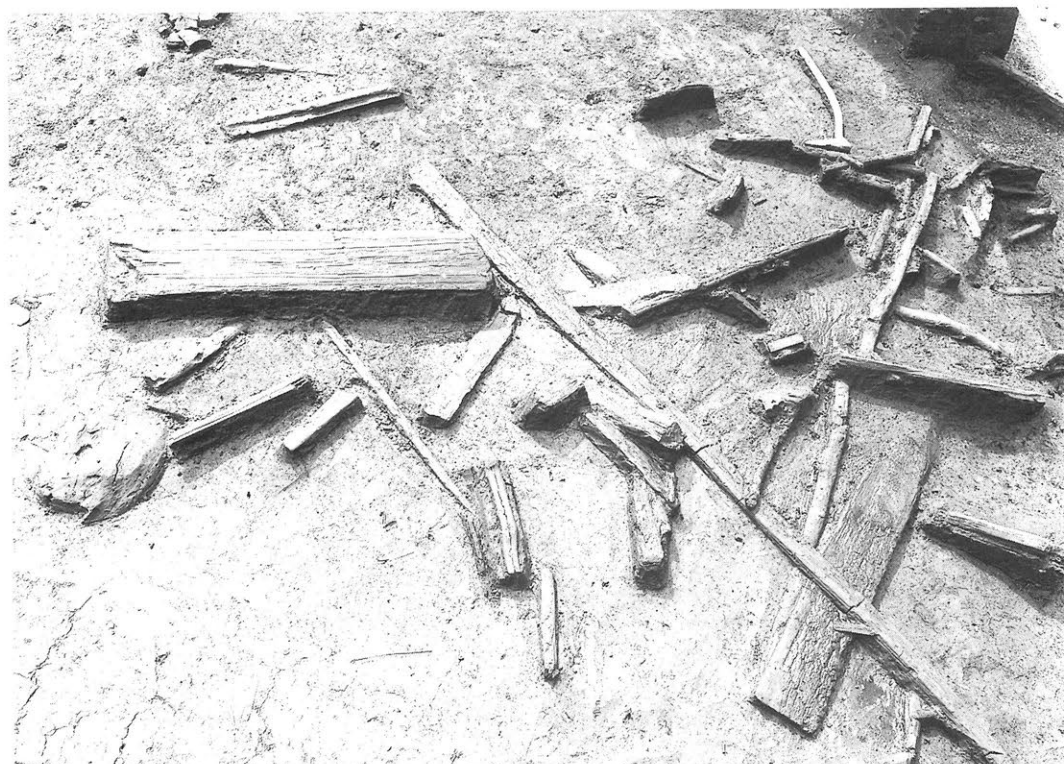
1 自然流路 (弥生中期末～古墳時代の状況)



2 B地区北端部西壁(A地区との境)土層断面



1 弧紋円板出土状況



2 鉄斧柄他木製品出土状況



1 鉄斧柄出土状況



2 ヒト頭蓋骨出土状況



1 自然流路東側の杭列（南より）



2 自然流路西側のピット群（北より）

図版6 宮ノ下遺跡第1次調査 B地区の遺物



1 第8M層出土のサヌカイト打製縦斧



2 第8M層出土のサヌカイト打製縦斧細部



1 貝層2上面(南より)

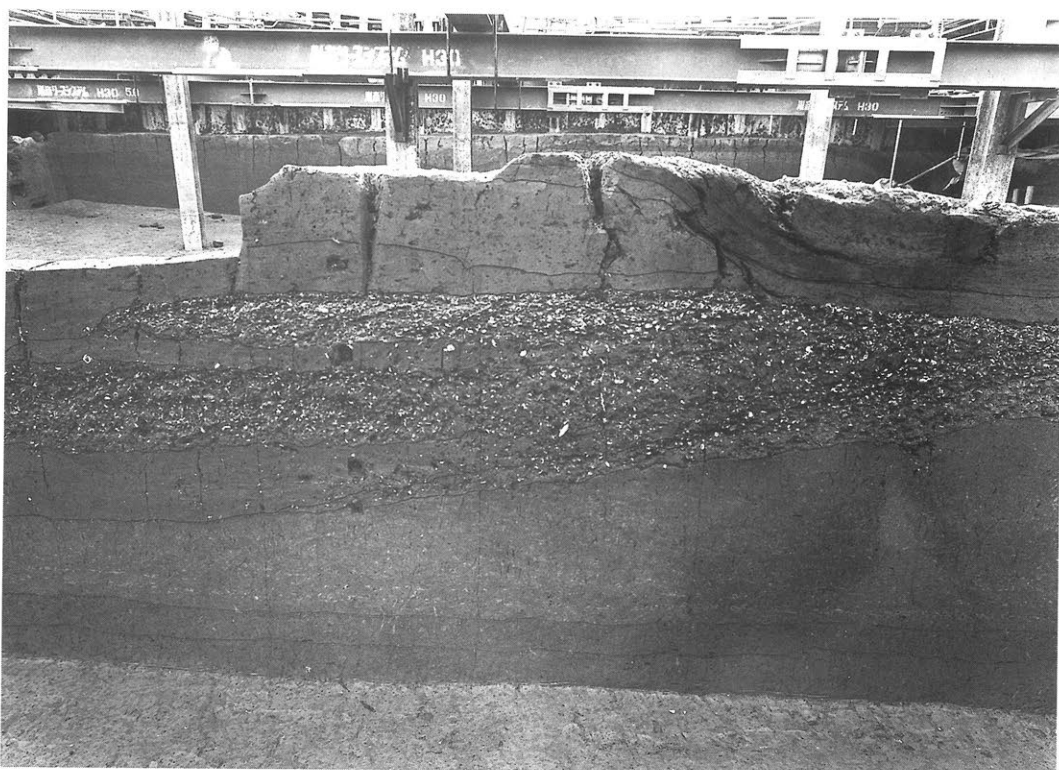


2 貝層1・貝層2中部上面(南より)

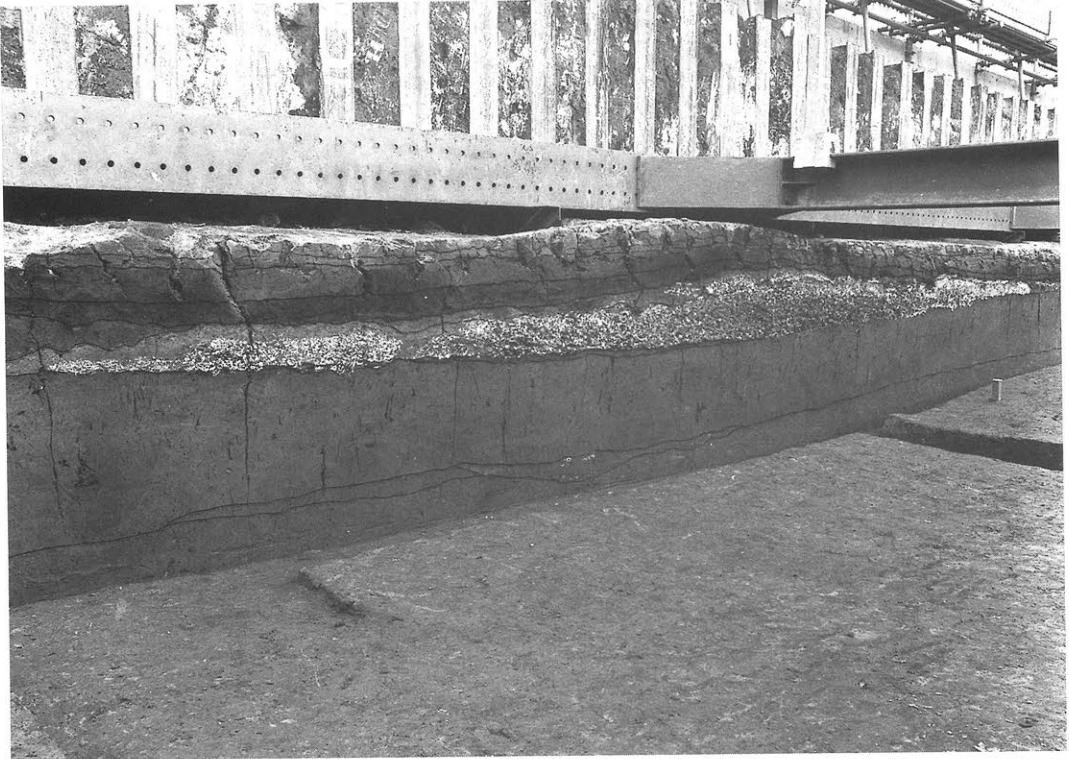




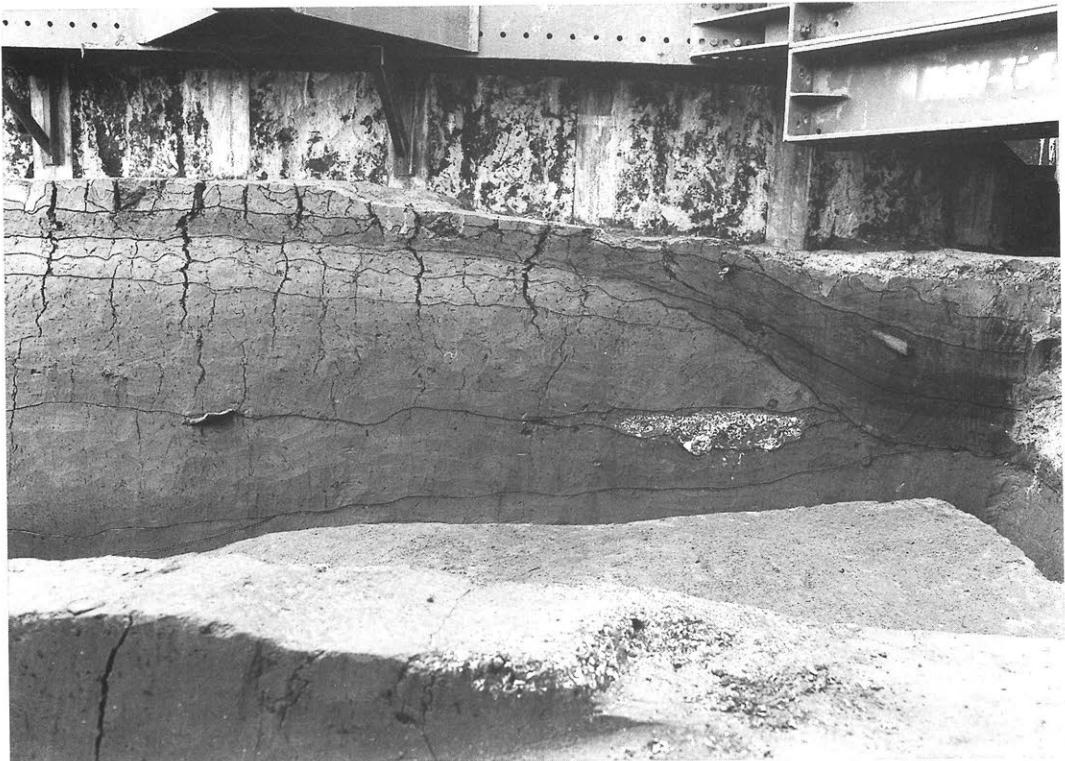
1 貝層1・2下面(南より)



2 Jライン貝層2断面(北より)



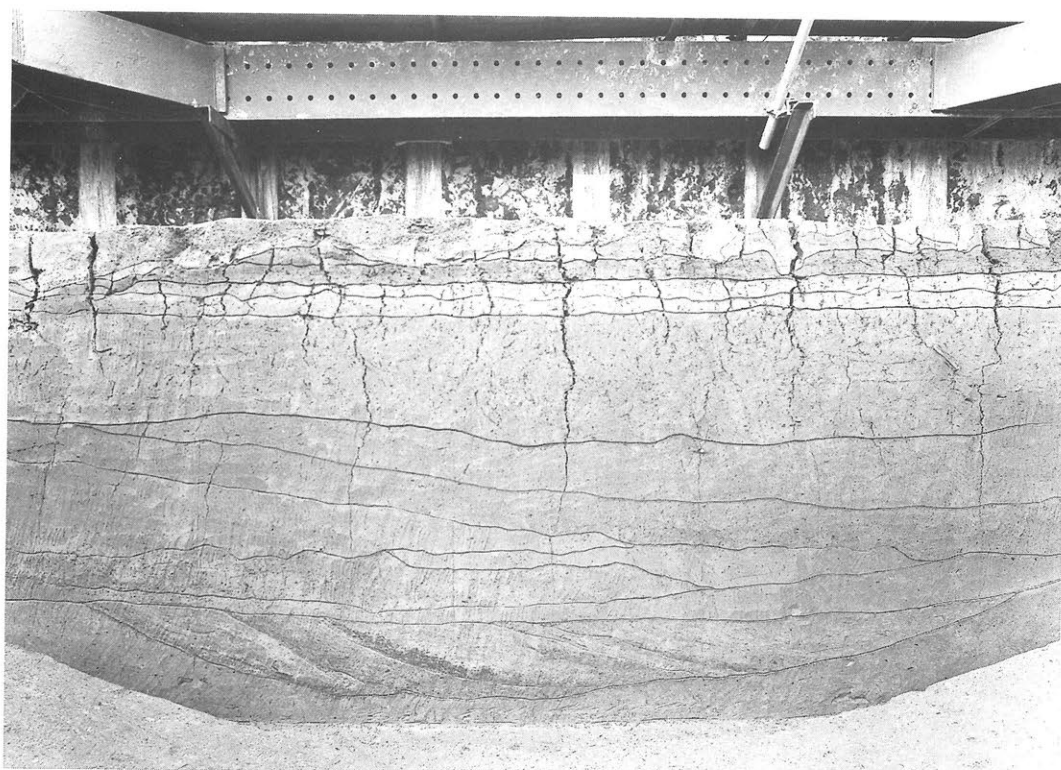
1 西壁断面の貝層1



2 南壁断面の貝層2



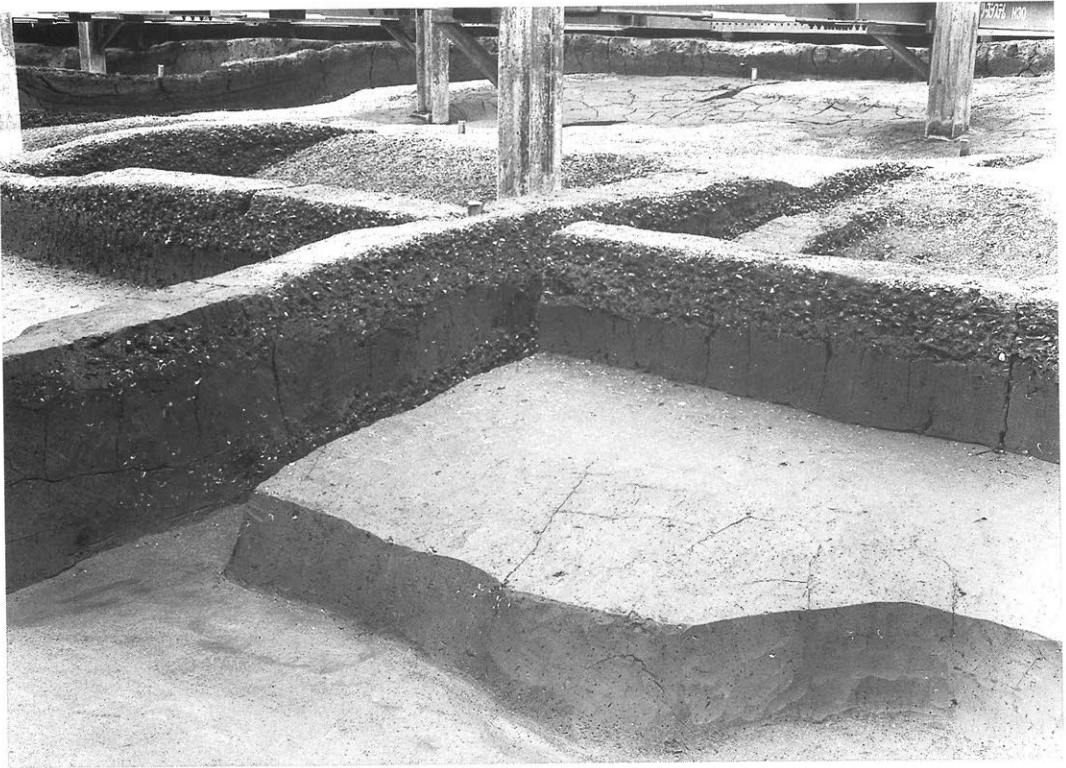
1 貝層2中部下面のピット



2 南壁断面の自然流路堆積層



1 貝層2下面（北より）



2 貝層2下面（北東より）



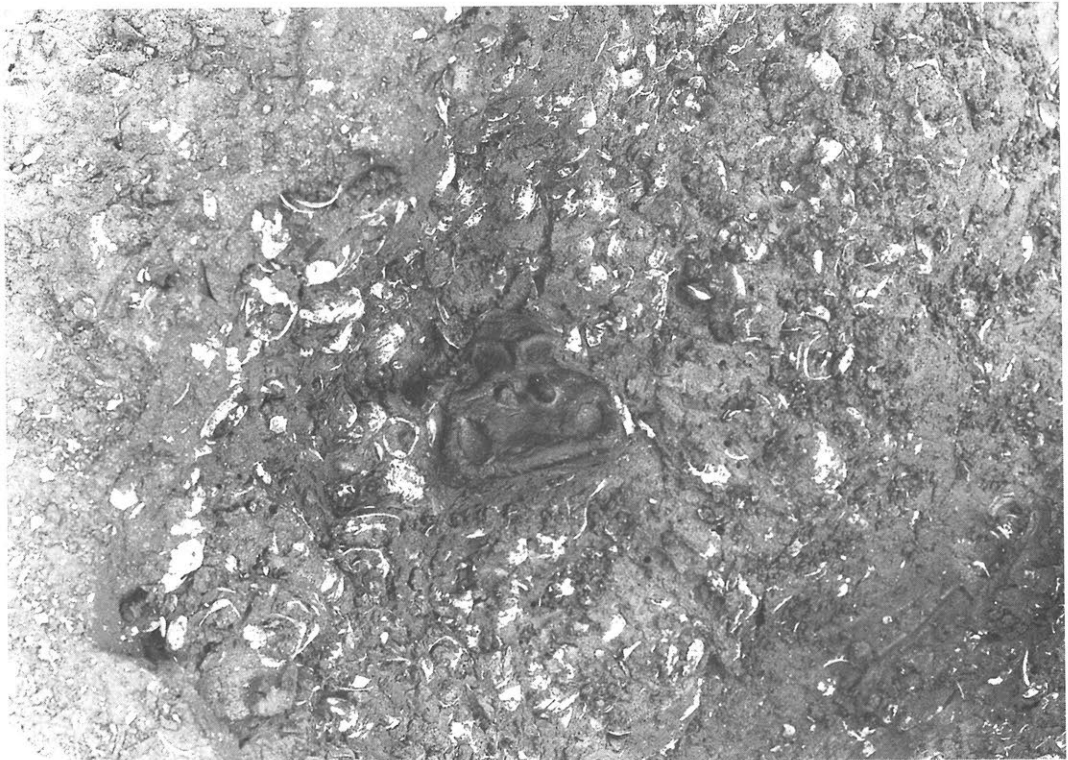
1 貝層2下面(南より)



2 貝層2下面(南東より)



1 貝層2中部出土の第I様式壺



2 貝層2下部出土の土偶



1 貝層2下部出土の縄紋土器深鉢



2 貝層1出土の縄紋土器浅鉢



1 B地区第9層出土の牙製腕輪



2 A地区第8層出土のシカ下顎骨

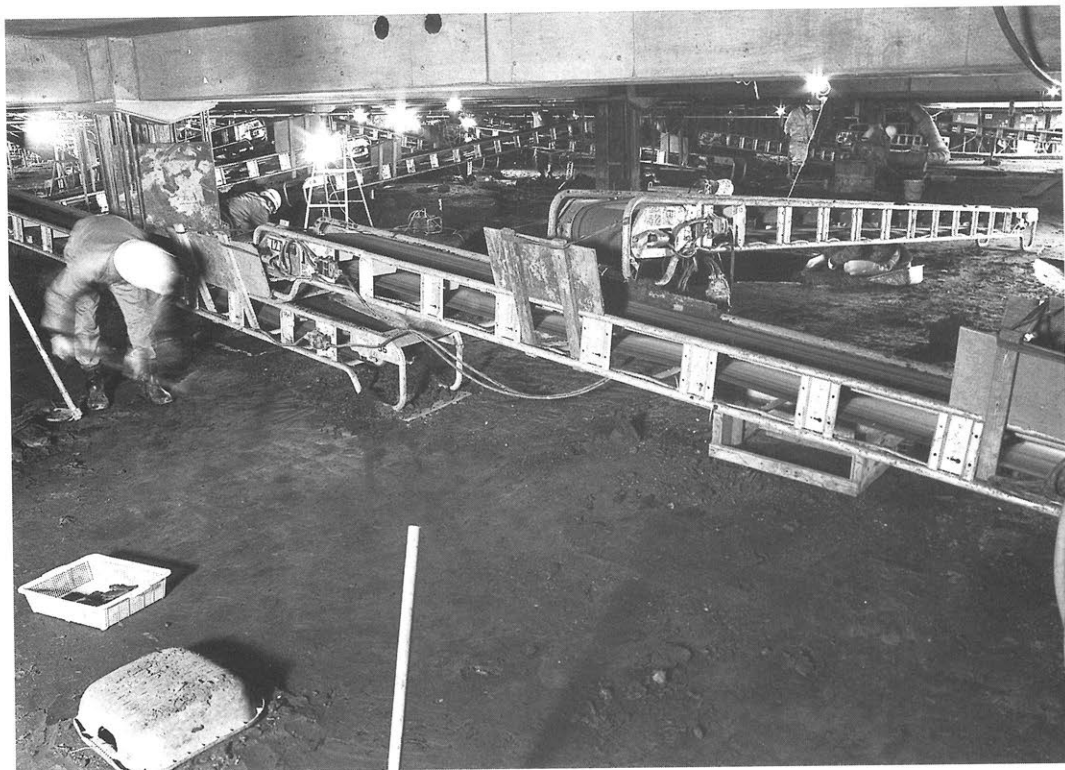




1 A地区第8M層出土のイノシシ下顎骨



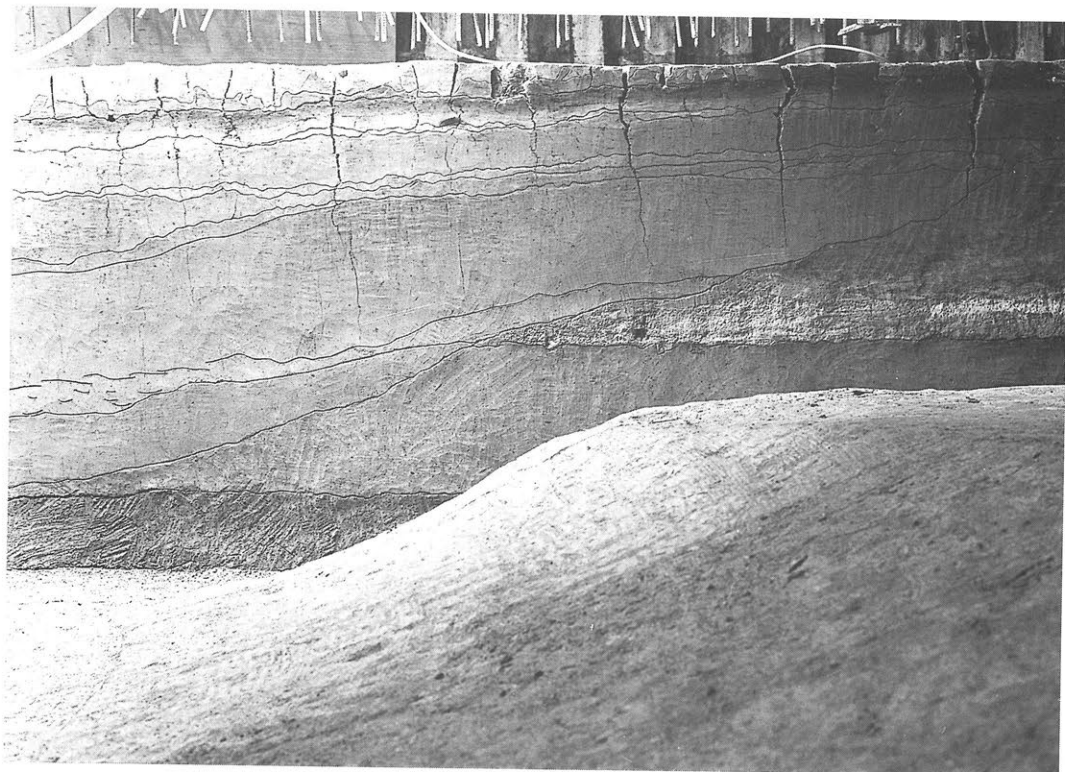
2 A地区第8M層出土のイノシシ肩甲骨



1 調査風景



2 調査風景



1 南壁の自然流路堆積層



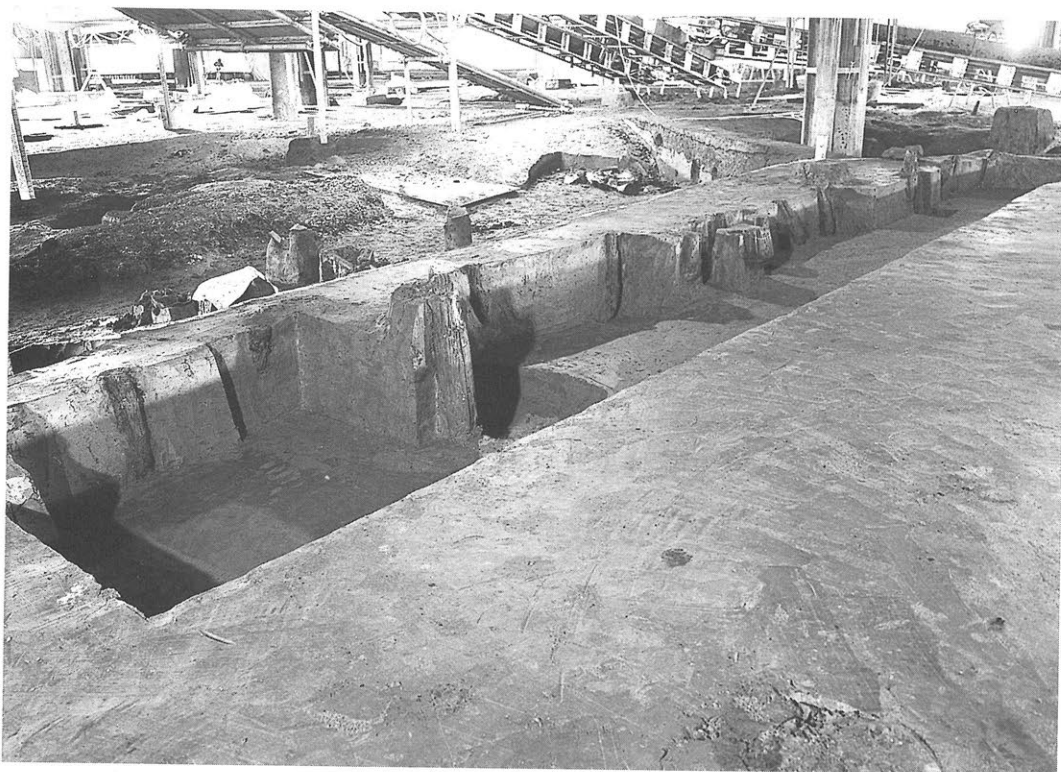
2 自然流路西岸の干潟堆積層



1 第8層下面のピット列



2 第8層下面のピット・土坑



1 第8層下面の杭列



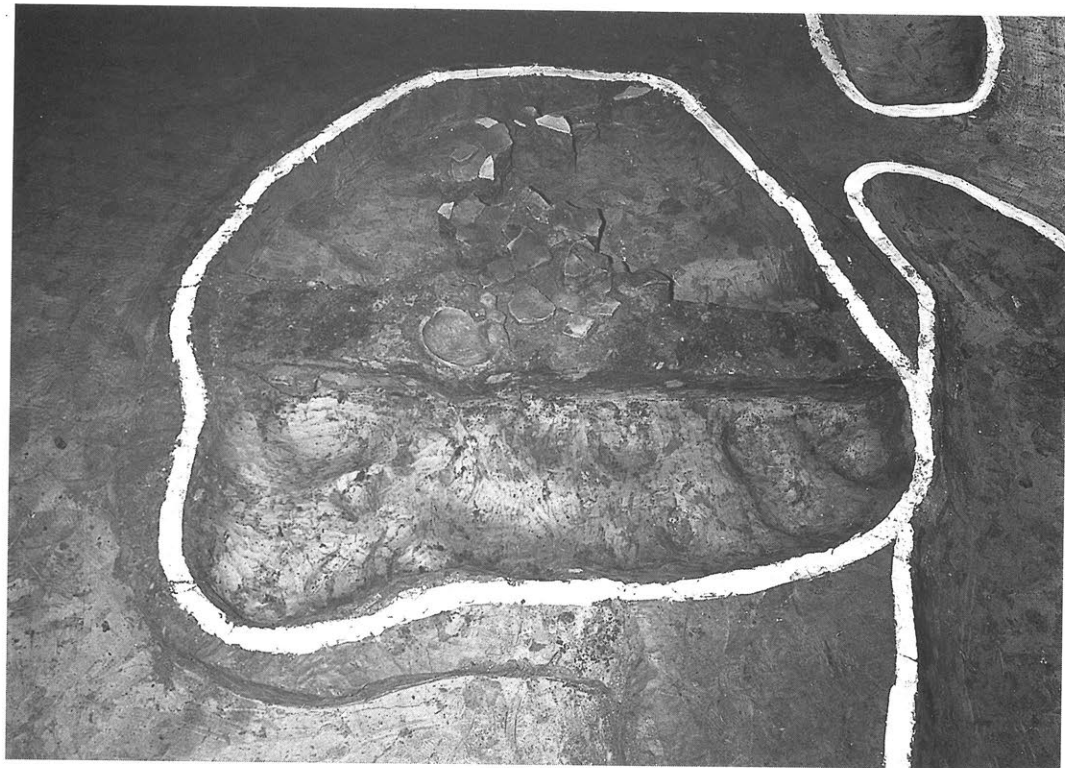
2 第8層下面の杭列



1 SD72東端部



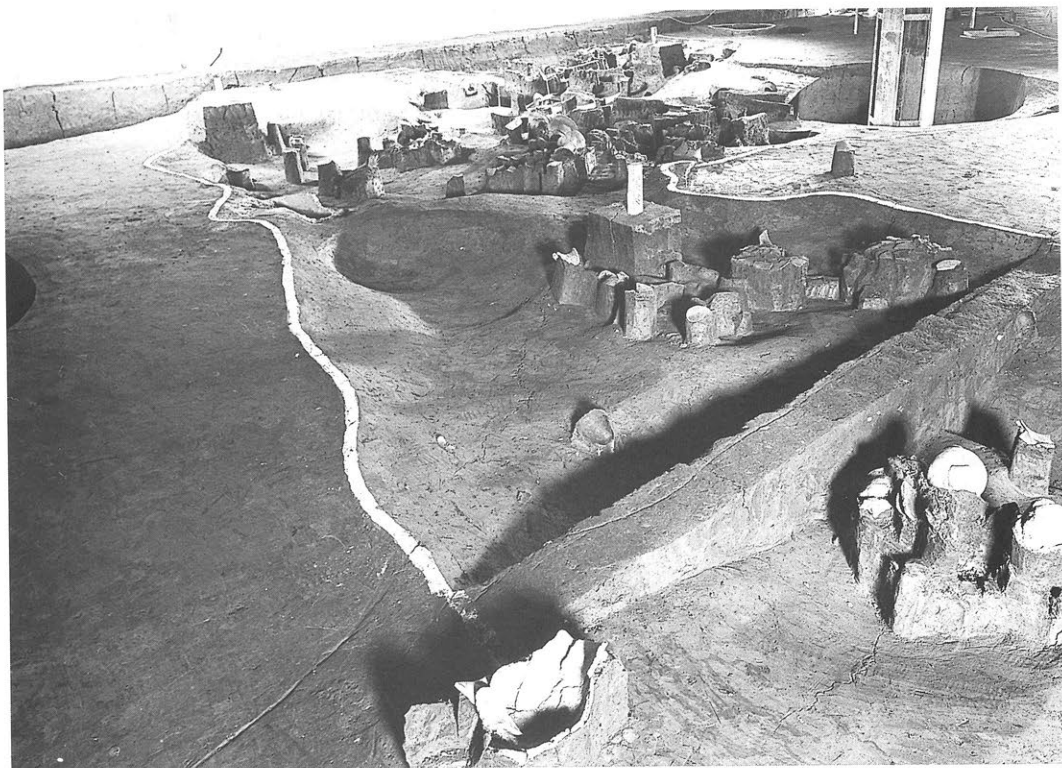
2 第8層下面のピット内弥生土器出土状況



1 第8層下面の土坑SK41



2 第8層下面の土坑SK51



1 SD69遺物出土状況



2 SD72遺物出土状況

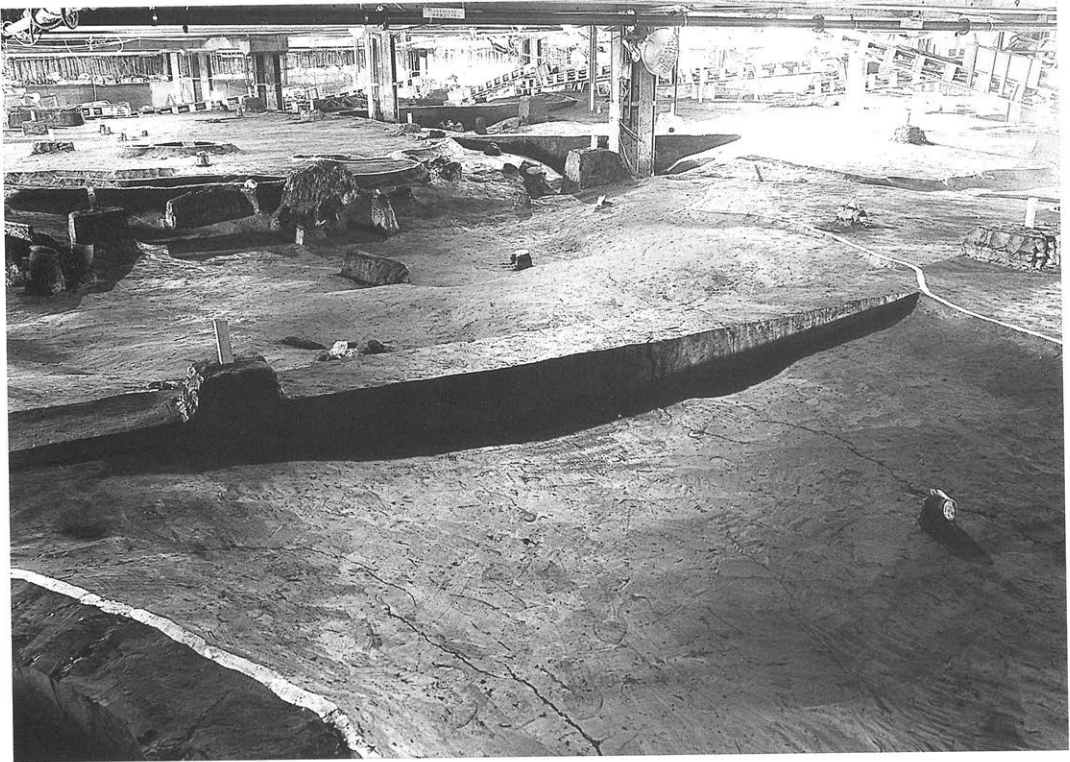




1 SD72内の小貝塚



2 自然流路内の小貝塚（西壁沿い）



1 SD72掘上げ後



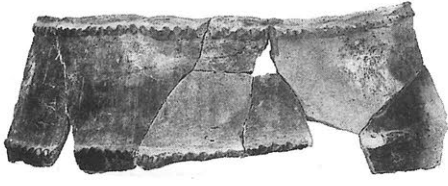
2 SD72遺物出土状況



1 SD69遺物出土状況



2 SD69遺物出土状況



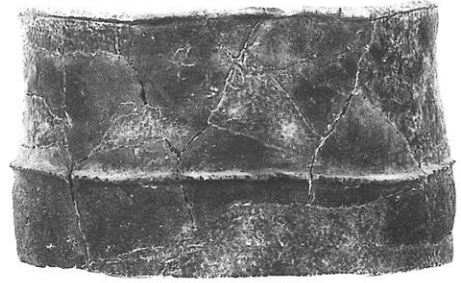
1



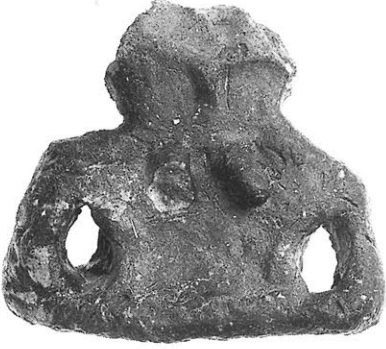
7



3



6



209-1

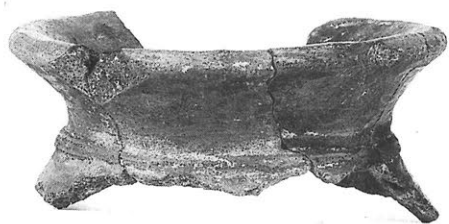


209-2



209-3

凸帯紋土器深鉢(1・3・6・7) 土偶(209)



211



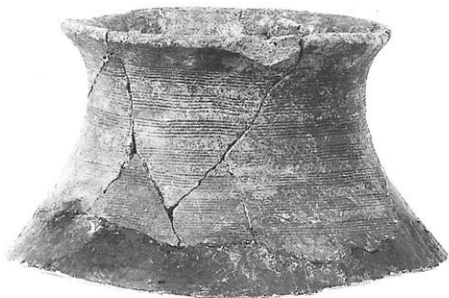
212



219



226



251



254



257



272



280



281



313



301



310



318



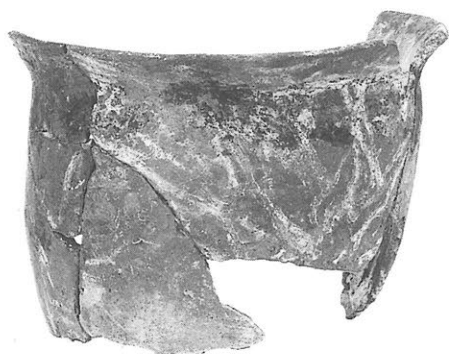
338



353



362



348



365



352



370



380



382



383



386



384



387



385



375





371



373



372



376



381



379



400



396



414



399



416



408

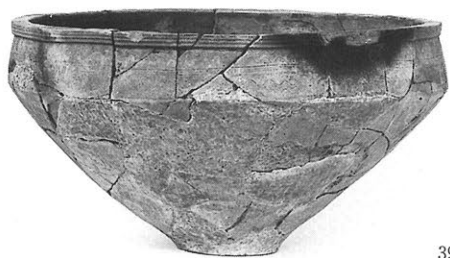


411



418

A地区第8U層(396・399・408・411・416) 第8U流路内(自然流路上部堆積層)(418)



395



413



410



421



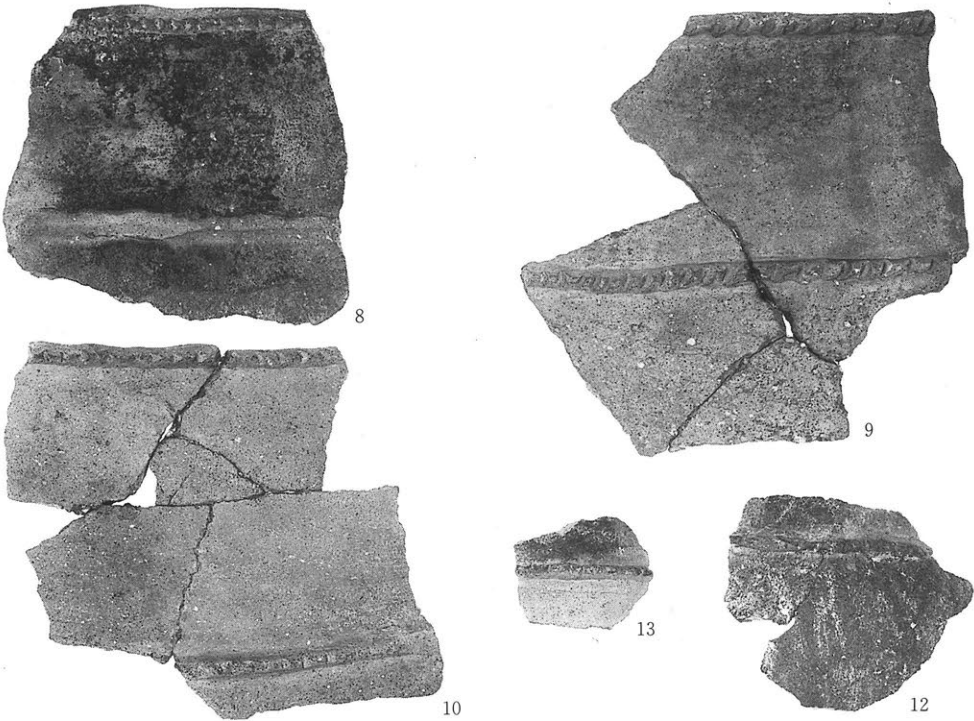
412



422



1 凸帯紋土器深鉢

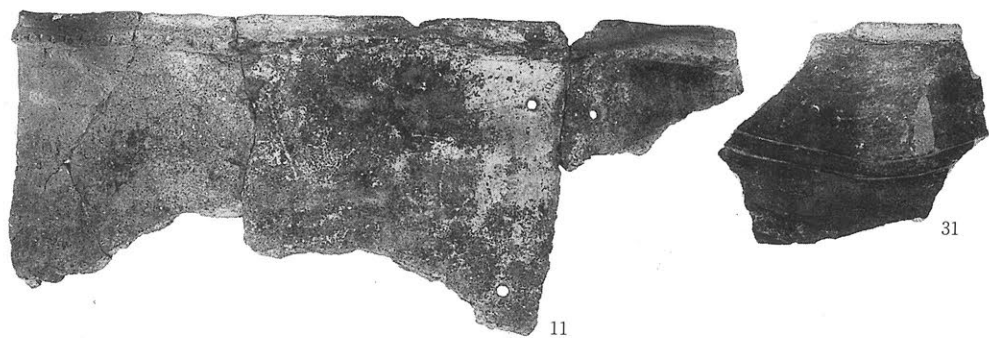


2 凸帯紋土器深鉢

図版36

宮ノ下遺跡第1次調査

縄紋土器



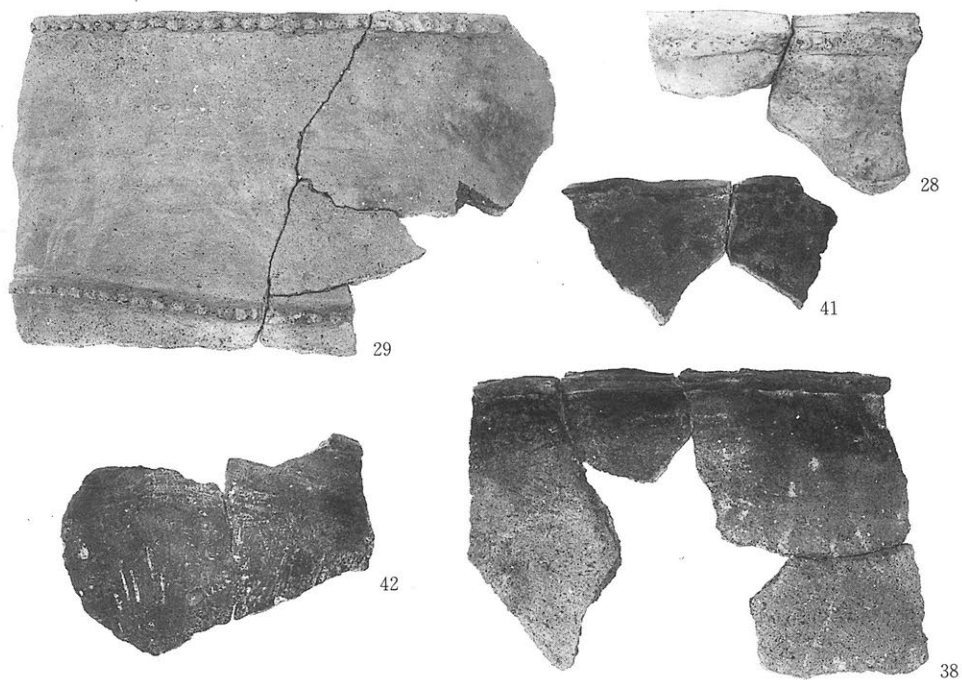
1 凸帯紋土器深鉢



2 凸帯紋土器深鉢



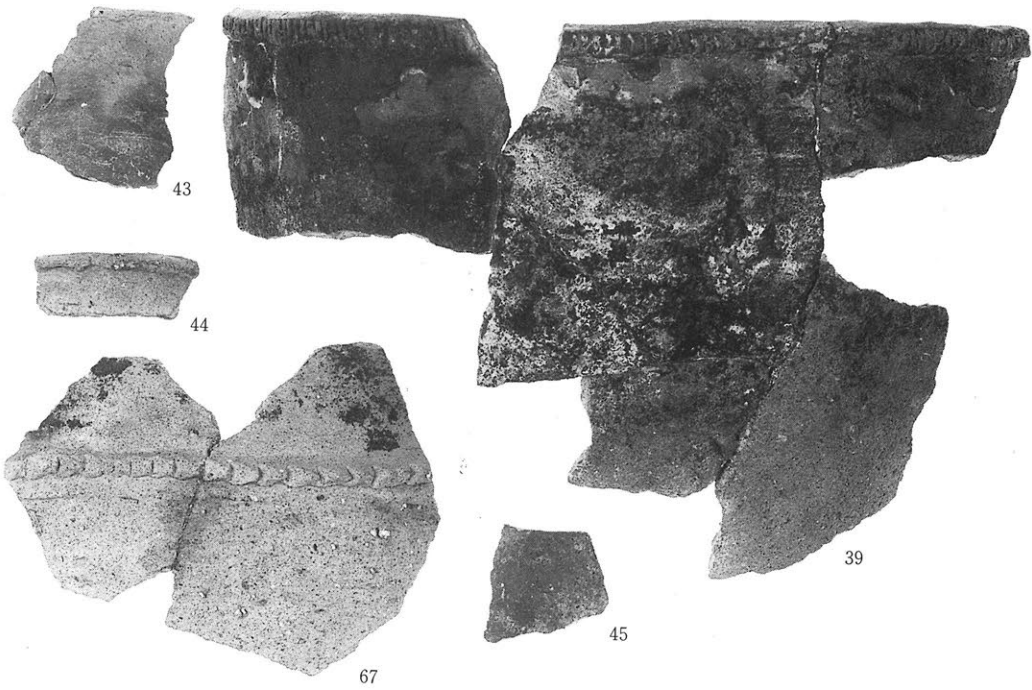
1 凸帯紋土器深鉢



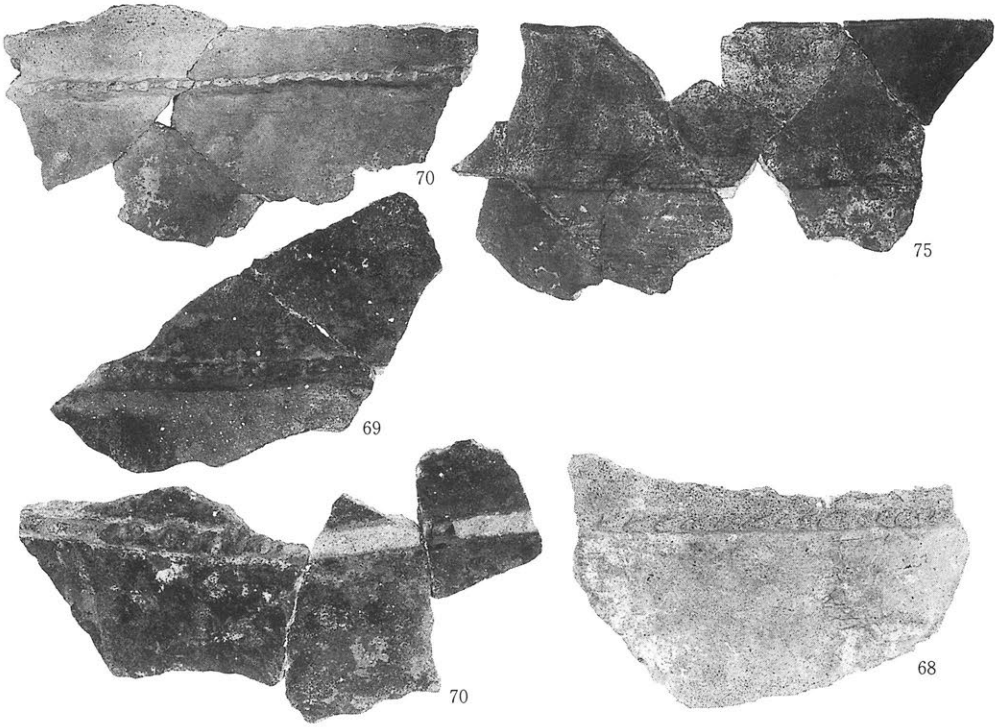
2 凸帯紋土器深鉢



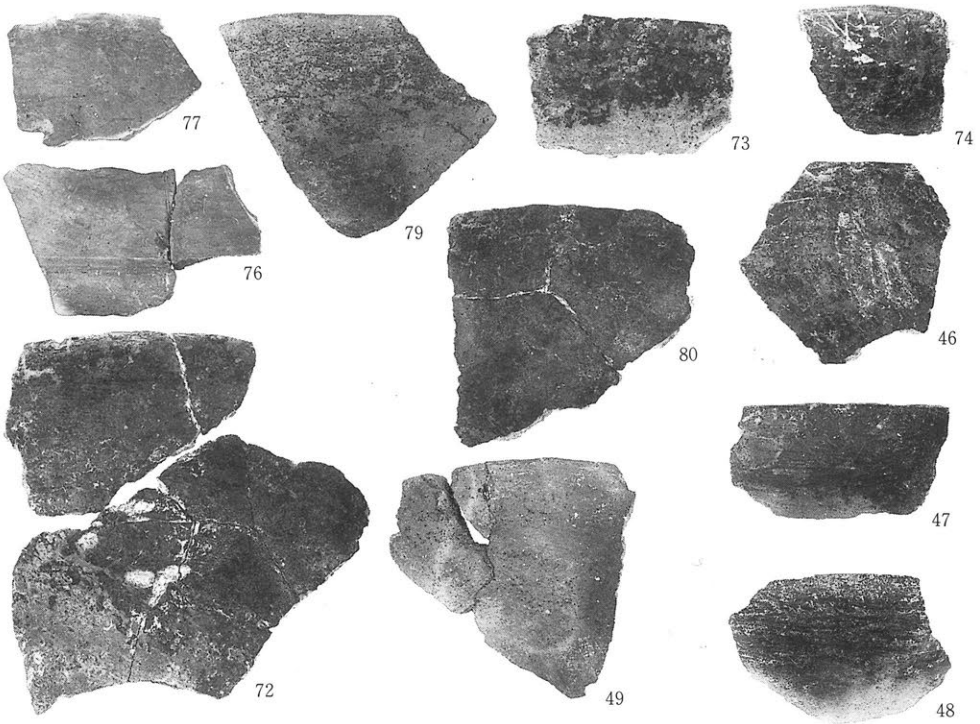
1 凸帯紋土器深鉢・線刻部分



2 凸帯紋土器深鉢

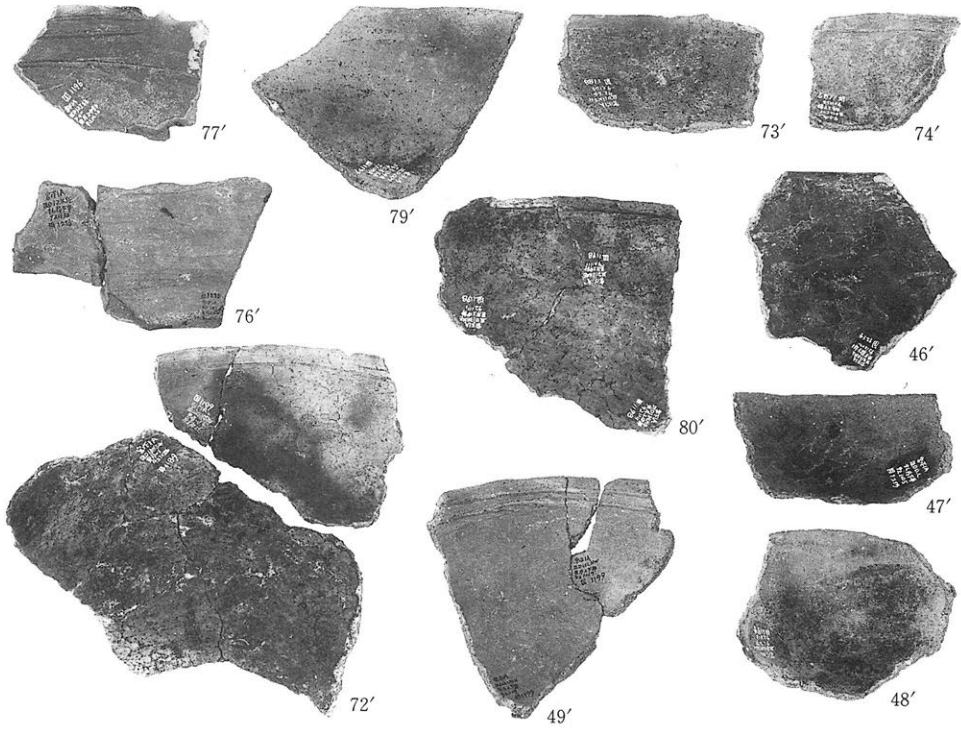


1 凸帯紋土器深鉢

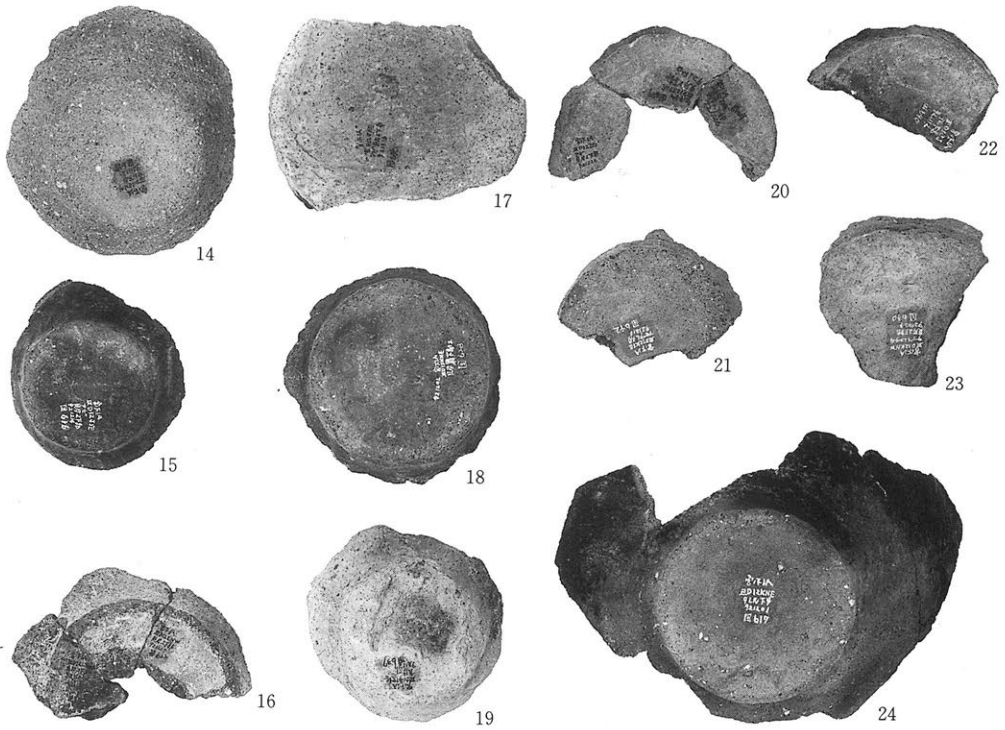


2 凸帯紋土器浅鉢(外面)

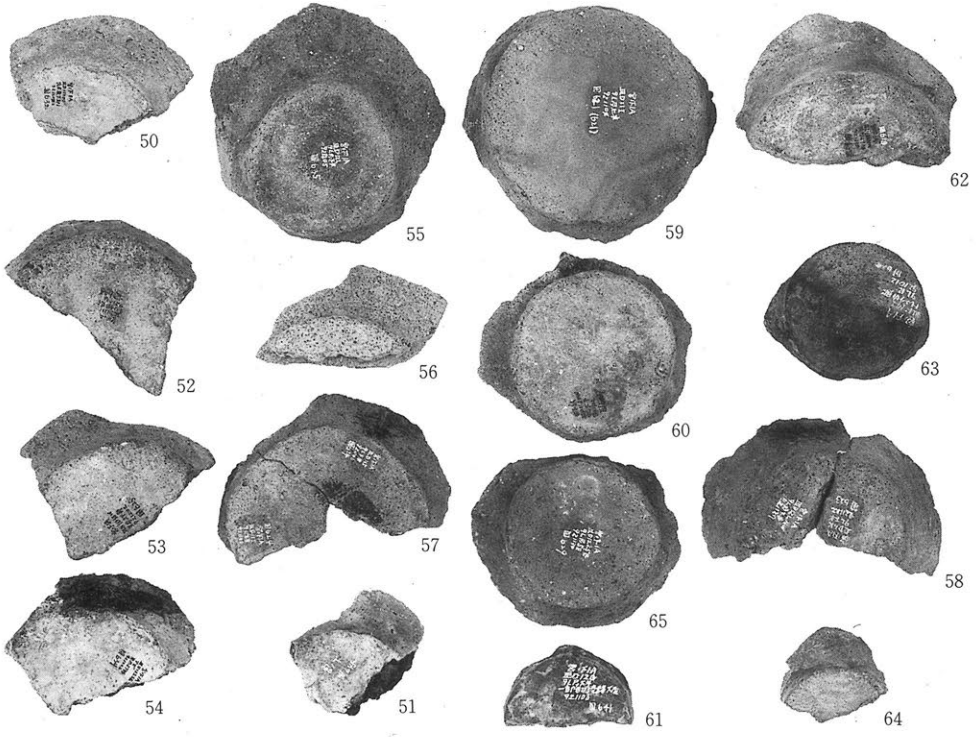




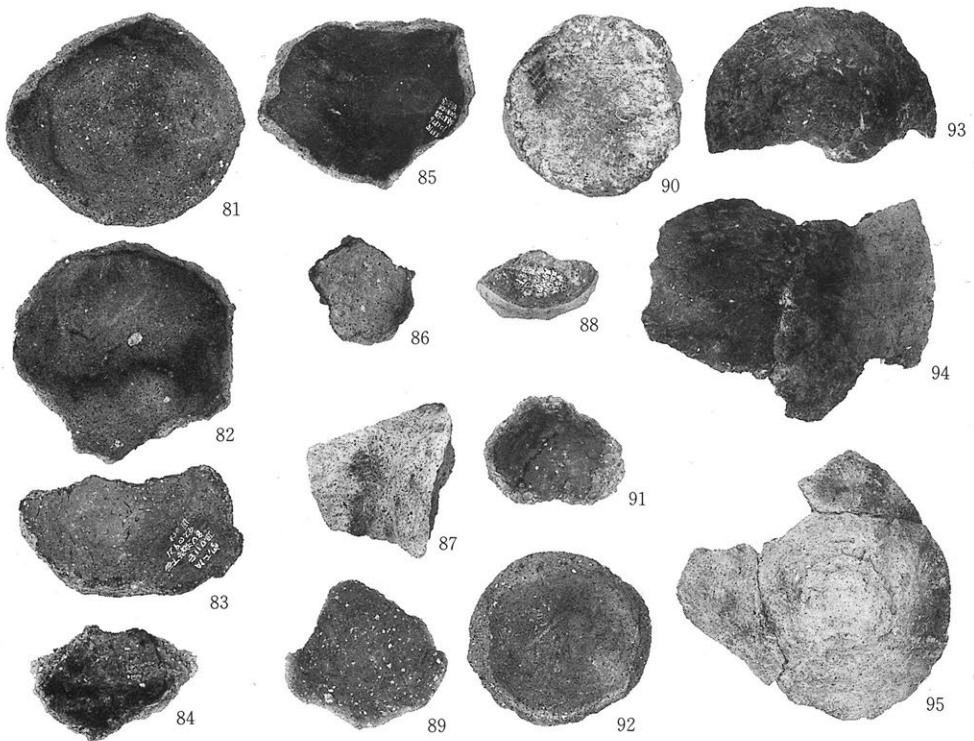
1 凸帯紋土器浅鉢(内面)



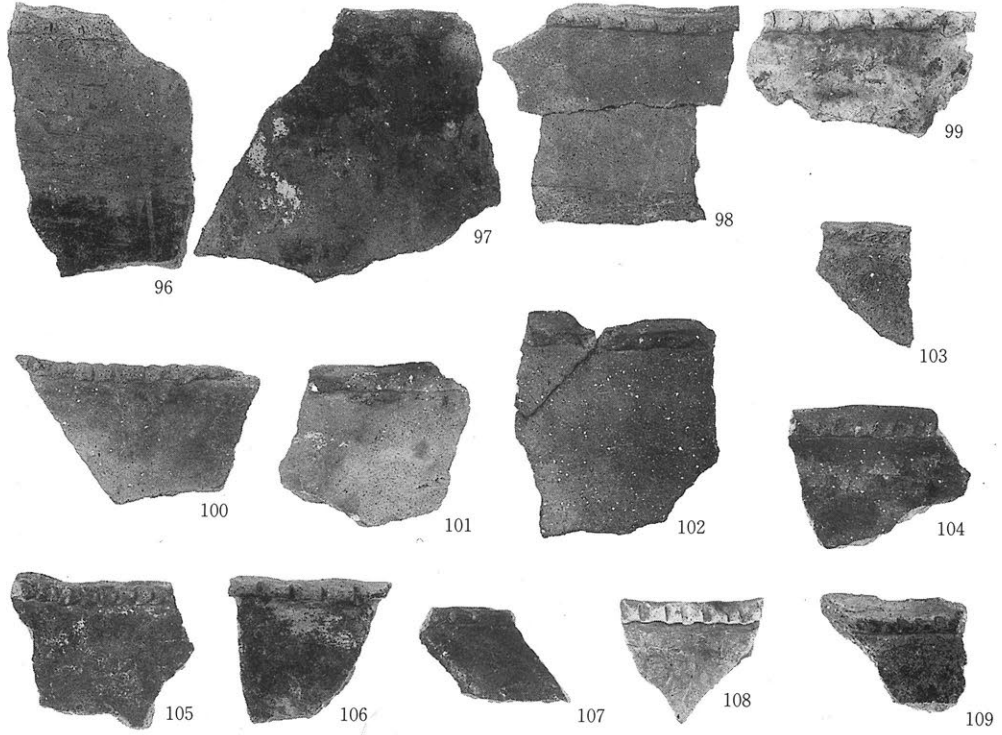
2 凸帯紋土器底部



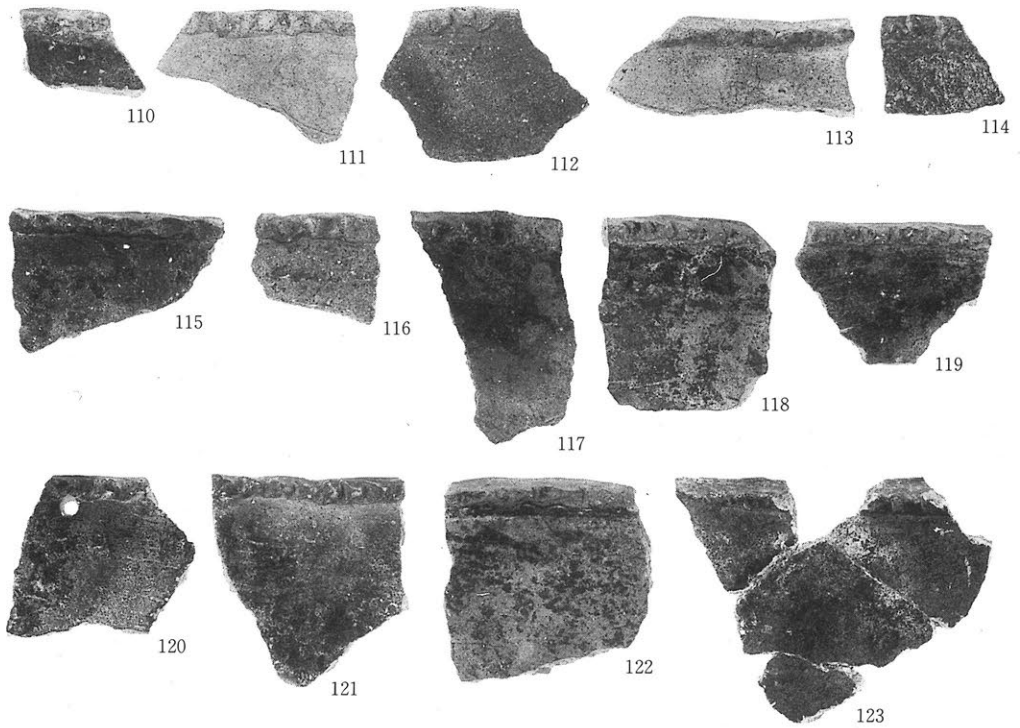
1 凸帯紋土器底部



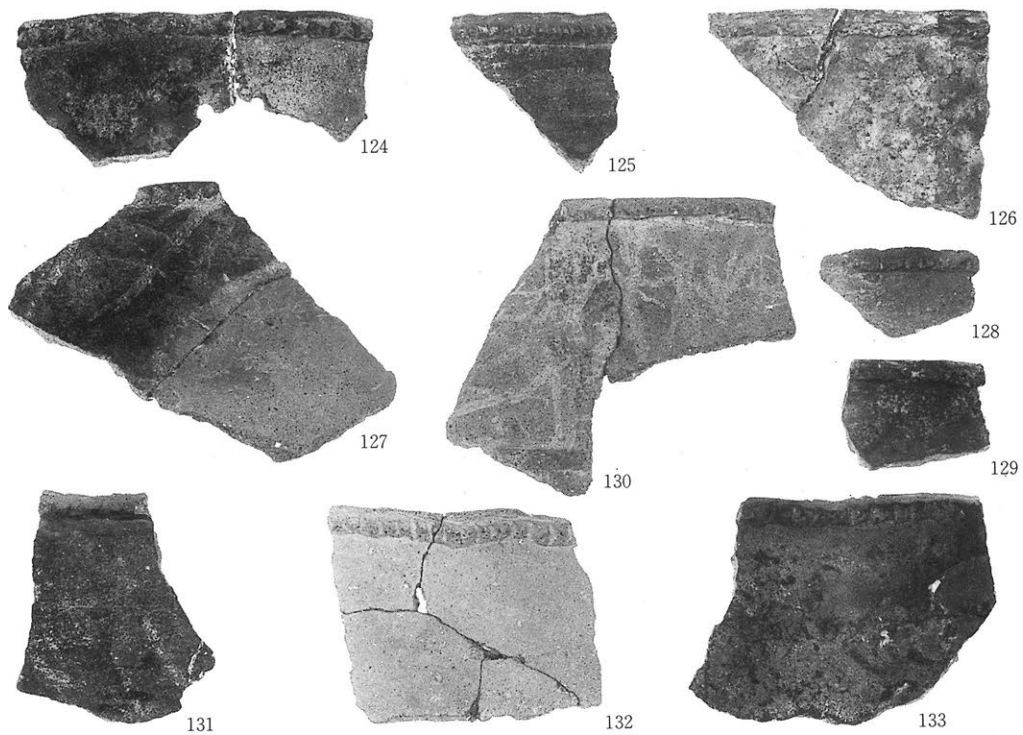
2 凸帯紋土器底部



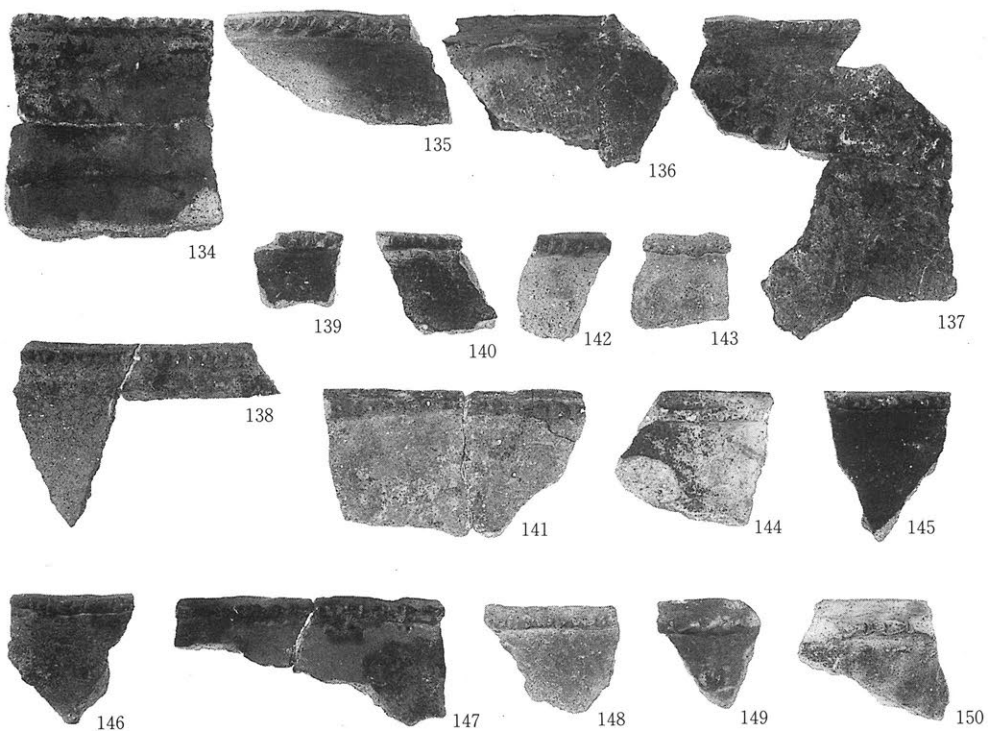
1 凸帯紋土器深鉢



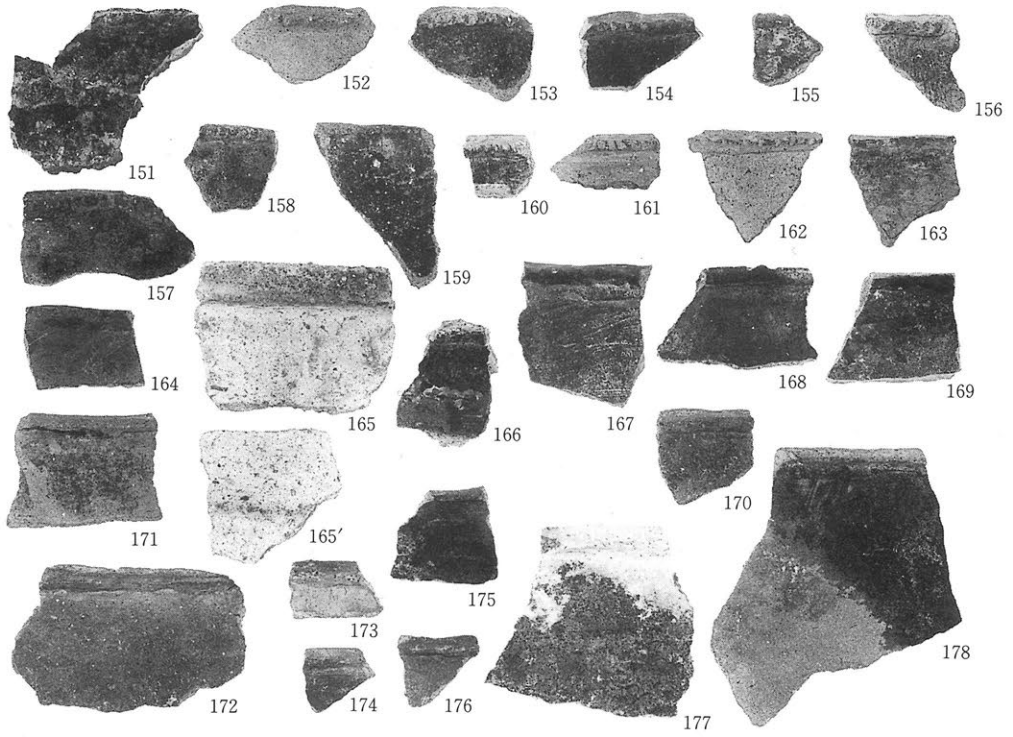
2 凸帯紋土器深鉢



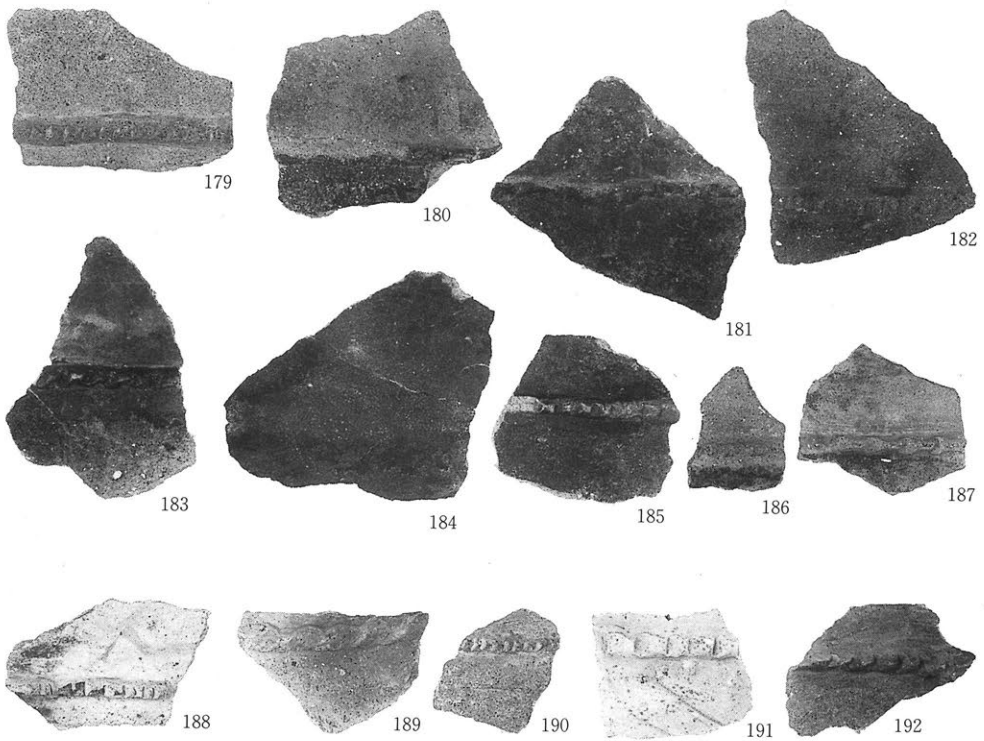
1 凸帯紋土器深鉢



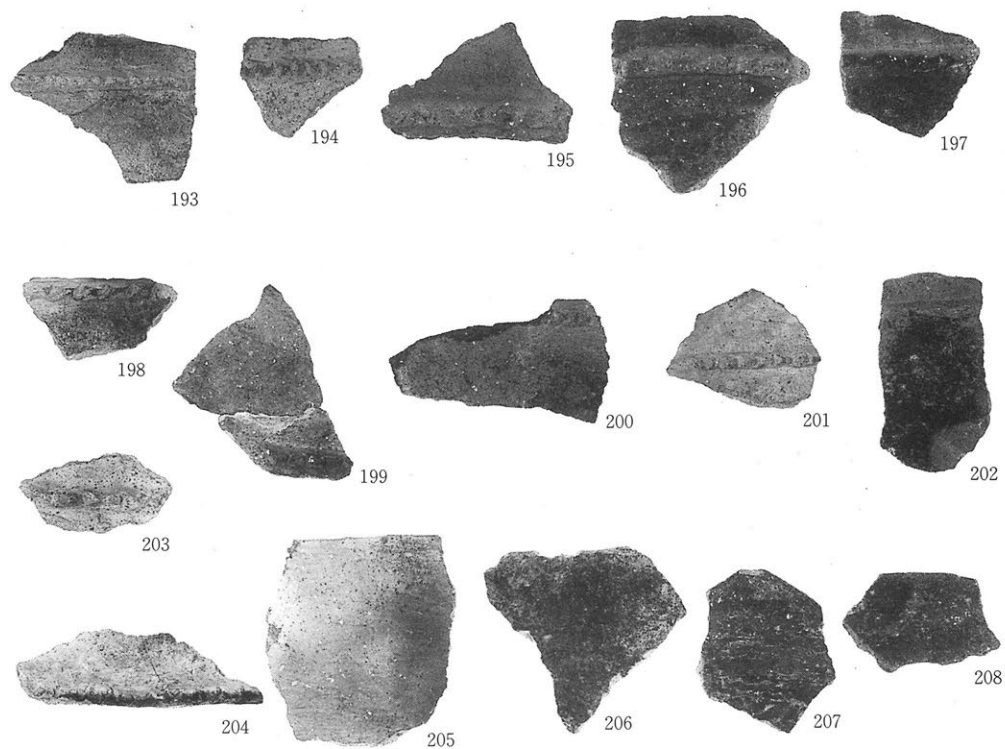
2 凸帯紋土器深鉢



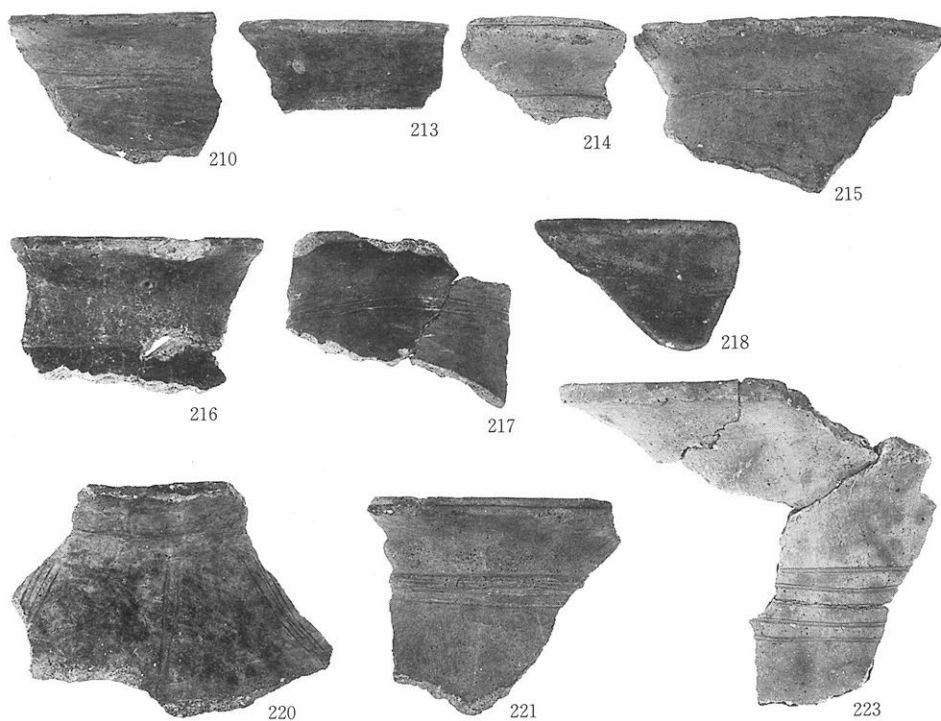
1 凸帯紋土器深鉢



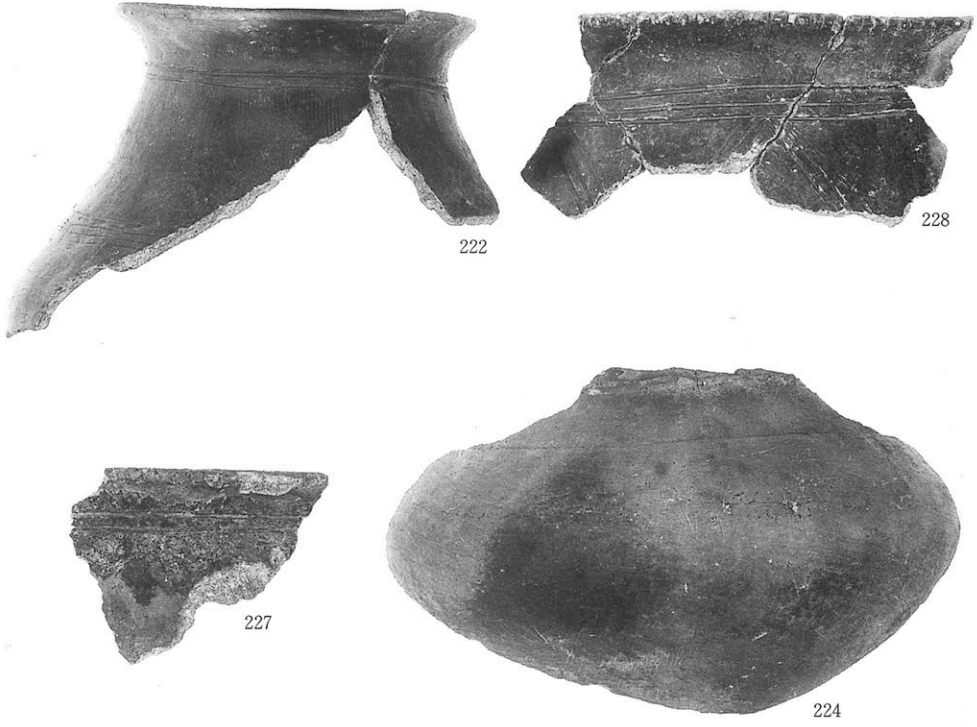
2 凸帯紋土器深鉢



1 凸帯紋土器深鉢(193~204) 浅鉢(205~208)



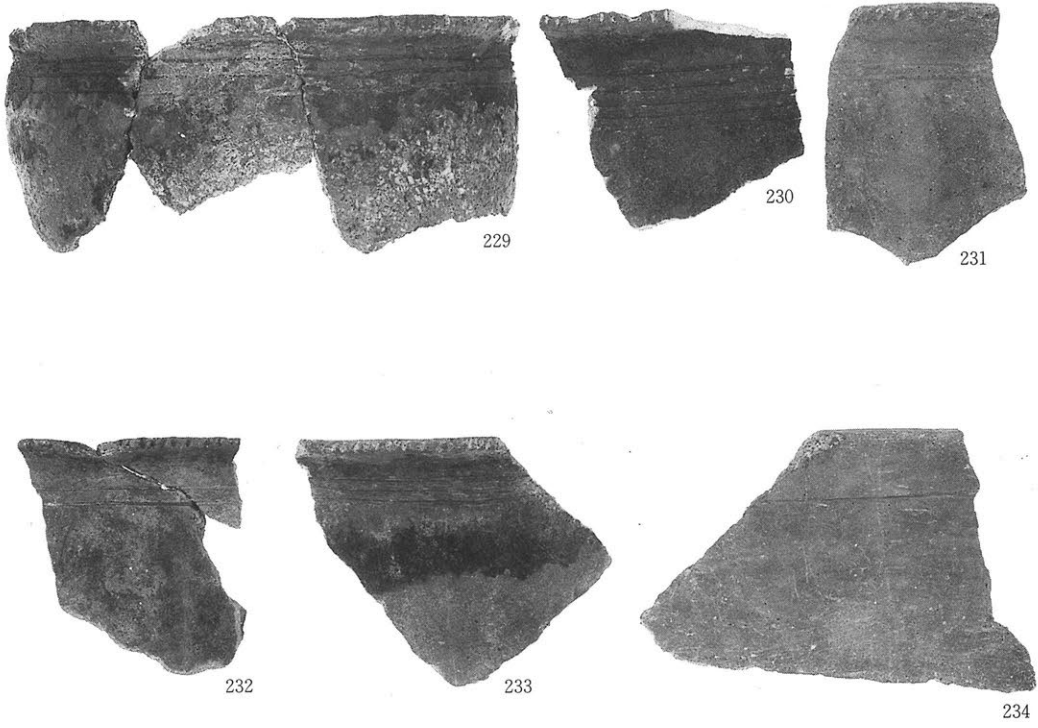
2 A地区貝層2中部(210・213・215~218・223) 第9U層(214・220・221)



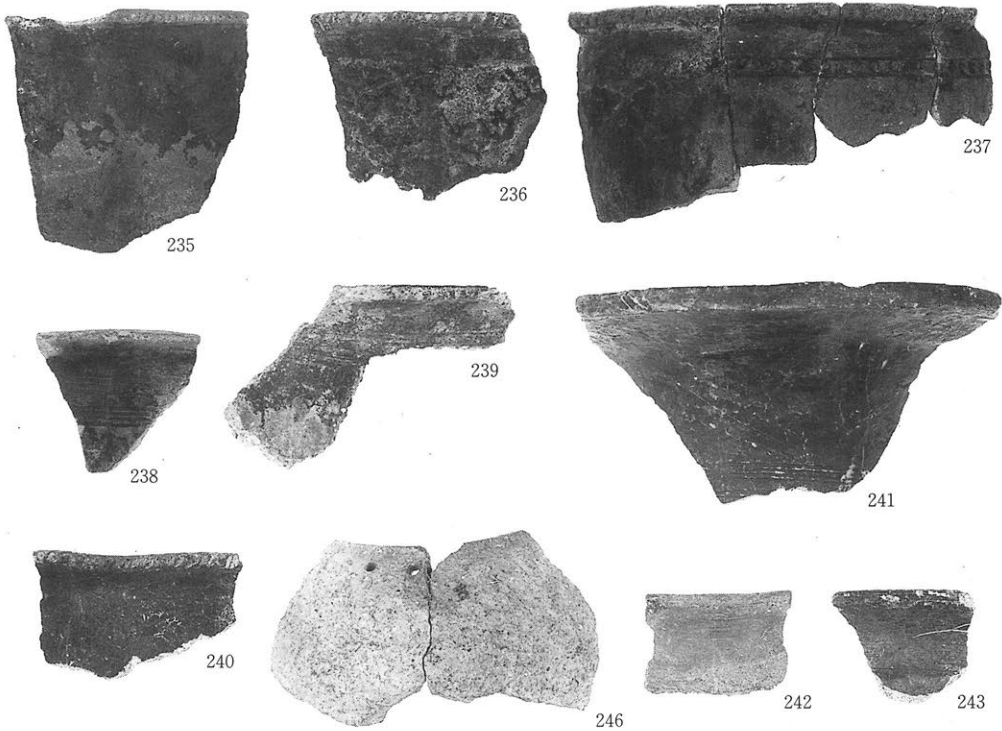
1 A地区貝層2中部



2 A地区貝層2中部

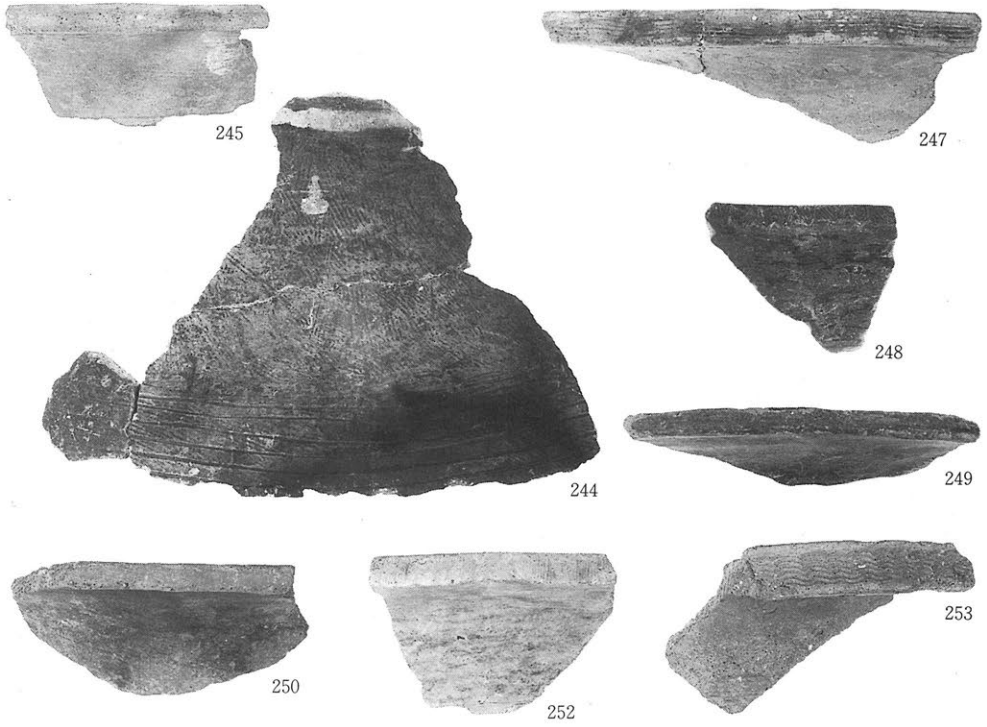


1 A地区貝層2中部(229~233) 第9U層(234)

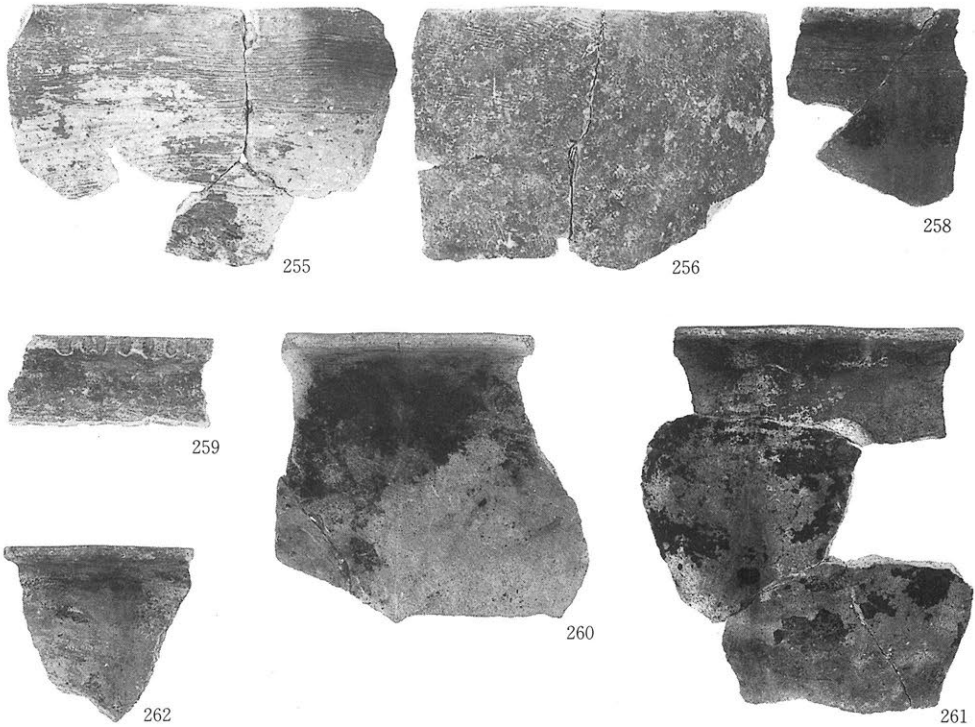


2 A地区貝層2中部(237・239・240) 第9U層(235・236・242・243・246) 貝層2上部(238)

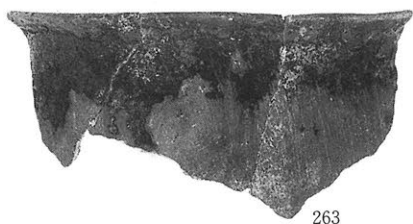




1 A地区貝層2上部



2 A地区第9U層(255・260・261) 貝層2上部(256・258・259・262)



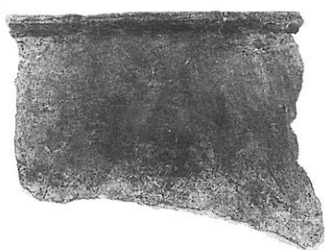
263



264



265



267

1 A地区具層2上部



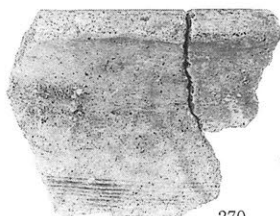
266



268



269

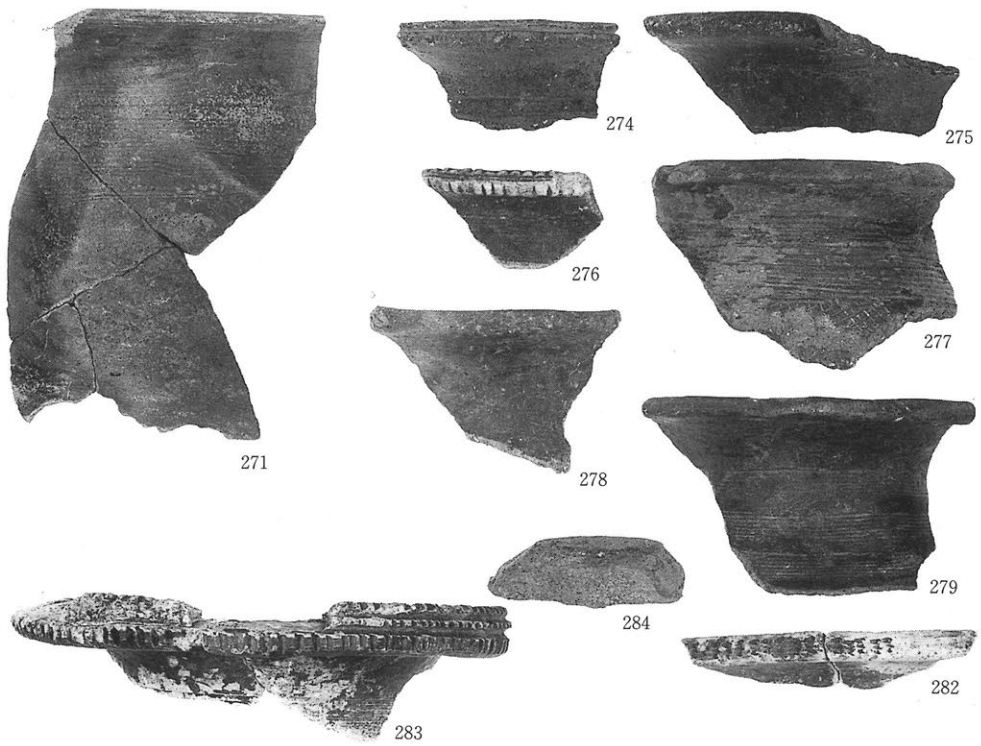


270

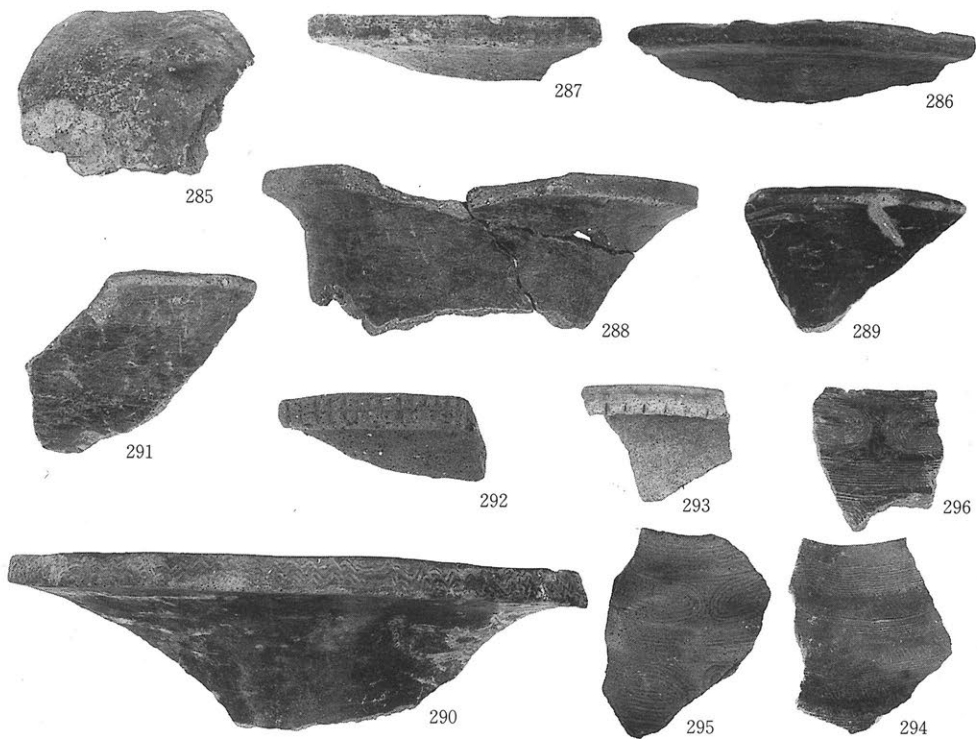


273

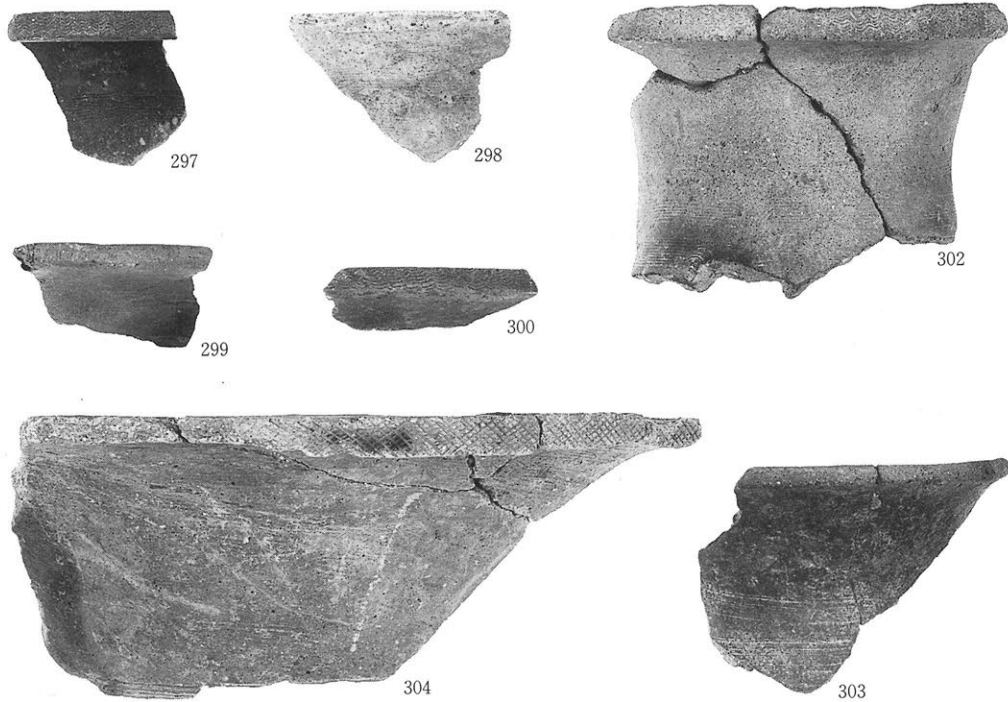
2 A地区具層2上部(266) 第8M層(268~270・273)



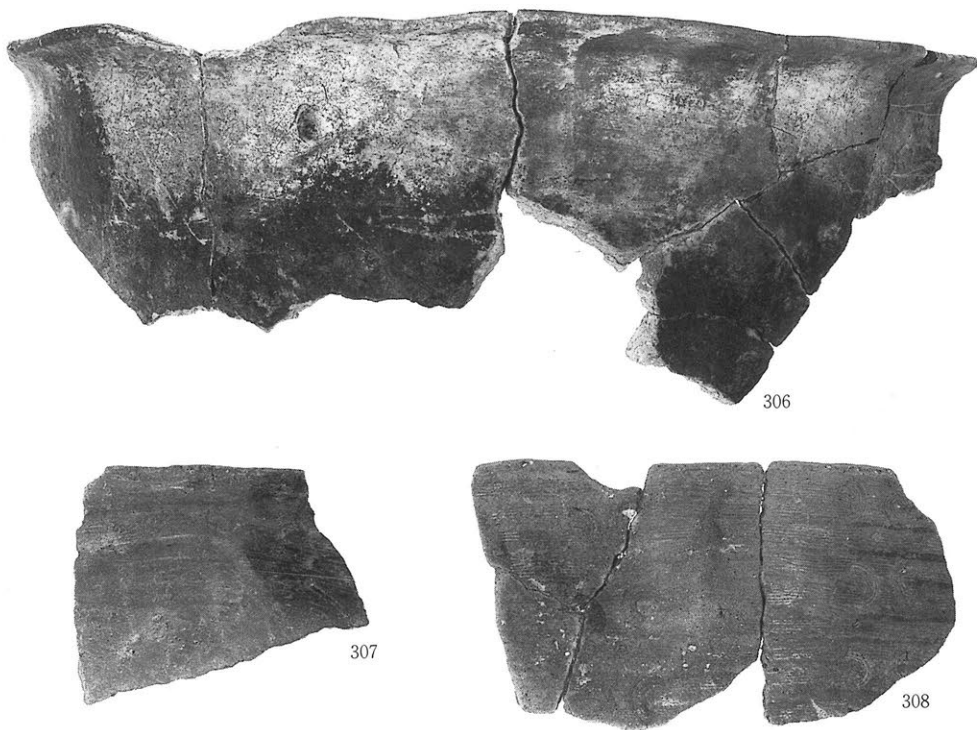
1 A地区第8M層



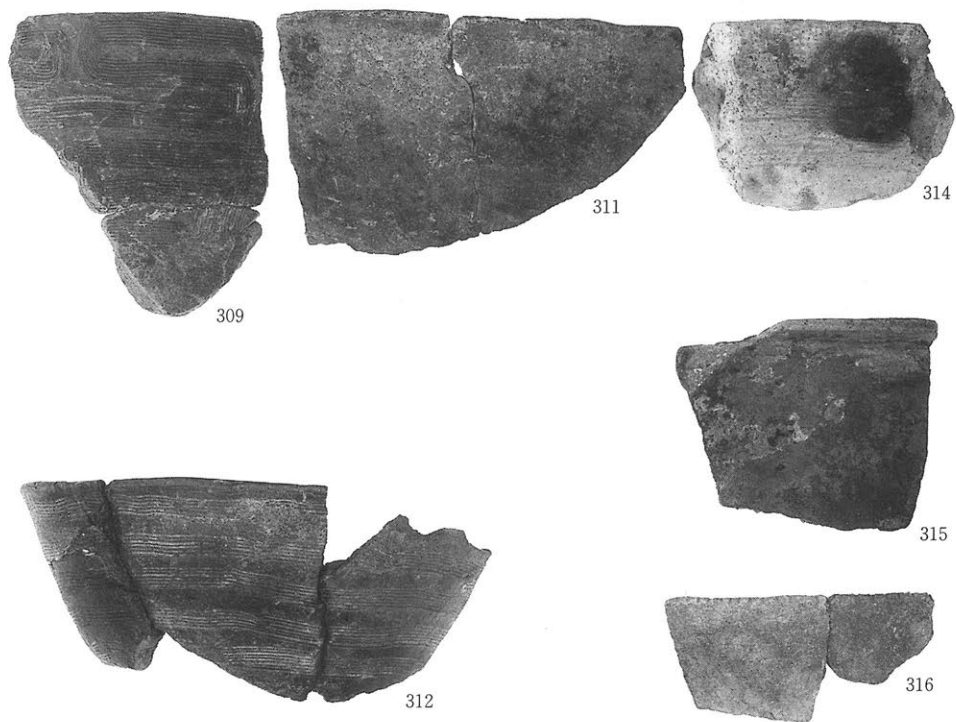
2 A地区第8M層



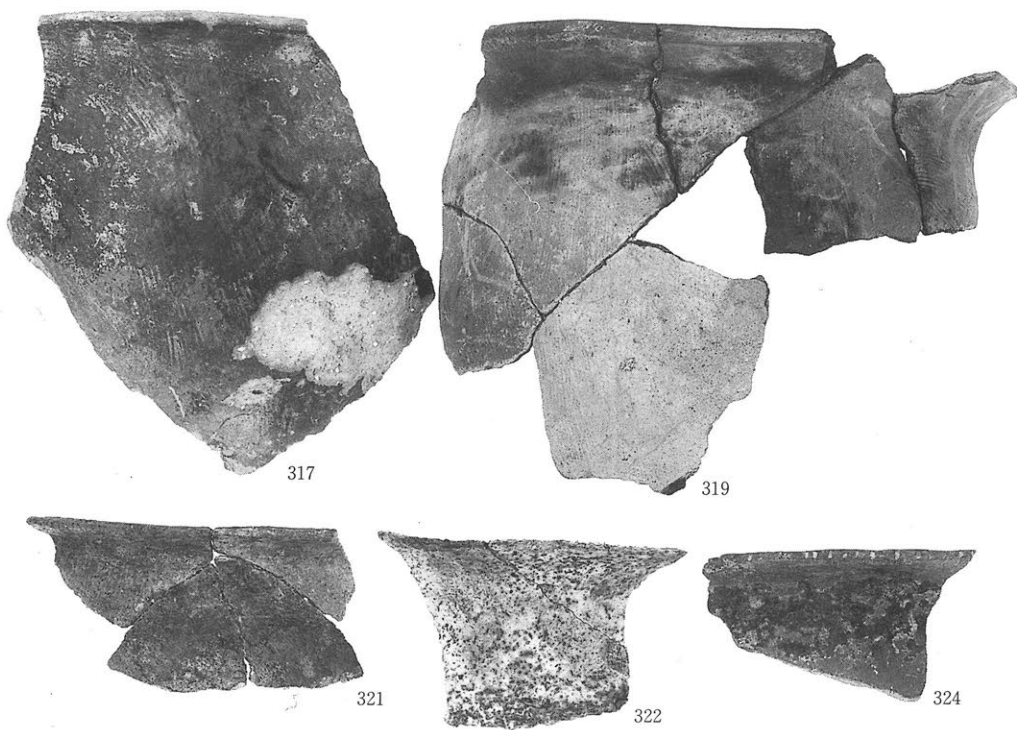
1 A地区第8M層



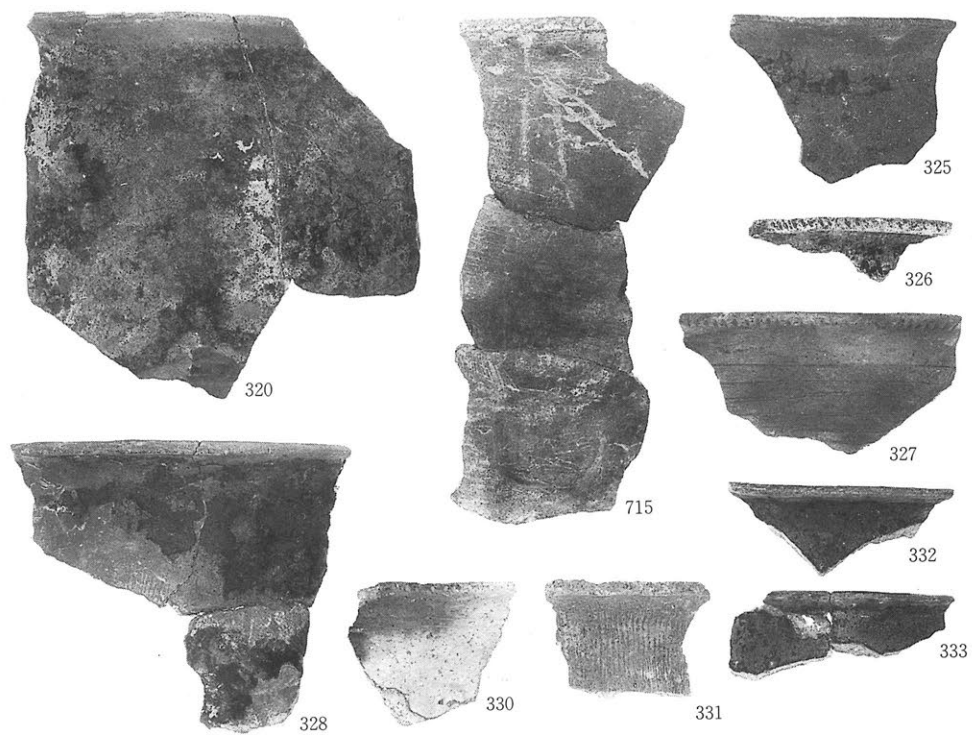
2 A地区第8M層



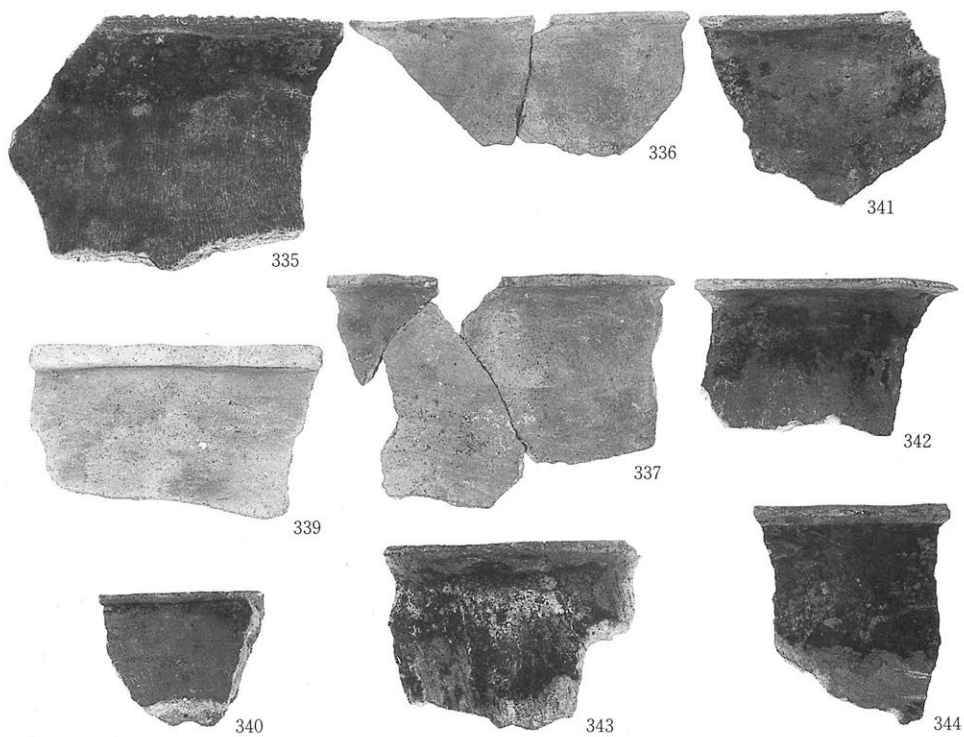
1 A地区第8M層



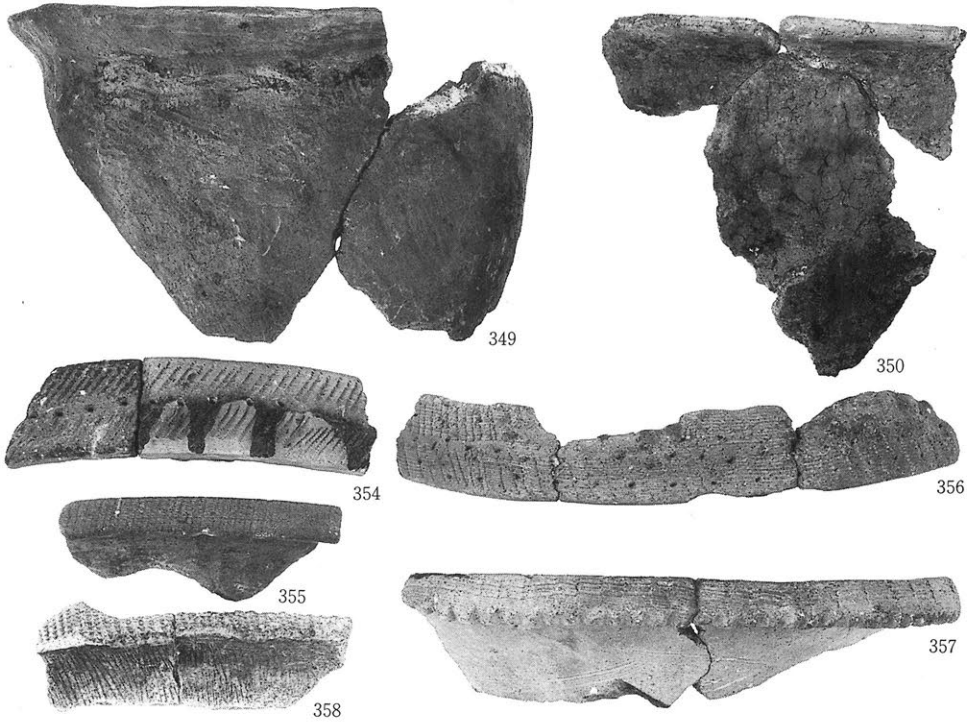
2 A地区第8M層



1 A地区第8M層



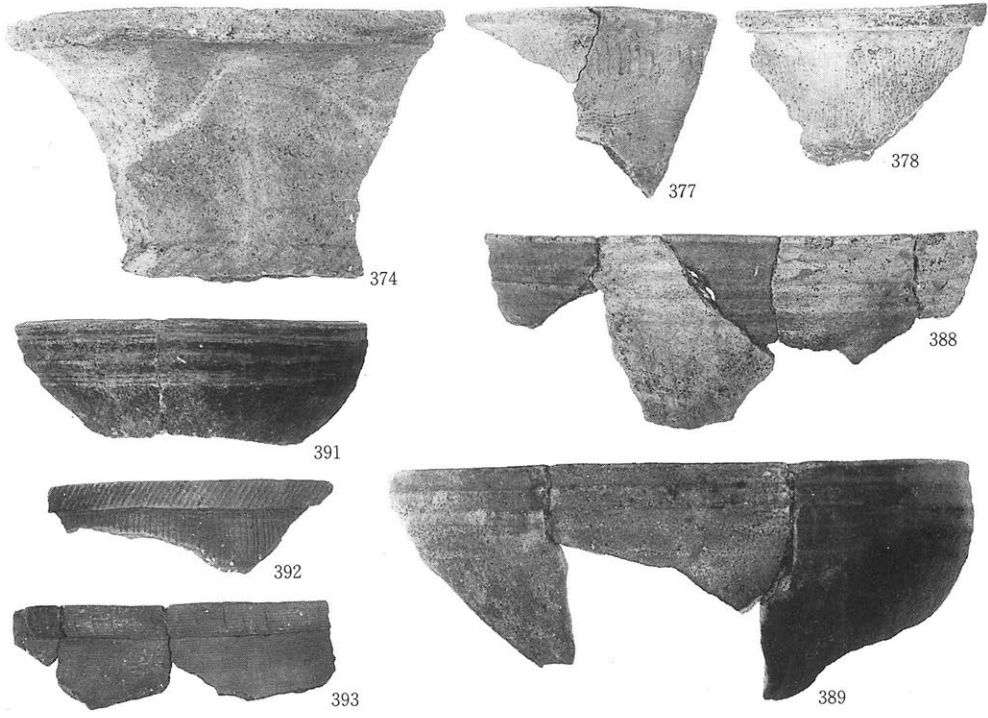
2 A地区第8M層



1 A地区第8M層(349・350) 第8U層(354~358)



2 A地区第8U層

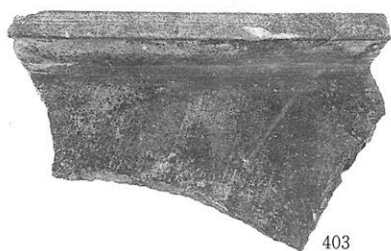


1 A地区第8U層



2 A地区第8U層

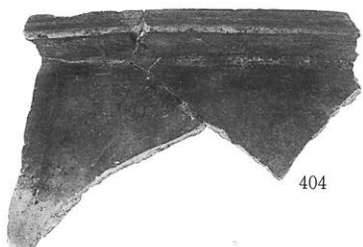




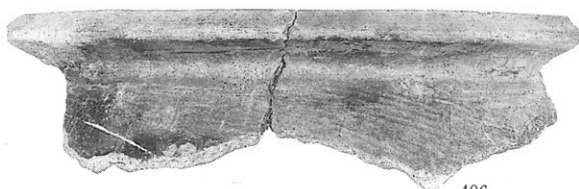
403



405



404



406



407

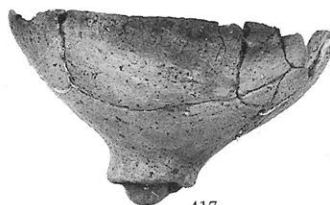
1 A地区第8U層



423



420



417



415

2 A地区第8U流路内(自然流路上部堆積層)



424



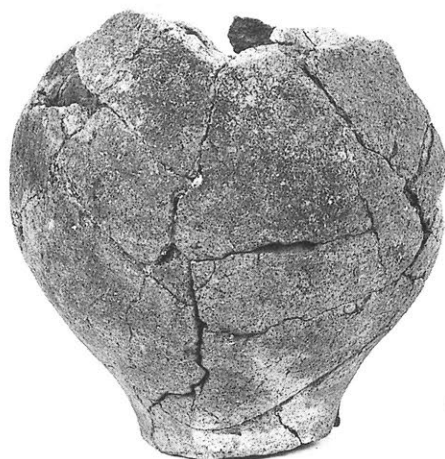
425



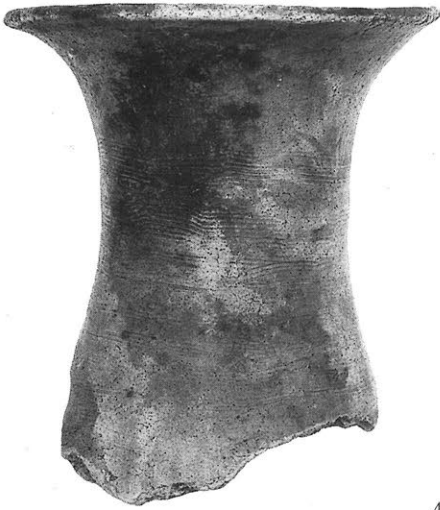
433



436



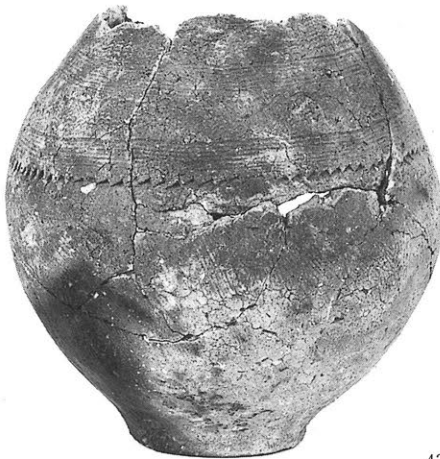
441



434



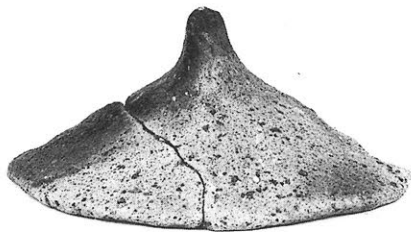
437



439



442



446



445



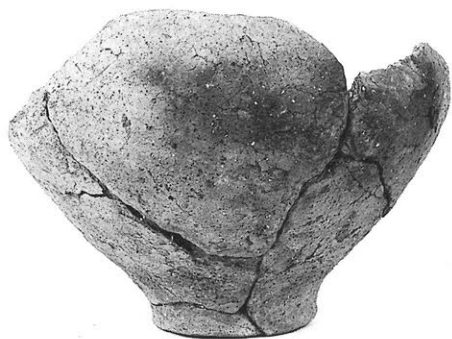
438



435



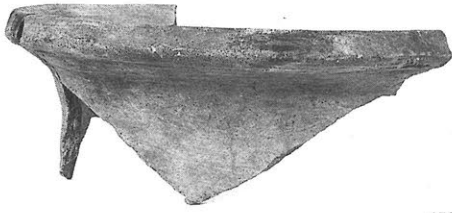
440



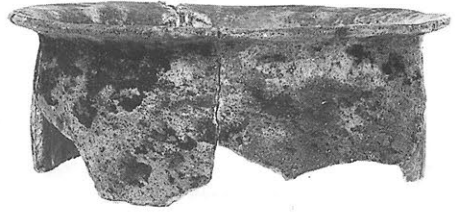
459



460



450



473



464



463



462



477



487



484



510



488



505



512



516



525



515



518



536



485



559



560



561



562



553



530





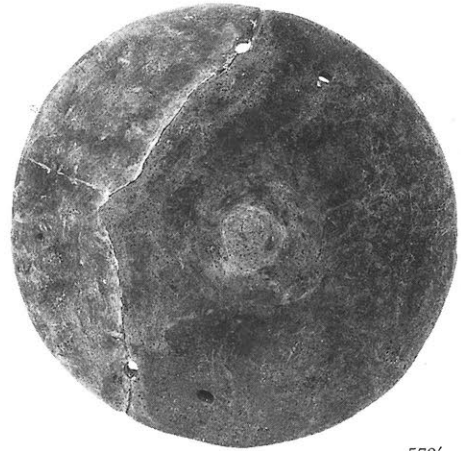
573



572



567



572'



587



585



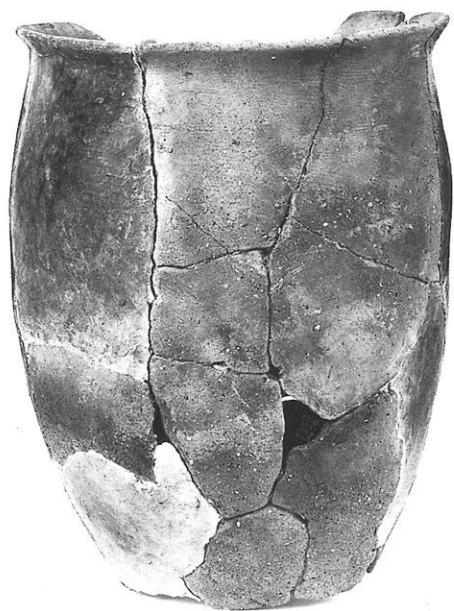
599



607



594



603



608

SK51(594) SK55(603) SK59(607) SK67(608)



628



619



606



604



624



612



630



632



627



620



629



625



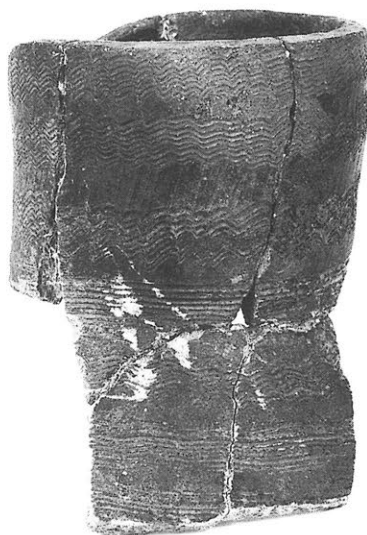
648



647



656



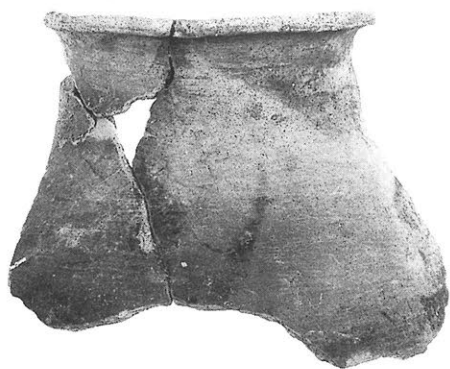
655



664



662



654



658



687



690



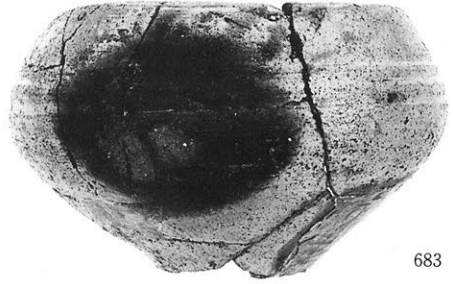
659



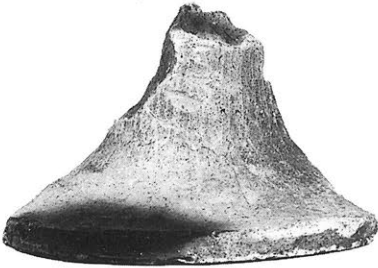
669



686



683



685



677



688



702



689



699



700



716

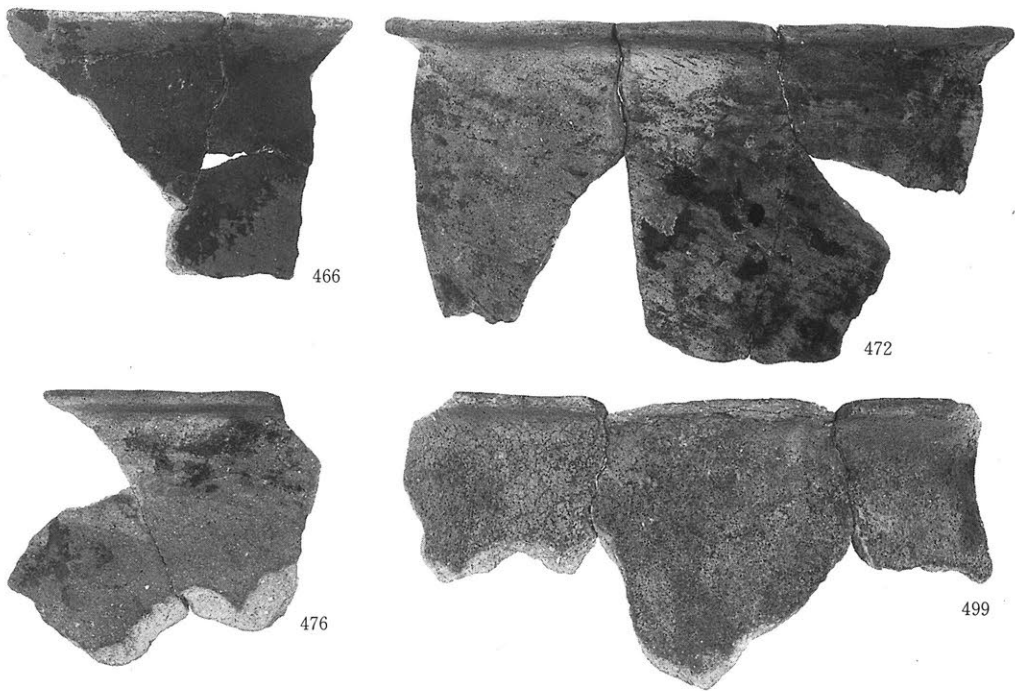


701

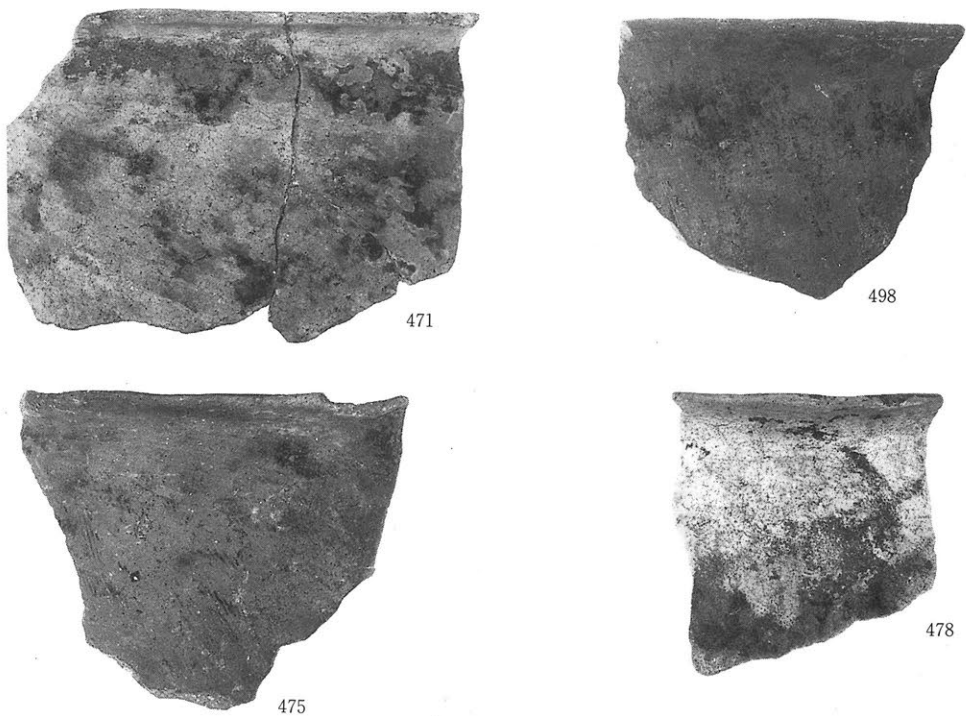


709

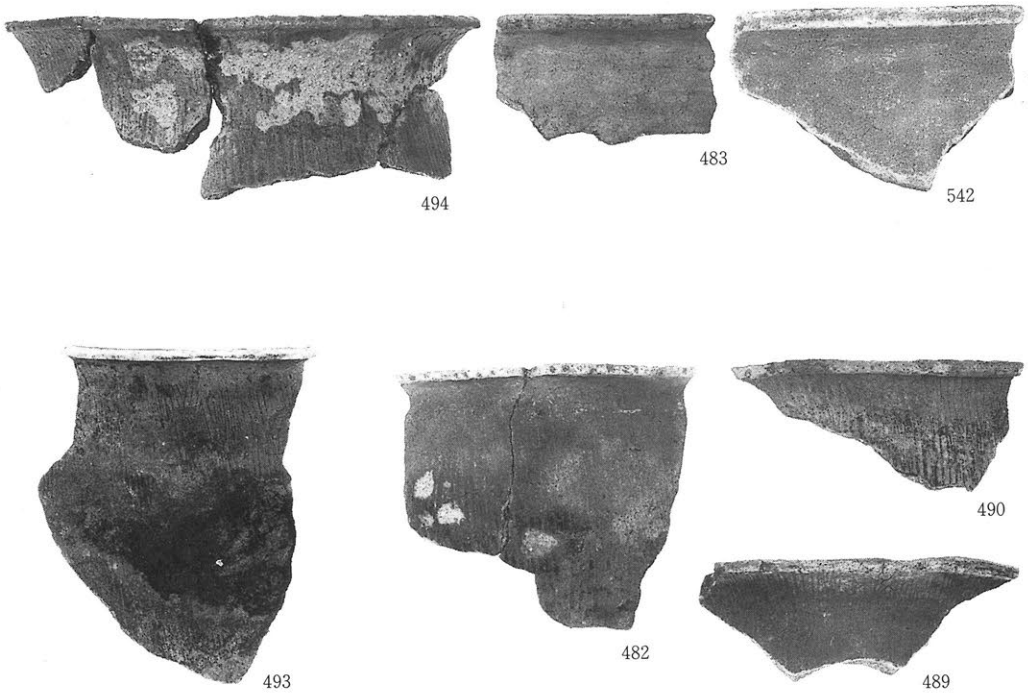




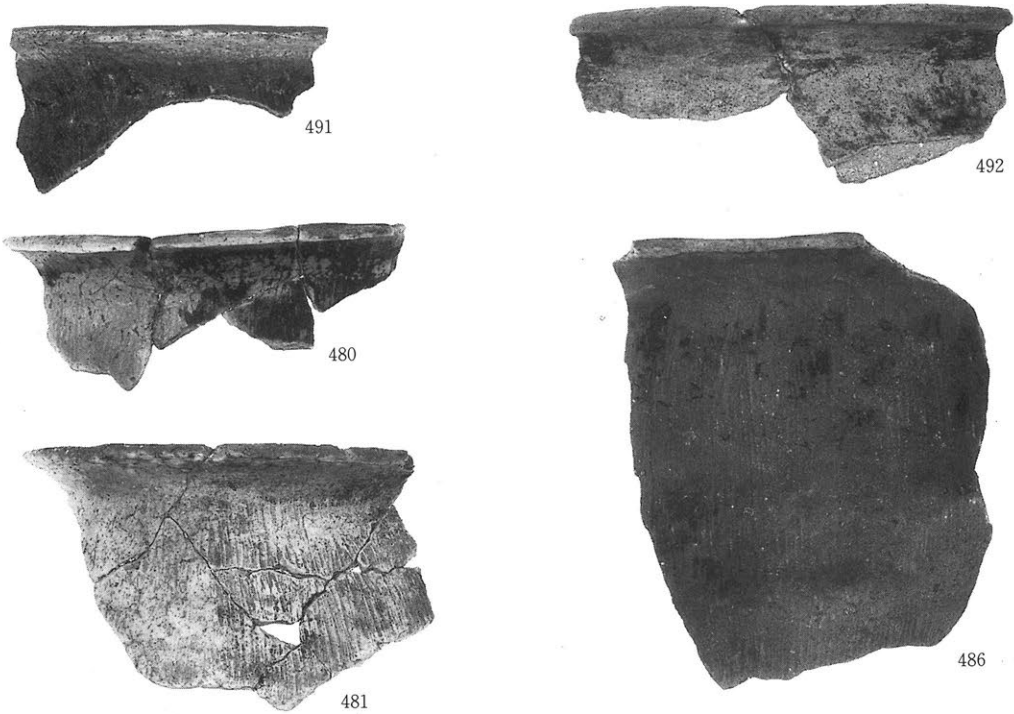
1 SD69(466・472・476・499)



2 SD69(471・475・478・498)



1 SD69(482・483・489・490・493・494) SD72(542)



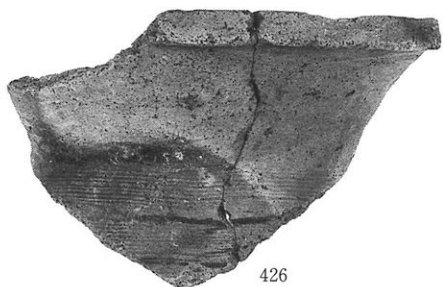
2 SD69(480・481・486・491・492)



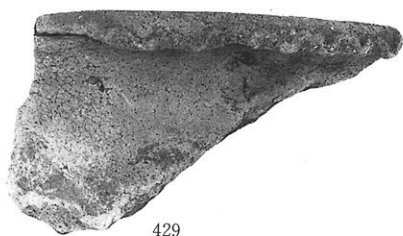
427



428

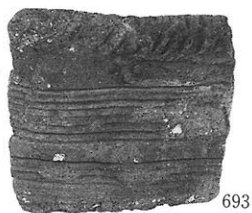


426



429

1 SD69(426~429)



693



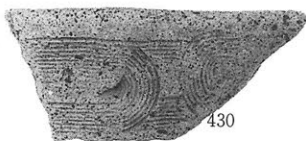
692



578



580



430



695



694

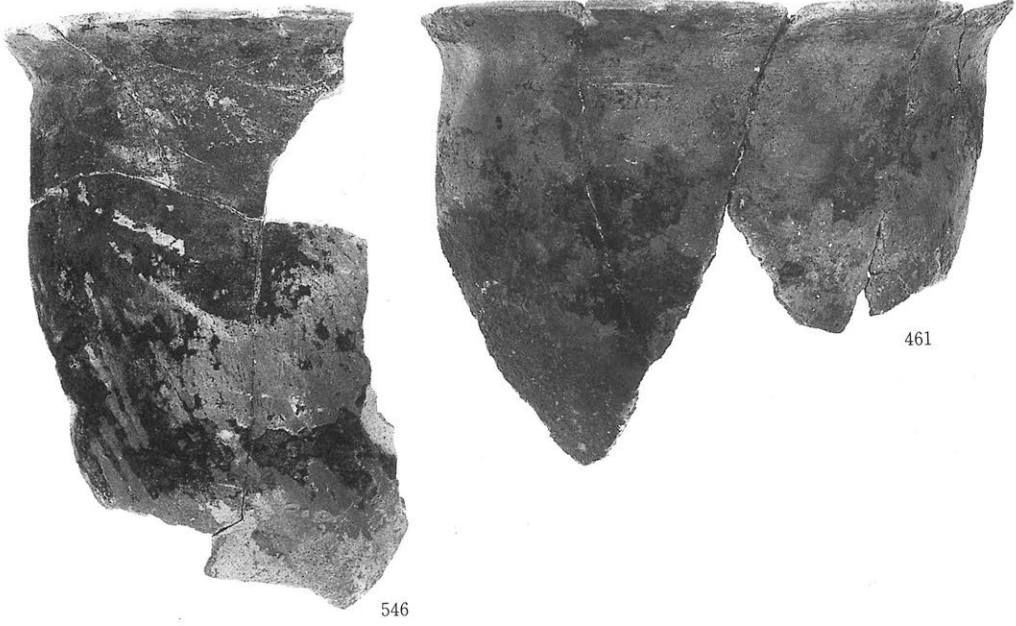


574

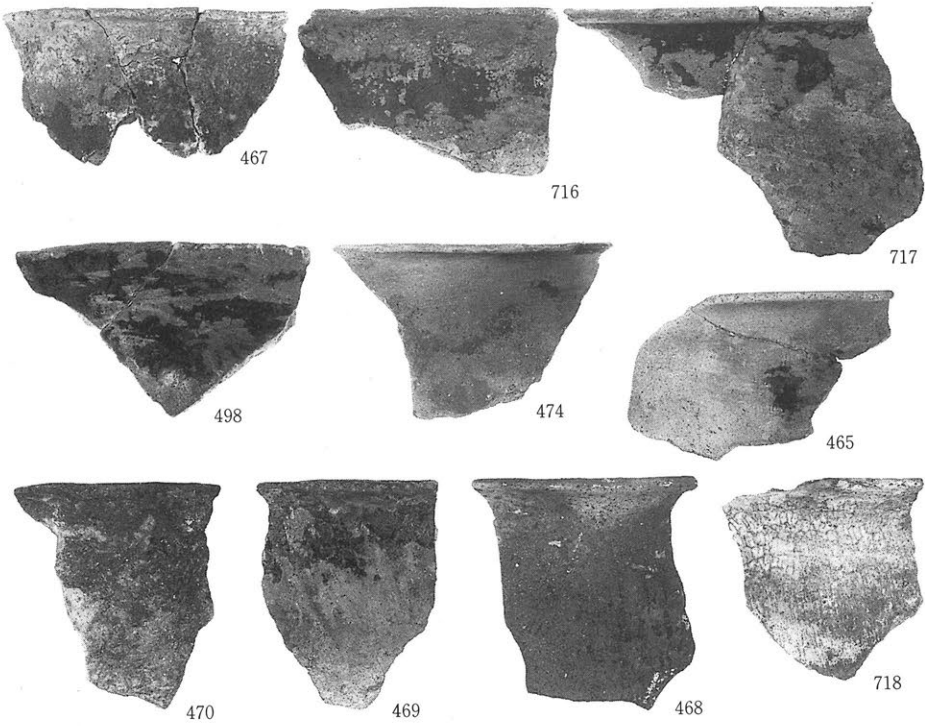


579

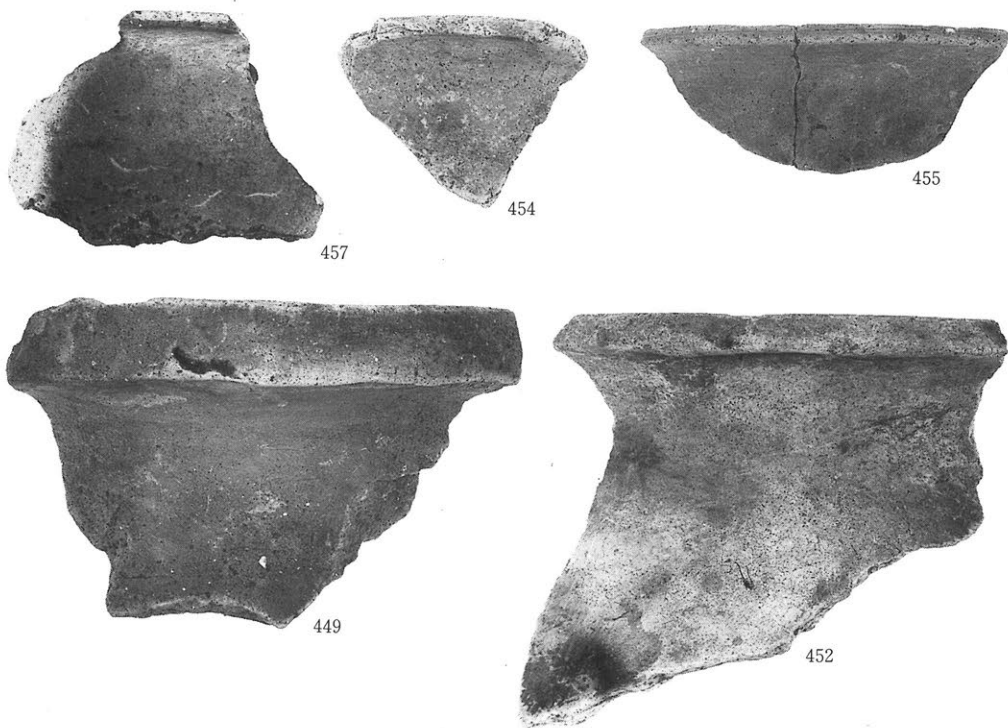
2 第8層下層(692~695) SD69(430) SD72(416~419)



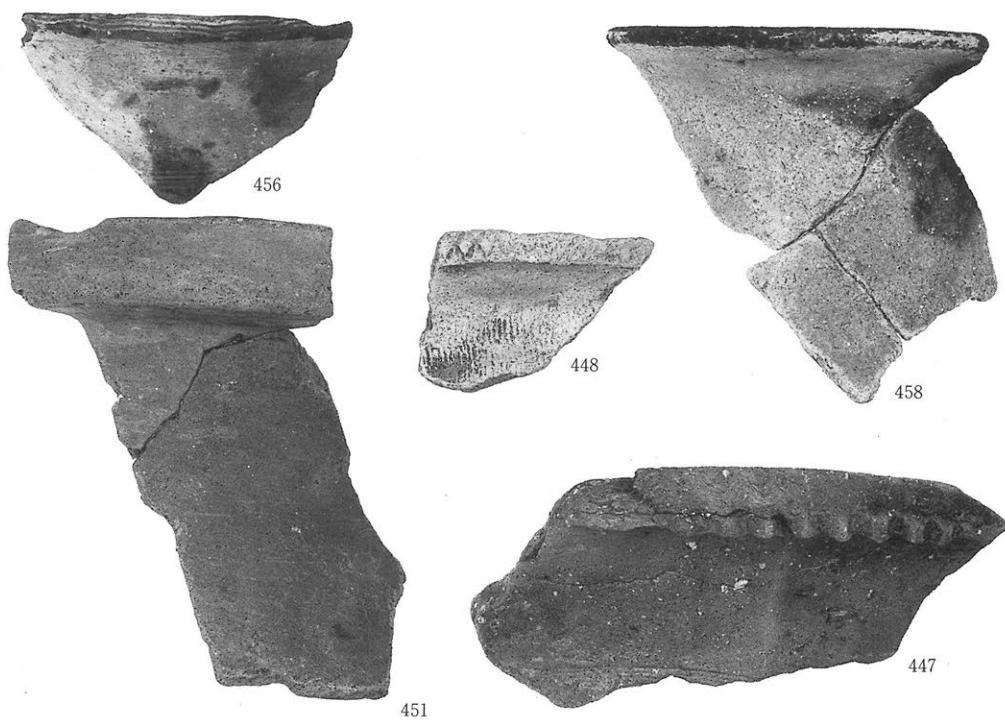
1 SD69(461) SD72(546)



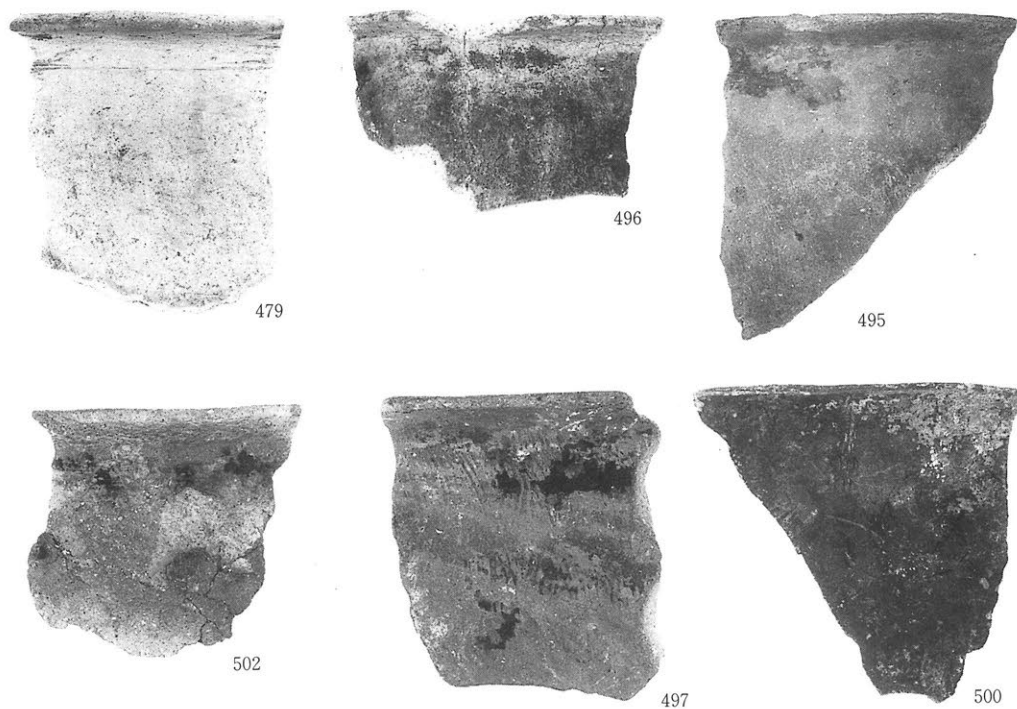
2 SD69(465・467~470・474・498・716・717・718)



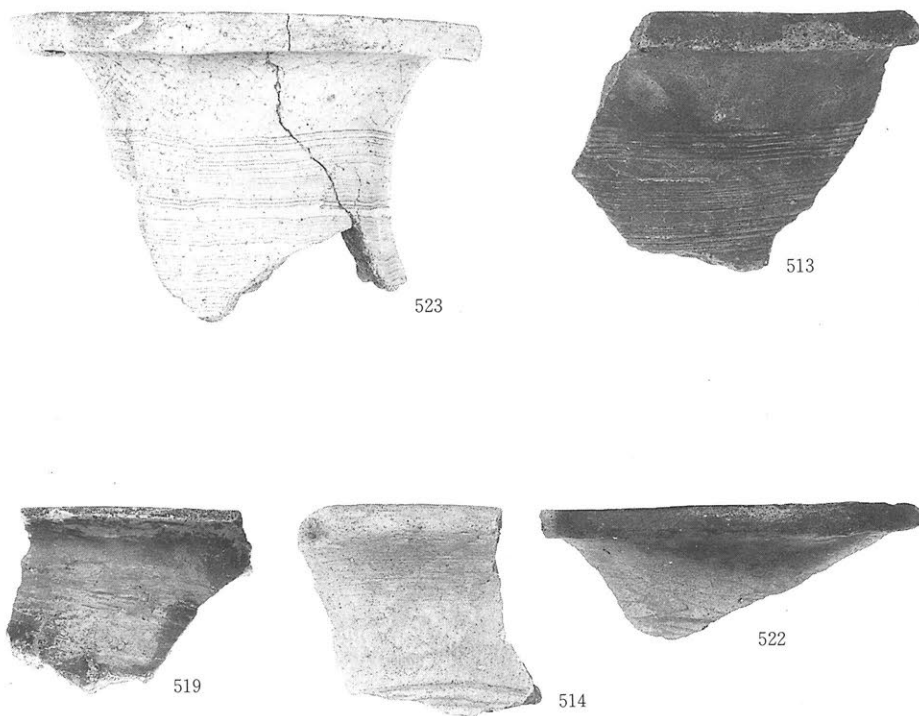
1 SD69(454・457) SD72(449・452・455)



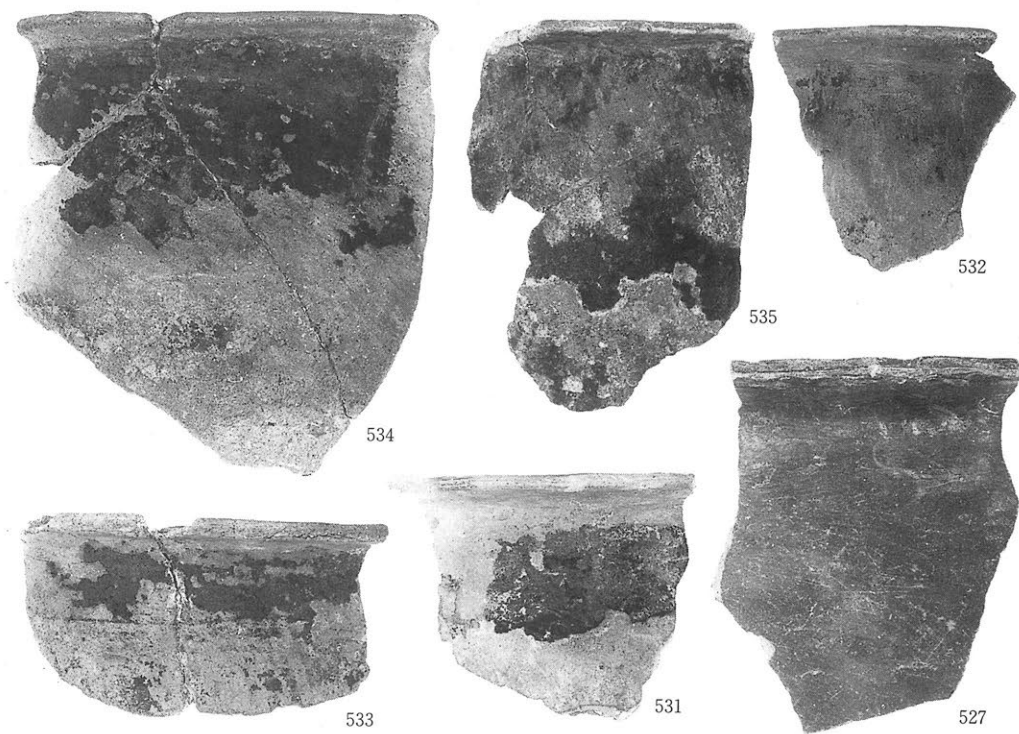
2 SD69(456・458) SD71(447) SD72(448・451)



1 SD69(479・495~497・500・502)



2 SD72(513・514・519・522・523)



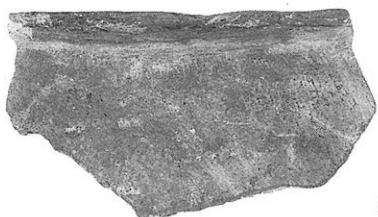
1 SD72(527・531~535)



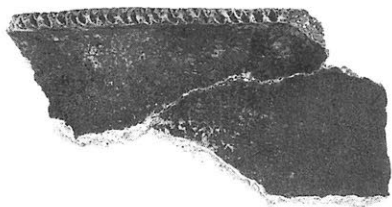
2 SD61(581) SD72(528・529)



540



544



543

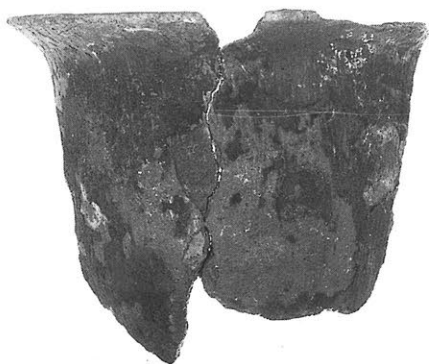


539



538

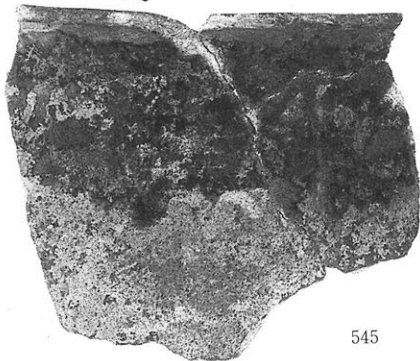
1 SD72(538~540・543・544)



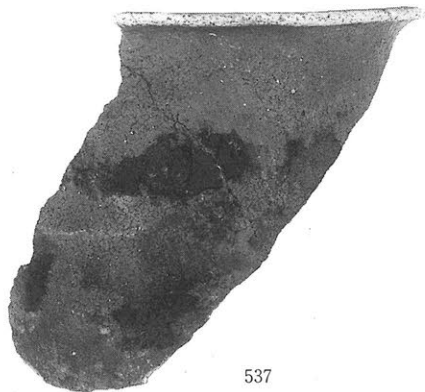
541



547



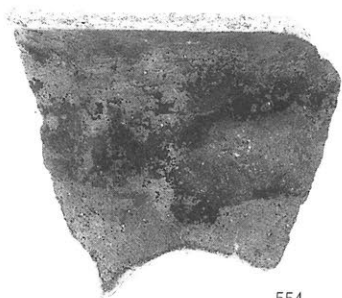
545



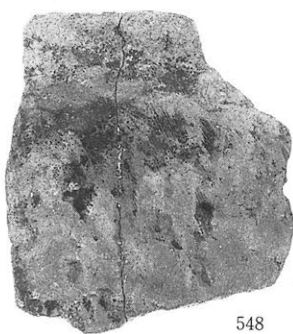
537

2 SD72(537・541・545・547)

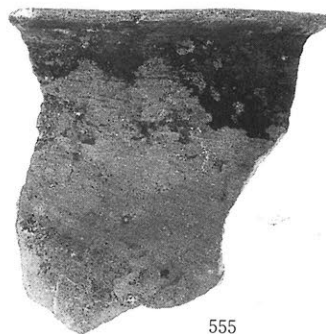




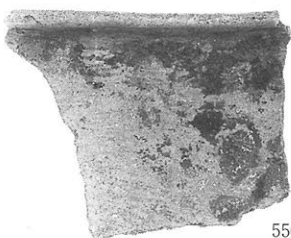
554



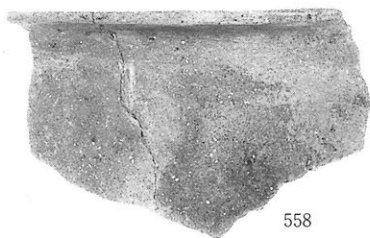
548



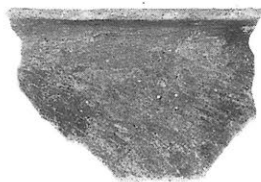
555



550



558

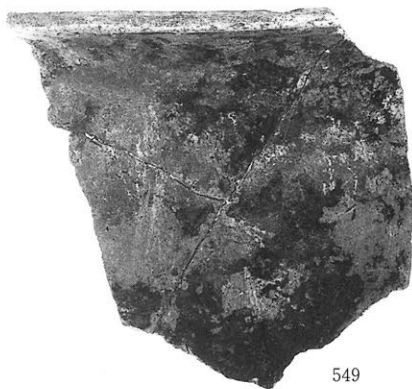


552

1 SD72(548・550・552・554・555・558)



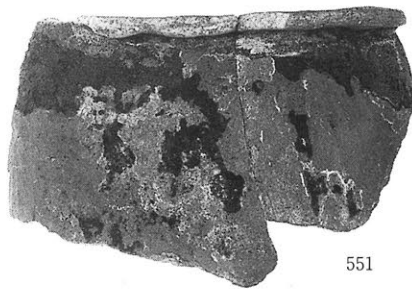
556



549

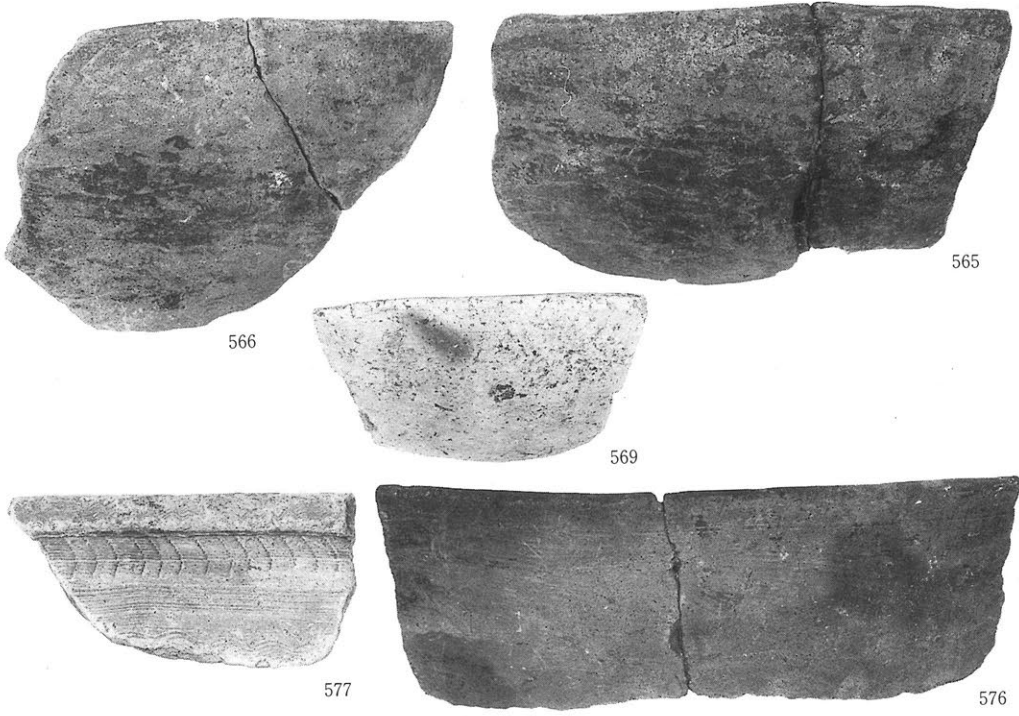


604

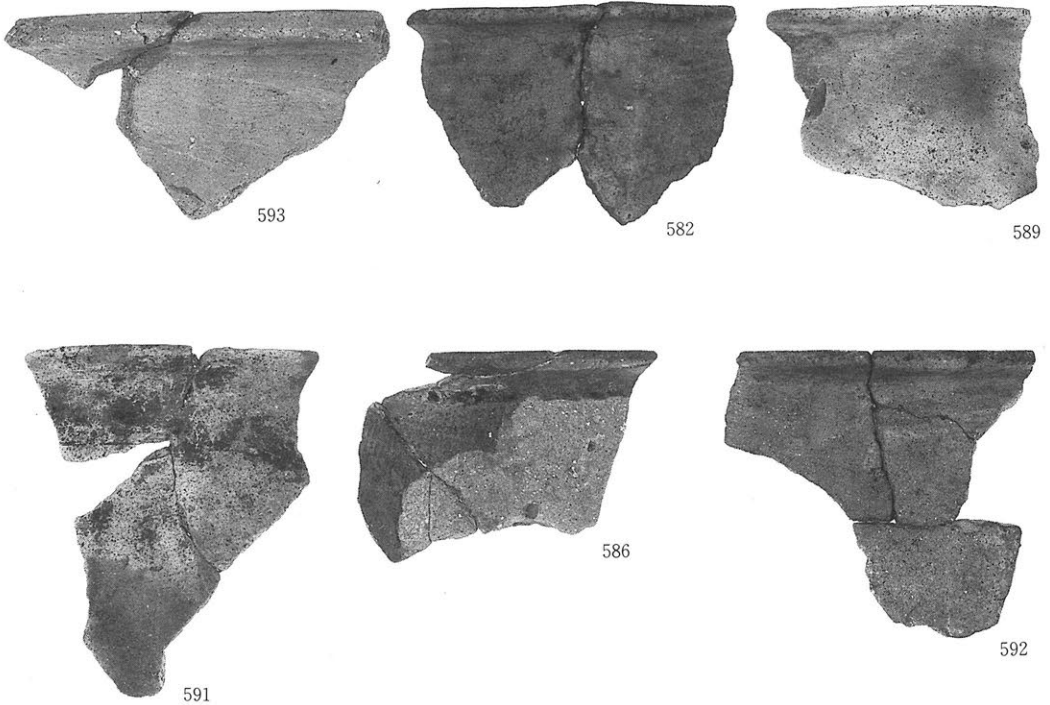


551

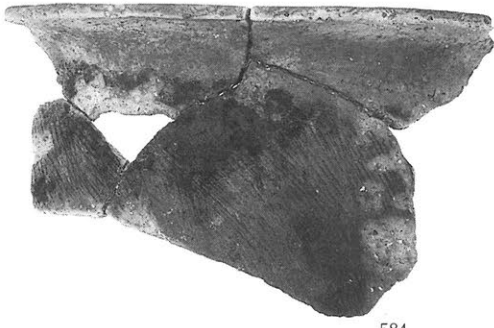
2 SD72(549・551・556・605)



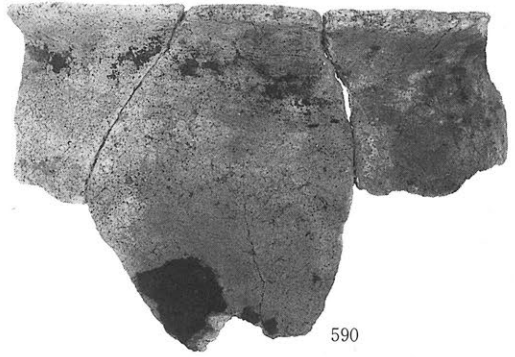
1 SD72(565・566・569・576・577)



2 SD61(582・589) SD66(591・592) SD69(586) SD71(593)



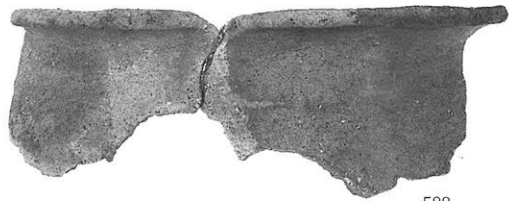
584



590



583



588

1 SD61(588) SD66(583) SD71(584・590)



596

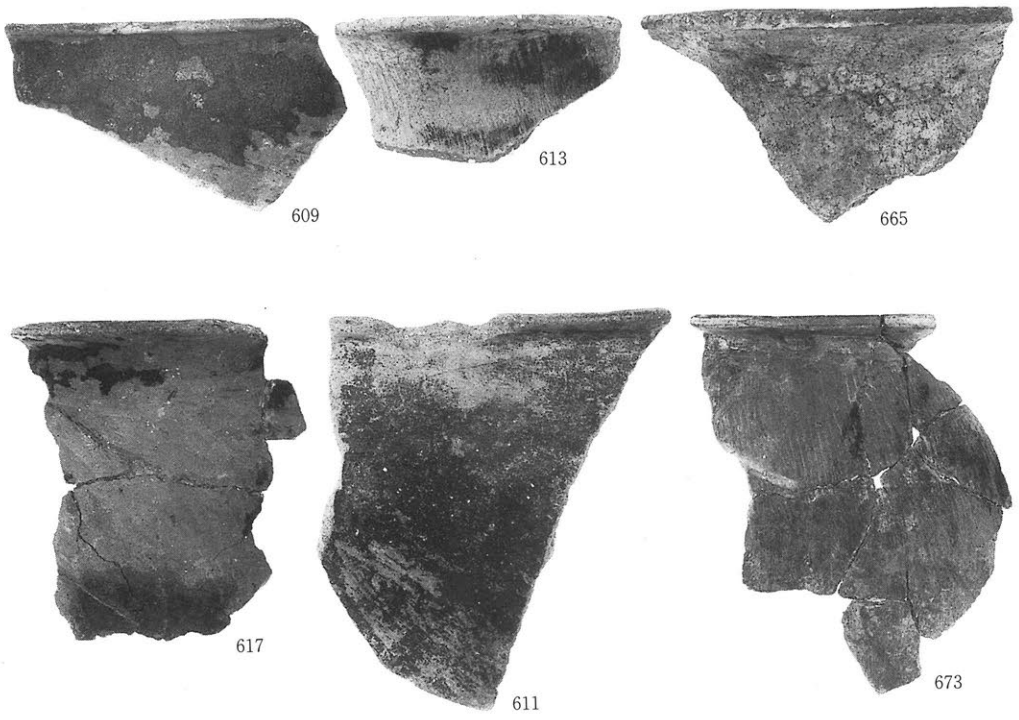


595

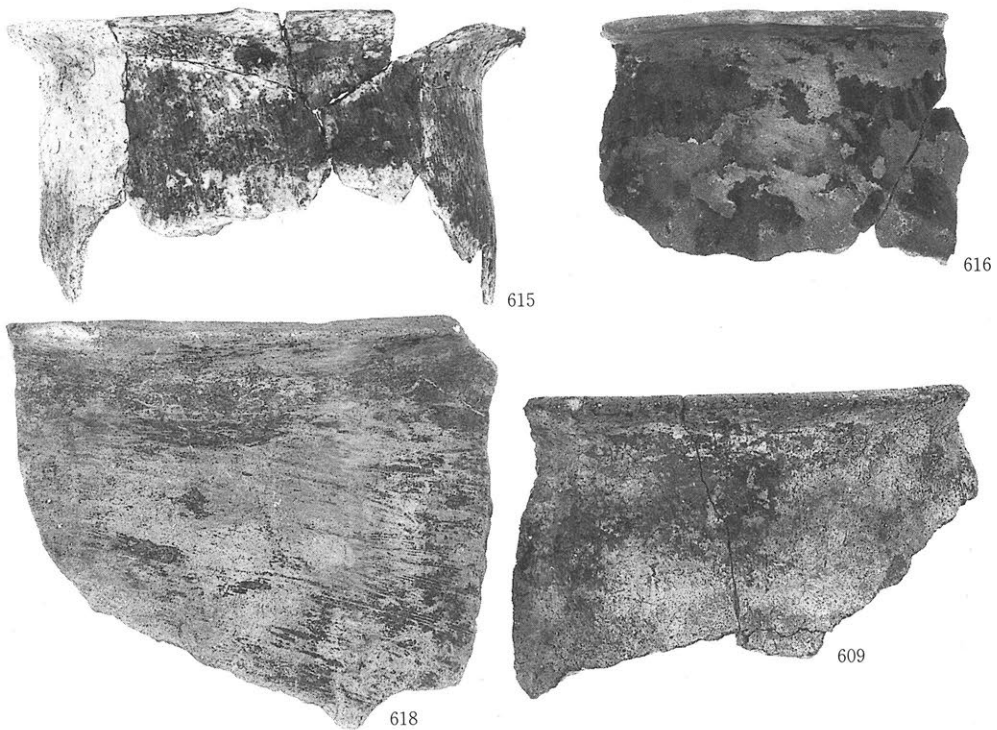


597

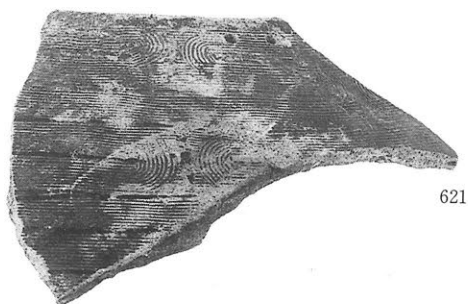
2 SK47(597) SK51(595・596)



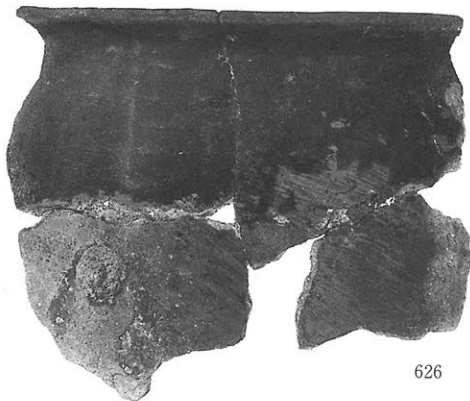
1 SK49(609) SK51(617) SK52(611) SK55(613) 第8層(665) 第8層下層(673)



2 SK44(615) SK49(609・616) SK67(618)



621



626

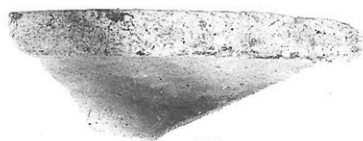


622

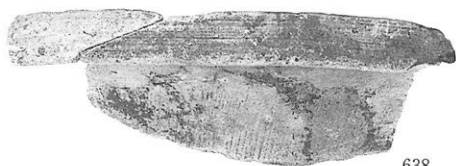


663

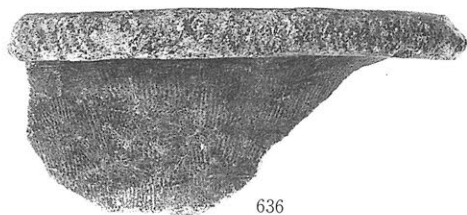
1 SX13(621) SX19(626) 第8層(663) 第9層(622)



635



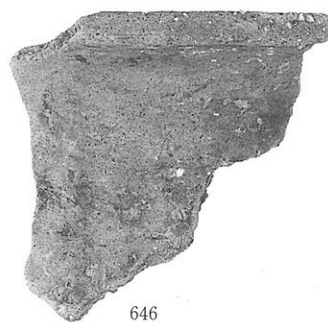
638



636

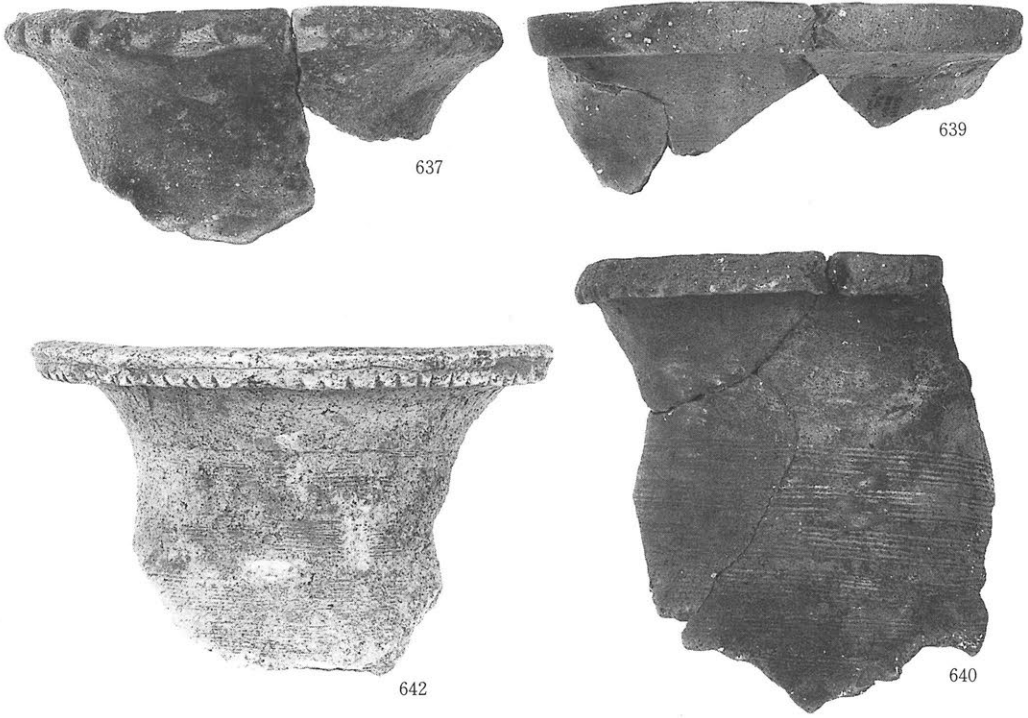


641

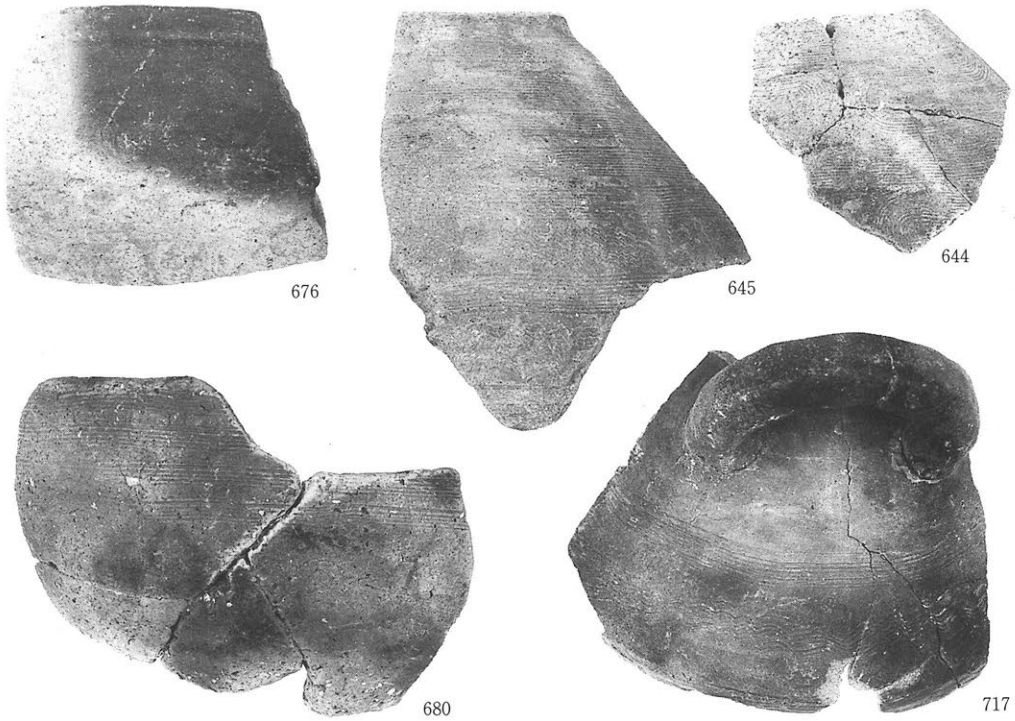


646

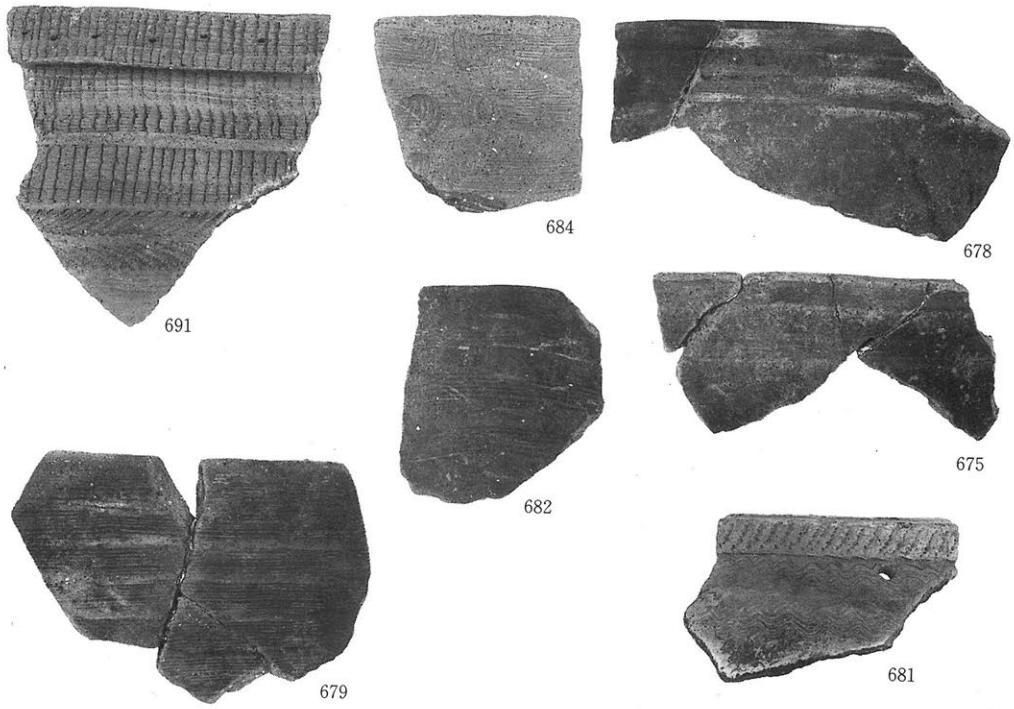
2 第8層(635・636・638・641・646)



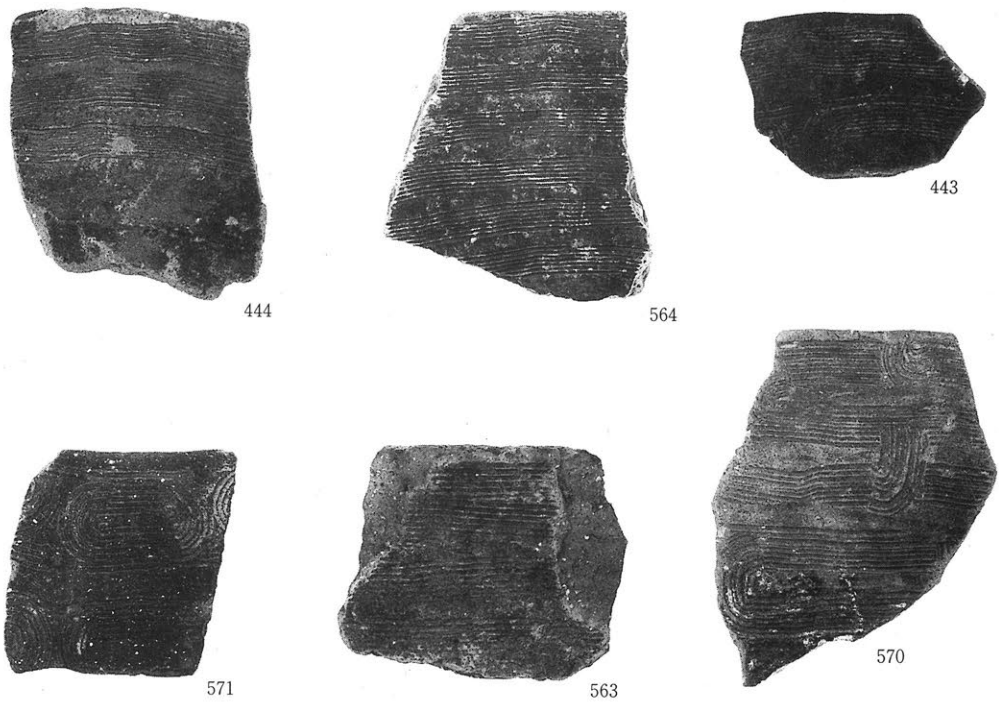
1 第8層(637・639・640・642)



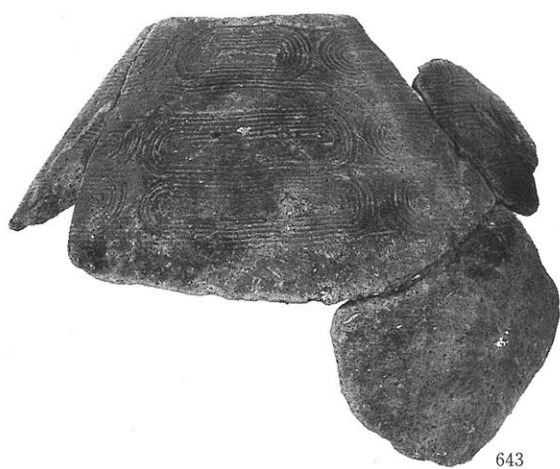
2 第8層(644・645・676・717) 第8層下層(680)



1 第8層(678・679) 第8層下層(675・681・682・684・691)



2 SD69(443・444・563) SD71(570・571) SD72(564)

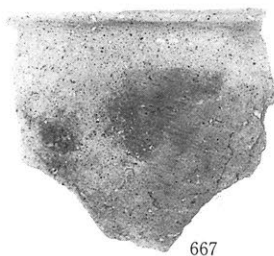


643



649

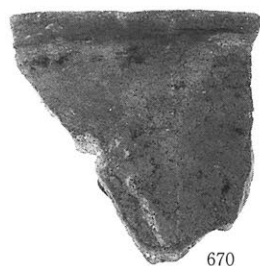
1 第8層(649) 第8層下層(643)



667



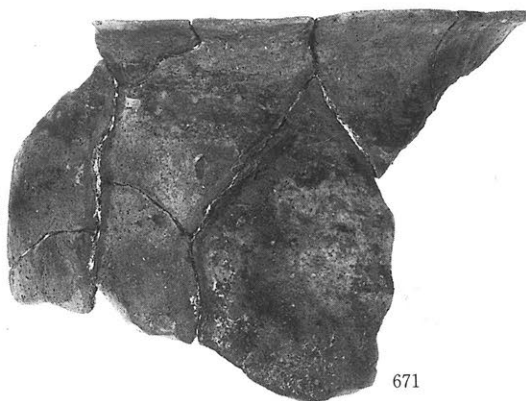
666



670



672

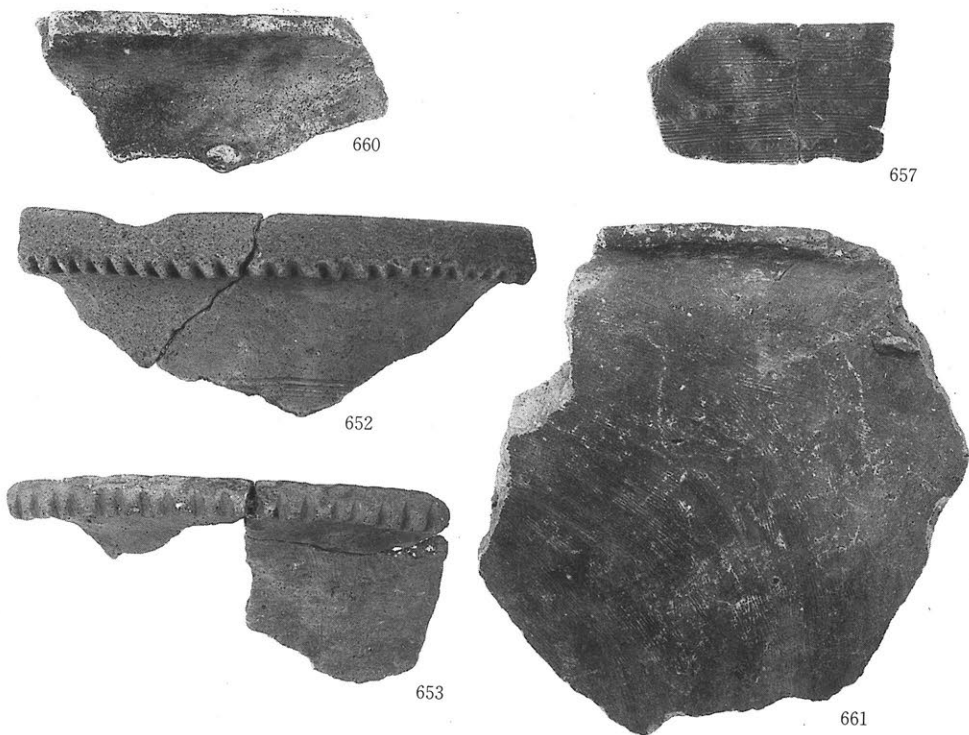


671

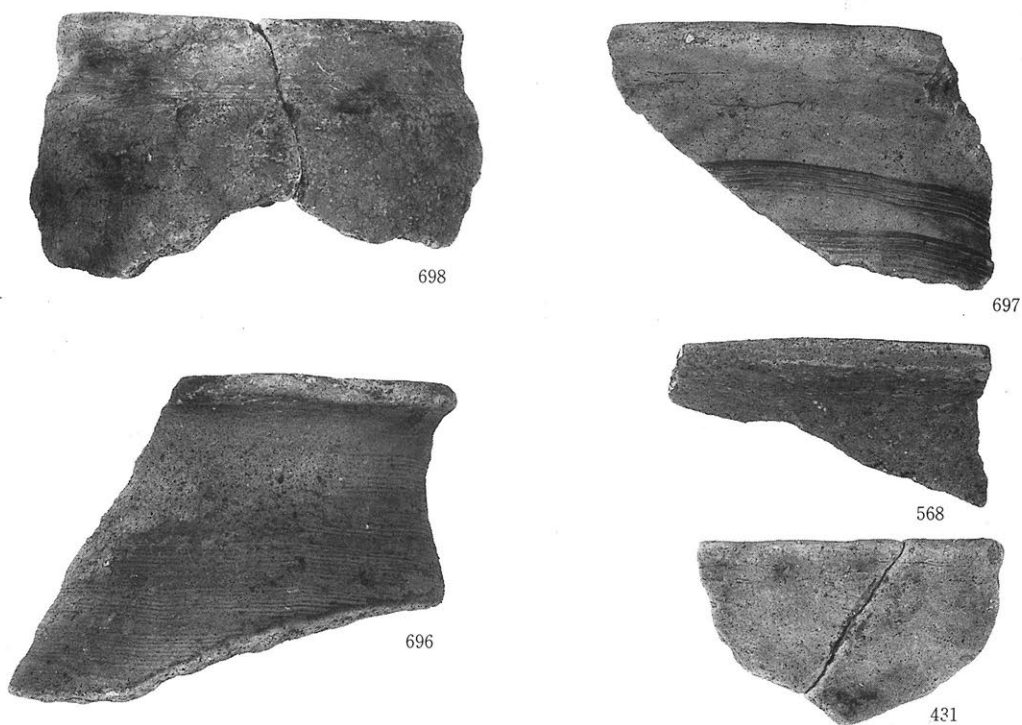
2 第8層(666・667・670・672) 第8層下層(668)



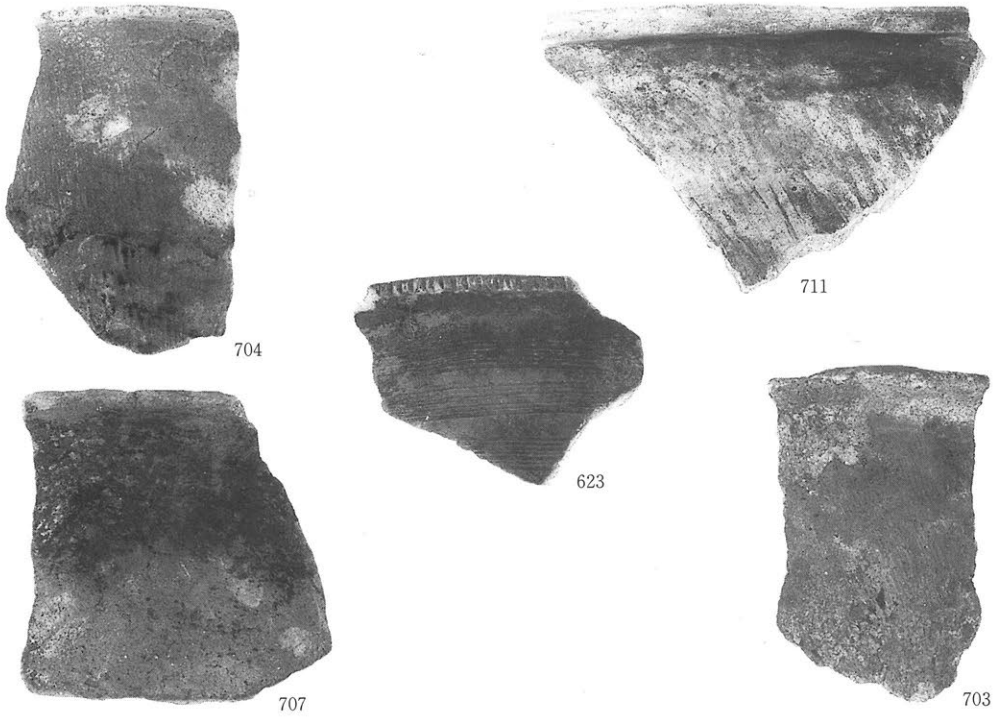
図版88 宮ノ下遺跡第1次調査 弥生土器



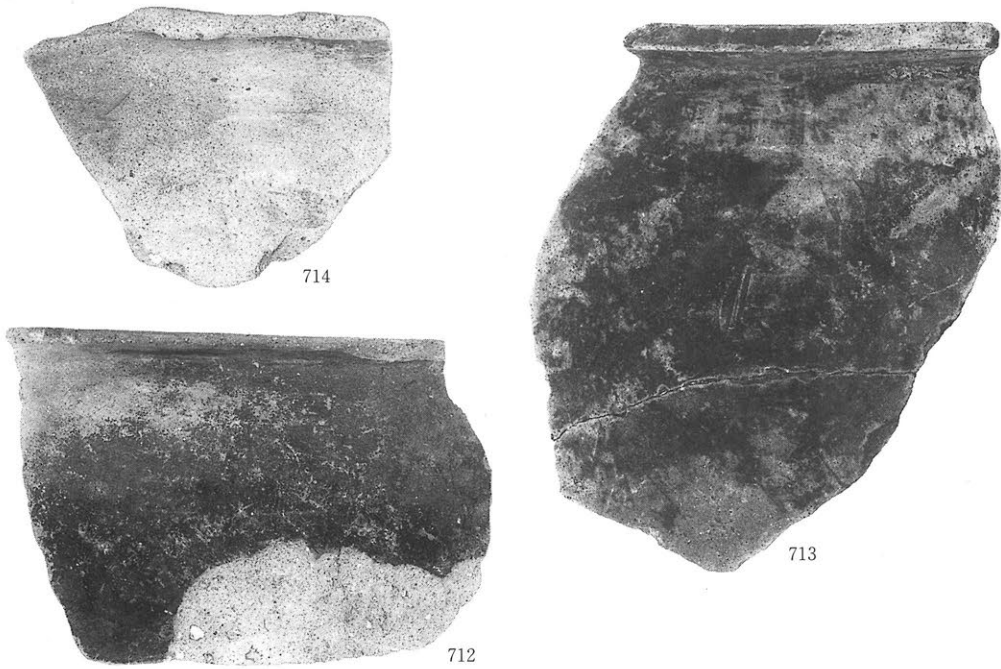
1 第8層(652・653・657・660・661)



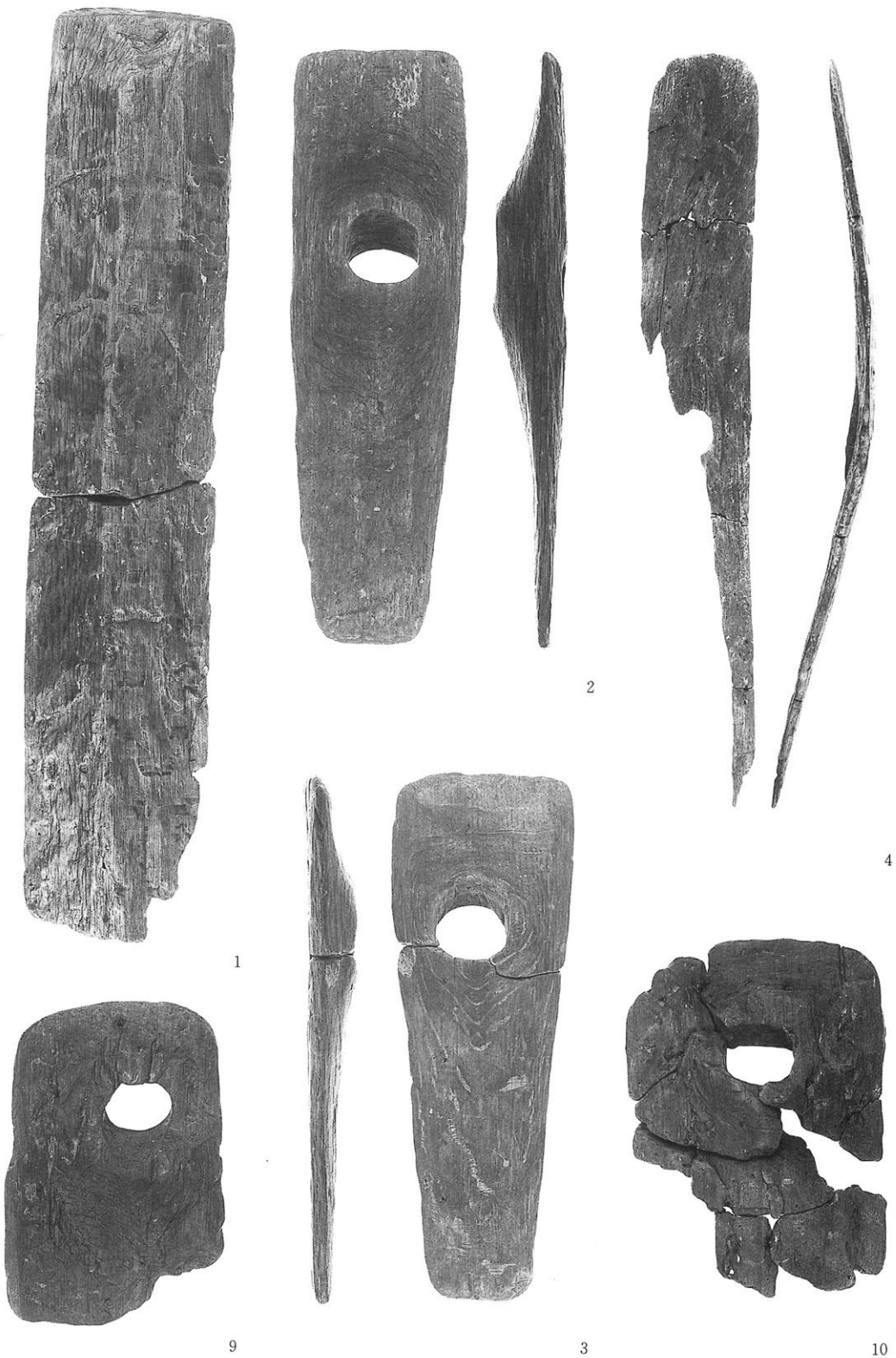
2 第8層下層(696・697) SD69(431) SD72(568)



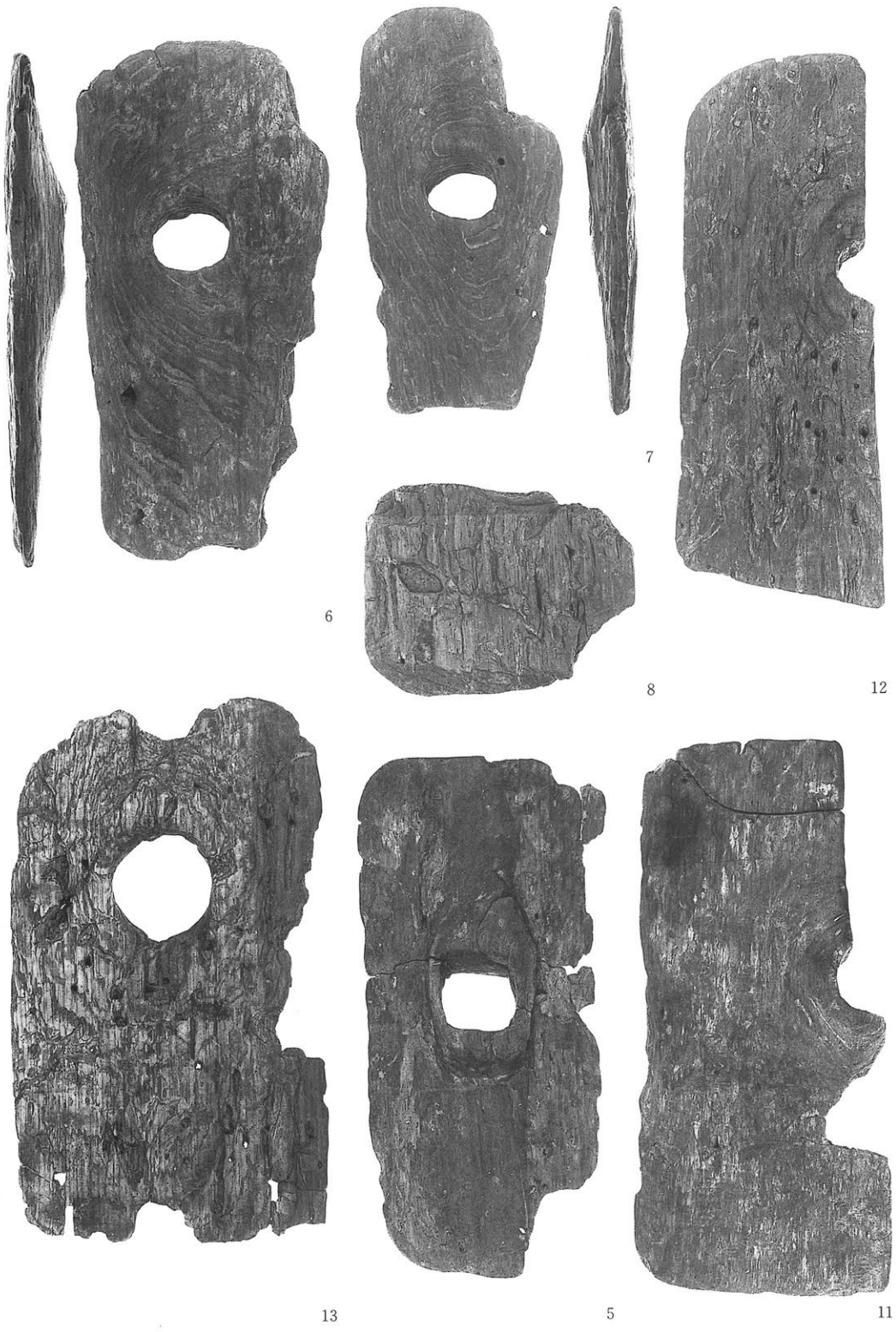
1 SX17(623) 第8層下層(703・704・707・711)



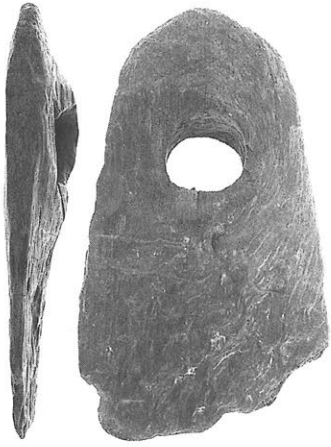
2 第8層下層(712~714)



1 鍬未成品(1/4) 2~4・9・10 鍬(1/2)



5~8・11~13 楯(1/3)



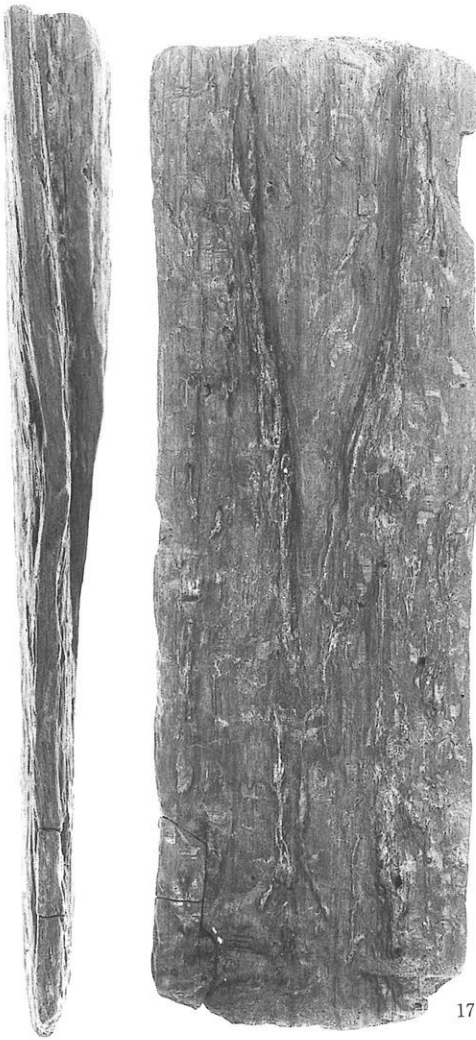
14



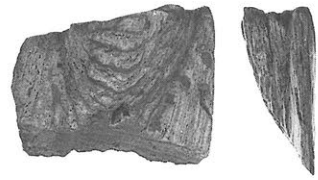
22



19



17



20



16



15



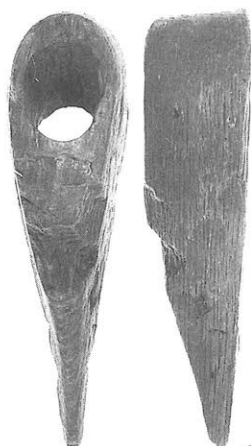
23



21



18



24



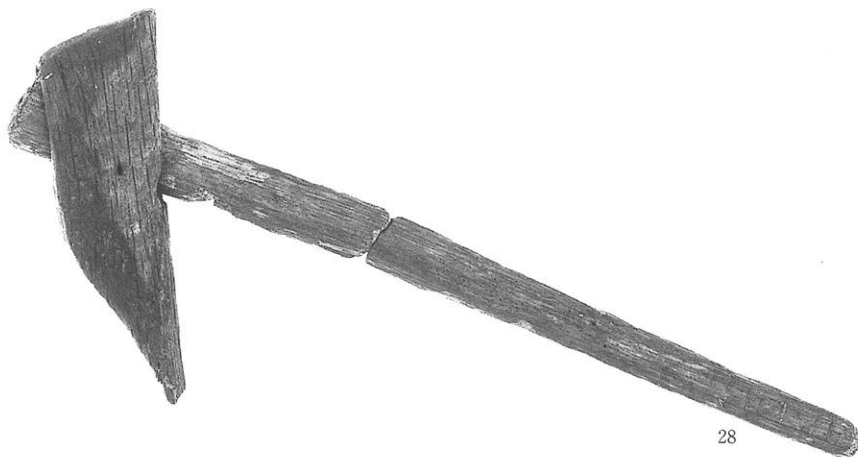
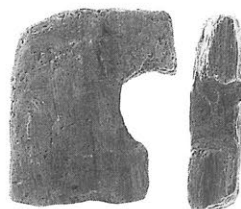
25



26



29



28

図版94

宮ノ下遺跡第1次調査

木製品



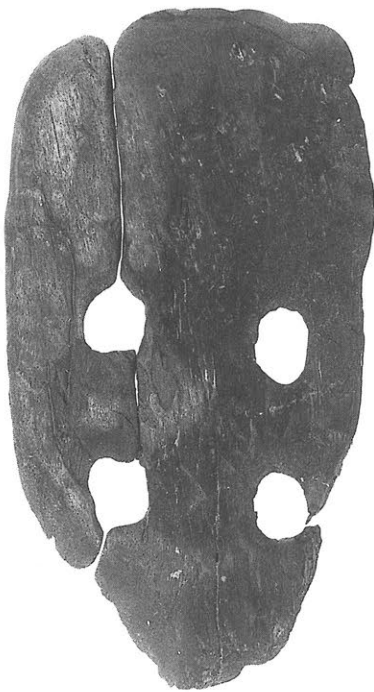
27



30



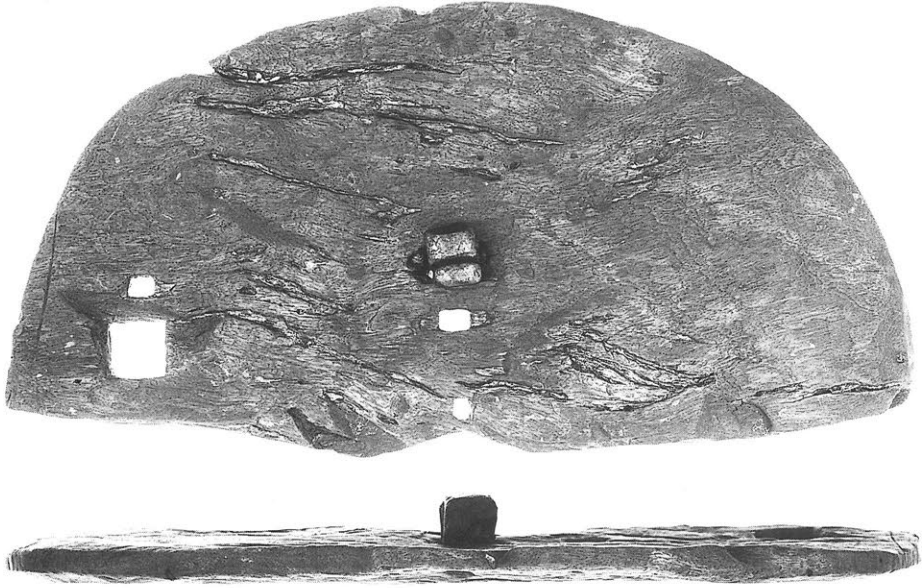
31



32



34

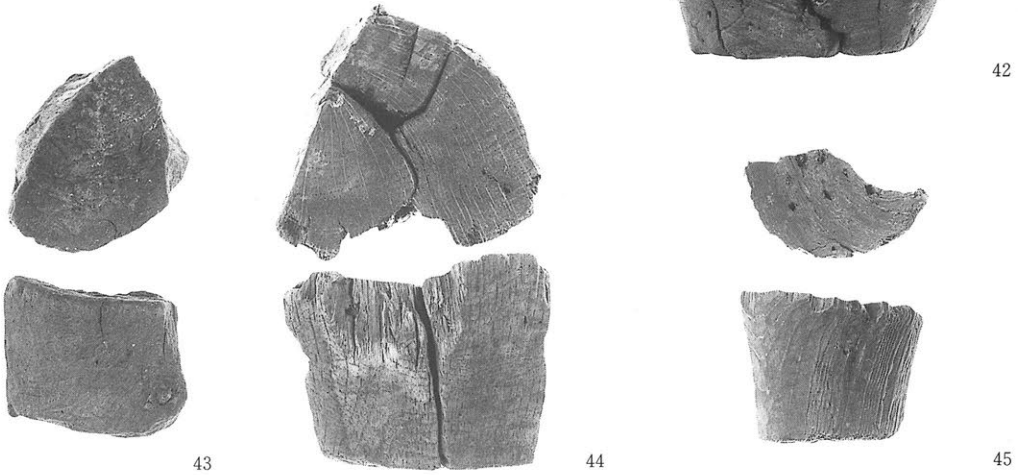
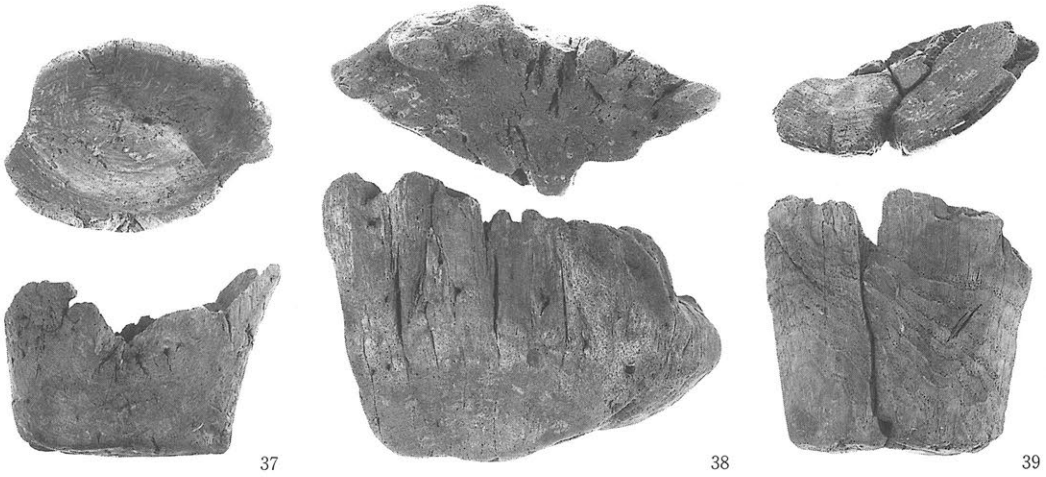


36



35







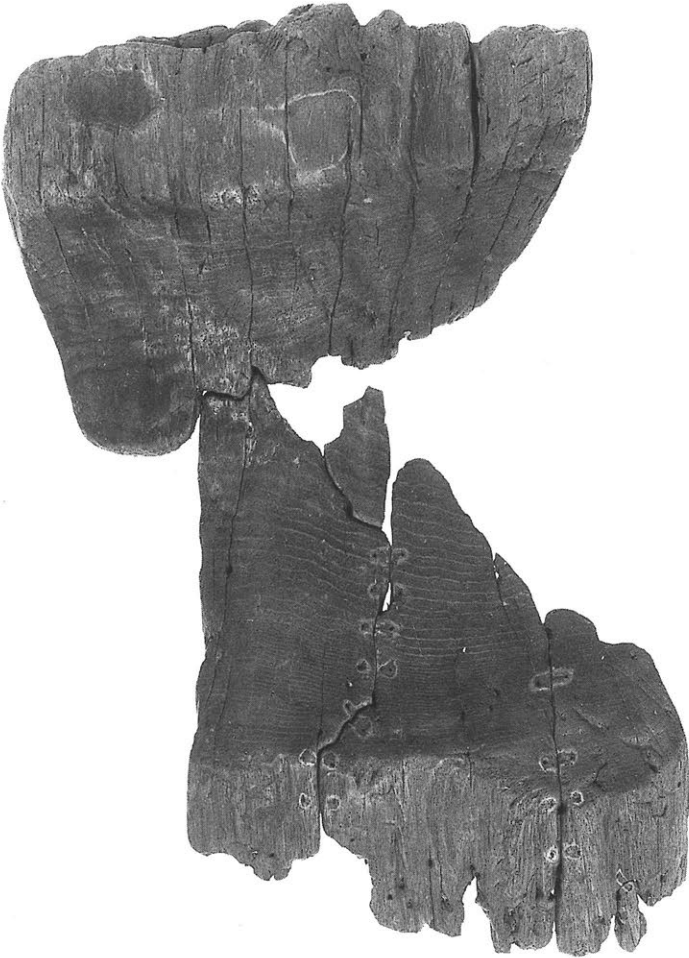
33



47



48



46



49

33 鋤柄 46 大型臼 47 扱すくい 48・49 堅杵(1/2)



51



57



56



53



55



54



52

61



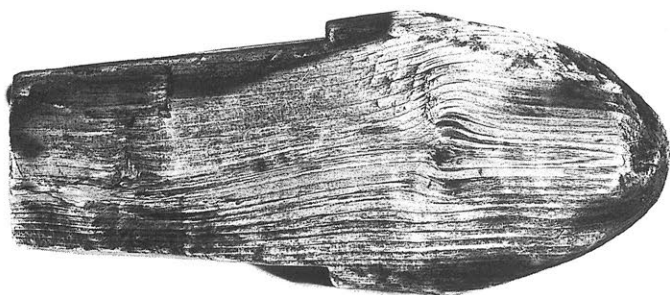
59



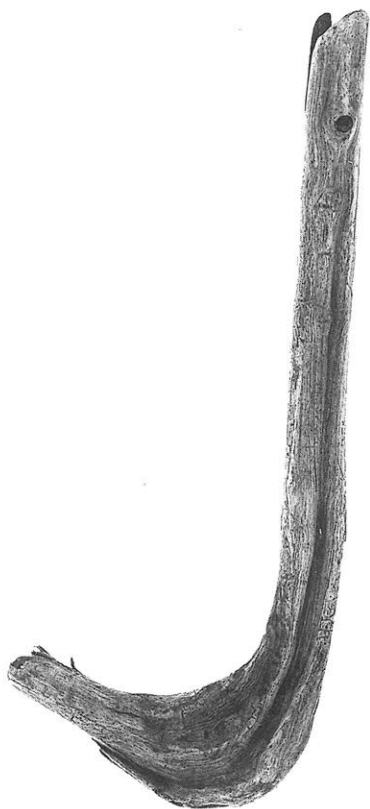
62

63

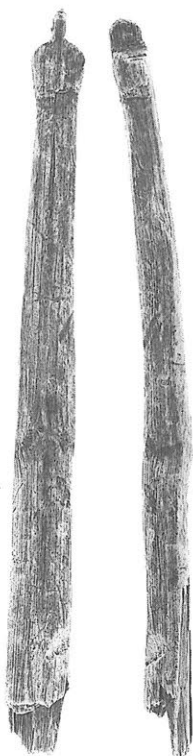
52 鏝 59 横斧柄 61 柄 62 火鑽臼 63 自在鉤(1/2)



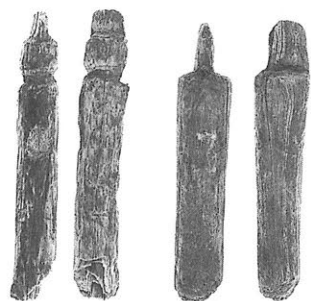
60'



64



70

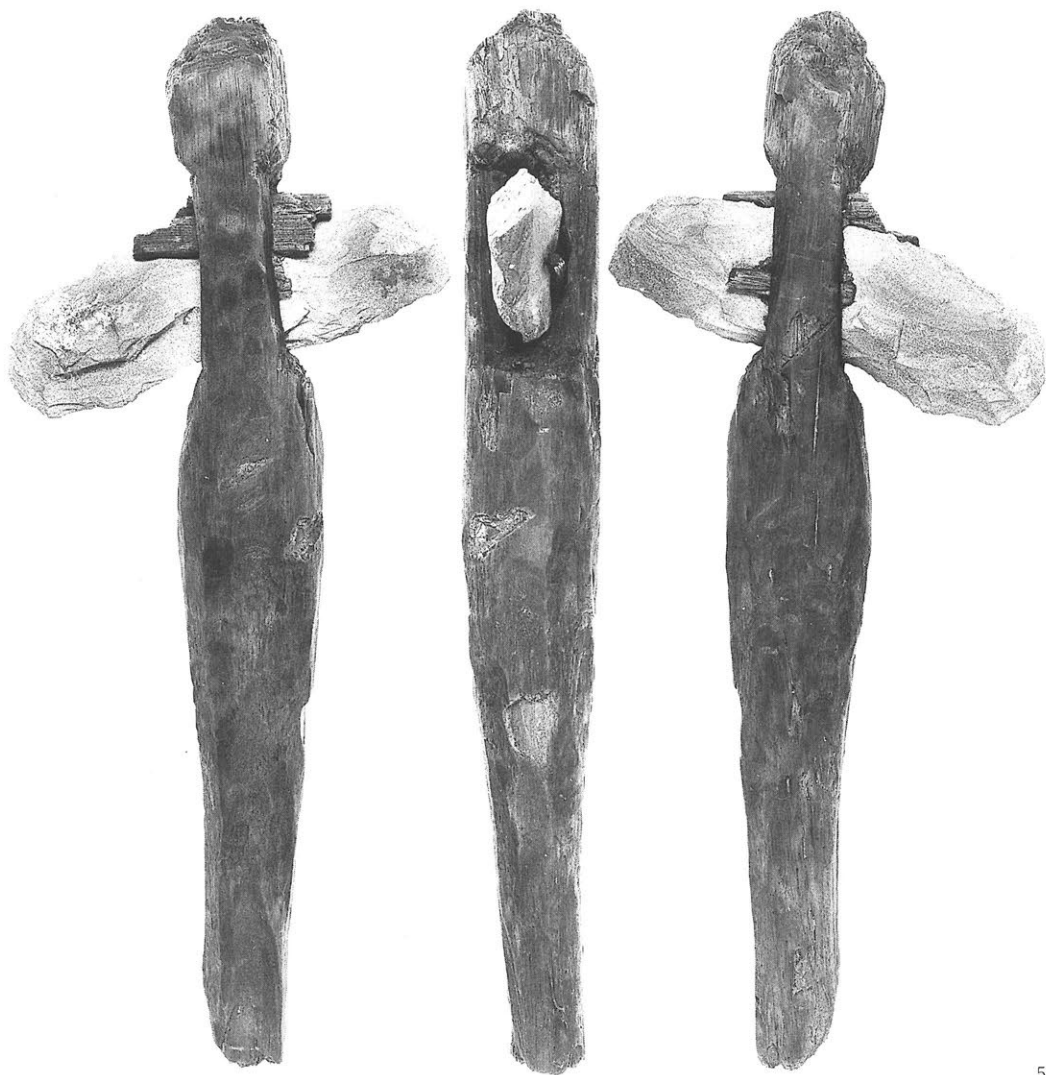


65

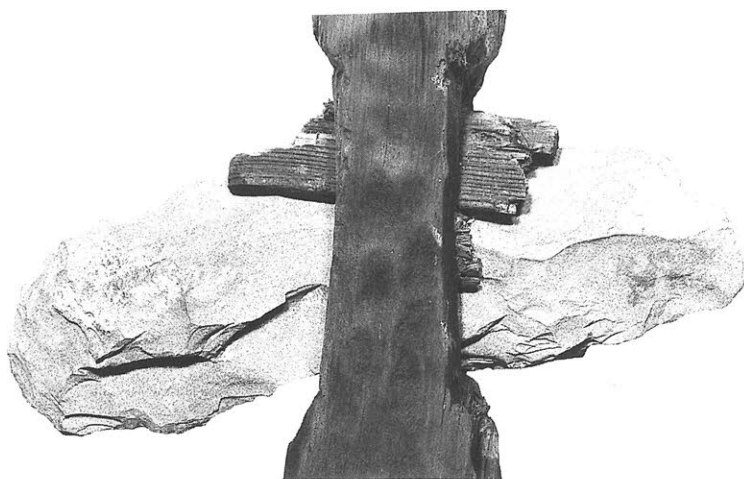
60

66

60 鉄斧柄 64 自在鉤 65・66・70 弓(1/3)



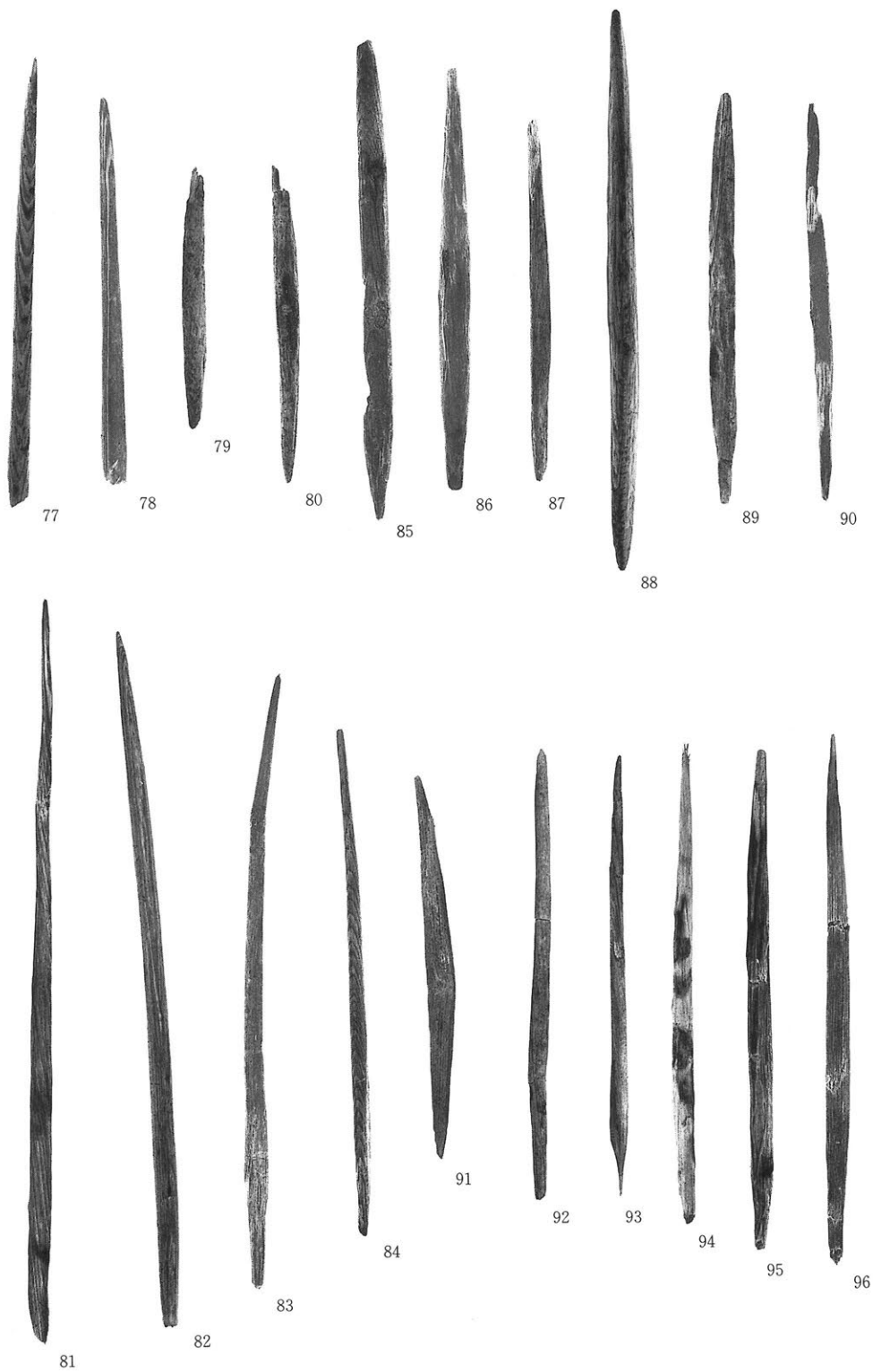
58



58'



67~69・71~74 弓 75 弧紋円板(1/2) 72・73 弓(1/6) 76 楯(1/3)



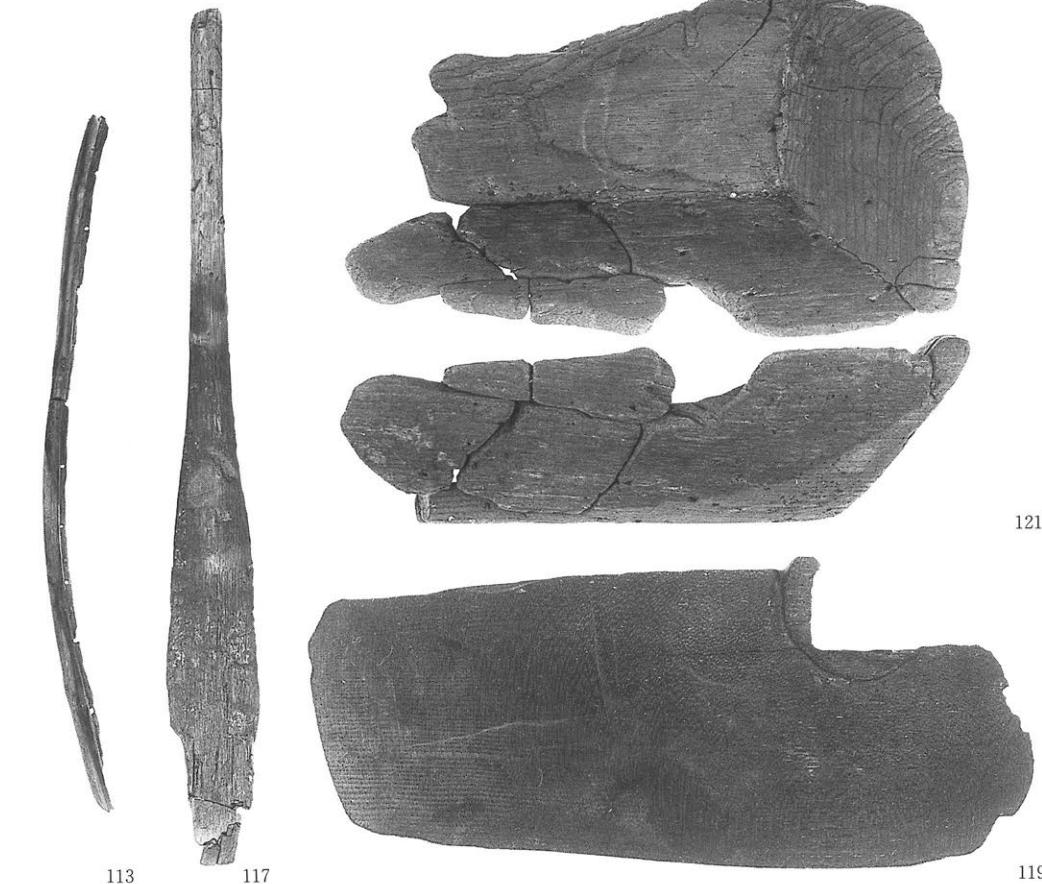
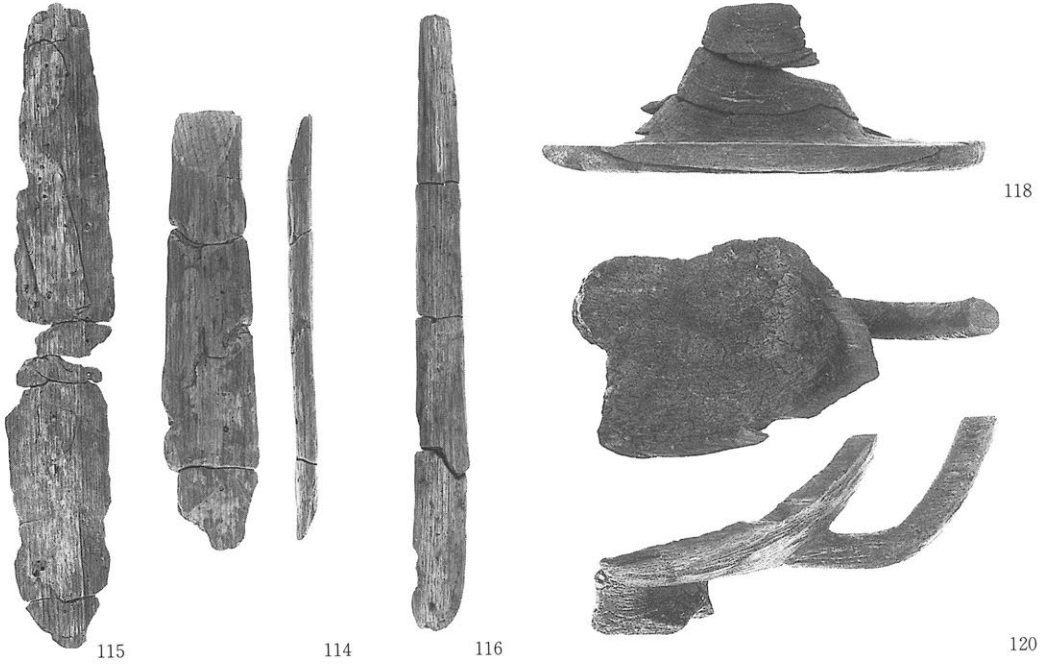
77~96 刺突具(1/2)



図版104  
宮ノ下遺跡第1次調査  
木製品



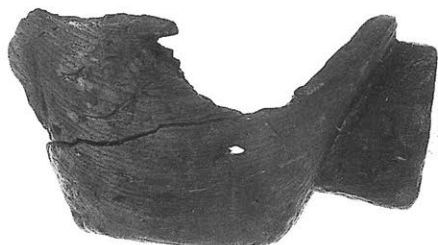
97~105・107~109 刺突具 110~112 刺突具未成品(1/2)



114~116 櫂(1/6) 117 櫂(1/4) 113 手網杵(1/6) 118~120 高杯 121 容器(1/2)



122



123



124



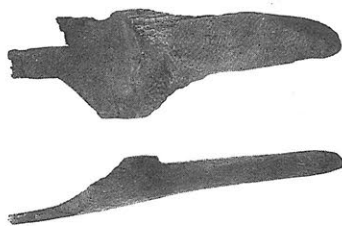
126



127



125



130

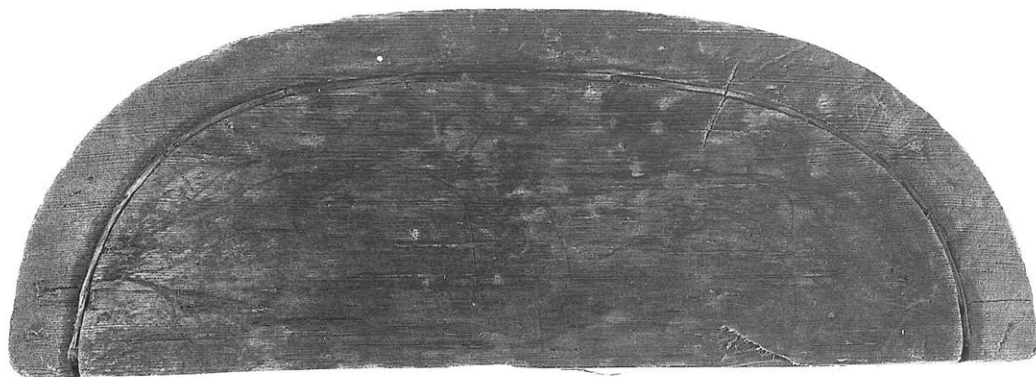
129



128



131

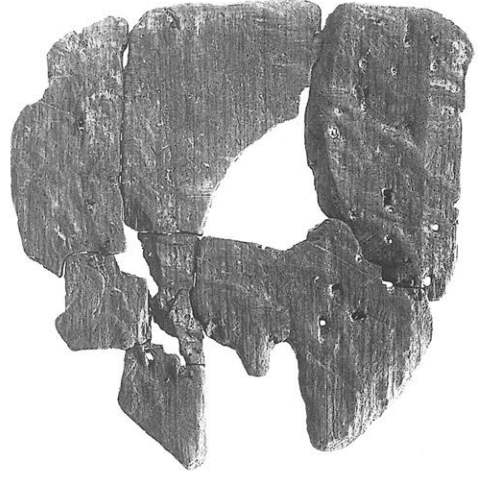


132

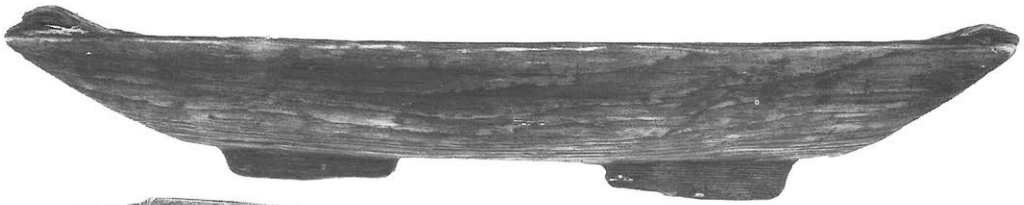
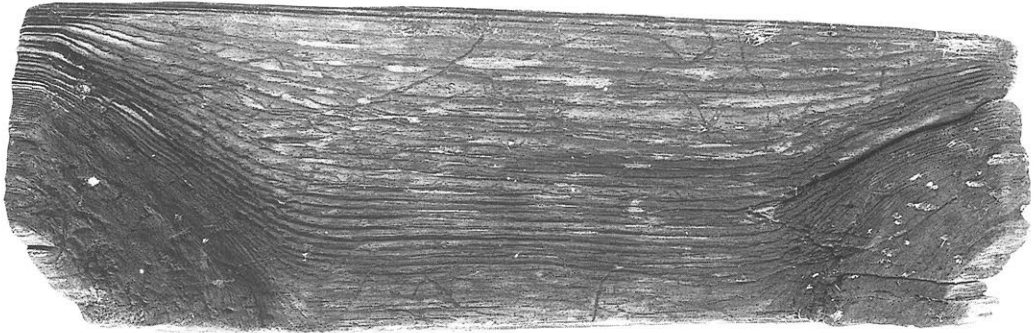
128 縦杓子 129 匙 131 曲物蓋 132 曲物底板(1/2)



133



142



134

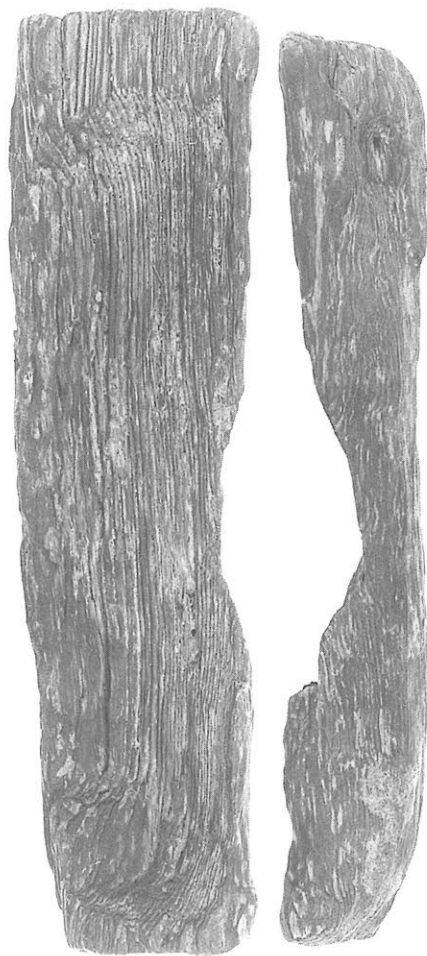
133 槽(1/4) 134 槽(1/2) 142 用途不明(1/2)



135



136



137



139

135 梯子(1/2) 136 用途不明 137 容器 139 槽(1/2)



140



141



143



146



144



145



138



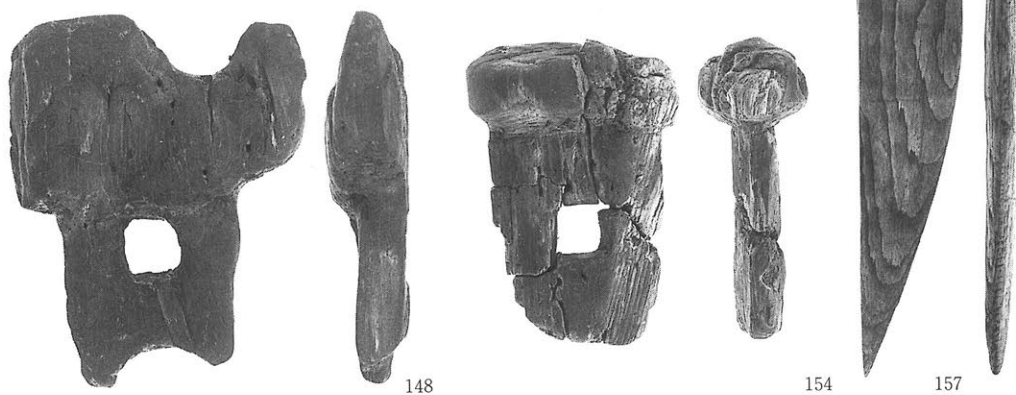
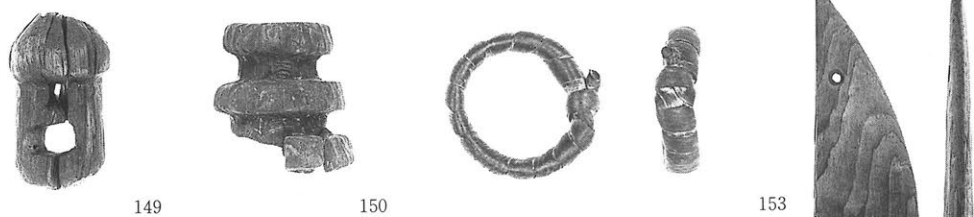
152



147

151

138・141・143・144～146 用途不明(1/3) 147 用途不明(1/4) 151・152 用途不明(1/2)



149・150 用途不明(1/2) 153 編物(1/4) 148・155~158 用途不明(1/3)





160



159



161



162



164



163



166



175



167



168



169



171



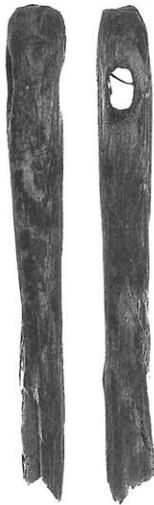
172



173



170



174



183



165



184



185



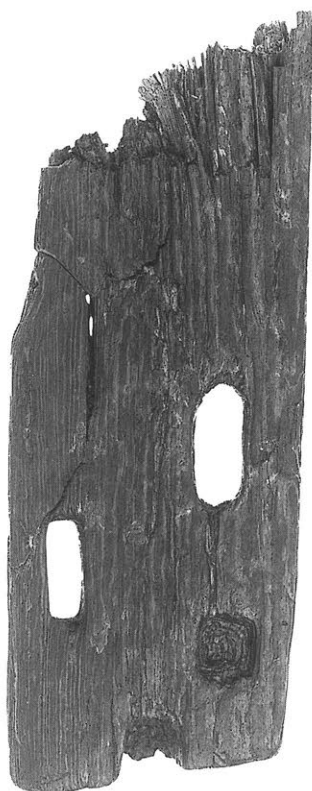
186



187



176



182



179



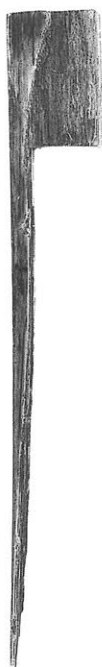
181



177



178



194

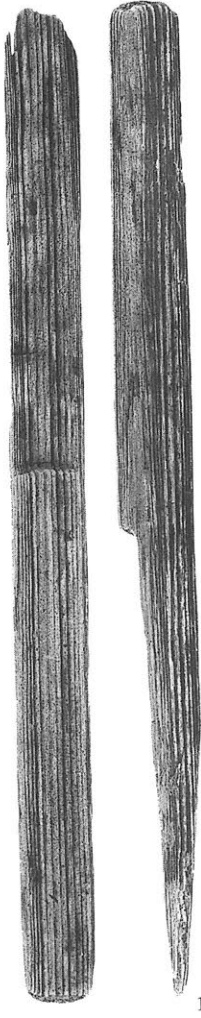


193



188





191



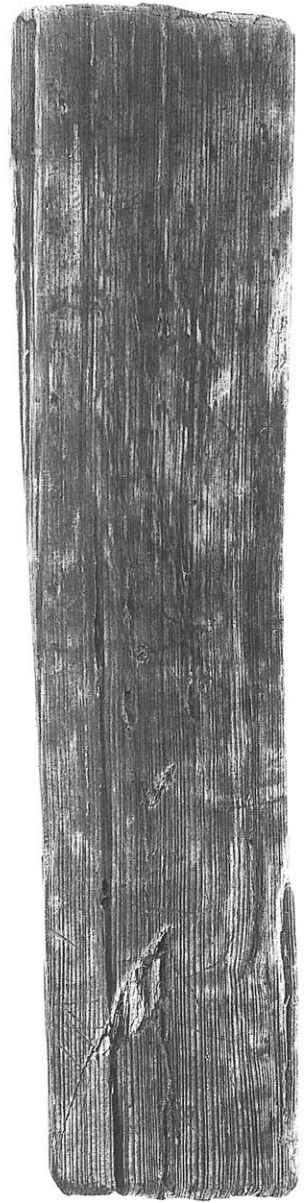
192



196



200



195



189

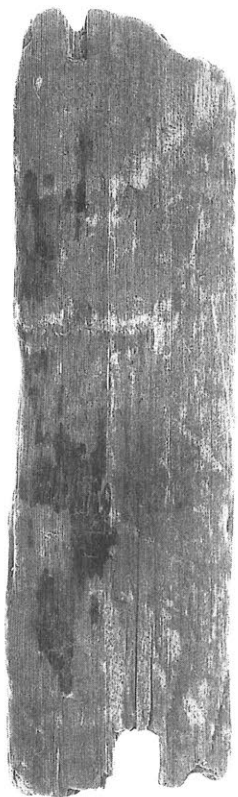


197

189・191・192・195～197・200 用途不明(1/2)



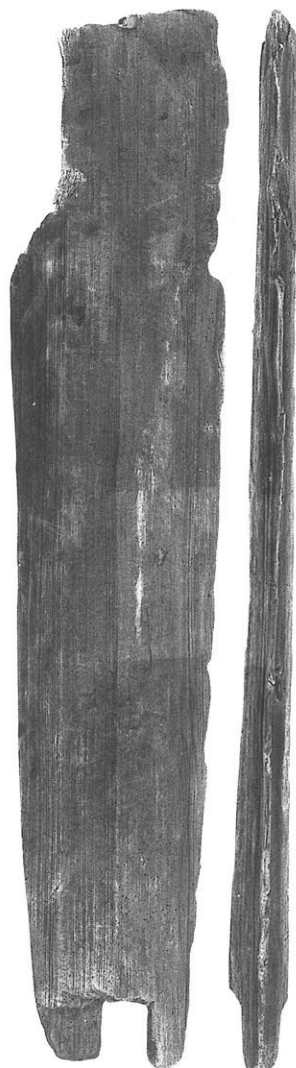
198



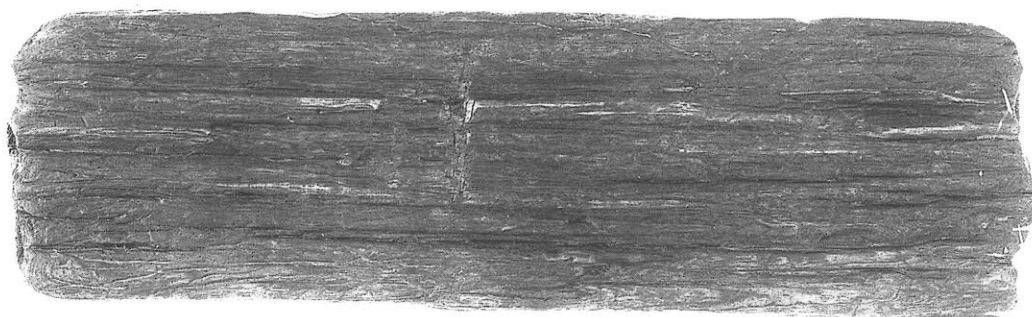
199



201



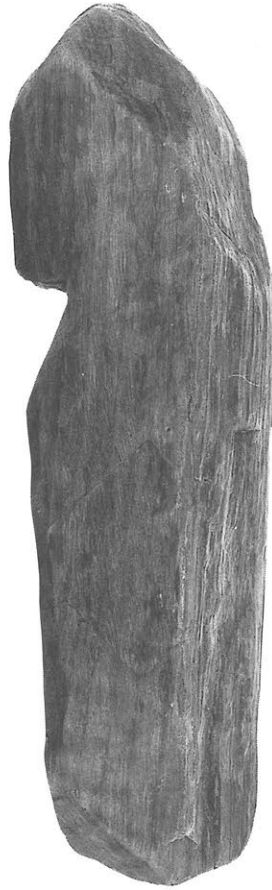
202



204



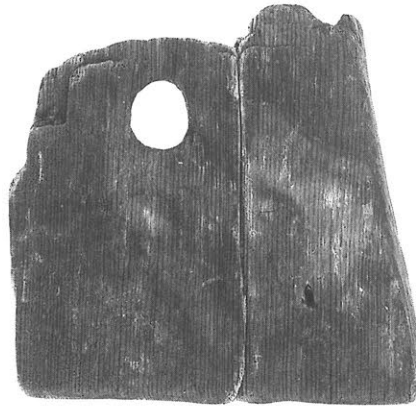
203



208



209



206

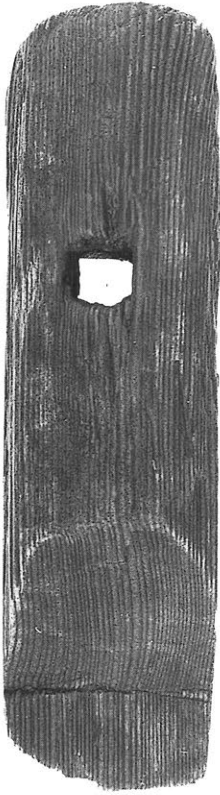


218



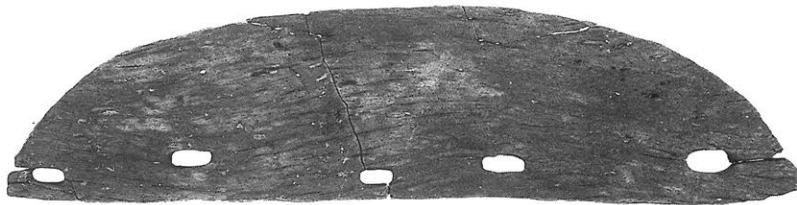
205

211



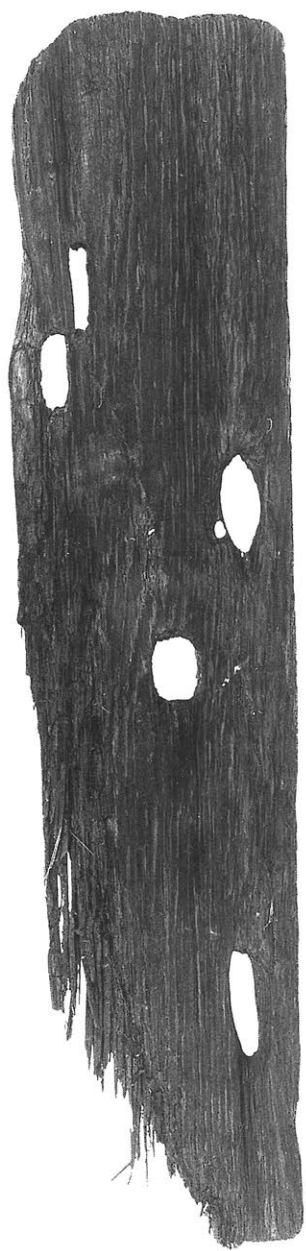
212

215



212・215 用途不明(1/3) 229 用途不明(1/6)

229



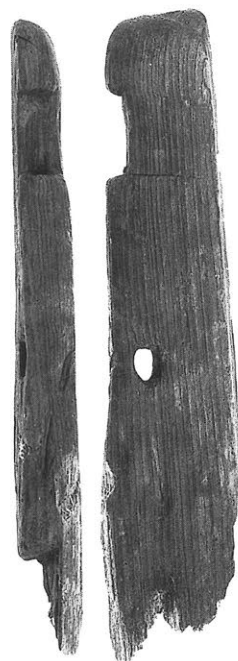
213



214



216



217



図版  
120

宮ノ下遺跡第1次調査

木製品

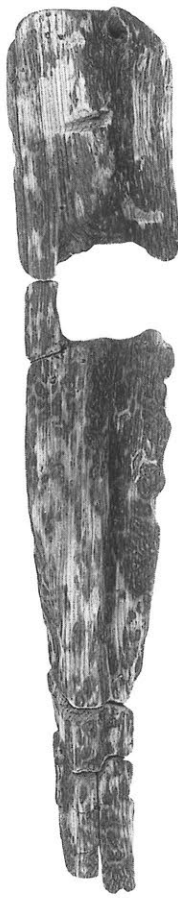




226



227



228



236



230



232



233



235



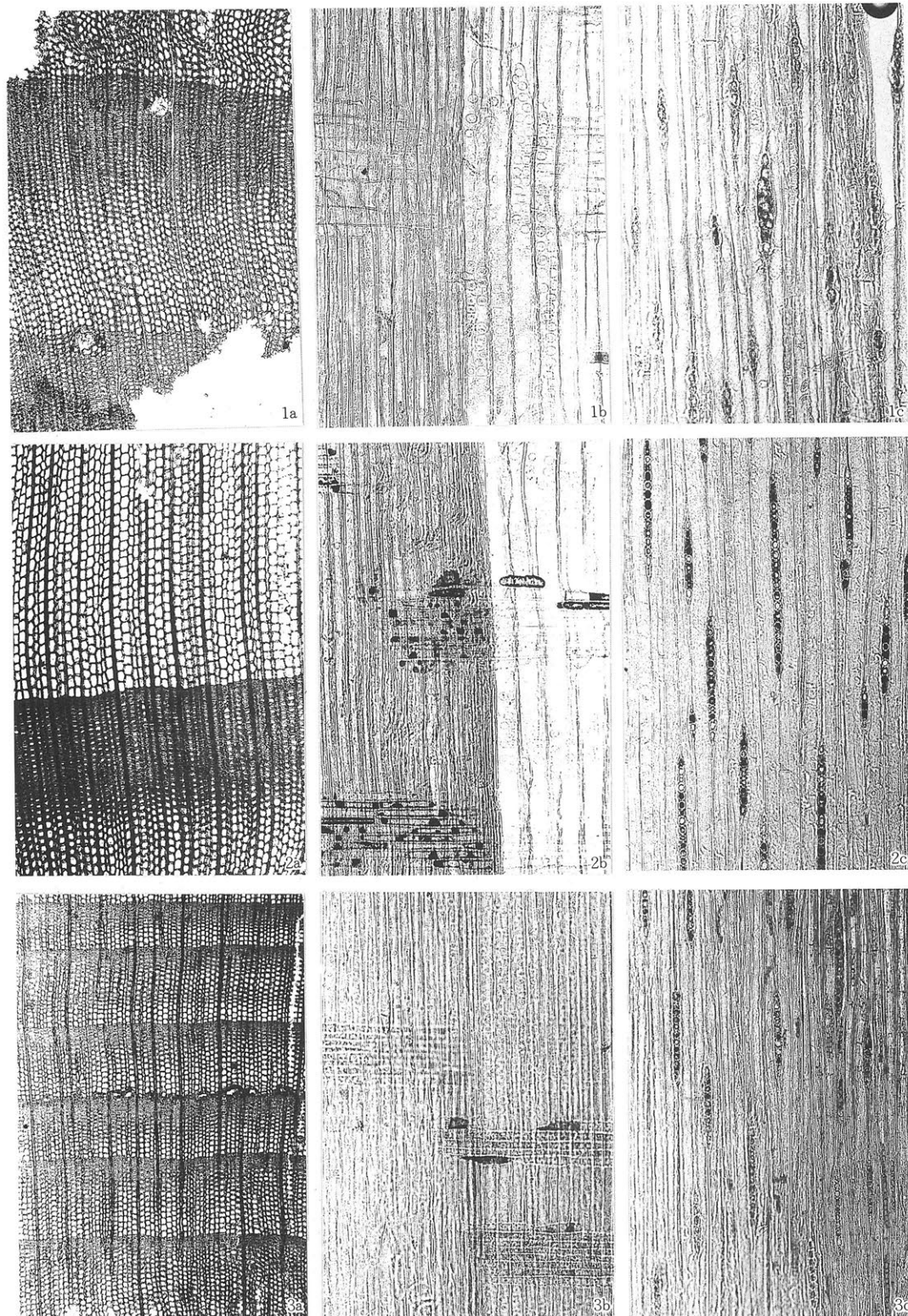
237



238

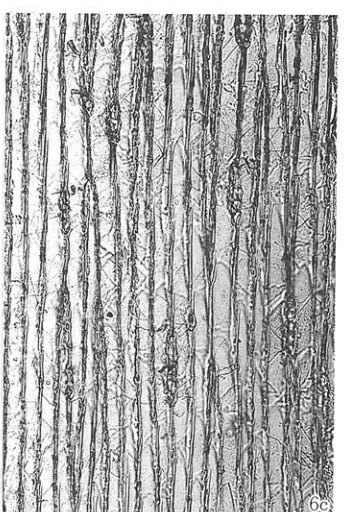
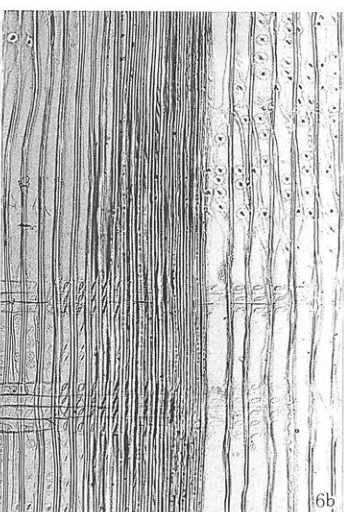
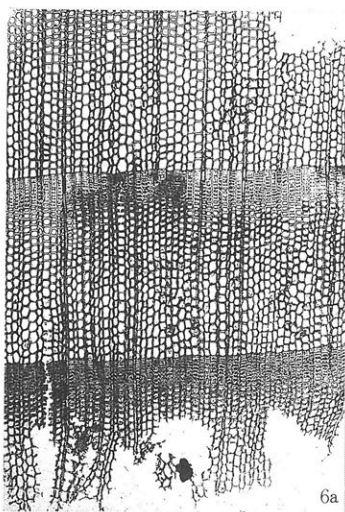
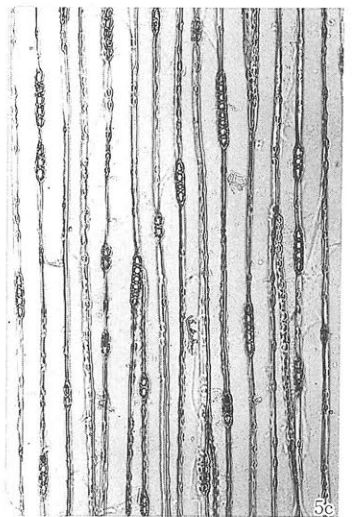
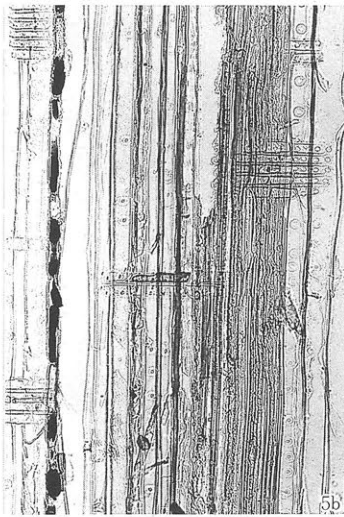
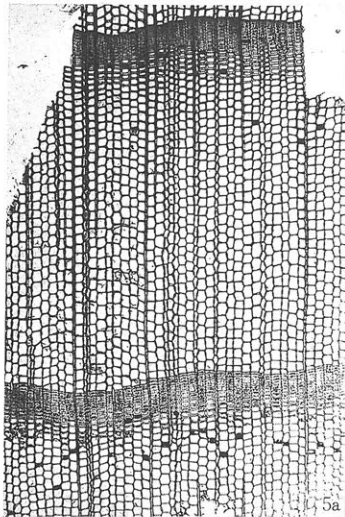
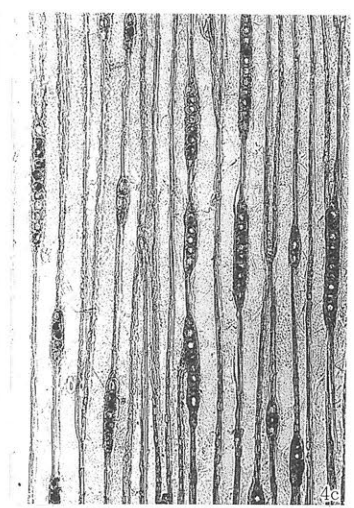
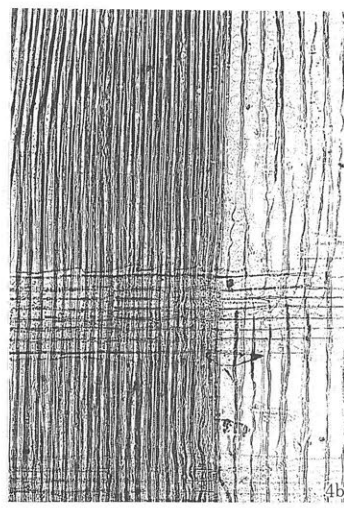
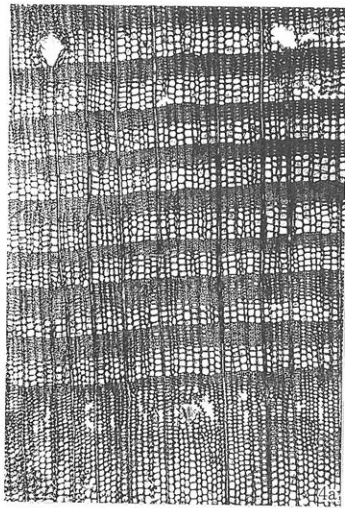


234



1. マツ属複維管束亜属 (試料番号174)  
 2. モミ属 (試料番号97)  
 3. モミ属 (杭21)  
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 $\mu$ m : a  
 200 $\mu$ m : b, c



4. ツガ属 (杭110)

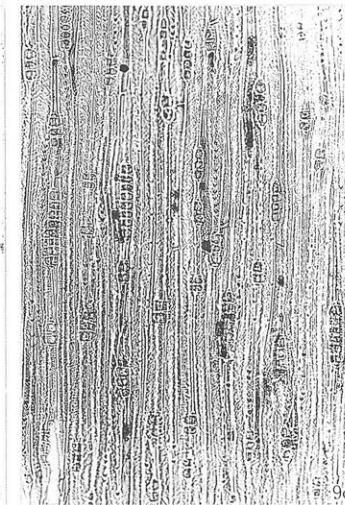
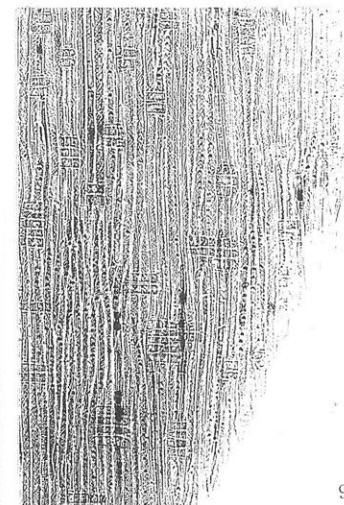
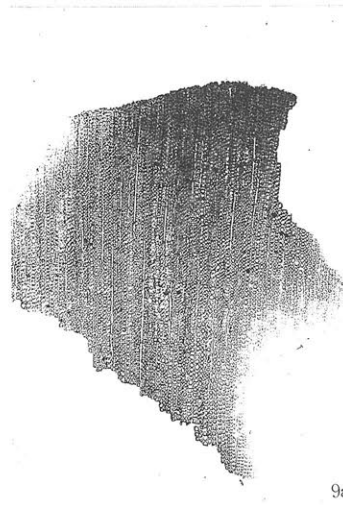
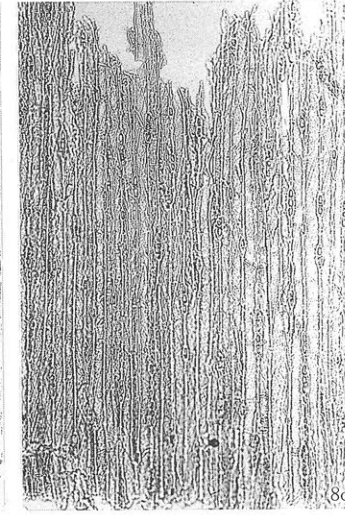
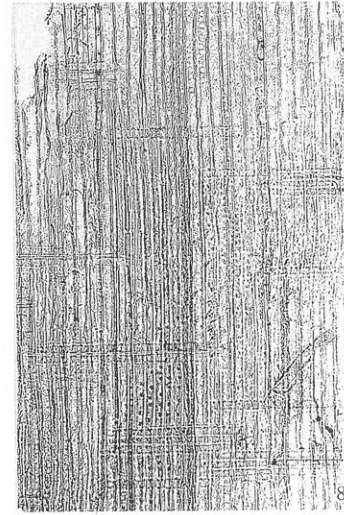
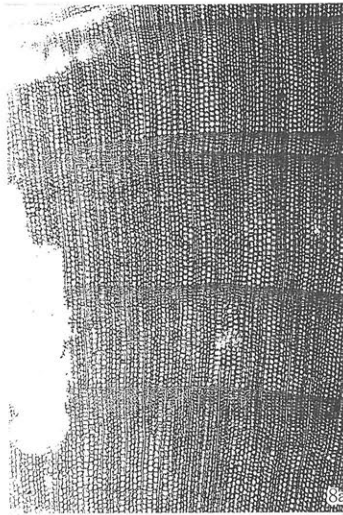
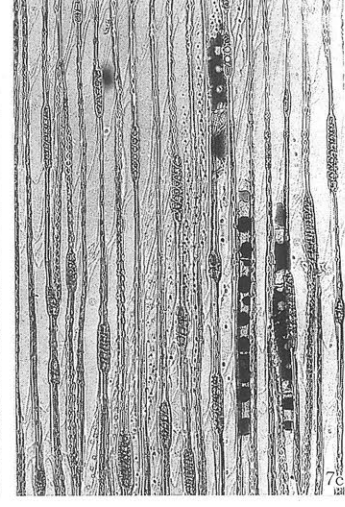
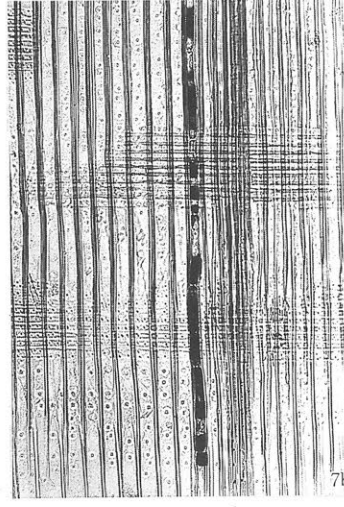
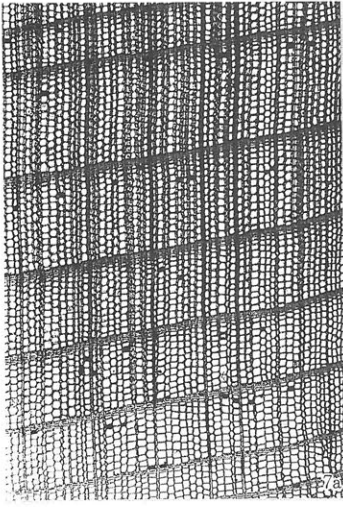
5. スギ (試料番号20)

6. コウヤマキ (試料番号29)

a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 $\mu$ m: a

200 $\mu$ m: b, c



7. ヒノキ属 (試料番号145)

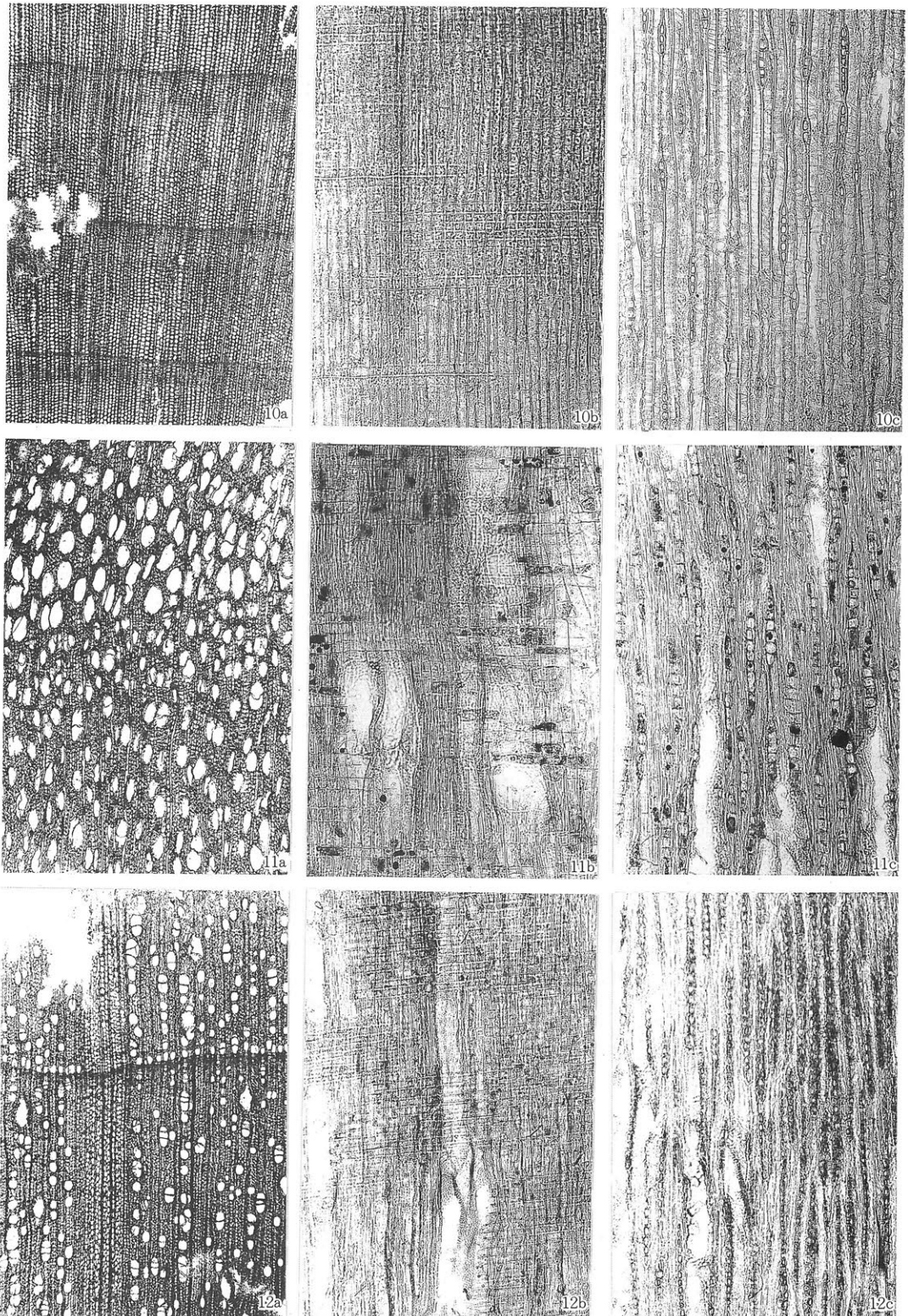
8. マキ属 (試料番号125)

9. イヌガヤ (試料番号90)

a: 木口, b: 柾目, c: 板目

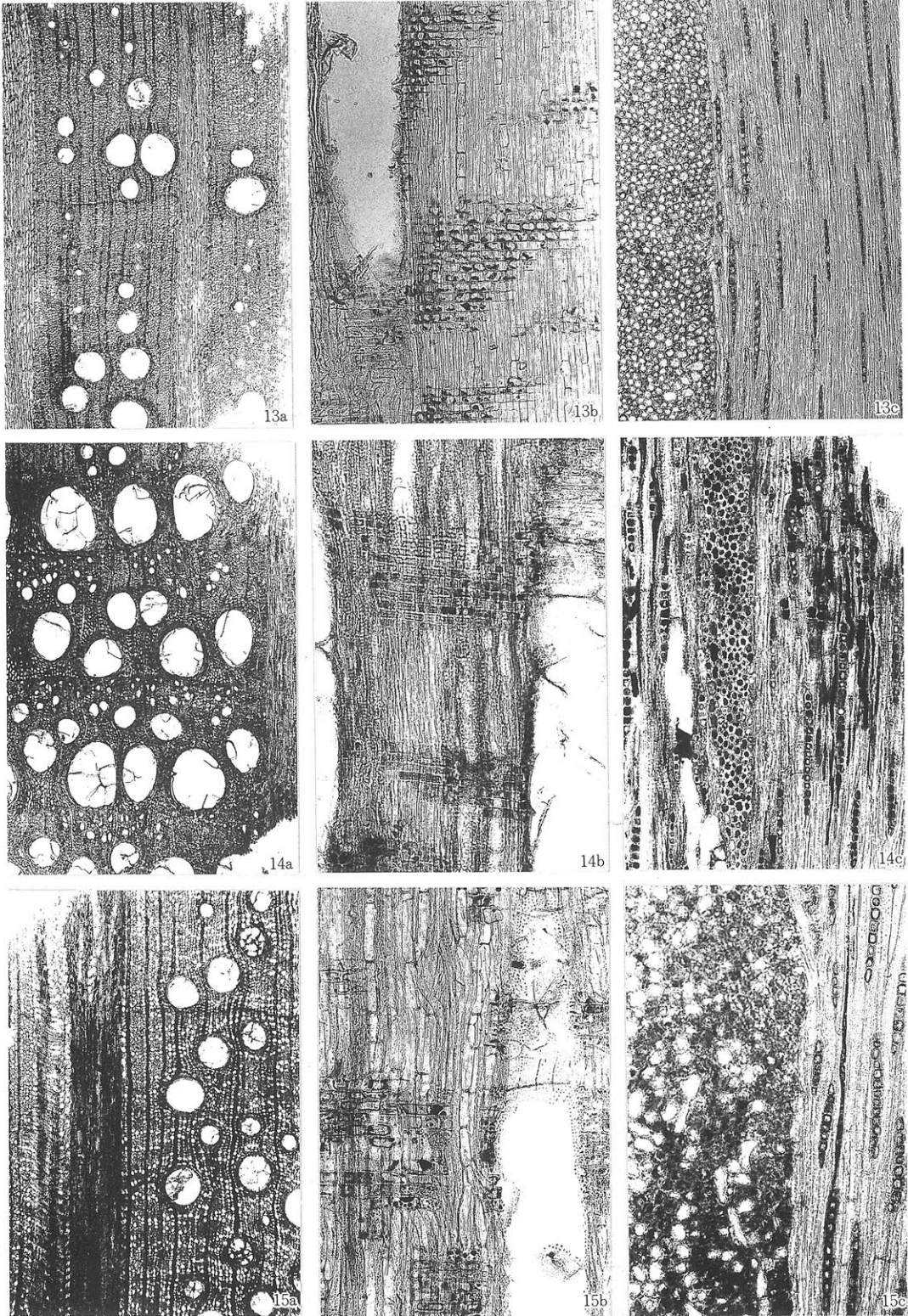
200 $\mu$ m : a

200 $\mu$ m : b, c



10. カヤ (試料番号57)  
11. ヤナギ属 (杭75)  
12. ハンノキ属 (試料番号198)  
a : 木口, b : 柁目, c : 板目

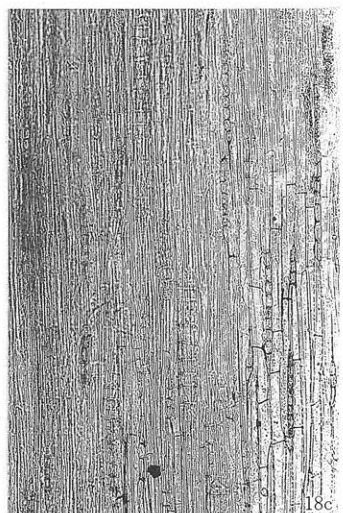
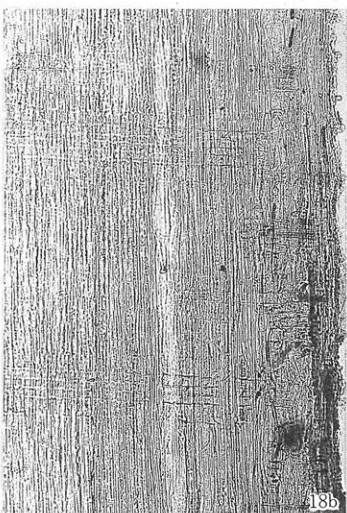
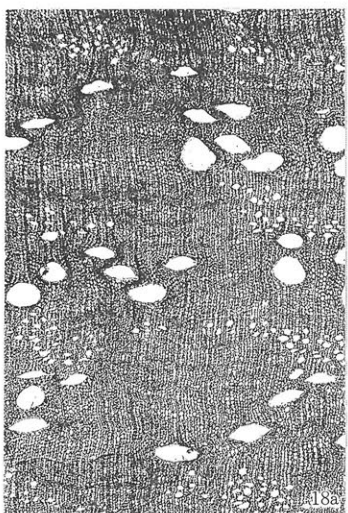
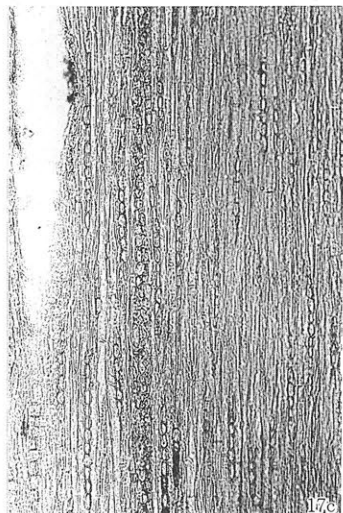
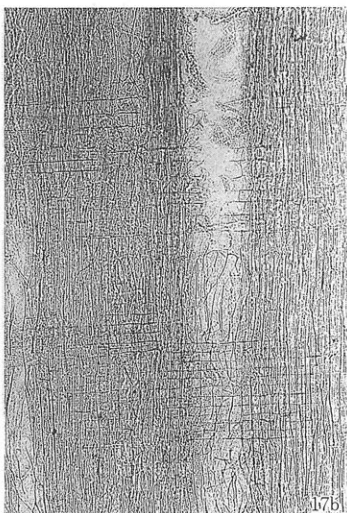
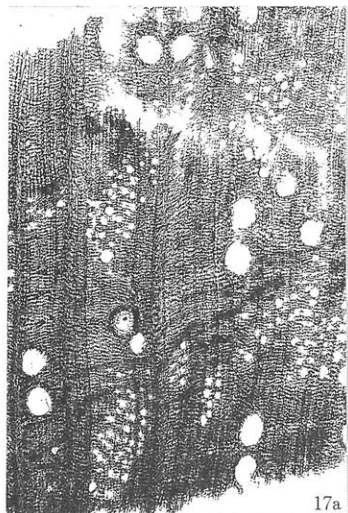
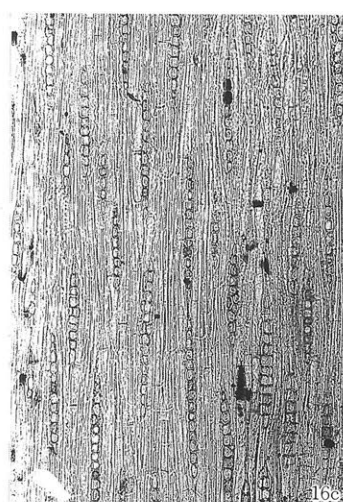
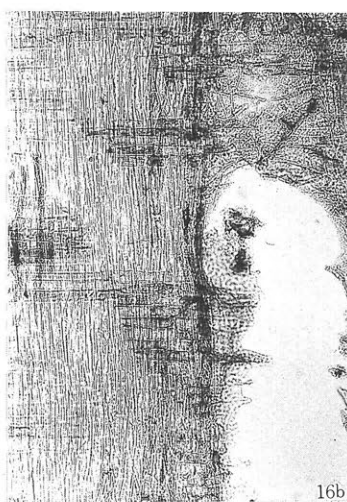
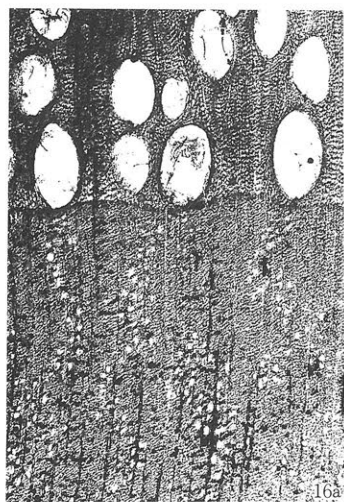
200 $\mu$ m : a  
200 $\mu$ m : b, c



13. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (枕9)  
 14. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (試料番号87)  
 15. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号143)  
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 $\mu$ m : a  
 200 $\mu$ m : b, c





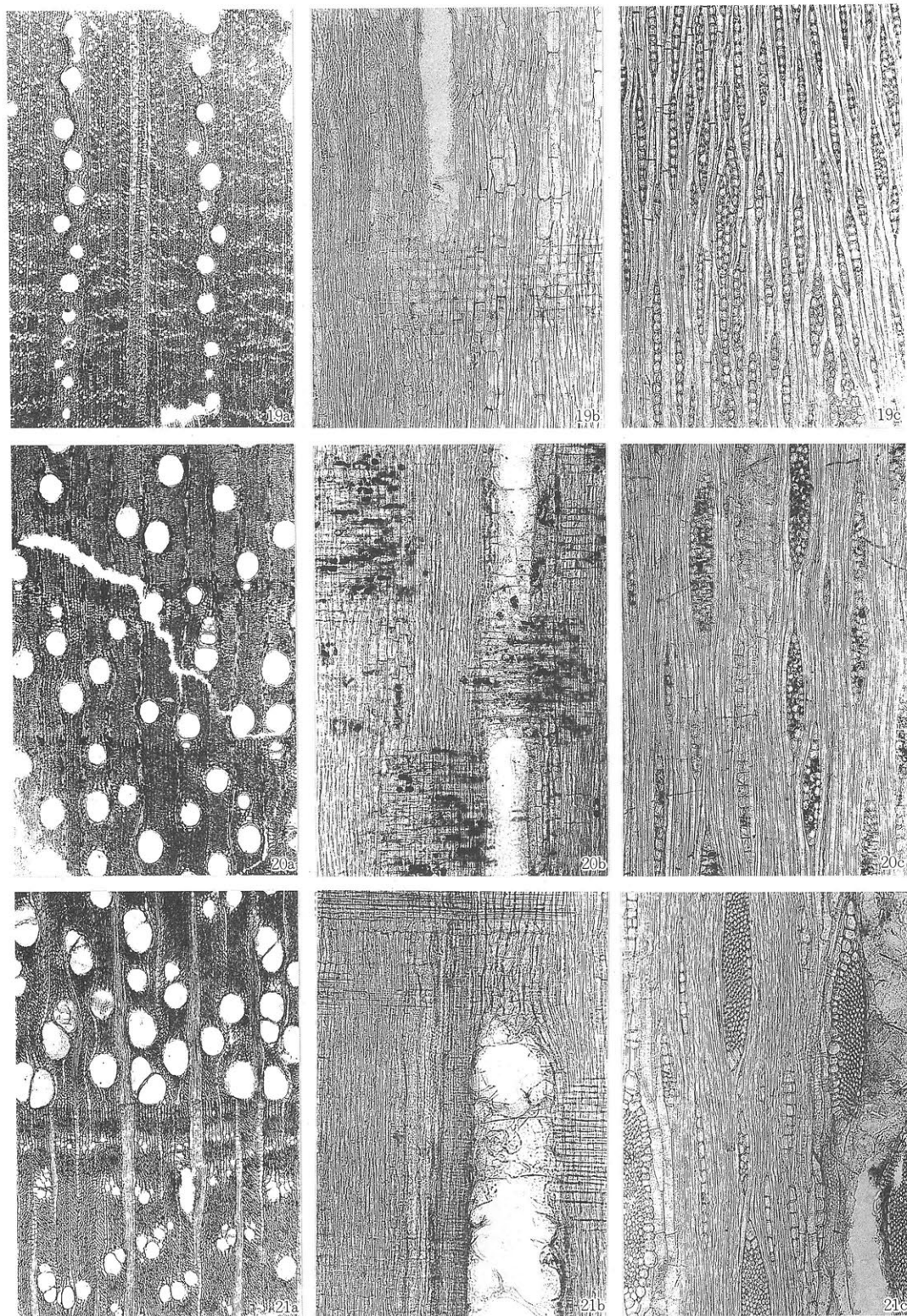
16. クリ (試料番号95)

17. ツブラジイ (杭35)

18. シイノキ属 (杭1)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 $\mu$ m : a  
200 $\mu$ m : b, c



19. マテバシ属 (試料番号208)

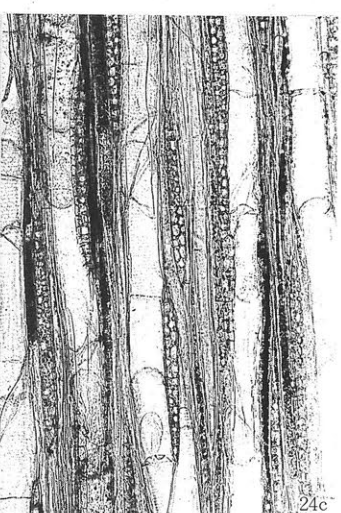
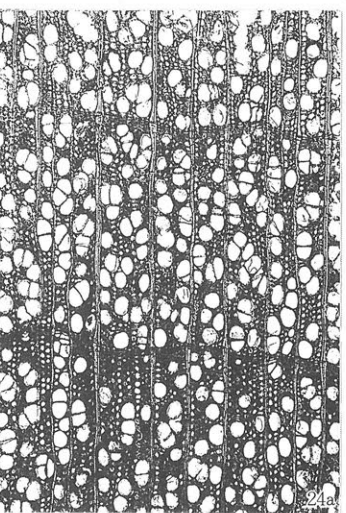
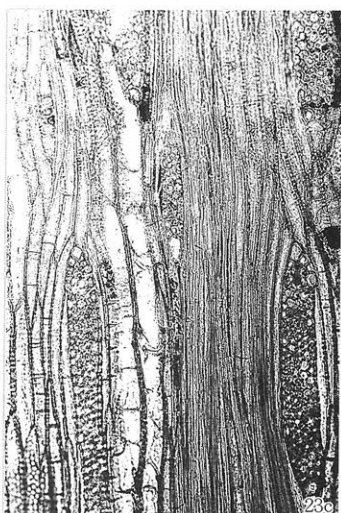
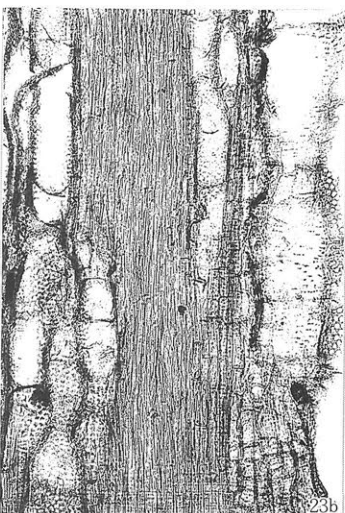
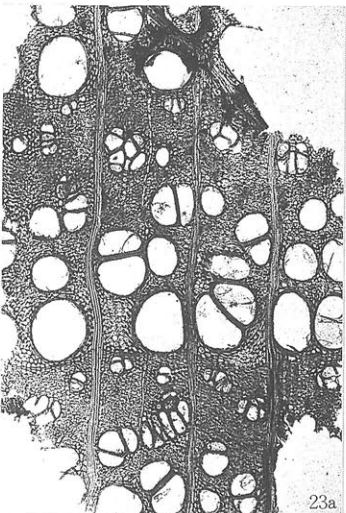
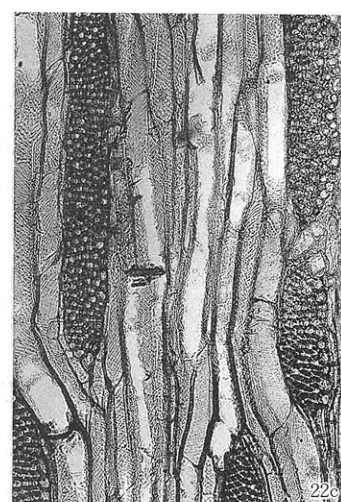
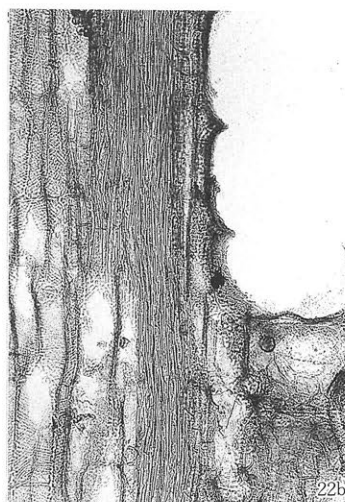
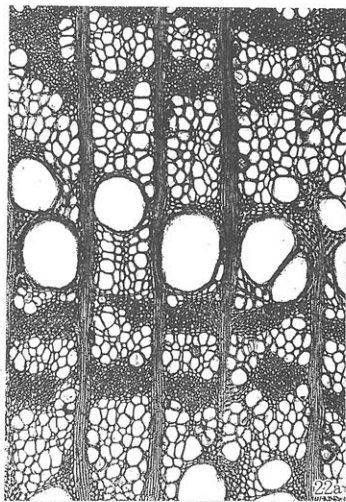
20. ムクノキ (試料番号161)

21. エノキ属 (杭111)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

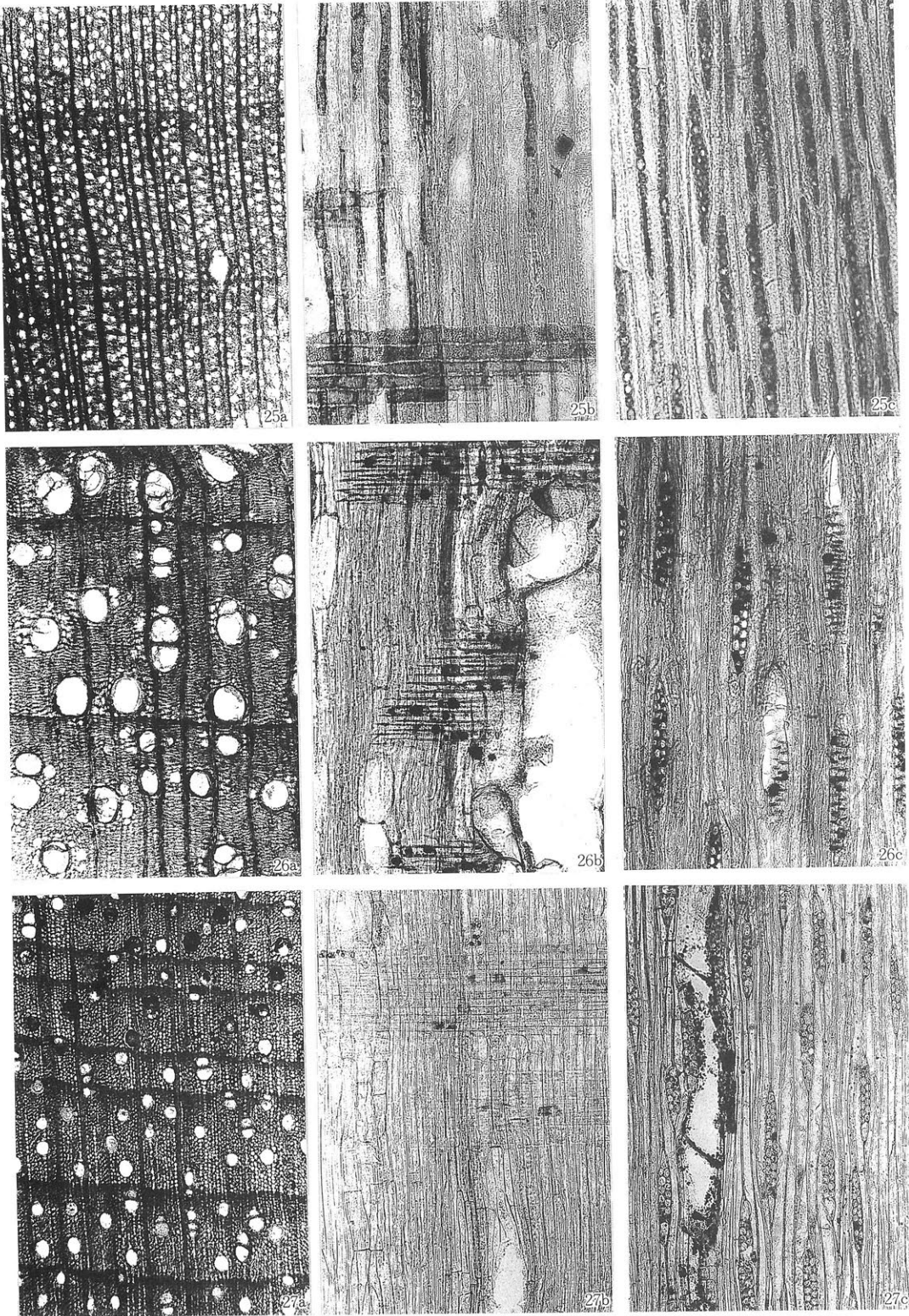
200 $\mu$ m: a  
200 $\mu$ m: b, c

図版130 宮ノ下遺跡第1次調査 木材(8)



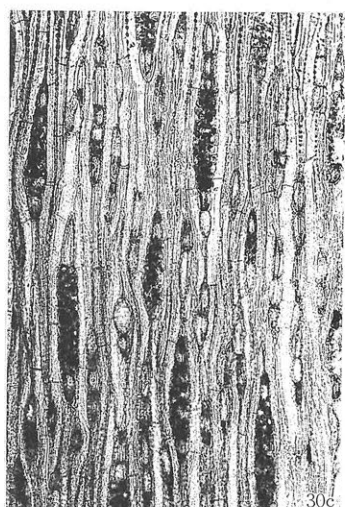
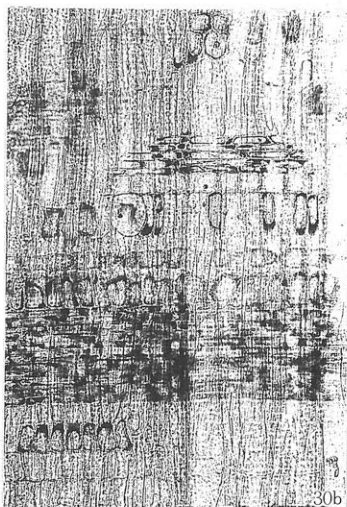
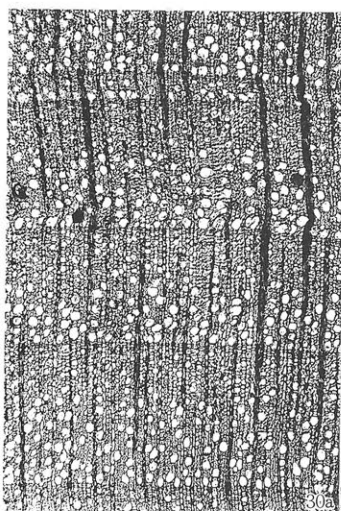
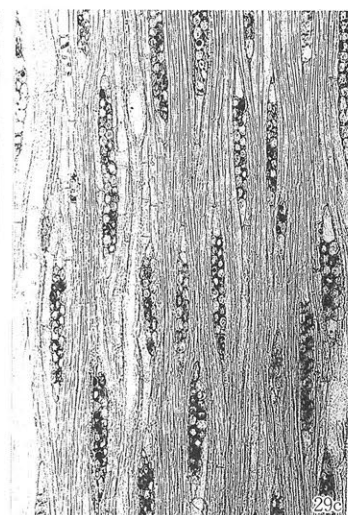
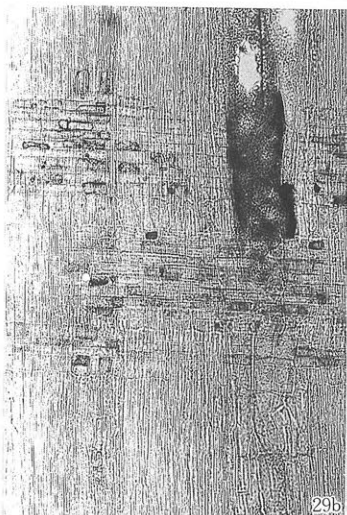
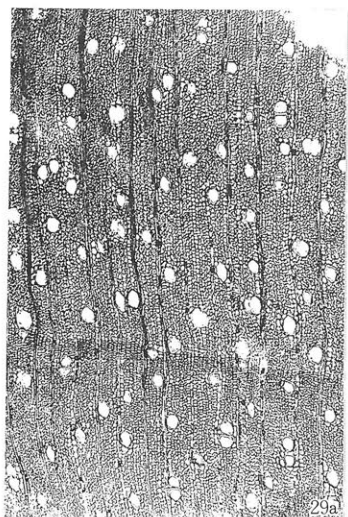
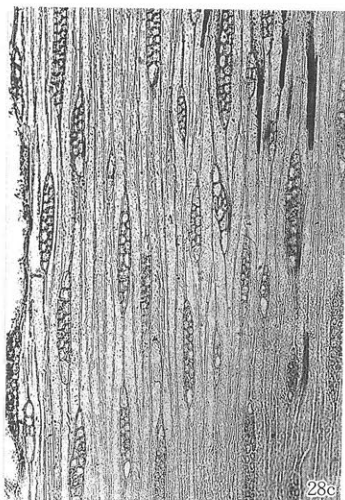
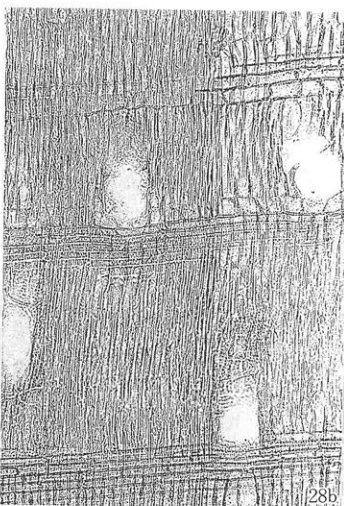
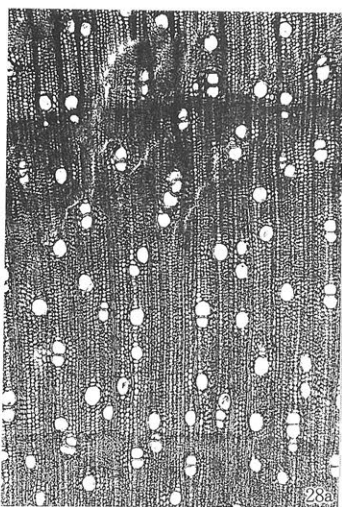
22. ケヤキ (試料番号152)  
 23. ヤマグチ (試料番号207)  
 24. モクレン属 (試料番号164)  
 a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 $\mu$ m : a  
 200 $\mu$ m : b, c



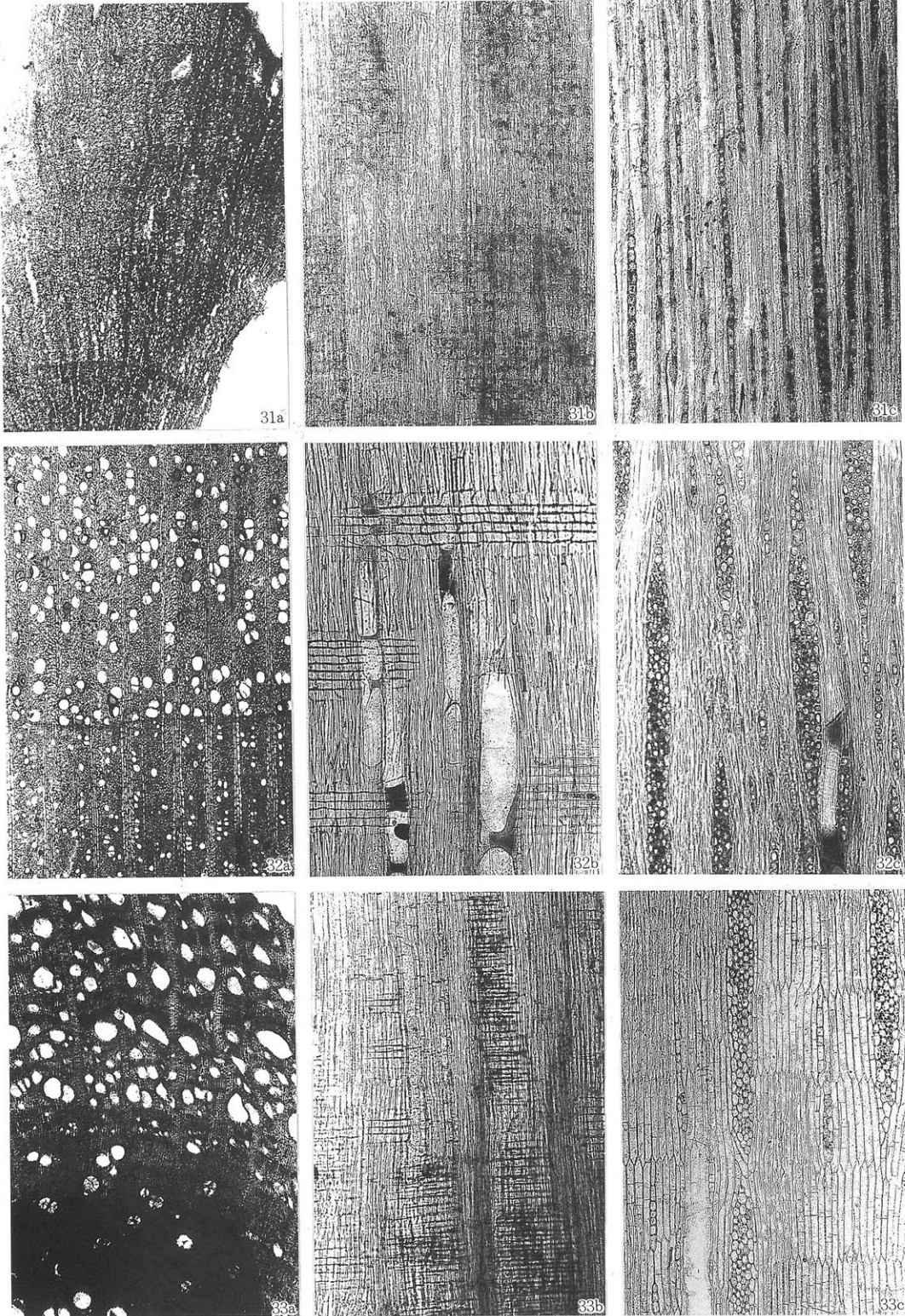
25. シキミ (杭188)  
 26. クスノキ (試料番号9)  
 27. タブノキ (杭71)  
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 $\mu$ m : a  
 200 $\mu$ m : b, c



28. クスノキ科 (杭123)  
29. クスノキ科 (試料番号159)  
30. ヤブツバキ (杭12)  
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 $\mu$ m : a  
200 $\mu$ m : b, c



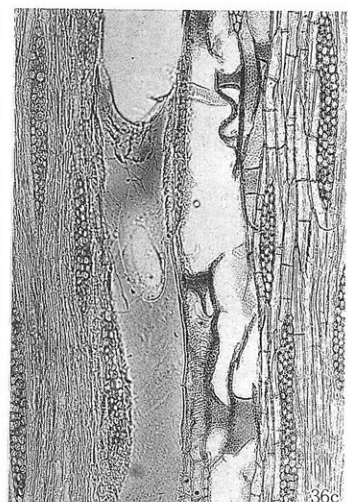
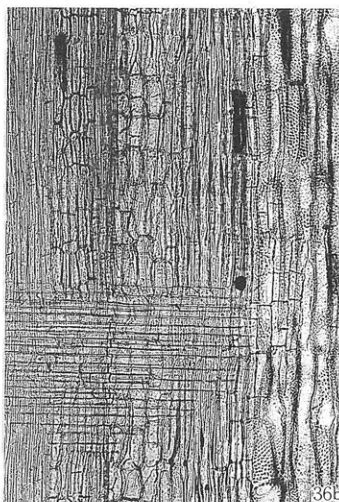
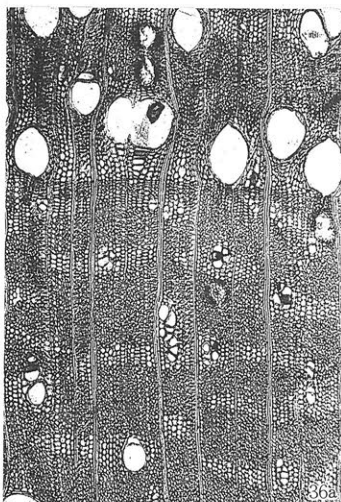
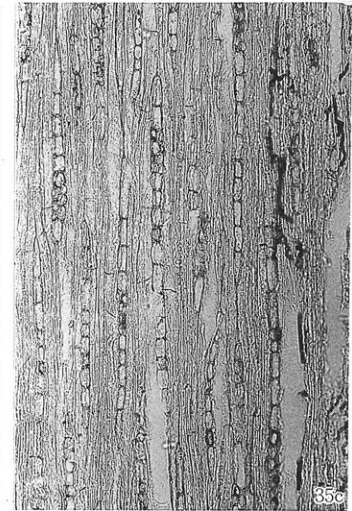
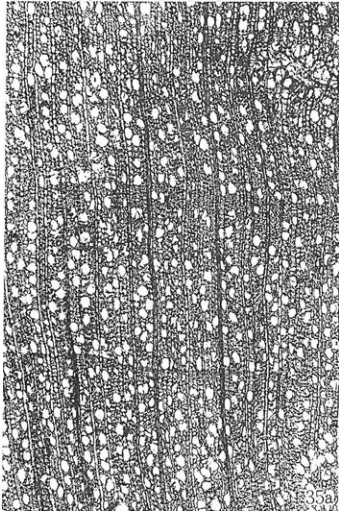
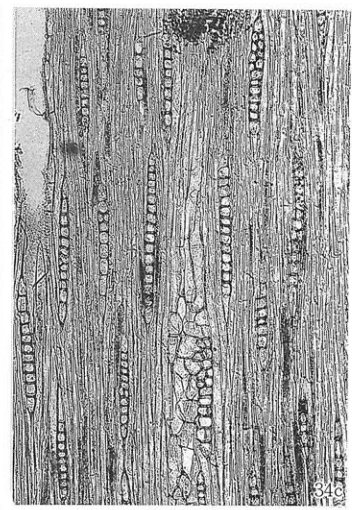
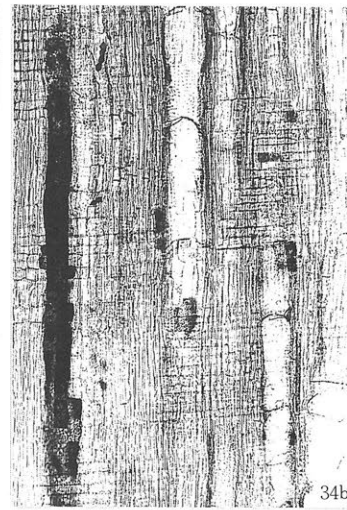
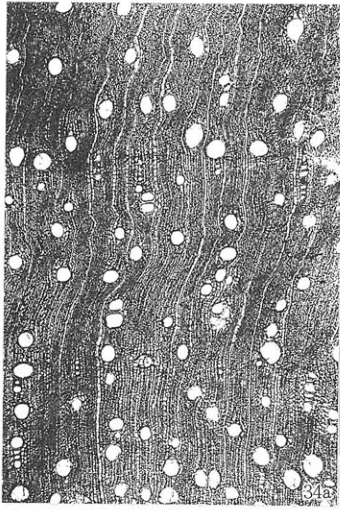
31. サカキ (試料番号141)

32. サクラ属 (杭107)

33. マメ科 (杭98)

a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 $\mu$ m : a  
200 $\mu$ m : b, c



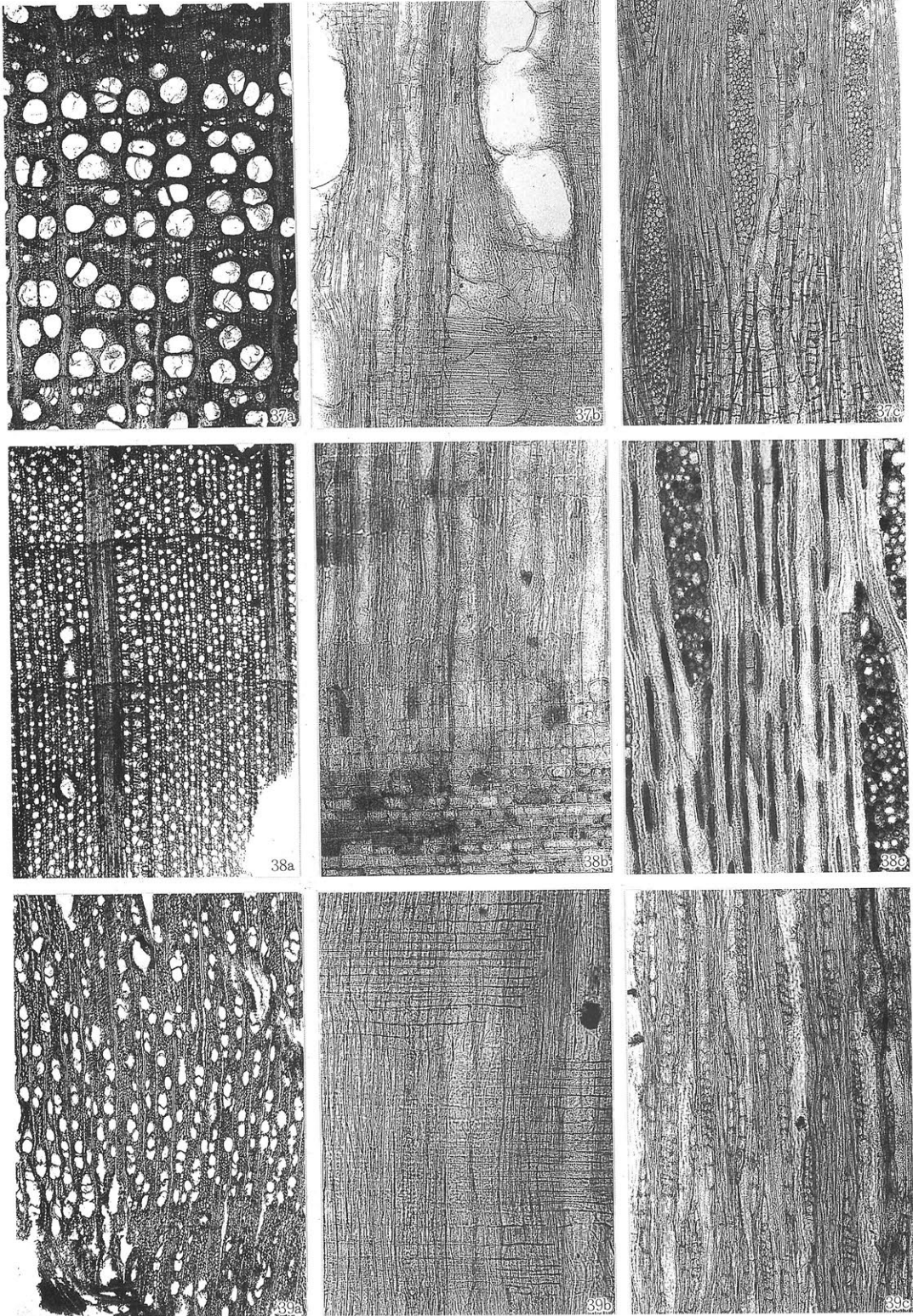
34. アカメガシワ (試料番号124)

35. ユズリハ属 (杭18)

36. ムクロジ (試料番号151)

a: 木口, b: 柾目, c: 板目

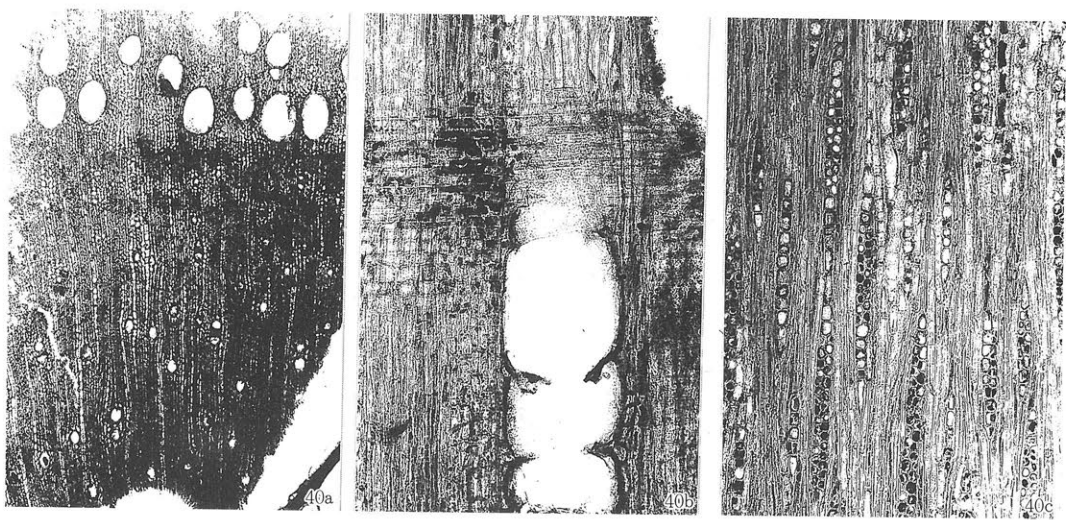
200μm: a  
200μm: b, c



37. タラノキ (杭170)  
38. シャシャンボ (杭313)  
39. エゴノキ属 (杭117)  
a : 木口, b : 柾目, c : 板目

200 $\mu$ m : a  
200 $\mu$ m : b, c





40. トネリコ属 (試料番号1)  
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 $\mu$ m : a  
200 $\mu$ m : b, c

## 抄 録

ふりがな	みやのした						
書名	宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書—第1分冊—						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	下村晴文・芋本隆裕						
編集機関	東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会						
所在地	〒557 東大阪市荒川3丁目4番23号 TEL(06)728-9361						
発行年月日	1996年2月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
みやのした 宮ノ下遺跡	おおさかひがしおおさかし 大阪府東大阪市 ちほう堂 長堂1丁目	27227	34°39'45"	135°33'59"	19920706 ～ 19930604	7,000	市街地 再開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
宮ノ下遺跡	貝塚 集落跡	縄紋 弥生	貝塚 自然流路 杭列 ピット 土坑		縄紋土器・土偶 弥生土器 石器 木器 動植物遺体	縄紋～弥生移行 期の貝塚より凸 帯紋土器と弥生 I期土器が出土	

宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書

— 第1分冊 —

1996年2月29日

発行 東大阪市教育委員会  
財団法人 東大阪市文化財協会

印刷 明文堂工業株式会社